# THE CENTRAL REVIEW

# 中央公論

v.29
no.5
1914

## 五月號

第廿九年第五號　第三百四號

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

安全なるしらが赤毛染

# ナイス

染たと見ぬ髪の色
黒々と艶の美はしさ!!
それはナイスで染た髪。

◀五大特長▶

■タツタ廿分で染る
■永く褪ず剝げず
■艶々と黒く美しく
■毛の癖を癒し
■用法の至極手輕

大瓶六十錢小瓶卅五錢新小瓶廿五錢

全國到る處の藥店化粧品店にあり

發賣 大阪市心齋橋筋二丁目 東京市日本橋區箔屋町 丹平商會藥房

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

メレジユコフスキー著　文學士森田草平　文學士安倍能成共譯

……人としての部――森田譯
藝術家としての部――安倍譯

# 忽再版

# 人及藝術家としてのトルストイ

並にドストイエフスキー

總クロース製美本
背像三葉入
全一冊
正價壹圓五十錢
小包內地十二錢

▼此書は文明批評家として當今世界第一人者と言はるゝメ氏が、ト、ドの二翁を評傳したものである。

譯者森田草平先生序の中に云『嘗て自分が文科大學に居た頃、此書を英譯で讀んだ。讀んで面白いと思つた。自分が西洋の小說を讀んで面白いと思つたのは、ドオデエのサッフォーである。論文では即ち此書である。其後サッフォーよりも面白い小說にはいくらも出會つたが、メレジユコーフスキーの此書よりも面白い論文は一度も見たとがない。』又云『著者の人生に對する批判もさる事ながら、藝術鑑賞の上に於ける洞察力に至つては、察ろ怖しい者がある。若し未だ此書を讀まざる人にして此書を讀んだとすれば、必ずや其人の批評眼を一變したであらう。』

中村不折　小鹿青雲共著

# 支那繪畫史

再版

▼我國に於ける始めての新著
寫眞版廿九葉及人名索引附
▼不折畫伯裝幀意匠
▼菊判上製美本全一冊
▼正價壹圓五拾錢
▼郵稅十二錢

時事新報評『吾人は本書を目して本邦唯一の支那繪畫史として深く推賞する者也』

發行元　東京神田區雉子町　玄黃社　電話本局二〇九番　振替東京七九九五　●全國書店賣捌

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◎我國飜譯界の記録を破れる空前の大計畫

# 泰西名著文庫

## 會員募集

夙に東西文明融合の趨勢に鑑み、泰西文藝の代表的雄篇傑作を選みて、之が飜譯を現文壇に於ける斯道の諸大家に囑し、至難なる飜譯叢書刊行の業を進め來れること玆に三年、今や漸く之を公表して逐次刊行し得るの運びに至つた。云ふ迄もなく作の良否は必ずしも量と一致しないが、泰西の名著は量に於ても亦大作である、以下列擧する如き雄編大作を羅致して我國の文壇に移植し得るもの、我刊行會の如くにして始て能くする處と、潜に辜負して天下の清鑑を竢つ。

### ◎戰爭と平和 四冊

（露）トルストイ著　馬場孤蝶譯

北歐の偉人として全世界の崇敬を一身に集めた伯爵レオ・トルストイの、人としても藝術家としても、元氣最も旺盛なる時代に成つた大々的大作である。行くとして可ならざる無き著者が精到、遒勁なる神筆は、彼が豐富なる人生智識及奔放なる想像力と相俟つて、此大作をして益々世界的不朽の雄篇たらしめた所以である。

### ◎虚榮の市 二冊

（英）サツカレー著　平田禿木譯

文豪サツカレーが冷たい皮肉のうちに熱い涙をこめた輕妙鋭利の靈筆もて、所謂彼のスノツブスの輩が百鬼夜行の體たらくを赤裸々に描き出して、走馬燈のやうな忙しい人の世の推移が掌に取るやうに見らるゝ英文學で名高い稀代の傑作『ヴアニチー・フエア』の完譯が、この『虚榮の市』上下二冊である。

### ◎哀史 三冊

（佛）ユーゴー著　戸川秋骨譯

文豪トルストイ翁をして十九世紀の最大傑作と叫ばしめたる本書の主人公、ジヤン・ウワルジヤンの名は、今は我國でも知らぬ人は尠ない。話の筋は無類に面白く、又之を一貫する磅薄たる大理想は、眞に世界文藝上の偉觀である、唯從來は一寸した抄譯の類が行はれて來たが、こゝに始めて其全譯が出るわけである。



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◉十日物語（デカメロン） 一冊 （伊）ボッカシオ著 森田草平譯

凡そ人間に文字あつて以來、ボッカシオのデカメロン位奇拔で面白い書物はまたとあるまい。人間の嬌態。痴態、變態、笑ふべきもの、怒るべきもの、輕蔑すべきもの、感心すべきもの、凡そ人情の千態萬狀を高い所から見て、人を馬鹿にしたやうな顏をして書いてゐる處、何とも云ひやうの無い天下の奇書である。

◉諸國物語 一冊 森鷗外譯

森鷗外先生は飜譯界の權威である。本書は、獨逸、スカンデナギア、佛蘭西、露西亞、亞米利加の諸文豪の傑作二十餘篇を集めたものである。清新なるもの、深刻なるもの、蜜の如く甘きもの、皮肉の骨を刺す如きもの、百花繚亂として現代文學の精華は收めて此一卷にありと云ふも、敢て過言ではあるまい。

◉プルターク英雄傳 三冊 高橋五郎譯

『手に任せて何處を開くも、英雄豪傑雲の如く、才媛淑女霞の如く、宛然オリムピアの饗宴に臨むがごとし』とは、エマーソンが此書を評した言葉である。眞に萬世不朽の寶典にして。古今の成敗、榮辱、利鈍の數、秦鏡をかけて照すが如く、活世界の活學問とは寔に本書の謂である。全譯たることは云ふ迄も無い。

◉イリアード オデッセイ 合本一冊 （希臘）ホオマア作 馬場孤蝶譯

古神話、古史詩の價値は、其處に古代人の一切の生活が具象的に織り込まれて居る點にある。就中、本書に收むる二大史詩の如きは、諸種の點から見て歐洲一切の藝術を味はんとする人々は、必讀書として何よりも先づ第一に此の世界最古の二大史詩に指を屈せずばなるまい。

◉英國近代傑作集 上卷 平田禿木譯

近代英文壇の巨匠、メレディス。ハーディ。ジェームス三家の短篇集である若し夫れ『泰西名著文庫』の大部分が、堂々たる寺院殿堂の壁畫の如きものとすれば、これは寧ろ草堂別墅を飾るべき、心にくき小幀にも比すべきであらう。譯者禿木氏また趣味の上から、詩人の創作にも劣らざる苦吟努力をもて生命ある邦文に寫し試みたのである。

◉英國近代傑作集 下卷 戸川秋骨譯

批評家、詩人、乃至小說家として當代英國に第一流の位置を占むるワッツ・ダントンのエイルキン一冊を收む。エイルキンは又の名を『警異の再誕』と云つて、人間が天地の神祕に接して感動するその驚きを書いたものである、話の筋は神祕な戀物語で、實に現代英文學中の逸品である。否世界文學中一頭を拔いた逸品である。

◉永久の良人 一冊 （露）ドストイエフスキイ著 森田草平譯

トルストイを現在の覇王とすれば、未來を支配するものはドストイフスキイであるとまでメレジユコーフスキーは斷言して居る。その思想の幽玄にして奇峭なる、彼は實に神祕其物である。人間の心理狀態を到底想像も及ばぬ精細と確實とを以て描寫して居る處、眞に人間業ではない。本書の價値亦多言するまでも無からう。

◉◉以上十八册

津田青楓氏裝釘意匠、菊判總クロース製天金、紙數一册平均約八百頁。

申込期限 四月三十日

略規

◉來る六月ヨリ每月一册宛配本し十八ヶ月を以て完結す。
◉會費は一ヶ月金貳圓とす、但し外に送本料を要す。
◉申込金貳圓を要す、但此申込金は最終の會費に充つ。

▼詳細見本及規定は御申越次第送呈す

東京市神田區小川町一番地

國民文庫刊行會

（電話本局七三二番）
（振替東京一八五七二番）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

# 少額資本 實業成功法

●本社が東京四大新聞に廣告し**懸賞**を以て少資本成功の考案を募集せし結果本書を出版せしに空前の大好評を博し忽ちにして五十餘版を出すに至れり、本書は五圓以上百圓以下の少資本にて容易に成功し得べき左の職業を撰定し其營業法に至るまで詳細に記述し、一讀直に實行し得べきを期したり。
▲人の氣づかぬ新職業十八種▲高尚にして利益ある營業十三種
▲外見惡しくも大利ある職業九種▲地方田舍の有望事業二十種

本書に記せる職業にて成功せし者甚だ多く、讀者よりの禮狀亦續續として來る眞に一字千金の良書なり尙參考として●何故に東京に出でゝ失敗するか●驚くべき計算表●資本金を得る法●借金償却法●不景氣利用法●四種の商略●最有望なる實業學校●日本財產家一覽表等を揭ぐ實業界に大成功を得んとする者は速に本書を讀め、一册送料共金三十四錢、振替送金一錢增、切手代用三十八錢送れ

◎東京神田錦町三ノ二 振替東京一六一八番 **學友社**

# 金もうけ

不景氣だの、生活難だの、就職難などゝいふ人は自分の職業が惡いからである如何に世の中が不景氣であらうが、生活難であらうが自分の職業さへ非常に利益のある業であれば、必ず一家の富を作る事が出來る。其れから又副業や內職も本業以外に豫算以上の收入を得、之を蓄積せば實に莫大の金高となるべし。若し其良副業を知らずして困しむ人は實地專門家の執筆せられたる本會發行●**致富講義錄**●を見られよ、若し熱心に此講義錄を讀み且つ之を實行せば最早生活難に苦しむ事なく優に數萬の資産を作る事を得べし、講義錄は全八册にて千〇廿四頁に達し、少資本にて大成功を得べき良職業數十種、及び高尚にして利益多き內職副業數十種を懇切に教授し、且會員の爲めに質問調査、就職紹介、營業資金貸與等の規定を設く、本會は山師的、詐僞的のものにあらず、郵券二錢封入申越あれば會則及說明書進呈す、殊に至急入會者には特に有利なる三大特典を提供す、至急申越あれ

會長 山岡子爵閣下

東京神田表神保町 電話本局四五六七 **帝國富强會**

反省社編輯

# 史學研究者の最必要書 空文年表

全一册 定價金五拾錢 郵稅金八錢

上下三千載に亘る各年代に、重要なる史的事件を記述せる外、各年代每に必らず餘白を存して史學研究及び自習の際自ら研究し若くは記憶し置くべき事件を自ら書き入るゝことを得る便を圖れるは本書獨得の特長にして苟も史學に志あるもの丶一日も欠くべからざるものゝ也

東京市本鄉區西片町十番地 **中央公論社發行**

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

# 薰風漂ふ五月號

# 文章世界

○杜若（小說） 鈴木三重吉

・思索・感興 田山花袋
・惡生徒と愚教師 生方敏郎
・春夏六題 萩原井泉水

△漱石門下の人々 三井甲之
△逝ける平出修の思想 阿部次郎

△櫻の實の熟する時（長篇小說）本號より揭載し始む 島崎藤村

△上京當時の回想 小川未明
△啞の少年 ダヌンチオ
△四月の文壇 本間久雄

○小窓（小說） 德田秋江

・時評 長谷川天溪
・自分自身に 加能作次郎
・朝と夕 西村渚山

本誌正價 貳拾錢 郵稅貳錢

東京本町 博文館

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

# 特價提供

稻葉君山新著

# 清朝全史

【内容見本】申込次第無代進呈

菊版布製美裝函入
挿圖二百五十餘入
全二冊千六百餘頁
正價金五圓
特價金四圓
郵稅金貳拾錢



現下の支那を理解し支那に活動せんとする者は支那の過去を知らざるべからず。清朝三百年の前鑑は事々物々一として其將來の暗示たらざる無し。則ち清朝史の研究が政治家、教育家、宗教家、商工業家等の爲に如何に切要なるかは多言を要せず。本書の出づる豈偶然ならんや。著者は南滿鐵道會社の囑託を受けて多年清朝史を研究せし人。其林料は會社が多年巨資を投じて支那人歐米人が指を染め得ざりし秘密の方面より蒐集せし者。此著者此材料、相待て清朝一代の有らゆる秘密を曝露して其眞相を闡明し東西史家の群疑を一掃す。考據豊富正確、議論警拔明快、眞に清朝史のオーソリテイ也

・斬新の研究に成る空前の大快著!!

發兌 東京牛込早稻田 振替一一二三番 早稻田大學出版部

(捌賣) 神田東京堂 日本橋至誠堂 京橋北隆館 大阪盛文館 其他

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

# ◯創業五週年紀念特賣

一時に金五圓以上御購入の方へは特價の五分割引

| 特價書目 | 定價 | 特價 | 送料 |
|---|---|---|---|
| 東京高師教授 佐々木吉三郎著 ◉教育的美學 | 上一、三〇 中一、三〇 下一、四〇 | 一、〇五 一、一〇 一、一五 | 各、一二 |
| 東京高師教授 吉田靜致著 ◉倫理と人生 | 一、二五 | 一、〇〇 | 、一二 |
| 天覽 文學士 横山健堂著 大將乃木 | 二、二〇 | 一、五〇 | 、一二 |
| 文學博士 吉田熊治著 ◉社會教育 | 一、八〇 | 一、五〇 | 、一二 |
| 文學博士 吉田熊治著 ◉我國民道德と宗教との關係 | 、四〇 | 、三二 | 、〇六 |
| 佐々木秋鹿著 ◉教授資料 大日本物產詳解 | 二、三〇 | 一、六〇 | 、一六 |
| 再版 文學士 細田枯萍譯 人と超人 | 一、二〇 | 、九〇 | 、一二 |
| 文學士 横山健堂著 ◉新人國記 | 二、二〇 | 一、四〇 | 、一二 |

| 特價書目 | 定價 | 特價 | 送料 |
|---|---|---|---|
| 文學士 笹川臨風著 ◉男性美 其一 其二 | 各、七〇 | 、五〇 | 、〇八 |
| 五版 中等英語研究會編 邦語英文法捷徑 | 、五〇 | 、四三 | 、〇六 |
| 五版 傳法、間崎共著 ユニオン第四讀本詳解講義 | 一、四〇 | 一、一〇 | 、一二 |
| 再版 文學士 大谷繞石著 開いた處 | 一、〇〇 | 、七五 | 、〇八 |
| 三版 間崎勝義著 英文和譯秘訣 | 、八五 | 、六五 | 、〇八 |
| 再版 野口秀敏著 分類詳解算術模範例題解法 | 一、〇〇 | 、七五 | 、〇八 |

右の外教育、學術、史傳、學生參考書等、現代の教育學術界に重きを爲せる學者、識者が、多年研鑽の餘りに成りし名編大作七十餘點！詳細は發行元、幷に各地賣捌店に御照會を乞ふ

發行所 東京神田小川町 振替一二三三六 敬文館 電話本局（四八五五）

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

# !!現文壇の權威世界の最大名著!!

## ■ブランデス著　矢口達氏譯■

# 十九世紀文學主潮　移民文學

●菊版總布特製美本箱入　正價金貳圓　郵稅內地十二錢

千古未曾有の**英傑ナポレオン**が、歐大陸を蹂躙したるかの**恐怖時代**前後を背景として、**歐洲文藝**は如何なる發達を遂げしか。**不滿**と**絕叫**とより生れたる藝術は抑も如何なるものなりしか。現代藝術評壇隨一の**權威ブランデス**はその博遠なる智識力と深鋭なる達觀力とを以て其時代を**縱橫無盡**に解剖論斷したり、是正に現文壇**最大名著**なり。窮極する處を知らざる**藝術の最深淵**を探らむとせば、乞ふ**本書**に來り求められよ。

〔前付の八〕

## ピエール・ルイ著　矢口達氏譯

# 不朽の戀

四六判總布
特製美本箱入
正價八十五錢
小包內地八錢

●批評摘載●

大阪朝日新聞曰く……オスカー・ワイルドの筆致によく似てゐる不斷美に牽引されて靈から肉へ肉から靈へ憐れにも迷ひ迷ふ悲壯と謂はうか歡喜と言はうか血に塗れてにこりと笑つてる美しい生活を眞夏の日光を受けて紫金に輝く樣な鮮やかさで書き流したもので美の爲なら五千石も何のそのと云ふ眞面目な强い憧憬が溢れてる云々！

發行所　東京小石川高田豊川町　新陽堂　振替口座東京一五五七〇番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

# 名著十二種

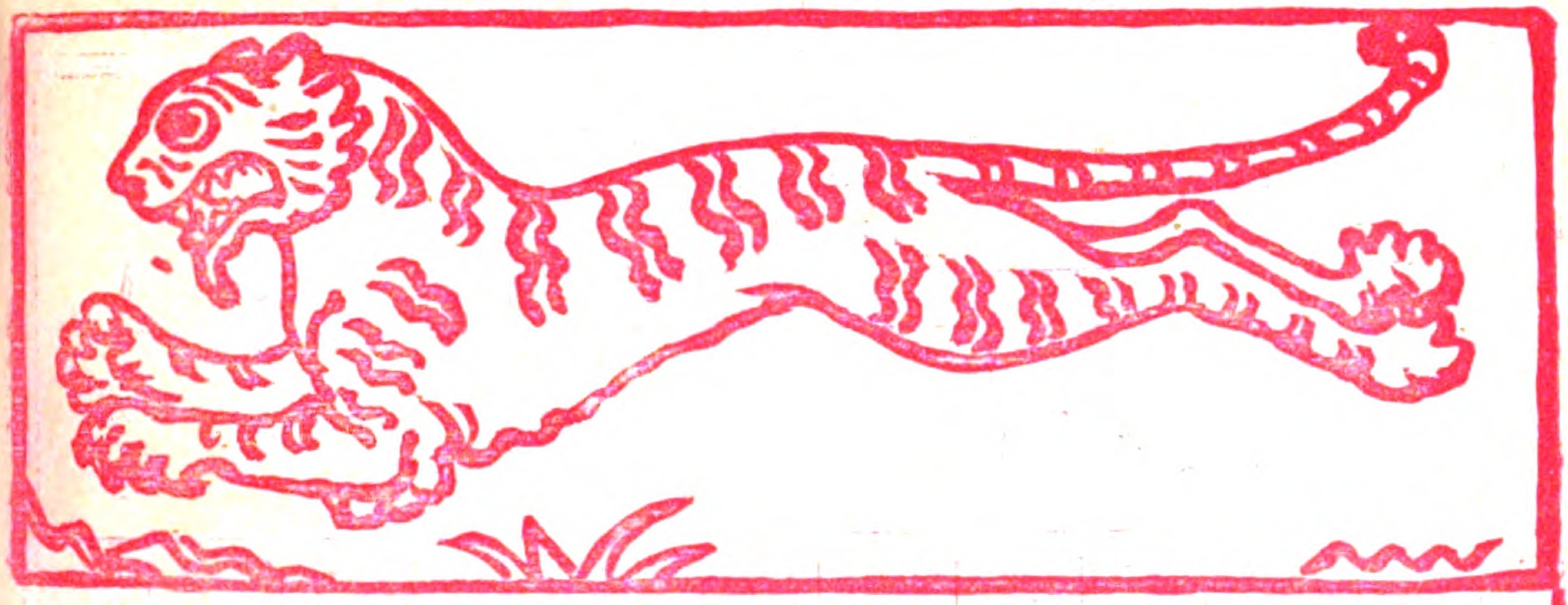
## 一書値千金

| 著者 | 書名 | 定價・送料 |
|---|---|---|
| 陸軍歩兵大尉 櫻井忠温著 | 肉彈 一名旅順實戰記 | 定價七十錢 送料八錢(菊判) |
| ミス、ベーコン 本田増次郎 共譯 | 英文肉彈 | 定價壹圓 送料八錢(四六判) |
| 櫻井鷗村著 | 歐洲見物 | 定價壹圓七十錢 送料十二錢 |
| 英國エリス原著 小倉清三郎和譯 | 性的特徴(男女兩性の科學的研究) | 定價壹圓五十錢 送料十二錢(菊判) |
| 櫻井忠温著 | 銃後(肉彈の姉妹篇) | 定價壹圓五十錢 送料八錢(菊判) |
| 盲天外 森恒太郎著 | 農業道徳 | 定價八十錢 送料八錢(四六判) |
| 新渡戸稻造著 | 英文武士道 | 定價壹圓 送料八錢(四六判) |
| 櫻井鷗村和譯 | 邦文武士道 | 定價壹圓 送料八錢(菊判) |
| 新渡戸稻造著 | 隨想錄(和文) | 定價壹圓 送料八錢(四六判) |
| 櫻井鷗村著 | リンコーン物語 | 定價壹圓二十錢 送料八錢(菊判) |
| 文學士 荒木良造著 | 貯金談 | 定價三十五錢 送料八錢(四六判) |
| 伯爵 大隈重信著 | 改訂 國民讀本 | 定價四十五錢 送料八錢(菊判) |

發行所 東京市麴町二丁目 振替口座七八四七 丁未(ていび)出版社

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



# 中央公論第廿九年五月號目次





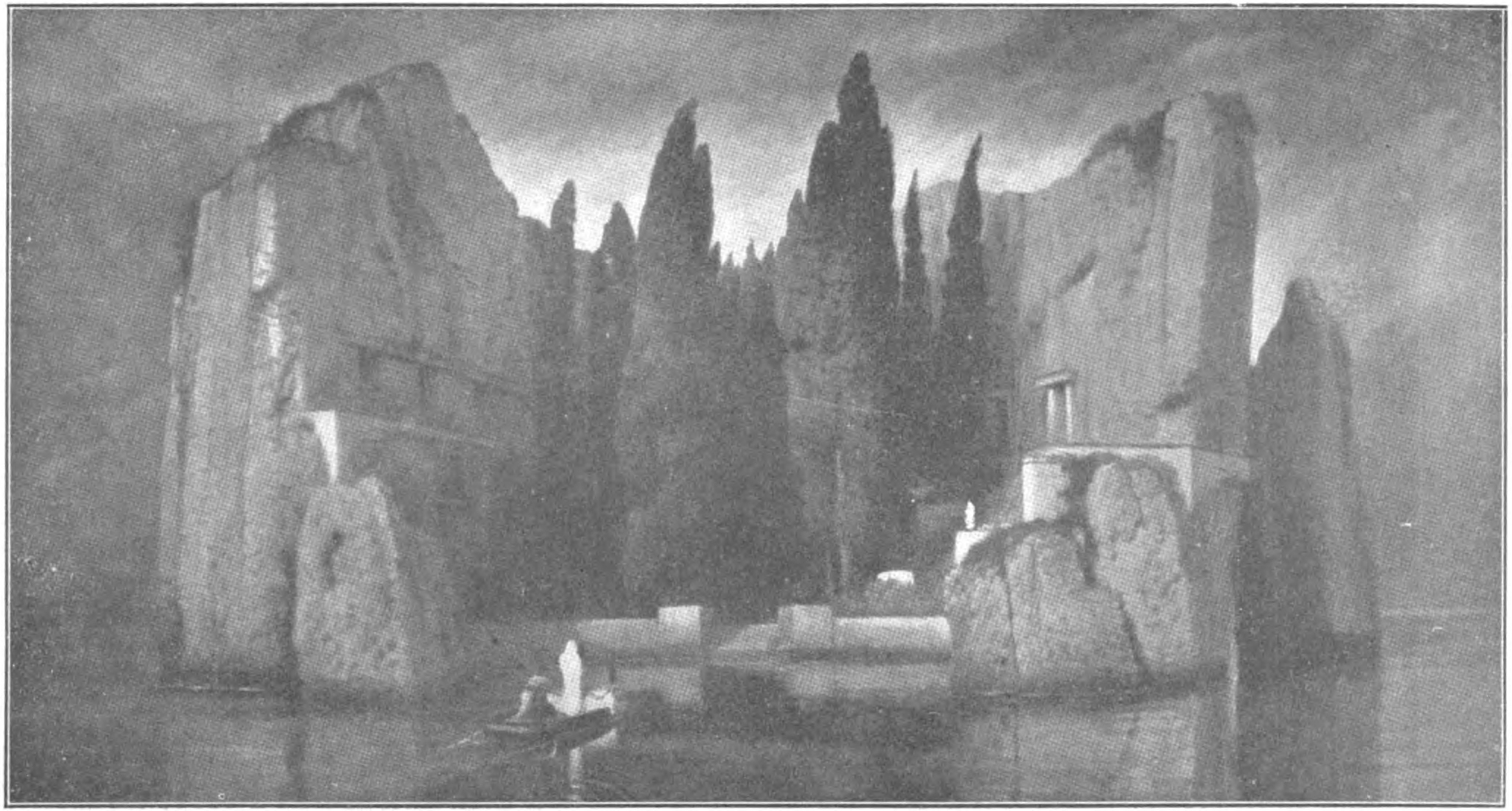
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ




信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

ARNOLD BŒCKLIN.



The Isle of Death.

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

# 皇太后陛下崩御

明治天皇登遐ましくして以來我　皇太后陛下には兎角に御健康勝れさせられず、沼津の御用邸にて久しく御靜養中に在せしが、春期に入り氣候變化の爲めにや、端なく重患に罹らせ給ひ、天下の名醫が智能を竭しての御手當も更に効なく、六千萬臣子が誠を込めての祈願も遂に應驗あらず、四月九日午前二時と云ふに御危篤に陷らせ給ひ、今上兩陛下の最後の御對顏にも返へさせらるゝ御語もなくして崩御ましませり。

伏て惟みるに我　皇太后陛下は天資聰明、夙に聖者の質あり『外和にして內剛に、義理を見ること明白、德を懋むること確乎動かず、眞に聖質を備へ給へり、殊に學を好んで倦むことを知り給はず』とは故侍講元田永孚の感仰稱揚したる所なり、先帝か英邁の天資を以て開國進取の國是を立て內治を擧げ外政を張り、偉大なる日本帝國を起して中興の大業を完ふせられし所以のもの素より聖德の致す所なるも、其間我　皇太后陛下の內助の御功績顯著なるは齊しく中外の悉知して感激する所なり。大奧の肅清、官中府中の分別は殊に　皇太后陛下の御人格に待つ所多きは言を待たず、女子教育を奬勵せられ、博愛慈善の事に御心を碎かれし等餘りに數多くして語り盡さず、建國以來賢明の皇妃多きか中にも孰れか我　皇太后に優れる方やある、今や國步艱難に際し國民崇敬の中心たる此　君を失ふ、上　皇室の御愁傷を拜察し下國家無限の損失を思ひ、吾人は偏に恐懼に堪へざるなり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

中央公論



五月號
第廿九年第五號
第三百四號

# 大隈内閣の出現

## （一）

海軍贖職事件を提げ山本内閣に肉迫し之を破壞したる民黨の有志は該内閣の辭職と共に直に後繼内閣引受の爲めに猛烈なる運動を開始したり、但し絶對多數黨なる政友會は依然として衆議院を左右すべき地位にあれば、其反對各派は假令へ全然聯合し得るとするも直に多數黨たること能はず、況んや三派の聯合なるもの頗る難事なるべきをや、玆に於て下院に於ける基礎の薄弱を補はんが爲めに上院の援助を求むるの必要あり、更に一歩を進めて長閥と握手の段取りとも爲るべし、斯くて裡面に官僚の勢力に依賴しつゝ表面には政黨内閣の色彩を帶ばしめんとするは策士の最も苦心せし處にして、遂に大隈伯は其

誂向きの總理大臣として歡迎せらるゝに至れり、加藤高明氏が三月二十四日の同志會慰勞會の席上になせし演說の如き自ら其胸中の祕を暗示せるものなり、曰く、

山本內閣の瓦解に次て起るべき內閣は世間種々の風說あるも其任命は陛下の大權に屬するを以て濫りに之を臆測し云爲するは其分に非ざるべし、然れども人各々希望あり予が竊かに諸君の希望を察するに純粹なる政黨內閣の組織に依り彼の官僚內閣超然內閣の如きは斷して反對さるゝ所なるべし、然れども今日の政黨は人材に乏しく衆議院に於て半數を過ぐる二十數名の彼の厖大黨すら全部適當なる閣僚を其中より求め難き有樣なり、閣員全部を一黨より求むるは至難なり、陸海軍の如き卽ち是れなり、從つて今後の內閣は甚だ混亂を呈すべし。

今後の內閣は唯だに誠心誠意を唱ふのみならず衷心國家の爲めに盡す所なかるべからず、世界に於て我國今日の形勢の如く政治上唯だ國內の形勢をのみ事とする國家は曾て是あらず、若し眞に憂國慨世の念あらば擧國一致以て國利民福に資すべきのみ。

試みに男獨特の巧辭を少しく玩味せんに『諸君は純粹なる政黨內閣に依り官僚內閣超然內閣の如きは斷じて反對さるゝ所なるべし』と云ひ、敢て自家の意中を吐かずと雖も、一歩を進めて政黨界に人物乏しきを云ひ殊に閣員全部を一黨に求むる至難なるを說きしは、暗々裡に他日或は官僚の一角と提契するの必要を見越しての伏線を張れるものに非ずや、更に擧國一致の必要を云ひ『國內の形勢をのみ事とする』の非を論ずるが如き萬止むを得ざる場合には思切りて長閥の巨頭をも仰ぎ首相たらしめんとする腹

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

案の存するを示すものと疑はれざるにも非ず、又『從つて今後の内閣は甚だ混亂を呈すべし』と云へるは萬難を排して其抱懐せる企圖を實現せんとするの意を示すと同時に、世間の夢想せるが如き純粋なる政黨内閣の成立し難きを知覺し、預め世間の非難攻撃に供へんとするものに非ざるなきか。

更に注意すべきは非公式に中正會を代表すと思惟せられたる尾崎行雄氏の意見なり、氏は某新聞記者に語りて曰く、

此際如何にせば時局を收拾するを得るかと云ふに孰れの立憲國に於ても見る能はざる如き不自然極まる超然内閣乃至前内閣の擁護者政友會を加味したる内閣を作らんとするか故に頗る難事たるも、立憲の常軌を進みて權兵衛内閣を仆したる民黨三派及貴族院を基礎として組織することゝせば立處に成立するに至るべし、此れ立憲國に於て當然のことなり、民黨三派が果して一致するや否や聊か憂慮するものなきに非ざるも、國民黨の一部が分裂するのみにて他は一致するに至るべし、而して何人が大命を拜すべきやと云ふに立憲國の例として政界の事情に通ずる貴衆兩員議長に命じ議長より更に政黨の首領に傳ふることとなし、又適當と認むる人に命ずるか、或は民黨三派及貴族院の團體に對し可命するか、其の形式は如何樣にも出來得べきなり。

尾崎氏の惱頭が單調なるだけに其言ふ所も自ら明白なり、其眼中多數黨の政友會なく又た元老もなし、民黨三派（若し國民黨參加せずば同志中正二派のみ）及び貴族院に對し新内閣の御下命あるも可なりと云ひ又は貴衆兩院各議長に御諮詢あるも可なりと云ふが如き頗る我邦の政情を無視するの傾あるは自

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ら尾崎式を發揮すゝものと云ふべきか、但し民黨三派及び貴族院を基礎として新内閣を組織す可しと云ふに至りては加藤男も異議なかりしなるべきも、男は必ずしも此一案に固執せず、同志會を基礎として起つの道さへあらば如何の方法を取るも辭せずと覺悟せるに非ざるなきか、若し後に大命の大隈伯に下らんとするや加藤男は伯の謀議に與り、各大臣の撰定等一切自家に相談あるべきを條件として協力の答を爲せしものゝ如く、他黨の代表者たる犬養尾崎諸氏に對すること宛も部下の大石河野諸氏に對するの態度を持し、其入閣する可なり其入閣せざるも可なりと云ふの度胸を定めたるに非ざるなきか、加藤男は流石に老練なり、三派聯合の聲は世間の信用を博するに必要なるも、三派對等の聯立内閣は不統一の内閣なるべきを知れるものゝ如し、蓋し國民黨及び中正會と提契するも同志會は少數なり、其少數たるに於ては自黨單獨を以てすると多く撰ぶ所あらず、新内閣の特色は下院の多數を占むるに在らずして、寧ろ統一ある人材内閣たらしめんとするに在らざりしか、加藤男は政友會か多數を過信し、大臣の人撰を黨本位に置きたる爲め大に世間の同情を失したるに鑑み、政黨を基礎とすと稱する美名の下に一種の官僚系人材内閣を作り、假令何人を首相と爲すも自ら實權者たらんと企圖せしに非ざるなきか。

（二）

民黨側に於ては前段述ふるが如き企圖を懷きて隱に陽に大に活動を開始するに對し、宮中に於せられては三月二十四日山本内閣辭表提出の後ち直ちに各地に散在する各元老に向ひ歸京を命ぜられ、廿六日第一回の元老會議は開催せられたり、此時會するもの山縣大山二公及び松方侯の三人なりしが、其議容易

に纏まらず、其何の日に決定を見るやを危まれしが、廿九日に至りて内閣組織の大命、貴族院議長徳川家達公に下れり、然るに世間一般には頗る徳川内閣の成立を歡迎せしも肝腎の公は頗る恐懼の體にして深く熟考せられしも、事局收拾の成竹なく自ら其器に非ずとして翌三十日を以て大命を拜辭せり、是れ世人の大に遺憾とせし所にして、既に大命の降下するからには、其以前に元老より少なくとも一應の相談は有りしなるべく思はれしも、前來の例を破り當の徳川公には一應の内相談もなかりしを聞き、世人は周ねく元老の不誠意を咎めざるなく、甚だしきは松方侯が徳川公を推擧せしに對し山縣公は徳川公の必ず起たざるべきを知り義理的に賛成したるに過ぎず、三老互の腹の探り合の結果徳川公の推薦を見たるに外ならざれば公は一時の煮出しに使はれたりと憤慨するものありしも亦奈何ともす可らず、然れども此際公が決然として大命を拜辭したるは一方に世人を失望せしめたるも、同時に自ら公の高潔にして賢明なる人物を仰くの感あらしめたり、斯くて徳川公の問題結了するや元老會議は直に淸浦子を推薦し、子に於ても宛も成案あるもの丶如く進んで御請に及びしは世人の聊か意外とせし處なり、抑も淸浦内閣の說は初より一案として世評に上りしには相違なきも、其事實として現はれ來るべしとは何人も期待せざりし所なりしが、後にして思ひ合はすれば存外に用意周到の企圖より出てしもの丶如し、事は徳川公推薦の前日に在り、即ち二十八日の午前記者聯合會の代表者黑岩大谷松井諸氏が淸浦子を華族會館に訪ひ、後繼内閣は須らく憲政の大義に則とり組織せざるべからざるを說きしに對し子は語りて目下予が大命を拜するやも知れずと世說紛々たるも鰻の匂ひのみにして未だ箸を採るに至らず、假りに大命を拜する

ことあるも目下沸騰せる人心の轉嫁は非常の難事なりと云ひ、又海軍に對する政黨並に兩院の意向は略ぼ知るに足るも、陸軍問題の解決に對しては心痛措く能はずと語れる口吻を以て察すれば、其嗅ける薄燒の香りが世間の風說以外頗る權威ある方面より放ち來れることと察すべからずや、然れば世間或は山縣公が元老會議に於ける淸浦子推薦の事を德川公辭任の後まで見合せつゝありしも、其內意は疾くに淸浦子に打明け、子をして隱に準備せしめつゝありきと云ふも必ずしも誣說とのみ打消すべからず、兎に角淸浦子は一たび大命を拜するや一氣呵成に其內閣を組織せんとするの概を示し、其閣員候補の如きも決定する每に其名を發表し、東京府知事官邸は未成內閣の集會所と爲れり、而して四月二日を以て內相に擬せられたる宗像東京府知事は淸浦內閣の爲めに左の如き聲言を爲せり、曰く、

目下の政局は世の唱道する如く必ずしも困難なりと云ひ難し只時局をして今日に陷らしめたのものは國防問題なり、苟も大禮內閣と云ふが如きは採るべきに非ず奮然起つの決心を有す以上は此場合に海軍廓淸及び國防問題の二を提け起たざるべからず、而して此二問題を解決するは易々たるものと信ず、從來政黨に於ては斯くせば實業家に反對を蒙るべし或は黨內の纒り如何等種々情實に制せらるゝ憾ありしも、純正なる超然內閣として起たんか專ら國防の見地に立ち、國防會議を起して來議會に臨むべし、幸にして解決せば新內閣存立の目的を達し其理由も玆に盡くるを以て內閣は總辭職を爲すべし、若し又不幸にして多數を以て否決せられん乎、之を否決したる政黨は後繼內閣を組織して同問題を解決するの義務あり故に斯る場合には淸浦內閣は直に辭職すべし、從來の超然內閣は表面に超然を標榜

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

し裏面には操縦を事としたるが、今次の超然内閣は模範的立憲的超然内閣を期し反對する者に責任を歸せんとするものなれば強ゐて小刀細工を施すの必要もなく、又妥協情意投合等を爲すの必要もなし、既に一身を犧牲にし最後の期も豫定す、何を苦んで他の鼻息を窺ひ氣兼ね氣苦勞を爲すの要あらんや。模範的立憲的超然内閣とは頗る奇抜なる熟語なり、各般の情實に制せられず公明正大に國防問題の解決を期し、其解決と否とに關せず一定の期間に辭職すべく、政黨に對しては妥協を求めず操縦を試みず、大く短く男らしく遣ると云ふに在れば、面白き一種の趣向には相違なきも、超然内閣と云ふことは、假令模範的にして立憲的なりと稱するに關はらず一齊に世間の排斥する所と爲れり。但し政黨を基礎とする内閣が如何にしても成立し能はざる場合には超然内閣も亦止むを得ざるべきも、世間にては未だ左程に斷念せず各政黨の本部にては寧ろ欝勃として元氣に充ち、大に成すこと有るの概を示すに關はらず、頑迷なる元老の推薦に因り出來れる超然内閣に對して孰れの政黨も反對の決議を爲せり、然れども超然を標榜せるものには天下の反對も空吹く風と取り合はず、何物をか竊に頼む所あるもの、如く颯々と進行し、四日に海相を除くの外閣僚の撰定も略ぼ結了し、加藤中將の承諾次第親任式あらせらるべしとさへ傳へられしが、同中將は五日を以て清浦子を訪問して海軍豫算の善後策に關し内閣に於て責任支出又は臨時議會召集孰れかの方法を採らんことを請求し、其遂に納られざるや悄々として辭し去れり、抑も此際に於ける責任支出の非立憲なるは事理最も明白なれども、臨時議會の召集に至りては必ずしも非立憲ならず、若し其提出さるべき追加案にして事實上前議會に不成立となりしものと同一のものたらしめば

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

非立憲の譏を免れざるべきも、前年度來繼續の製艦費を本年度に限り支出すべきものを請求する爲のものたらしめば臨時議會の召集は寧ろ當然の擧なりと云はざるべからず。然るに清浦子が之を肯せざるは其超然標榜の結果として臨時開會の劈頭に不信任決議の成立せんことを恐れたるに由れりと測量せざるべからず、斯くて清浦子及幕僚は加藤中將の强硬なる態度に接し今始めて新內閣の船を暗礁に乘り上げしを覺り頗る悲觀に傾きしが、果して六日の會見に於て加藤中將は責任支出案を撤回し、清浦子より萬止むを得ざる一部に對し豫備費中より臨時支出を爲すべしとの提案を受けしも、到底海相としての責任に堪へずとの理由の下に入閣を謝絕せりといふ、清浦子は更に齋藤海相を訪ひ善後策を講ぜしも、臨時議會開催を拒む以上別に候補者の出づべき樣なく、遂に超然內閣の計畫も最後の頓挫を來たし春宵一場甘夢と消去せたり。

(三)

斯くて清浦內閣は無殘にも流產したるが、其流產の原因たる加藤中將が始め好意を以て入閣の提議を受けながら竟に之を拒絕せしことは我政界の事情を明かにするの必要上研究の價値ありと思ふ。世人往々之を海軍のストライキに基因すと云ふ、假令果してストライキなりとするも海軍は何を以てストライキを爲して迄も清浦內閣に反對したりや、吾人は毫も海軍として清浦內閣を恐るべき事情ありしを知らず、清浦內閣は決して海軍の理由ある要求を拒絕せんとするものに非ざりしなり、只た本年度に於て必要止むべからざる費用の支出に關して臨時議會を開くことを拒みしのみ、必ずや何かの手段に依り少なく

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

とも職工等の離散を防ぐだけの方法は立てしなるべく、而して前途の年度割の増加により八年計畫をば違算なく實行すべき覺悟なりしは疑ふべからず、然るに關はらず加藤中將が强いて辭任せし所以のものは、有力なる政黨の後援を有せざる超然内閣の基礎甚だ微弱にして、賴むに足らざるを悲觀したるが故に非ずや、宗像氏の所謂模範的立憲的超然内閣は一種の思付にして、紛糾せる事局を鎭定するに最も都合よき仕組なるが如きも、政友會の如きは頗る之を利とするの事情あるに關はらず遂に「超然」の名前に對し該内閣を到底援助すべからざる地位に立てり、且つ實業界の如き從來政黨政派に無頓着なるものに於ても、一時的にして永久の基礎なき微力なる内閣を歡ばず、斯の如くして概して世間一般に益々政黨の必要を認むるに至れるは淸浦内閣の流産に伴ふ著るしき時勢の特徵なりと謂はざるべからず、此際元老輩は未だ非政黨の僻見を全く擲たざるが如きも、超然主義に基ける淸浦子の推擧が失敗に了りし一事は最善の教訓たりしや想像すべし。

淸浦内閣失敗の善後策を立つる爲め元老會議は四月八日を以て重ねて開かれたり、此度は興津に靜養中の井上侯も歸京して參加し、侯の首唱に依り天下の大勢に順應して立案奉答することとなし、而して首相候補者としては元勳の一人にして且つ世人の最も歡迎せんとする大隈老伯を推擧すべきことを決定せり。

大隈伯推擧のこと一たび露布するや、政友會及び其關係者の頗る愕然たる耳ならず、世間一般にも頗る意外の感を爲せり、蓋し民黨三派の基礎の上に大隈内閣を築かんと企畫せしものも、容易に元老が此

案に首肯すべしとは信ぜざりしもの丶如く、殊に政友會一派の間に於ては絕對多數の威力に信賴し苟も政黨を基礎とすと云ふ以上は政友會を除き別に基礎とするに足るものなしと信じたり、是れ必ずしも笑ふべき見解には非ず、第三十一議會に於て反對黨各派が幾度か不信任案を提げて肉迫せしも、其度每に必ず二百〇三の多數を以て敵を擊退したる結束力に至りては敵も味方も舌を卷かざるはなかりしなり、然れば政友會を基礎とせざる內閣成るとせば次の議會に於て一大衝突を來たし、解散ともなり豫算不成立を繰返へすことゝもなるべきは何人の想像にも浮ぶべき問題ならずや、苟も政界の紛擾を鎭定せんとせば次期議會を無事に切拔得べき內閣を必要とす、政友會一派が多數黨を無視する內閣の成立難を確信せしも一理なきに非ざるなり。

然れども是れ一方の意見なり、更に反對の脚地より之を見れば、政友會が衆議院に於て絕對多數を占むる事實は否むべからざるも、其世間一般に頗る不人氣なるは蔽ふべからずして、其事實上の黨首たる原敬氏が新聞紙攻擊の標的となり居れる今日なれば、若しも假りに同氏が首相候補に定められたりとせんか、物論更に沸騰して遂に如何なる不祥事を喚起せんも計り知るべからず、原氏の一身は別事とするも、政友會が此際海軍收賄の關係より僅かに免れ得たるに、復た直ちに世間憎惡の中心となるが如きは頗る不利益のことならずや、然れば原內閣の此時に實現せんことは原氏にも利なく、政友會にも益なく、而して物騷なる世間を鎭定せんことは思ひも寄らず、但し大命西園寺侯に降下したりとせんか、自ら別問題にして假令世間の一方に例の違勅問題を云々するものありとするも、事局を解決する上には申分な

き方法と云はざるべからず、然れども大命は終に同侯に降下するに至らずして、先づ大隈伯に下れり、吾人は四元老が加藤、大石、尾崎、犬養諸氏との關係ある大隈伯か必す三派を糾合し得べきを信じ且伯が世間の歡迎すべき人なるを思ひ、以て伯の蹶起を促したるを頗る機宜の處置なりと信ず、而して是れ實に井上侯晩年の大出來なりと云ふを躊躇せず。

四月十三日内閣組織の大命は終に大隈伯に降れり、十日に元老會議の内意を傳へられて以後の伯は元老との交陟に全力を傾注せしが、今日始めて伯は閣僚の撰定に取懸れり、茲に於て伯が最も心肝を碎きしは三派糾合の問題にして、其成ると成らざるとは將さに成らんとする大隈内閣の强弱に頗る影響すべき耳ならず、亦た伯個人としての威信に最大關係あればなり、伯は犬養氏を羅致するの困難を自覺せるもの丶如く、一方三浦將軍を以て勸誘せしむると同時に、他の一方には先づ尾崎氏を說き更に同氏をして犬養氏を說かしめたり、而して後犬養氏を早稻田邸に招き大に膝詰談判を試みしも、冷靜なる犬養氏は黨員に謀るを必要なりとして即答せず、而して十四日に至り終に入閣を謝絕せり、是に於て既に犬養氏の入閣を條件としたる尾崎氏も亦た中正會に謀り、大浦子の内相たるを排し且つ中正會より二人の閣員を採るべしと云ふ新條件を提出し、其容れられざるため逡巡して決せず一時は殆んど交陟行惱み又々內閣流產を見るの說さへ傳へられしが、終に大浦子を內務に容れざるの約束を得て、尾崎氏も止むなく花井氏を殘して獨り入閣することを承諾し、茲に始めて新閣員の撰定を終り四月十六日の新任式を以て大隈内閣は成立せり、獨り内相の椅子は大浦氏が排斥されて後ち各方面の滿足すべき人物を得ること頗

る困難なるものゝ如く、首相の兼任することとなりしは以て一大苦心の跡を見るべし。

斯くて漸くのことに出來上りし新内閣に就て見るに、若しも第一流の人材内閣と云ふべからずとするも決して非戈内閣にはあらず、纔くに大隈伯を以てする外、副總理の位置にある加藤男の外務は最も出色と云ふべく、司法の尾崎氏亦た一種の人氣を惹くに足らん、司法部内の刷新もしくは法典の改正と云ふが如き事業に關しては東京市長としての尾崎氏を知るものは到底多くを望まざるべきも、目下司法官憲の着手中に屬する社會廓清の事に就ては只た尾崎氏が法相として全然法廷の進行に放任して干渉すること無ければ卽ち足れり、卽ち總ての情實を排してドシ〳〵遣るべしと命令すれば足れり、斯る消極的活動は氏の得意とする所にして、吾人は少なくとも當分氏の法相振りは頗る世間の人氣に投すべしと思ふ、若槻氏の大藏、一木氏の文部、武富氏の遞信孰れも申分なし、但し若槻氏の閲歴に富まざる爲めか實業界方面に於て多少の不滿なきに非ざるが如きも、氏の計數に明なる其議會答辯に老巧なる決して撰を誤れりと云ふ可らず、而して大浦氏に至りては其農相として申分なき耳ならず、黨勢の消長に明かなるが故に必ず内務行政上首相唯一の顧問たるべく、或る一定の時を過ぐれば、大浦子は遂に内相に移さるべき内約あるにあらざるなきか、内務は最も煩忙なる職にして、事多く地方の細事に關し從つて人心の向背に影響する處深し、内相を兼ぬる大隈首相が親しく此等の細事を考慮に上すことは不可能なるとともに、又た下岡次官に放任し去ることも危險ならん、然ればとて一部の運動者に聽きて後藤男を内相とするも不可能なるべく、大石氏もまた物に成らざるべく、新内閣が議會解散の避くべからざるを覺悟す

る時は即ち大浦子が内相の椅子を占むる時なるべきが、而して差當り知事の交迭其他重要問題に關しては必ず大浦子の意見を待つて事を決することとなるべし、八代海相岡陸相に關しては世已に定評あり亦た吾人の推稱を待たず。

要するに新内閣は其顔振れより觀れば一種の人材内閣たるを失はず、然らば則ち其前途は如何、果して成功に終るべきか、多幸多福なるべきか、吾人は其然らんことを希望するものなり、又た假令其内外に危險の要素ありとするも前途の事多くは時の運にあり、必ずしも今日吾人の眼に映する所の危險が皆な實現し來るものにも非ず、當局たるもの餘り各方面に氣兼せずドシ／＼其行ける處まで行くべきなり、但し吾人が好意より新内閣の前途を觀測し聊か批評を試みる亦た一興にして、當路に取り多少の補益なきにしも非ざるべきか。

《四》

大隈内閣の一大弱點は其衆議院に於ける基礎の甚だ薄弱なることに在らん、犬養氏の入閣拒絶と同時に國民黨は『大隈内閣の成立を希望し且つ之を援助す』と云ふの決議を爲し、又た黨より一人の入閣者をも出さざる事を申合せたるは異分子の爲めに内閣を短命ならしめざる好意に出でたりと辯明するも、已に自らを以て異分子なりと思惟する程なれは其内閣に對し果して幾許の援助を與ゆるを得べきか、ツマリ入閣せざると同時に内閣成立の邪魔を爲さず云ふに止まり、前途に於ては自由の行動を取らんとするものに外ならず、犬養氏自ら其脚地を說明して曰く、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

時局如此紛亂し遂に大隈伯の蹶起を見るに至りしが此間に處し最も苦心せしは余なり、明治十四年以來政治的に伯の子分として終始一貫知遇を忝ふしたるは恐らく余を措いて他になかるべしと信ず、而して余を以てするも此際老齡の伯を起たしむるは頗る氣の毒の感に堪へざる次第にて情誼としては伯を諫止すべき者なれど、同志會の連中が躍起となりて老伯を擔ぎ上げんとする今日余之を諫止せんか却て彼等の疑を招く無きを得難く、又老伯の蹶起を贊せざる者獨り余のみならず他に之ありて此人よりも諫止さるゝ模樣あるを以て余自ら之に當るの要なきを認め遂に伯の意に任せたる次第なり、然しながら大命下り老伯拜受したる上は余も極力之が援助者たるべき義理合なるも新内閣中に幾多異分子を網羅するが如きを以て此上余の如き異分子を加ふれば却て新内閣の基礎を危くするに外ならず、伯に對しては閣外より誠心誠意之を援助すべし、國民黨は好意的中立を嚴守するに決定せり、而して未だ何等大隈内閣政綱發表を見ざる今日此決議を爲したるは大隈内閣の政綱が吾國民黨の政綱と背反せざる範圍に於て之が援助者たること勿論なり。

國民黨の態度已に斯の如し、而して中正會亦尾崎氏が會の決議を無視して獨斷に入閣せるを憤慨し自由行動を採るの決議を爲せしを以て少なくとも其一半は新内閣の黨與たらずと見るを至當とせん、玆に於て同志會は獨り内閣擁護者たるの觀あるも、後藤男に緣故ありと思惟さるる非幹部派は益々跋扈跳梁せんとするものゝ如し、假りに同志會の九十名と中正會の一半は忠實の黨與として信賴すべしとするも衆議院の過半數に及ばざること甚だ遠し、若しも三派悉く聯合して百七十餘人の黨與を有したらんには

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

假令少數なりとは云へ解散して多數を得るの望なきに非ざるべきも、三派聯合成らずして現在の衆議院に於ける根據斯の如く薄弱なるに於て果して何の成算ありて議會に臨まんとするか、近日開かるべき臨時議會は自ら別なれども、第三十二議會に對して、何か新内閣を利すべき政界の大變動あるにもあらざれば、大隈内閣は自然に立往生するより外に途なかるべきなり、而かも尙稱して政黨に基礎を置くと云ひ立憲的なりと云ふ、吾人は寧ろ大隈内閣が事實上の超然内閣たらんとするを危まずんばあらず。

假令政黨主義を抛擲せざるまでも、事實上官僚の色彩を帶ぶるは否むべからず、加藤男は英國風の政黨政治を理想とすと稱せらるゝも、我邦にては同情未だ其域に達し居らずと思惟せるものゝ如く、大浦氏は政黨に身を置くも其思想は純然たる官僚の權化なり、尾崎氏武富氏ありと雖も一方には、山縣公の代表者として一木、岡の兩相及び内務次官の下岡忠治氏あり、世間或は大隈内閣を評して桂内閣の變形にして、隈伯を以て桂公に取換へたるに過ぎずと云ふもの必らずしも大隈伯の政敵にのみ限らざるが如し、虚心公平に觀察すれば何人も斯の如き感想を起さゞる能はざるべし。

其他大隈内閣は政策上幾多の難問題を有す、其最も重要なるは國防問題にして、八代海相は差當り海軍豫算問題を如何に解決せんとするか、海軍廓清は一方虚心公平に法律の運用に放任し他方に能く人物を鑑識し適材を適所に配置すれば足れり、然れども豫算補充又は前途の海軍充實は容易の事業に非ず、是れ實に軍人として令聞ある八代中將の行政官としての一大試驗たらずんばあらず、新海相は果して其試驗に首尾よく及第すべきや否や、而し岡中將が陸相となれるは二師團增設の前提と見るべく、大隈伯

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

は在野當時陸海權衡論を唱へて暗に增師に贊成したれは陸軍の要求に反對せざるべきも、尾崎法相は有名なる非增師論者として果して衝突せざることを得べきか、尾崎氏また前議會の行懸上九千三百萬圓の海軍充實案にも反對せざるを得ざるべきか、蓋し尾崎法相は彼と稍々性行を同ふして更に偉大なるクリスピーの顰みに效ひピラミットの下に在ると其頂上に立つとは自ら眼界を異にすと云ひ平然として陸海軍擴張に同意すべきか、抑も亦政治上の德義として言質を重んじ決然桂冠の勇氣あるべきか。

更に同志會出身の四大臣は前議會に提出されし大膽なる財政案を政府案として次回の議會に提出すべき責任あり、殊に營業稅（全廢）二千六百四十三萬三千圓、通行稅（全廢）四百五十九萬九千圓、地租（七厘減）千二百萬圓、計四千三百餘萬圓の大減稅案は如何に始末せんとするか、其實行は國民の翹望止まざる處たるとともに、其不實行に對しては決して默過し去らざるべきなり。

之を要するに大隈內閣は異分子內閣なり、極端なる軍備縮少論者と熱心なる擴張論者と席を連ね、民權論者と官僚支持者と相伴ひ、國民に對しては法外なる減稅の約束を荷ひ、而して其衆議院に於ける黨與は議席總數の三分一に及ばず、其狀たる宛も重荷を負へる一群の男女が相携へて一本橋を渡らんとするに似たり、吾人は個々の大臣に就ては其人物の頗る推稱するに足るを思ふと同時に內閣として其前途甚だ多望なりと云ふ能はざるを恨む、若夫れ危を轉じて福となすは政治家の手腕に屬す、吾人は刮目して新局面の開展を見んと欲す。

# 政略の濫用

輿論政治は言論の政治なり、政爭の激する處往々常規を逸し政敵の私行を發き若しくは無根の風説を流布して他の信用聲望を害せんとすることあるが如きは即ち政略の濫用にして識者の取らざる所なり、然れども現在の社會は頗る社交禮儀に習はざるが爲め、政熱の迸しる處漫然手段の如何を顧るを忘る丶ことあるも寧ろ心事の諒とすべきもの往々なきに非ず、但し國家の大問題を政爭の爲に濫用し又た神聖犯すべからざる大廟の事件を政敵攻撃の具に供するが如き其害の及ぶ所最も深且大なるものあり、吾人は此種の濫用に對して特に警戒を加へずんばあらず、第三十一議會の開くるや幾許もなく尾崎行雄氏は陸軍大臣に對し一の質問書を提出せり、其意味は前年帝國議會に於て陸海軍孰れを重しとするやを質したるに當時の軍事當局者は陸海孰れも輕重なきこと宛も鳥の兩翼の如く、車の兩輪の如しと云へりしてとありしが政府は今も尚ほ同一の理想を抱き居れるや果して然らば今次政府提出の豫算に於て政府は單に海軍の擴張を企圖し陸軍の二個師團增設案を提出せざるは如何と云ふに在り、一に政府を苦めん爲めの質問としては此質問の如きは頗る巧妙なりと云ふべきも、其質問の結果が陸軍を煽動して增師熱を昂騰せしむるの嫌あることは看過すべからず、若しも質問者が軍備縮少論者たる尾崎氏に非ずして、增師論者たる他人ならしめば、吾人は毫も之を非難すべき理由を見ず、何となれば相當の手段を以て反對者を苦しむるは政略上當然の手段にして、同時に質問者の素論たる增師案に利することを得ば是れ即ち一

學兩得たるべければなり、然れども輿論の指導者を以て自任する尾崎氏としては一時の快を貪らんが爲めに國家重大の利害關係ある國防問題を濫用するは最も不謹愼の事ならずや、此點に關しては吾人が犬養毅氏の態度の寧ろ頗る公明なるを稱せずんばあらず、氏は衆議院に於ける山本内閣彈劾上奏案の提出に際し山本伯が海軍不正事件の責を負ひ辭職すべきことを痛論し、語を更めて曰く余は貴族院の決議に悉く賛成し能はざるものなり軍備の偏重偏輕とは何たる不合理ぞやと、語簡なりと雖も寸鐵人を殺すの概あり、增師必要ならば增師すべく海軍擴張すべくは擴張すべきのみ、然れども一方を擴張すれば他にも增師せざるべからずと爲し、權衡を理由とするは必竟國防を弄ぶものに非ずや、但し犬養氏の貴族院を戒めしは甚だ善し、然れども尾崎氏の質問に對しても一言の忠告なかるべからずと思ふ、何となば尾崎氏は假令陸海權衡論に自ら賛成すとは言はざるも、其言は寧ろ貴族院の權衡論者を挑發したるの結果あればなり。

大竹貫一早川龍介の兩氏は衆議院に於て内相原敬氏が大廟に於て不敬の行爲ありと云ふに付き質問書を提出せり、是れ相當の事にして毫も非難すべきを見ず、然れども兩氏の質問に對し原内相及井上神社局長が丁寧反覆辯明を試みたるに關はらず尙ほ且猜疑の眼を以て其辯明に難僻を付し强ゐて不敬の罪を負はせんとするの觀あるは吾人の甚だ遺憾とする所なり、井上神社局長が詳かに辯明する處に由り察するに、神宮御内に苟も汚濁等の事あれば必ず最も鄭重なる洗清め式并に修祓の式を行ふの例にして曾て一度も之を放漫に付したることなしと云ふは疑ふ可らざるに似たり、何となれば神官等の身上より考へ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ても洗清め式拜に修祓を怠るの恐るべきを思ふべければなり、又た原内相が神前打切の不敬を爲せりと云ふも伊勢太廟の御板垣の御構造よりして神前打切は行はんと欲して能はずと辯するは信を置くの外なしと思ふ。

原敬氏の人物及び行爲に對して人各々見を異にすべきも、六千萬の同胞中一人として彼が伊勢太廟の尊嚴を冒したりと云ふ風説の無根ならんことを希望せざるはあらず、但た政治上の敵愾心に驅らるゝの餘り、端なく強ゐて罪を構成せんと努め、他事ならば兎も角、神聖犯すべからざる太廟を其の爲めに利用せんとするに至りては最も恐懼すべきことならずや、原氏にして若しも不敬行爲あらば決して容るす可らずと雖も猥りに太廟を政爭の具に供するも亦一大不敬と云はざるべからず、吾人は今次の爭論を大に遺憾とし、將來に向つて深く戒むる所あらんと欲す。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

公論

# 信仰の進化

田中王堂

ダアヴヰンが一度植物及び動物の中の種の變化に對して、從來行はれたよりも一層精確にして一層合理の說明を與へ、其の經過に進化といふ名を與へて以來、進化といふ言葉は宇宙にありとあらゆるものの秘密を開く鑰のやうに見做されて來た。今日に於ては、少くも人間の經驗に入り來たるものの存在と變化とを支配する法則は進化若しくは其れの變形でないものは一つもないと見做さるゝやうになつた。されば、其の實は何の說明にも、又は解釋にもなつて居らなくても、たゞ其れが進化の法則によつて、さうであるといつたならば、忽ち凡ての不思議は解決されたやうに見做されて居る。私も、勿論、進化の事實と、進化論の學說とを固く信じて居るものの一人である。併し、私は眞面目なる進化論者であるが爲めに、頻に進化といふことを口にする世間の論者が、果して眞に進化の意義を理解して居るかどうかを疑はざるを得ぬものである。

一口にいふと、進化なる事實は確かにある。併し、其れは目的でなくして、ある目的の達せられた時に生ずるところの產物に過ぎない。今觀察を生物だけに限るならば、彼等をとりまく境遇は常に變はつて居る。而して、生活の持續は獨り有機體を境遇に順應することによつて得らるゝのであるから、生物は境遇の變は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

る毎に、其れに相應するやうに彼等の生活を變へて行かねばならぬ。其れてあるから、一度境遇と有機體との間の整齊又は順應が成立つや否や、其の結果として有機體も境遇も常にある變更を受けるが、生物が存在する限り、永劫に亘つて、境遇と有機體の間の整齊は暫くも停止しないから、有機體と境遇との間の變更も亦暫くも停止しない。其れて、その變更の長き連續を進化と呼ぶところから、變更そのものに重大なる意味あるがやうに理解して、非常な誤謬に陷つて居る論者が少くない。彼等は進化といふ言葉に捕はれて、生物の目的は適應にある、變更は必然てはあるが、大した價値のない物產に過ぎぬことを悟らないのてある。

私は、宗教も生物の一つなる人間が彼れの生活を持續する爲めに工夫した機關てあるから（丁度、手や、眼が、機關であるといふ意味に於て）、其れが變遷と消長とを知るには進化論の立場よりするに勝れたものはないと思ふ。即ち、ある時代に於て、何故にある信仰が行はれて、他の信仰が行はれなかつたか。又、他の時代に於て、何故に更に新しき他の信仰が起つて前の信仰が衰へたか。是れは、皆進化の法則、即ち有機體が境遇に順應する必要から來たのてある。特殊の意味に於ける宗教なるものが如何に生じて來たか。如何にして其れが變りゆくかを説明するのが此の文の少しく目的とするところてある。

信仰には二種ある。即ち廣義に於ける信仰と、狹義に於ける信仰とが、其れてあるとは今日信仰を心理的に、或は社會的に觀察する論者の意見てある。是れは確かに事實によつて居るものには相違ないが、彼等がかく識別した時に、兩者の間の關係を明瞭に意識しないのを私は遺憾とするものてある。

初めには唯一種の信仰のみがあつて、其の作用は生活全體を支配したものてあることは明かてある。此の信仰の性質を吟味すると、今日吾人が狹義の信仰と呼ぶところのものと外形に於ては大分類似の點がある。

併し、其の志向に於ては、却つて今日の廣義の信仰に大分接近して居つたのてある。此時代に於ては生活一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

般より離れて別に宗教と名づけらるべきものはなかつたのであつて、唯、凡ての活動は其の外形に於て今日吾人が宗教と呼ぶところのものの色彩を帶びて居つたといふだけである。

ある欲望が起ると、其れを充たす爲めに客觀を變更する方法を講ずるのを合理的と名づけ、客觀の條件を變更することを努めず、唯、幻想によつて欲望を充たすことを努めるのを不合理と名づけるならば、上古に於ける人間の生活は、合理的の要素と不合理的の要素とが區別出來ない程に錯綜して居つたのである。尤もある欲望が充たされた時には、其れがどこまで實際に客觀の條件を變更し、どこまで幻想に止まつて客觀の條件を、少しも變更しないかといふことを判斷するのは、當人にとつて殆ど不可能のことであるから、不合理的とか、合理的とかいふことは、彼等の生活の成績について、吾人の標準に憑據して識別するのであるが、兎に角、初期の人間は尋常の場合には合理的に生活して居つたが、非常な出來事に出逢ふか、或は、さうでなくても日常の出來事でも、何かの必要から一層深く其の意義を知らうとして來ると、忽ち不合理的の態度をとつたのである。不合理的といつても、彼等にとつてはさうしないよりも一層の統一と慰安とを得たものであるから、彼等にとつては極めて大切なものであつたことはいふまでもないが、私は、たゞ其れが合理的であつたものとは別の原理に立つて居つたといふだけに過ぎない。私は例を以て是等の二つの性質の如何に異なるかを説明して見よう。

是等の合理的生活法と不合理的生活法とを分析すると、兩方ともに理論と實行との兩側面となつて現れる。合理的の方からいふと、過去の經驗から類推して、空が曇るといふことと雨がふるといふとの間には、ある關係があることを知る。又、喉が渇いた時は水を以て其れを癒すことをする。其の理會には精疎の相違もあるし、其の手段には優劣の相違もあるが、兎に角、かゝる智識及び方法は直ちに客觀の事實に相應し、或は其れの條件を具備して居る。但し、不合理的の方に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

なると、日蝕の原因の説明として、太陽が死んだのてあるとか、或は大いなる鳥が其れを掩ふたのてあるとか信じ、又ある石を拜むことが流行病を止めるに効能ありとして其を拜むやうなものてある。合理的の方は科學と藝術とてあるが、不合理の方は神話と魔術とてある。生活を持續するといふ上から見て、科學と藝術とは神話と魔術とに比して其の効果の優れることは云ふまてもないが、併し生活には絶えず新しき要素が入つて來る。而して、どうにかして其れを理解し或は征服して、一般の經驗の範圍に入れないならば、忽ち懷疑が生じ、不安が生じて、生活の統一が破られることになる。そこて、理解と、工夫との皆無に優るものとして、神話と魔術とがたよられるのてある。併し、是等二種の樣式に隨つて、生活を統一して行くと、彼等は自から是等の生活法は其の根柢と原理とに於て非常に異なることを發見して來る。合理的の方法と不合理的の方法との、相容れないのは無論てあるが、其れに止まらずして合理的のものは、個々の經驗の間に聯絡があるし、又何時ても同じ方法て同じ欲望は充たさるゝに反して、不合理的の方は個々の經驗の間に何等の聯絡もないし、又どの方法にしても其れを繰り返して決して特定した欲望の滿足が得られないといふことてある。詰るところ、理論的に見て、統一ある生活は統一なき生活よりも一層大なる滿足を齎し、實際的に見て、ある欲望を實現する方法として信賴出來る生活は信賴出來ぬものよりも一層大なる安立を與へるから人間が段々に文明の域に進むに隨つて、神話と、魔術とは其の領土を科學と藝術とにゆづるようになつて來たのてある。詰り、生活は不合理的のものより段々合理的のものに化して來たのてある。神話も、魔術も、何等の方法のないには優ると私は云つたが、併し、更に一層勝る方法の見出された場合には、最早神話と魔術とは次第に其の勢力を減じ行くといふことは當然のことてある。其れならば、如何なる風に神話と、魔術とは其の勢力を減ずるか。

科學や、藝術が盛になるに隨つて、魔術と神話とが

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

衰へるといつても、其れの經過は單純なものではない。其れは、輪廓と、中心との二點に於て起る經過てある。輪廓の方に起るものは、新しき活動に分化し、中心に於て起る變化は、從來の方法の改釋となつて現れる。新しき活動の分化となる方からだけ見れば、魔術と、神話との範圍は段々に狹くなるやうに見えるが併し、是れは重に實行だけに限られるのであるから、改釋によつて殘る理論の方は決して其の領分を減じない。のみならず、人間が段々に宇宙に對する智識と、同胞に對する同情とを增すに隨つて、却つて其の範圍を廣めて來たやうな觀がある。

今日、吾々が宗教と呼ぶところのものは、其の初め魔術と神話とを以て始まつたものの遺物である。魔術の方は僅かな儀式や祈禱の形を以て殘つて居る外は大低他の活動に分化して了つたが、まだ理論によつて代表さるゝ神話の方は宗教の名の下に盛に行はれて居る。而して、其れによつて養成さるゝ覺悟は宇宙と人生とを結びつけ、又人間と人間とを結び附けるに重大なる役目をもつて居るものと見做されて居る。

神話の特徴は實驗的に發見された欲望を實現する方法と並んで、超實驗的の生活の方法を信じ、其れに偉大なる人格を賦與した點にあるが、今日行はるゝ宗教の多くはなほ此の特徴を存して居る。今日に於ても、信仰の對象はある人格を有する存在物であらねばならぬ。併し、歷史を通じて其れが經過した跡を見ると、其れは段々に醇化されて來たことが知れる。其の物の性質に關しても、又其のものに對する態度に關しても一方には普遍的となると共に、他方には個人的となつた傾がある。是れを學術上の術語て、物質的より精神的となつたともいふし、又、儀式的より倫理的になつたともいふのである。詰り、前には生活に必要なる欲望ならば、其れを實現するに正當な方法を講じないて、たゞ追求したのであるが、後になると、生活全體の利害より商量して、欲望の中に價値の相違を見出し、而して、比較的に價値ある欲望を充たす方法を講ずるやうになつたのである。此の徑路が最も明瞭に現れて居

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

るのが猶太教が基督教に變はつて行つた歷史である、どちらにしても宗教である限りは、幸福を唯一の目的として居つたことは明かであるが、猶太教はたゞに其れを欲求するといふ一事によつて、得ようとして居るが、基督教になると自己の氣分を鍛錬することによつて其れを得ようとして居る。獨り基督教のみならず、あらゆる宗教は其の中心に於て神話の要素を存しながら、經典の解釋によつて、教理の改造によつて同一の徑路を踐んで居る。

文明の初期に於て、いろ／＼の意味に於て、人間の生活に統一と安定とを與へたものは宗教である。併し此の魔術の方面が段々に工業藝術等に分化して來たと同樣に、其れの神話の方面は政治、道德、科學等に分化して來た。魔術と、神話との目的は、其等によつて生活の破綻を防がうとしたところにあつた。詰り、生活全體に一致の精神を有たせようとするところにあつた、其れであるから、其れより分化して來た藝術、工業、科學、政治等にも自づから一致の精神が傳へられて來て居ることは明かである。否、前の一致はたゞに幻想より生ずる一致であつたのに、今は實驗より來たる一致であるから、前のより更に自由にして充實せるものであることは明かである。世人は藝術や工業によつて實行を奬めて行かうとはして居るが、魔術によつて生活を續けようとはして居らない。然るに、既に政治や、道德や、科學が成立して居るのに、尙ほ神話の遺物である宗教にたよつて欲望を充たさうとして居るのは少し矛盾の所爲のやうである。併し、こゝには多少の理由のないわけでもない。其れは畢竟ずるに理論と實行との性質の相違から來たつて居るのである。

理論はもと實行を支配して、其れを正確になす外には職分はないのであるが、生活するには、先づ、大凡其れが起るあらゆる境遇に入り來る條件の一般狀態を表式することが必要となる。併し、一度理論が此の方向をとると、是れが實行に關するものの外に、上に、更に高遠なる自足の目的があるやうに誤解される。其の結果として境遇や、興味が場所と時とによつて既に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

限られて居るが爲めに、ある種の實行に必要なるあらゆる要素を綜合せずして、時々に起る一つ、二つの要素を力說して出來た概念を作る。而して、そんなものが實際生活の要求に合はないことはいふまでもないが、合はなければ合はないほど却つて絕對的又は永久的の眞理があると考へるに便利なものとなるのである。是れが、等しく宗敎の要素ではあるが、魔術の方は早く其の力を失つたが、神話の方はなほ其の生命を保つ所以てある。

併し、如何なるものといへども、直接に、間接に、生活を助長するものでなければ、又助長するやうになされなければ、長く社會に其の存在を保つことは出來ない。それて、神話が敎理になつた後でも、其れの解釋といふ名の下に絕えず其の時々の社會の要求に適合しようと努めて居る。事實として、社會は絕えず變遷し、隨つて、其の要求も絕えず變遷して居るから、いつの時代に於ても、敎理は新しく改造されて行かねばならぬ。而して、改造は二つの相對する二つの事實の確執を待つて初めて行はるゝものてあるから、古き生活を代表する敎理と、新しき生活を代表する敎理があつて、其れの爭鬪と協同とがあつて改革は行はれて居るのてある。なほ審にいふと、等しく古い敎理の中にも、比較的に新しき要求に對して價値あるものと、價値なきものとがある。又、新しき敎理の中にも、其れに對して比較的に意義のあるものと、ないものとがある。是等は皆それ〳〵過去に於て多少の必要があつた爲めに又現在に於て多少の必要がある爲めに、各先を爭ふておのれの實現を主張するのてある。併し、之等は直接及び間接の試驗によつて其等が實際の要求に對してどれだけの効果があるか、ないかといふ一點によつて選擇され、採用されるのてある。此の結果として、宗敎はなほ外形上は、他の活動と獨立した體系を有しながら、其の精神に至つては他の活動と全然一致した方向をとつて居る。此の事實を政治の側面より見れば、宗敎はます〳〵社會的になつたといふのてあるし、道德の側面より見れば其れはます〳〵倫理的になつたとい

ふのであるし、科學の側面より見れば其れはます／＼實驗的となつたといふのである。なほ、一層適切に此の事實を觀察すると、初め宗教が有つて居つた內容は次第に法律、政治、道德、工業、美術、科學等に分化して、其等は悉く時代の必要に應じて變化して來たから、今、宗教として現代に對して少しでも意義ある部分は僅かに間接の而かも不經濟の方法によつて、個人に於て社會生活に於て統一の感情を與へて居るに過ぎない。併し、他の活動が單一なる人間によつて單一なる欲望を充す爲めに運用せられて居るならば、其等の中に十分に統一の感情を養成して行く條件がなければならない。

人間は一度生活に役立つたものは餘程不便とならない限りは其れを保存しようとする。又餘程變形しない限りは同一名稱を其れに保留しようとする、是れは勢力の經濟より見て甚だ大切なることではあるが、併し此の傾向より生ずる弊害も、決して小なるものではない。今世上の識者のあるものの宗教に對する見解なるものを見るに、嘗て宗教が必要であつたが爲めに、今日でも必要であらねばならぬと信じ、又、宗教が其の實質に於て非常に變はつて殆ど宗教の名を與へるには不適當であつても、なほ强いて宗教の名を保留しようと欲するのである。

カントは神の存在と、靈魂の不滅と、意志の自由とは、生活に必要なる三大思想と見做したが、實驗的には到底說明することの出來ないものと考へた結果、其れに統一的原理を附して實驗的原理と相並んで生活の覺悟として保存しようとしたのである。もし、是等の概念にして果して生活に重要なるものならば、其れは必然に生活の事實より實驗的に創設された公準でなければならぬ。さうして來ると、是等の三つの概念は、已に現代の生活には不要のものであるが、或は改造されて全然別種の概念とされなければ何等の意義も有たないものとなつて居る。カントにして此の明瞭なる事實を認識することの出來なかつたのは、生活に對照して、時々信仰の意義を改釋することを知らずして一

度必要であつた信仰は何時までも必要であらねばならぬと先天的に假定し、無理にも其れを保存しやうとして盲目的に努力した結果である。

世には次のやうに論ずる論者が少くない。天道の幸福と地獄の苦痛とを以て人民を教育して居つても此の通り世の中は過失と罪惡とに充ちて居る。其れであるのに、もし賞罰の根源なる未來の賞罰を人民の意識より全く取去つて了つたならば、此の世の中はどんなに不幸と怨嗟との充滿するところとならうかと。併し私から見れば、是れは全く本末を轉倒した愚見といふものである。畢竟するに、未來の賞罰を教育の一部に入れたいといふことは現世に於て幸福と平和とを出來るだけ獲得したいといふ欲求から發したのである。現世に於て幸福を得ようとするのは凡ての時代に於ける人間の欲求であるが、ある時代に於ては、一般の人民が生活の繼續を未來世にまで延長しようとする傾向のあるのを利用して、時の爲政家又は僧侶が其れに賞罰の觀念をつけ加へたのである。其れであるから、現世の幸福が目的であつて、未來の賞罰は附け加へたものに過ぎない。して見ると、已に世人の中に未來の賞罰の實在を否定し、或は無用視するものが生じたとすると、彼等は既に未來の賞罰によらずして、他に生活を整頓する方便を案出したからである。其れであるからもし前の識者にして眞に事理を達觀するだけの聰明があるならば、未來の賞罰にたよつてさへも斯くの如く道德の事業は擧つて居るのであるから、まして其れを必要としなくなつたならば、更に一層道德の事業は擧らねばならぬと云はねばならぬと思ふ。

是れは卑近なる一つの例に過ぎないが、併し、深く過去の制度又は習慣に捕はれたところの人士の論據は大概是れに類するものである。公平に、正明に證明の强弱の吟味出來る人は、政治や、科學や、工業の存在の理由を證明する論據と、宗教の存在の理由を證明する論據との間には、强弱の點に於て、多大の相違のあることは認めなければなるまい。前の者はそれ〳〵特殊の機能を附して實驗的に其の作用を說明することが

出來るが、後のはたゞ空漠たる想像又は習慣の上に立つ情操によつて其れを假定するに過ぎない。實驗には種々の方法があり、證明にも種々の程度があるが、兎に角、直接に或は間接に實驗し得ない制度は少くも現在に於ては其の存在の理由を失つたものと見ることが出來る。詰り、生活全體と有機的の關係を保つて幸福を增進する要素となつて居るものは實驗によつて證明され得るものであつて、其れと有機的關係を有たないものは實驗によつて證明出來ないものである。

して見ると、宗敎は現代の生活と有機的の關係を有たぬことは明かである。少くとももし其れを繼續して居るある活動があつて、其れがなほ生活の利害と有機的に結び付いて居るならば、其れは宗敎より他の名稱によつて呼ばるゝことが適當であると信ずる。

宗敎が今に至つても、なほ神話を根柢として居る爲めに、生活に二元觀を齎すといふことが今日の生活に合はざる要點である。詳くいへば、合理的生活法と並んて不合理的生活法を立てようとするのが其の要點である。さうなると、本來、信仰なるものは凡て合理的根柢の上に立つ生活全體に含まれた要素でなければならないのに、僅に不合理的の假定を基礎とする一部の生活に含まれた要素として了ふ。私は飽くまで信仰の人間の生活にとつて重大なる價値のあることを信ずるものであるが、其れには、どうしても生活全體を支配する合理的のものとせねばならぬ。私が過去の宗敎に對して批判の態度をとり、其れを全然現代生活より排斥するか、又は是れを擴張してあらゆる活動と抱合せしむることかせねば止まないのは全く此の理由に基くのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

# 立憲思想開發策

田川大吉郎

立憲政治は、要するに國民的調和、折れ合、活動を求むる政治てある、隨つてそれに適應した穩和、遜順、公平の國民的氣風を要する、而して我國民の氣風は、嚴厲、峻烈、峭直の方て、加ふるに權略、詭譎の分子をも多量に含んて居り、較々それに不適當のやうに感ずる、去り乍ら既にルビコンを渡つた、今更、引返しも出來ない、我國民は、勝つか、負けるか、一國の名譽、面目、浮沈を此一事にかけて、勇進せねばならない、それだけ多大の努力、警戒を要する、して見れば、その根本の手段は敎育てあらう、敎育に由つて、徐ろに、而して確實に、之に適した性格氣風を養ひ、之に適しない性格氣風を矯めねばなるまい。

僕は、十五六年前から、家庭の立憲的氣風といふことを唱へて居る。國の立憲政治は、家の立憲政治に始まる、若くば立憲的氣風に始まる、それが、大事だ、大切だといふのてある、而して今果して如何、僕は、そこに立憲的氣風の大いに缺げて居ることを明かに認める、國の立憲政治の滿足に行はれぬ所以てある、日本人は、誰も、彼も、專制政治家て無いか、一般の氣風が即ち專制的て無いか、

其話は、後日に讓るとする、先般、海軍收賄問題の起つた時、山本首相に、その收支の公開を求める聲があつた、而して此聲は獨り此時に始まつたのて無く、凡そ公人は、常に此用意覺期なかるべからずとの要求は、此より先、屢々新聞雜誌に顯れて居た、而して英國の藏相ロイドジョージが、マルコニ事件嫌疑の際、執つた手段を、模範として引用する聲も稍强かつた、然も僕の、氣風か大切てあるといふ說、即ち、習慣が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大切である、周圍が大切であると主張はこゝに在る、英國の如き一切開放的て、且、銀行關係が見事に發達し、個人の收支も、概して一般に、銀行に由り取扱はれ居る現實の習慣に對し、我國には、それが、どれ位まて發達して居ると思ふか、山本伯は存外、財利の念の進んだ人だから、或は、そのやうな手段を、採つて採れないことも無かつたらうが、一般の氣風はどうだ、習慣はどうだ、山本伯が遂々此方法を執つた時、續いて其後を逐ふ公人が、果して幾人あり得べきか、そこに、僕は、所謂英國流を、一概に、我政界に求むるを得ざる習慣の相違、氣風の相違があると、窃に嘆じて、悲んだのてある、これぞ、僕が、當時の世論の要求に唱和し得なかつた次第てある、

去り乍ら、教育の途は、矢張遼遠てある、それは他の專門家の考慮を仰ぐとして、僕は、議會政治作振の方法とも題すべき範圍に、三四の事を述べて見る、

第一に、僕は、倶樂部が足りない、殊に政治的倶樂部が足りないと思ふ、今日、我國の政黨て、倶樂部を有して居るのは、中正會の（中正會は政黨て無いけれど）中正倶樂部のみてあらう、僕は、此種の倶樂部の勃興を全國に促したい、例へば、青年會といふものが全國に在る、既に專屬の家を持つて居るのもある、勿論、さうて無いのもあるが、僕は、此等の青年會舍に、青年會員が、別の、政治倶樂部を作つたら可からうと思ふ、而して幼稚、不充分ながらも、何にせよ、政治的談論を勉めて樂む氣風を興したいと希望する、

第二には、代議士と選擧區との政治關係てある、おかしいことを言ふやうだが、僕は、我國の選擧區と、代議士の間には、殆んど政治的關係が無いと思ふて居る、代議士て、選擧區に、その政治的所見を訴へ、所論を徴したものが、果して幾人あるか、選擧民の幼稚な罪も無論あるが、代議士の幼稚な責も亦免れない、幸に、以上の如き倶樂部が、選擧區の各所に起つて、新聞なり、雑誌なりて、讀んだこと、聞いたことの各種の問題を取り集め、而して相談の結果、希望する要項を、その代議士に求め、代議士も、打ち開けてそれ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

に應答し、而して若しその代議士一人の自由に應答し得ざる場合には、之を黨の先進領袖に謀り、その明白なる回答（例へば書面の類）を得て、之を公示する等の事例を開き、習慣を作ることにすれば、稍可なるに近いと思ふ、一體、我國の代議士と、その領袖との間には、たゞ金錢の關係だけで、金錢若くば私利をねだり、ねだらるゝ關係だけで、政治上の計畫を立て、國利の振暢を謀る相談打ち合せは、全く無いのて無いか、僕は、代議士と選擧區の政治的關係を、更に親密にし、而して絶えず新しき政治問題を、平生に於て、研究し、作興したいと願ふものてある。

第三には、大學てある、選擧區に大小の倶樂部の起る如く、大學にも大小の倶樂部の起るやうにしたい、否、その倶樂部は既に起つて居る、形體上倶樂部に似たものは既に起つて居る、それを、一層整頓し、發達させたい、而して政黨若くば政治家との關係を、親密に結ばせたい、其の方法は、代議士と選擧區とのそれの如く、政治家と大學の各倶樂部との間に、將に起らんとする政治的事項の研究討論を促すのてある、我國ては、兎角、大學生をも子供扱ひにするが、僕の見た所、海外ては大人扱ひてある、卑近な例だが、我國の大學生は、制服、制帽て、子供らしく、取扱はれて喜んて居るが、海外ては、制服、制帽は中學生限りのやうだ、即ち、中學生は、制服、制帽て、見分けが着くが、大學生は、それては全く見分けが着かない、校堂の中ても、その集まれるや、演説會場の如く、株主會議の議場の如く、種々雜多の服裝が入り亂れて居り、而してその帽子の如き、最も、多種多樣に分れて居る、彼等は、成人として、既に一個獨立の地歩を占めて居る、而してその智識は、蓋、國中に騈ぶ者が無い、たとへばその感情は未だ練れて居ない、その實務的才幹は未だ磨かれて居ないにしても、その知識は、確に國中無雙てある、その知識の鋭に照されて、政治家の計畫を是非し、潤飾し、而して萬誤まり無きことを期するは、蓋、有要の事業てあらう。僕は、各大學と、政黨との間の連絡を、的面、直接に謀りたい、而して大

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

學の代表者を、議會に列せしむることも（大學に投票權を與へて）亦必要なる手段の一つと思ふ、

第四が議會である、議會に就ては、種々言ひたいが、一括して言ひたい點は、議會を、輿論の最終の舞臺と爲したいのである、以上の如き方法に由り、輿論の種子を各處に蒔き、芽を吹かせ、勢力を作り（新聞紙が、此間に立つて、これらを刺激し、高調するの必要は謂ふ迄も無い、新聞紙は議會以外の議會である）而して、百川、海に入るの勢ひもて、之を議會に導き、議會に於て、始めて輿論を作るのでは無い、既に出來て居る輿論を、議會に於て、實際的に調攝し、鹽梅し、疏通融洽せしむるのである、然るに我國の實際は、議會は、稍最終の舞臺であると共に、又最初の舞臺である、動もすれば、最初の舞臺である場合が甚だ多い、即ち、人民先づ唱へて、議會之を決するので無く、議會之を決してから、人民が之を考ふるのである、而して苦情を唱ふるのである、故に、我國では、議會は、或要求、若くば苦情の解決の府で無くして、寧ろ或要求若くば苦情の醱酵所と爲つて居る、國民の多數は、元來それに氣着かずに居る、議會はその氣着かずに居る苦情の種を蒔き、智恵を着ける所に爲つて居る、即ち、問題解決の最終の府と爲らずして、最初の府と爲つて居る、こゝに僕は我議會の弱點があると思ふ、我議會の討論の、幼稚なる、而して險しき、而して無價値なる原因は此にあると思ふ、どうぞして、以上の如き諸種の機關、舞臺を作り、言ひ換ゆれば、各處に小議會を作り、その序を逐ふて、議會に入り、議會を、その、疏通、解決の最終の府たらしむべく期したいものである、

此く改進せしむるに、差詰め、有効の手段と思はるゝは、大臣自ら討論に與かることである、我國の議會では、大臣及び政府委員は、原則として提案の要旨を說明するが、決して討論をしない、僕は、大臣の討論に與つた例を殆んど記憶しない、原敬氏に就ては、世間、いろ〳〵惡口をこく人あるも、僕は、大臣中、討論に與つた人は、眞似形ばかりでも、討論に與つた人は、此人一人かと思ふて居る、その討論に與かる氣風を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大いに作興したいものだ、即ち、獨り、自省の提案に關し、討論するのみならず、その大問題に關しては、進んで他省の提案にも干與し、大臣總出て、討論に與かるやうにしたいと思ふ、大臣が、進んで討論をすれば、反對黨でも、總理が進んで討論に與かり、從つて、議論に活氣が生じ、責任が伴ひ、國民の注意が議會に集まり、議場の空氣が、もつと引き締るやうになる、議會政治作興の工夫は、六かしい方から言へば、際限も無いけれど、易しい方から言へば、此一事でも、確に、面目を變じ、生氣を鼓舞することが出來る、僕は、之を是非、新內閣の諸君に期したいと思ふ、思へば、新內閣の諸君は、いづれも辯者である、辯の効力を解した人である、殊に、尾崎君、武富君は、その所屬團體の代表者として、反對者として、議場に勇戰した人である、その立ち方は、確に、原君の總務たり、松田君の總務たり、加藤君の總務たるやり口、流儀に異なつて居る、此人にして今、閣臣たり、必らず議會の討論說明、主張に勉めらるゝであらう、僕は、之に由つて、直接、政友派の努力を刺激し、議會の討論を、今迄よりも、もつと重からしめたいと希ふて居る、

大臣を、討論に與からしめるの外、僕は、黨派の首領を、勉めて議會に席を持たせたいと思ふ、例へば、前議會に於て、加藤男は議會の外に在つた、爲に、便宜を缺いたものは、獨り同志會ばかりでは無い、議會も、國民も、齊しく便宜を缺いた、僕は、彼の場合に、加藤男は當然に貴族院に存らしむべき人だと思つた、在らしむべく政府ですべき筈だと思つた、その以前に遡れば、大隈伯である、大隈伯が反對黨の黨首として立つこと二十年、然も常に議會の外に在つたゝめ、國家、國民の受けた損失は測り知られない、彼の場合は、たとへ伊藤公は大隈伯を憎んだにせよ、山縣公は大隈伯を嫌ふたにせよ、松方侯、西園寺侯は、大隈伯に含み、恨む所があつたにせよ、伯の反對意見を貴族院の一隅より聽かるべく、勉めて膳立てすべきであつたと思ふ、それらは舊夢、今は、反對黨の首領は幸に衆議院に在り、そんな心配を要しないが、此際、一層の敬

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

意を反對黨の首領に拂ひ、秘密は秘密とするも、協議すべきものは、十分協議の途を盡し、以て公明なる、而して公平なる研究、進善の端を啓き、業を成したいものである、

それから總選擧前に、議會を解散するの例を開きたいと思ふ、四年の議會が、四年目に、事無く終止すると謂ふて無しに、その四年目の議會の終りには、政府から固より可し、反對黨からも、進んで解散問題を作り、以て、その總選擧を有意義に致したい、何の爲の選擧か、政府と反對黨とは、何を、此度の總選擧に決せんとするのかの意味を、洽く國民に知らしめ、國民をしてその知る所に本づき、向背を決せしめ、隨つて、議會に、國民の意向が、明白に表顯せらるやうに致したい、我國には、從來、幾度も解散はあつたけれど、意義の有つた解散は、一回も無つた、政府は何を主張し、反對黨は、何を主張するのかの意義が、明白に、理解された選擧は一回も無つた、過去は詮なし、何年までも、此愚を繰返すべきて無い、新らしき、問題は日に〳〵湧いて居る、どうか、新らしき政策を立て、互に相對して、國民の最高、最秀、最善の力を盡したいものである、その力を此方面に集まらせたいものである、

それから、內閣が、いよ〳〵辭職の場合には、後任者に、反對派の首領を奏薦したいものである、例へば山本伯辭職の場合に、若し今日の大隈伯を奏薦したら、今日の時局は、如何に奇麗に、國民喝采の間に收拾されたてあらう、山本伯、原氏は、此一擧積日の誹りを一掃し得たのてあらう、たとへ、一掃し得なかつたにしても、立憲政治の模範的運用の一例を貽したゝめ、後世から、如何に多く感謝さるべきてあつたらう、たとへ、感謝されないにしても、如何に、中心の誇りを禁じ難き堂々たる男子の事業てあつたらう、僕は、山本伯が、此擧に出て無つたのを、伯のため、終世の恨事とする、原氏が、此擧に出て無つたのを、更に、氏のため終世の恨事とし、且、氏の立憲的政治家たる進退の瑕瑾とする、これも既往を咎むるは益なし、大隈伯等

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

が之に鑑みて、斷じて百紛を排し、原氏等、政友會の領袖に、後の内閣を讓り渡さんことを望む、伯の内閣に百失ありとも、若し此一事を成せば、伯はそれに由つて百世に生くべきである、而して議會政治の面目は大いに振ふに相違ない、立憲政治の興味眞味が、國民の間に、鮮かに認知され、鑑賞さるゝに相違ない、但、その場合、貴族院議長に諮詢せらるゝや否やは別の途である、別の問題である、僕は、樞密院議長に諮詢さるゝを欲しないが、貴族院議長(衆議院議長に及ぶもよし)に、諮詢せらるゝことは必らずしも不當と思はない、

第五に豫算と決算との關係が、餘りに間が拔けて居る、間が拔け過ぎて居る、此間を、もつと、つゞめたい、然し、細かい議論は今爲さない、此主意より、議會を毎年十月ころより開いて、年内に終る方法は、どうだらうかと思ふ、どうだらうかと謂ふのは、疑ひを持ちかけるのでは無い、寧ろ善くないかと思ふのである、外でも無い、前年度歲入の現計が八月に出來る、故に、九月か、十月に議會を開けば、前年度豫算の收入と、實收入との關係成績が、稍明白に國民の眼に映じ、議會の討論が、一層本氣に爲り、國民の興味も、政府議會の責任の觀念も、自然にして深くなる譯だと思ふ、今日の實際は、大正三年度の豫算を、大正三年一二月に論議する場合に、參考の基礎となるものは、大正元年の成績であつて、その豫算は元年の一二月に議したのだから、其間に丁度二年の隔りがある、僕は、それを、間が伸び過ぎて居ると思ふので、假に、僕の說の如く、議會を年内に終結すると、大正元年議會の結果を大正二年に承知して、次の豫算に進む譯に爲るから、記憶も較々明かに、感情も鮮かにして、議論が幾分確實に爲るかと思ふのである、何にせよ、豫算に頓着なき國民である、隨つて豫算に頓着なき代議士である、此弊を矯めねばならぬ、矯める工夫を、四方八方より講ぜねばならぬ、而して豫算議定の今日の方法は、その工夫を缺いて居る、國事を國民に知らしむる主旨で無い、寧ろ知らしめない主旨では無いかと邪推せしむべき方法である、方法とは必らずしも謂はないが、

そのやうの態度である、このやうの態度が、歴代當局者の口吻、言動の間に隱見して居る、隨つて、豫算に對しても、太多しき不備の感と、隔靴の憾みを免れない、此態度の一變てある、當局者が、此態度を一變してかかれば、豫算改善の工夫は、澤山ある筈てある、その改善が、出來、材料が新らしく爲り、利害が明かに爲り、成敗が、ハキ〳〵、眼に映つて來ることに爲れば、當局者も面白く爲り、自然に、はづんで來、國民も、代議士も、此政治の成策を樂むやうに爲る、何にせよ、豫算の關係、租税の納期、年度の工合、議會開會の時期等も、立憲思想の開發、助長に、直接多大の關係がある、決して等閑に附してはならぬ、

記者足下、取急ぎ此の如く答へる、今回は、足下が、あまりに無理てあつた、僕は、山本内閣の覆へり、大隈内閣の興つたに對し、勝利を感じた一人である、然し乍ら大隈内閣の顔觸れを見ては、失敗を痛感した一人てある、顔觸はどうても宜しい、その献立の精神に、一大不滿を感じた一人てある、隨つて僕は今悲喜兩様の感に撲たれて居る、而して情緒糸の如く亂れて居る、折角の好問題てある、最も大切なる問題てある、思念して答へたかつたけれど、思念する精神上の餘地も無く、時間も無つた、匆々の間、亂想亂筆、たゞ恐縮の至りに堪へない、どうぞ、大目に見て下さい、深く謝する、四月十七日、大隈内閣の成りたる翌朝

# 新内閣の採る可き經濟政策

福澤桃介

▼財政よりも國民經濟

大正三年度の豫算案が不成立となつたが爲めに、現

在の國庫には澤山の剩餘金があるんだからして、外國から借金をする必要もなければ、又增稅をする必要もない。從て新內閣の大藏當局たるものは財政上に於ては極めて樂な地位にあるものであつて、我々も亦財政上については今別に左したる註文もない。只經濟――國家經濟の方面をどうするかと云ふ事が現時の問題であらうと思ふ。

### ▼小さな事を徐々に着實に

然し私の觀る所を以てすれば此方面に於ても一寸エライ事は出來ない、現在の狀況に大いなる變動を與ふることが六つかしからうと思ふ。例へば明治四十三年の桂內閣の時は、四分利公債の借換をやつた。此時は、外國の金融界が一般に緩漫て、且つ日本に向て金を貸さうといふ風が一種の流行のやうになつて居つた時である。其機會に乘じて五分利を四分利に借換へたのである。然るに今日は外國の經濟界も眞面目になつて、日本に向つて警戒を加へて居るんだから、誰が局に當つたからつて、外資輸入と云ふやうな事は出來るものでない。だからして眼の轉倒へるやうな放れ業は何人にも出來ない。龍も雲を得ざれば蛇と伍するより外ないと同じて、如何に豪傑の大隈伯でも、雲が無ければ――四圍の形勢が不可てあれば、目覺ましい藝當は出來まい。それて今日は先づ徐々と改善するより外に途がない。小さい事ても放棄つて置かずに、眞面目に着實に、徐々として改善の途を講ぜられんことを希望する。

### ▼不安の念を取去るが第一

一體今の經濟界が不振不安を極めて居るのは餘程不思議な現象てある。金融は緩漫てあるし、財政の餘裕はあるし、どうしても堅實な事業の勃興を見なければならぬのであるが、實際は之と正反對て、事業は起らないし、株式は不振てあるし、一般に萎靡沈滯の狀態にあるのは、經濟界の根抵に大いなる不安があつて、何人も手出しをするに躊躇するからてある。何故と云ふに、最も安全なるべき瓦斯、電燈の如きにも無謀なる競爭が起つて少しも安心が出來ない。紡績には紡錘數が增

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

して供給過剩（オーヴァープロダクション）の心配がある。臺灣の砂糖は非常の天災もなかつたのに、外國產のものよりも却て高い。と云ふやうな譯で、不安不審の念がある爲めにどうしても事業が勃興せず景氣が立ち直らないのである。

▼先づ瓦斯電燈の競爭禁止

然らば之を救ふには如何にすべきかと云ふに、臺灣の砂糖の如きは之はどうも人爲的には出來ないものである。又紡績の如きも支那に向つて一層其輸出を奬勵てもするより外に途が爲い。然し瓦斯、電燈の無謀の競爭の如きは立處に之を止めることが出來る。元來瓦斯電燈の如きものに競爭を許すと云ふことが根本の間違てある。競爭は動かすことの出來るものには必要てある。瓦斯、電燈も、東京のものを大阪に移すとか、大阪のものを東京に動かすとか云ふ事が出來るものてあれば競爭も結構てある。が瓦斯、電燈はさう云ふ事が出來ぬものてあるから、之に競爭を許すと云ふ事は絕對の間違てある。先づ第一着として從來の無謀なる瓦斯電燈の競爭を禁止するといふ事は、一般經濟界に向て少からぬ慰安を與ふるものと思ふ。さう云ふ風の小さい事から徐々として改善するより外はない。

▼自由貿易方針を採れ

又我國の現在に見る所の輸出入の權衡（バランス）が取れないと云ふ事は之は敎育制度の弊害であると云ふのが私の持論てある。――即ち敎育が無暗にハイカラ流になつて、何ても彼ても外國品てなければ滿足せぬやうになつたのが其根本原因と思つて居るが、然し此思想の改善にはなか〱暇がかゝる。それて差當つての問題は、輸出輸入は自由貿易に限ると思ふ。殊に粗製品（ローマテーリアル）に對しては無稅にして物價を下落せしめなくてはならぬ。物價の下落は一時苦痛てあるに相違ないが、之より外に途が無いのてある。一體物價の騰貴は世界的事實てあつて何處の國ても物價の騰貴を見ない國はないけれども、日本の物價は世界の騰貴率以上に騰貴して居る。之は無暗に消費稅とか海關稅とかの上つた爲めてある。私は近十年間の物價比較表を作つて見たが、生糸とか羽二重とか云ふものは十年この方餘り變らない。生糸

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

は少し高くなつたが羽二重は殆んど同じてある。然るに輸入品は殆んど約二倍の騰貴を示して居る。之は税が高くなつた結果である。夫れ故に私は新内閣に向つて自由貿易の方針を採用せられんことを希望する。之も急に出來ぬとしても徐々として其方針に則られんことを希望する。

▼遣れば廢軌位のもの

之を要するに、今の場合は誰が遣つても、大きな、目覺ましい、華々しい放れ業が出來兼ねる形勢であつて、小さな事に暇をかけて、徐々として遣るより外ないのであるから、如何に豪傑の大隈伯だからとて、前に私が云つたやうな事より外に施設の仕様があるまい。然し若し何か多少の目覺ましい事を遣るとすれば多分廢軌鐵道の復興かも知れぬと思ふ。廢軌論者の仙石氏が鐵道院の總裁になつた事であるし、之は或は遣り出すかも知れぬと思ふ。若し遣れば確かに一つの改良であり、進歩である。私は之を遣ることを勸める。

# 國防會議と軍閥の打破

犬養毅

今回内閣の更迭と共に、陸海軍將校の移動が行はれた。其移動の顔觸れを見ると、海軍の方では、世人の所謂山本閥の人間が淘汰せられて、閥外の人物が多く採用せられたやうであるが、陸軍の方では、所謂長閥と目せられた人物が續々陸軍の要部に入つて來た。新陸相の岡、新陸軍次官の大島などが長閥の色彩最も强烈なる人間たるは勿論、新たに參謀次長の要職に就いた明石元二郎など云ふものは、今まで朝鮮にあつても行

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

政的手腕の認むべきものがあつた丈け、陸軍部内にあつても最も長閥復興に熱心なる政治家的軍人てあるらしい。一體參謀本部は何人も知る如く、國防及び用兵の事を掌る所てあつて、陸軍の行政的方面には最も無關係てあらねばならぬ所てあるのに、斯くの如き政治的色彩の强き人間を以て、其次長の要職に据ゆるなどは實に國家の爲に深憂すべき現象てある。

海軍の方面には今度其大臣を求むるに、坂本(一)と云ふ說もあつた。島村と云ふ說もあつた。瓜生と云ふ說もあつた。八代と云ふ說もあつた。島村の如きは實に立派な軍人て、大臣をさせても十分勤まるに相違ないが、然し其得意は軍政よりも寧ろ軍令と云ふ方にあるらしく、其方面に廻した方が寧ろ人物經濟の上に益があると云ふ事になつたらしい。瓜生大將は豫備てはあるが、つい最近まて現役にあつたからして、別に古いと云ふ事もなく、又海軍の內外に對して威重があるからして、今日問題になつて居る部內の廓淸を實行するには極めて適當てあらうと思つてゐたが、終に八代中將の就職を見るに至つた。此人は軍政上に經驗がないからして、事務的方面から觀たならば多少の遺憾があるかも知れぬが、然し人物は廉潔剛毅てあるらしいから、部內からして腐敗の空氣を一掃する位の事は斷行するてあらう。要するに今回の陸海軍將校の移動には、海軍の方は比較的によい方に向ひつゝあると反對に、陸軍の方は段々惡い方に進みつゝあるのは慨嘆の至りてある。

之と云ふのも、我政治社會の根抵には陸軍と海軍との對峙反目があつて、互に其勢力を相爭ひ、常に其均衡を保たんとするの惡弊があるからてある。貴族院の國防論の如きも陸海軍の偏輕偏重を許さずとか云つて、陸海均衡論に墮して居るのは實に國防の根本義を無視したるものてある。國防の方針は固より四圍の狀況によつて決すべきもので、或時は陸軍の擴張に專らなるべく、或時は海軍の充實に全力を盡すべく、皆各其時の形勢如何によるべきことゝて、決して偏輕偏重などと評することを許さぬのである。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

それで予は從來の國防方針に根本的改良を施すにはどうしても國防會議を起さなくてはならぬと云ふ意見を持つて居る。一體日本現今の軍制の上に於て一大誤謬がある。それは國防及び用兵の事は一切之を參謀本部と軍令部とで取極めて、天皇の勅裁を仰いで之を實行すると云ふ習慣である。第一に先づ此習慣を破らなければ、國防を其根本義によつて決すると云ふ事は不可能である。用兵の事は勿論專問家でなければよく分らぬのであるが、國防の事は別である。國防の事は外交、財政其他内外形勢の狀况によつて決すべきもので、之は寧ろ政治家の決すべき問題である。それで予は現今の如き陸海軍々人のみならず、總理大臣、大藏大臣、外務大臣等をも之に加へて國防會議を開き、現在の如き誤りたる國防決定の方針を破りたいものと思ふ。

我が憲法第五十五條には「國務大臣ハ天皇ヲ補弼シ其責ニ任ズ」とある。之は天皇の私事を除くの外は、副署があつてもなくても、天皇の御一言御一行は知つても知らなくても悉く其責任を負ふと云ふ意味である。知つても知らなくても責任を負ふと云ふ事であれば、知り得べかりしことを知らなかつた時に其責任を負ふのは勿論であるが、知り得べからざることを知らぬ儘て責任を負ふと云ふ事は理屈に合はぬ事である。之は無理である。然るに國防の事は陸海の軍事參議官のみが秘密に之を議して天皇の勅裁のみて之を實行するのてあるからして、國務大臣は之に干與すべからず、之を知るべからずと云ふ仕組である。それて予の云ふが如き國防會議が開かるゝ事になれば、其結果、其效能は措いて問はずとするも、差當つて、此誤つた主義丈けは破れることになる。已に此主義が破れゝば、國防問題の解決を軍閥にのみ委ねずして、國民全體で以て國防を議するの端が開けて來ると思ふ。

元來從來の國防方針は、山縣が金科玉條として守り來つたもので、伊藤が破らう／＼として、とうたう破り切れなかつたものである。然るに今回山縣公が大隈伯と二時間か三時間の會見に於て、どうやら今までの大主義を擲つて、國防會議のやうなものを開くことを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

默諾したものとすれば、時勢の變化と云ふ事もあらうが、何だか一種の交換條件でもあつたやうに思はれて仕樣がない。而して其交換條件は恐らく二師團增設問題であらうと云ふ事が想像が出來やうぢやないか。尤も表面上は大隈さんは條件として何も受けなかつたと云ふ事である。之は確かにさうに違ひない。大隈さんも之までいろ／＼の經驗もされ、隨分苦い味を嘗めて來られたから、條件を受けるやうな事はしまい。之は確かと信じてよからう。然しながら永年伊藤と喰ひ合つてどうしても放さなかつた主義を今度どうして容易く放したかは一の不可思議と思ふ。何だか氣味の惡るい心持がするぢやないか。增師問題もどうもなかなか旨く行かないから、今度一つ大隈さんにやつて貰ふと云ふやうな魂膽が見え透くやうな氣がする。予が唱導する國防會議の開かるゝに至らんことは予の最も喜ぶ所であるが、今度若し開かるゝものとすれば其後ろにはどうしても二師團問題が隱れて居るのだと思ふ。

先達の議會などに於ても、國防問題を提げて、山本總理に肉迫したものが澤山あつた。然し前述べたやうに今日の國防方針なるものは、現制度の上では總理大臣が與り知らぬことになつて居る。それで大石などは國防問題で以て山本を責める。山本は軍事參議官であるから、軍事參議官としての山本は知つて居るかも知れぬが、總理大臣としての山本は知らないと云ふ事になる、だから知らないと答へる。どこまで行つても同じ事で一向要領を得ない。それで私は之を許して君等二人の問答は、片方は藤八拳で行くに片方は虫拳で行くやうなもので、勝負の附きやうがないと云つて笑つた。守屋此助などは「何故總理大臣が陸海軍大臣に御命令なさらんか」などと云ふから私は袖を引いて「そんな馬鹿な質問はよせ／＼」と云つた位で、今日の制度及び習慣の上では、總理大臣は直接に國防の事に干與する資格がない事になつて居る。こんな事はどうしても不都合な話で、一日も早く之を改めなければならぬのである。

扨、今度いよ／＼大隈內閣が出來たが、實際此國防

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

問題をどうする積りであらう。私は大隈伯の企圖（インテンション）はよいと思ふからして、善意を以て之を迎へ、又遣れる丈けは援けて遣らせるがよからうと思つて居るが、どうも内閣の組立てがよくない。あの顔觸をとつて總理大臣の大隈と云ふ名の上にベタリと貼紙をして見給へ。そしてずつとそれ以下の銘々を見來れば、大隈の代りに誰を持つて行つても少しも差支がないぢやないか。山縣でも松方でも井上でも寺内でも、平田でも何でも彼でも當て嵌るのだから驚く。一體大臣たるものは、入つては國務大臣たり、出でては各省長官たるべきものであるが、其資格あるものは、あの中で大隈伯只一人限りだと思ふ。斯ういつたら學堂は「俺はどうだ」と云ふだらうが、學堂は成程入つては立派に國務大臣たる資格があらう、然し出でゝは各省長官の方はちと怪しいから、完全に大臣とは云へまいぢやないか。然し學堂などは先づ惡口をいはずに十分に遣らしたいと思ふが、扨國防問題を決する事になれば、尾崎の立場などは實に困つたものになる。此頃の大隈伯の宣言によつて見れば第二臨時議會を開催するらしいが、此議會には必らず海軍の補充費問題も出て來るであらう。之は是非出すべきだ。之を出さずに次の議會まで待つとすれば、戰鬪艦三隻の建造事業が中止せられて國防上に一大缺陷を來たすのみならず、横須賀、呉、舞鶴、室蘭、川崎等にある八千人ばかりの熟練せる職工の離散及び無職問題を惹起して、由々しき社會問題も發生するのである。夫れ故に之は是非提出さなくてはならぬ。又出した處で政友會は之に反對は出來ぬし、貴族院も勿論賛成するであらうからして此案は必らず立派に成立するのである、若し萬一政友會が之に反對でもしたらそれこそ政友會の不信不誠實を國民の前に暴露するのであるから、之はどうしても反對は出來ない。だから之は兩院を通過するに極まつて居るが、只少々困るのは新内閣の閣員たる尾崎である。尾崎は議會に於て明かに海軍充實無用論を唱へた。我が四國の狀勢上海軍の擴張は無用である。之まで掛つた六百萬圓は捨てゝも構はぬと云つて、六百萬圓手附流れと云ふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

警句を吐いたのであるからして、國務大臣として其持論に反對なる政策に贊成する譯にも行くまい。そこて先生どうするか、餘程困るだらうと思ふ。然しまア其時は一寸風邪(かぜ)ても引くんだネ、風邪(ふうじや)缺席とても出かけるより外あるまい。大石も豫算會議に於て海軍充實反對てあつたから、議事の當日は矢張り風邪を引くことにすればよからう。さうすれば兎に角海軍充實案が通ると思ふ。只學堂などが目的を達する爲めには手段を選ばず、如何なる說をも勝手に造り出して敵に當らうとした因果を覿面に受けて、非常に苦しい立場に立たうとして居る事は、一般政治家を戒むるに足ることであらうと思ふ。從來の如く、政治家が政權に有り附からとするには如何なる詭辯を弄し、如何なる策略を用ふるも構はぬと云ふ風は其世道人心に及ぼす惡影響實に測るべからざるもので、今後は深く之を戒めなくてはなるまいと思ふ。私の海軍充實案に贊するを誣ふるに、やれ薩閥と結托したとか、ヤレ川崎造船所から賄賂を貰つたとか云うてフレ廻つた連中の如き、今日何の面目あつて、海軍充實案に贊せんとするか。紛々たる小人輩の言說實に冷笑にだも値せざるを覺ゆる。

之を要するに、從來の誤れる國防方針を改正し、陸海軍閥の弊害を一掃せんとするには、國防會議を開催することを以て、最大急務とするけれども、我が陸海兩軍の反目嫉視は其根抵非常に深く、大隈內閣の起ると共に一度び下火になりかけた陸軍部內の長閥又忽ち頭を擡げて來ると云ふ有樣であるからして、單に國防會議が開かれたからとて、それを以て直ちに滿足することをなさず、總ての國民が其內容及び經過に深き注意を拂ひ、以て公平に眞面目に國防問題が議せらるゝの理想に達することに努力しなければならぬ。(四月十八日文責在記者)

# 大隈伯の三大使命

福本日南

明治大帝の神去りましまして以來大政の基礎は動搖し初めた。一度び出でゝは昨年二月の政變となり、二度び發しては今年三月の政變となつた。此の間(かん)に於ける人心の動搖・群衆の騷擾は是れまで多く見ざる所である。此の人心の動搖なり群衆の騷擾なりには支那革命の影響もあらう。又現時の世界を惱ます所の生活の困難と云ふ事もあらう。或は危激なる新説が、少壯社會無形の心頭を刺戟した所もあらう。而して一方には外交の不振、殊に對米政策の失錯、對清政策の失敗等が又此騷擾を促し、之に加ふるに、舂來人心を激昂さした海軍の腐敗問題——此等が集つて殆んど一國を無秩序の中に墜落せしめんとする氣味がある。從て國際の信用は日々に減退し、人をして大正の日本を何れの所に漕ぎ着けるかに疑ひ惑はしむるものがある。尙又我國の政治社會、殊にそれを率ふべき中心人物の如何を省みれば、所謂元老は概ね凋落し、其殘存するものも最早や老衰の極に到り、其後を繼いで今日及び今後の日本を統率すべき人々の切れ目となつた、其證據は如何はしい清浦子までも推して一時なりとも內閣組織に鞅掌せしむるに到つたので知れる。誠に氣遣はしい時代である。

此秋に方つて大隈伯が起つて國政の衝に當られたと云ふ事は、伯の國家に忠貞なる所以をも見るべく、又稍々人心を强からしむるものがある。伯の一度起つや沈滯し極つた人心も爲めに多少の活氣を帶びるに至つた。現に兜町邊では株の相場が五圓方騰貴したと云ふ事である。此等は一時の現象ではあらうが、それにしても天下の輿情が如何に伯の內閣組織を歡迎しつゝあ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

るかと分る。株といへばちよいと思ひ出したが、前の内閣組織に失敗した清浦子の如き、折角の努力が無効に歸したのは本人にとつては遺憾でもあらう、他から見ても氣の毒であるが、今大隈伯が其後を受けて新内閣を成立させられたに對しては、定めて消極的感謝の意を表して居らるゝであらうと思ふ。嘘か本當かは保證の限りでないが、當時清浦子が内閣組織の大命を拜せらるゝや、其御子息は親父が總理になるといふので、種々の株券を澤山に買ひ込まれたと云ふ事である。すると、世間は御子息が考へる程子爵の内閣を歡迎せず、爲めに株券は大いに下落した。そこで御尊父は天下は取れず、おまけに資財は一夜の中に大缺陷と云ふ破目に臨まれて、餘程苦心せられたやうに聞いて居たが、幸に大隈伯の評判によつて數日を出でざるに五圓方の騰貴と來たから、缺陷扨置き、多少は御利益になつたかも知れぬ。さう恨んだものでもなからう。

扨、かゝる餘談は差措いて、伯の組織せられた新内閣の顔觸れについては、隨分内外に如何はしい批評もある。伯は同志會を土臺として立ちながら閣員の總てを同會より採らず、或は他派から拔き、或は舊官僚から採つたと云ふので同志會中にも多少は沙上の偶語をなすものがある。又或は最初に犬養、尾崎に計らずして、專ら加藤男と相談して閣員の顔觸れを定められた。之が爲めに木堂などが不平を起したと云ふやうな話もある。斯くの如くして内閣組織に其人選の當を得ないのを責むる聲を段々聞く。然しながら自分を以て之を見れば之は責むるものの無理である。今日の伯は宛然として千八百七十一年セダンの敗後に於ける佛國の老政治家チエールの位置である。勿論日本はセダンの敗の如き屈辱を經て來たものではない。されども國内にはオルレアニストに當る黨もあれば、ボナパルチストに當る派もある。帝國に於けるレパブカン黨と云ふのは、ちと譬喩を失ふかも知れねど、純粹なる憲政擁護黨などは之に當るべく、又ソシアリストと云ふべからざるも、それの變體に似た浪人黨などゝ云ふものもある。其浪人黨の、或意味に於ける旗頭は樞密顧問の中

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

にも居る。チエールが當時の内閣を組織する際に諸黨に聞かねばならなかつた如く、種々の方面から囑望せられて居る大隈伯は又同じく諸黨に聽かねばならぬ。若しも此際純一派に聽いて内閣を組織せんとすれば、恐らく其成立を告げなかつたであらう。夫れ故に現在の閣員配置を見るに至つたのは時にとつて止むを得ぬと思ふ。現にチエールが當年の共和政府を組織するに方つて、王黨たるオルレアニストをも排せず、又ボナパルチストをも捨てなかつた如く、伯の眼から觀れば官僚黨も亦憎むべきを見ないであらう。論より證據は、伯を推薦したものは井上侯ではないか、而してそれに同意したものは山縣公である。此推薦此同意を經るに非ざれば伯は總理たるを得なかつたのである。すれば伯としてはそれが餘り憎くも見えまいぢやないか。それから當年のガンベツタ、いやガンベツタといふのはちと勿體な過ぎるやうであれど、それの孫位のものは我政治社會にもある。おまけに伯の政友にもある。若しも之と最初から内閣組織を相談せられたなら、それこそ大事は集まらぬ。況んや其ガンベツタの孫は底に二心を懷抱してゐるやも亦未だ知るべからざるに於ておやだ。それと當初より之を計らなかつたのも亦無理からぬ事と思ふ。代りに伯は此小ガンベツタの舊友たる小ジユール・フエーリー位の處までは閣中に收めたてはないか。又同志會とても左程不足の云へた義理でもあるまい。現に伯は同會から加藤・大浦・若槻・武富の四氏を選拔した。全體から云つても總理以外の閣員には八個の椅子よりない。それを委しく云へば海陸の軍人閣員を除けば六個である。其六個の中から四個までを悉く同志會に授けたのであるから、同會たるものも亦滿足すべきてはないか。それに不平を云うて妄動するものは之こそ眞の盲動で、其眼球に釘を打つたものである。大勢達觀の明を失つたものである。夫れ故に今日の閣員の顏觸れについては先づ此位の所てあらうと思ふ。

只伯に望むべきは今後にある。伯が老軀を提げ、殊に困難なる現時の政局に立つた以上他人ならば兎も角

も、一代の大政治家を以て人からも目され、自身にも許してゐる伯であるから、何等かの爲す所がなければならぬ、自分の見る所を以てすれば、伯は三大使命を負へりと云はねばならぬ。

其第一は日本の政治から藩閥非藩閥の畛域を取り除くことである。世界に於ける日本の立場を忘れて、單に内政丈けに見れば、過去に於ける藩閥の罪惡は責むべき憎むべきもの一にして足らぬ。さりながら其藩閥と非藩閥との爭は、要するに國内の騷動、砕いて云へば帝國のお家騷動たるに過ぎぬ。先代萩を見る時に何時も感ずるものは、伊達安藝と原田甲斐二人の爭をつき合はすれば、一は正で一は邪と云ふ事もあらう。然し要するに其爭は伊達家の幸てはなかつた。あれが今一段嵩ずれば奥州仙臺陸奥守は五十四郡の提封を棒に振る所であつた。今の帝國も藩閥非藩閥の紛爭の爲めに國際上にどれ程の損をなしたかも知れぬ。一日も早く帝國を此お家騷動から出さねばならぬ。之を出すには大いなる手腕を要する。伯は確かに其人であらうと思ふ。但懷に見來れば藩閥黨にも能者はある。非藩閥黨にもやくざ者は澤山居る。たゞ藩閥黨は政治上の心得がわるいと云ふ丈けである。其心得を改めて國事に盡力しようと云ふならば元は他人でもなければ異人種でもない。引いて以て國運の進捗に盡力していゝではないか。

其次は一新政黨の樹立である。今ある所の政黨は何れを見ても口を張つて政治的公黨とは言ひにくい。何物かに貪緣して而して政權を得ようと云ふのである。此等は昔なら何某の郞黨たるに過ぎぬ。郞黨には國政を負擔する資格がない。政友會大なりと雖も失禮ながら今日までは同じ郞黨の區域を脫しない。政黨を組織せる以上は自ら起つて之に當ると云ふ意氣精神と及び技量とを有せねばならぬ。それが無いのであるから公黨と目し兼ねるのである。而して此郞黨黨が多數を以て情實の政を援け來たのであるから國政を害したる事も亦甚しい。夫れ故に伯たるものは此際政友會以外に一の新公黨を形成してそれを以て自己の政策を遂行せねばならぬ。斯くする時は政友會も亦其前に立つて同じく自家の主張を憲政の上に現はさうと努めて來るであらう。玆に至つて初めて二大政黨が日本の憲政を軌道の上に推進することになる。憲政有終の美は伊藤公の夙に唱へる所であつたが、其業成らずして中道に倒れられた。次いで桂公も憲政の濟美を標榜した。然し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

之が何等の實蹟を擧げずして世を去つたのである。今藩閥非藩閥の畛域を取り除け、而して二大政黨を國内に對立せしむるに至れば、初めて以上の憲政有終の濟美に到達するのである。伯に望む所は玆にある。

それから今一つは近時の我國政が内閣の更迭毎に動搖して、動ともすれば一國の動亂を惹き起さんとする惧があるのは、要するに政治的中心人物がないからである。勿論自分では總理を極め込んで居るものもあり、各省大臣を極め込んで居るものもあらう。斯くの如きものは藩閥非藩閥の間に亘つて數十百を數ふべきも、それは獨りよがりに過ぎぬ。上下の信望を負うて何時にても國務大臣たるべき地位の人物が極めて寥々である。現に此内閣の成立以前を見ても、人もあらうに淸浦子までも呼び出さなければならぬと云ふ現象は畢竟中心人物の缺乏に座するのである。然し其中心人物は此國に皆無かと云へば左様ではない。之が士官候補生たるものは澤山ある。只それをして許すに中心人物を以てさせるまでの保護者がないが爲めに缺乏して居るのである。故桂公の如き一身に種々の批難は負うて居れど、先帝の御末年に自ら野に下つて政黨を組織したいと云ふ事を奏上した丈けは此人の爲めに確かに傳ふべきことであらうと思ふ。それを如何と云ふに、元老は追々凋落して未來の國政に充つべき人物が未だ出來てゐない、之は實に國家の爲めに憂ふべき事である。夫れ故に不肖ながら野に下つて廣く同志を國内に求め、其中から適材を得て、追々に之を奏薦するの道を拓きたいと云ふ事を申上げたと聞いて居る。帝は之を聞召し、一日間御考慮の後、翌日桂の申す所は如何にも最もであるから、其希望に任すとの御沙汰があつたと云ふ事である。而して彼人は僅かに其道途に上つた丈けで此世を去つたから之も一空に歸したのである。それで此事を成就すべきも亦伯に望まねばならぬ。例へば現内閣中に伯が加藤男なり其他の諸君なりを抜いて同僚に入れた如きは中心人物を作るの端緒である。此等の諸君にしてよく其任務を盡せば、自ら上下の信望は其人に集つて來る。舞臺にして一轉すれば其等の諸君が主となつて未來内閣の組織者にならぬの限りでない。

斯くして一方の政黨を守り立て、それをして空論や放言から出て、實務に堪へ得る丈けの實をあらはさしむれば、前にも云ふ通り、其前に立つ所の政黨も之と拮抗上其政見を擧げ、又其技量をも進めて來る。之は伯自身が養ふのではないが、間接には養ふと同一結果

を見るのである。すれば二大政黨から未來の中心人物が簇出するに至るであらう。

以上の三使命、之を爲し遂げるのは伯の自ら任ぜねばならぬ所である。且つ又伯一身の爲めに之を云ふも、あの高齢を以て、早稻田には全國から數千の俊秀を集め、育英の業に從事して居らるゝ以上、それをして各々其器に應じて大成せしめらるれば、其れ丈けでも伯の功業は澤山である。然るに七十七歳の高齢を以て紛錯せる此政界に身を投じられた以上、以上申し述べた三大使命を果さるゝに非れば其就職は年寄りの冷水に墜ちるのである。恐らく伯も此邊については熟慮深思せられた上の事であらう。

斯く見來れば、伯の事業は敵も味方もなく、王道恒々たりとも云ふべきであるが、扨其實行に至つては容易ではない。此點から云へば伯の新内閣は血戰内閣でなければならぬ。血戰を經ざれば以上の三大使命を果さるゝことは出來ぬ。惟ふに政友會は枚を啣んで伯の爲す所、出る所を觀望しつゝあるであらう。伯が年來唱導する情實打破の政策を事實の上に現ぜんとすれば必ず大有力の妨害が其前に現出すべきは眼に見えて居る。然る上は之を打破つて遂行するの外はない。血戰内閣たらざらんとするも得んやだ。此處危險は其血戰にあらずして往々血戰を避けんとする所にある。それを避けらるゝとすれば避けらるゝの日に於て現内閣はない。のみならず大隈伯もないのである。見渡す所伯の左右には策士もあれば智者もあるが、斷々乎として血戰に出て斃れて後止むの概を存する人が果してどれ程あらうか。自分の危む所は只之れ丈である。

縮めて云へば伯たるものは過去の政治社會と未來の政治社會との接木者である。伯の爲めに那翁の常言を擧げて此談を畢らんと欲す。那翁は居常云つた。自分は過去の君政の美と新來の民政の美とを結びつくるのである。佛蘭西の幸福は此中に存すると云つて居た。伯も亦此心を以て心とせねばならぬ。内閣は一年でもよい。三ケ月でもよい。長く持たうなどゝ云ふさもしい了見を起されてはならぬ。只血戰して前路を拓き、大正の天下の爲めに次の時代から新らしい政治運行の機運を開くと云ふ事に全幅の精神を注がんことを希望して置く。（四月十八日）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

# 新聞改良論

## △新聞改良論

法學博士　堀江歸一

自分は四年前から大阪毎日新聞社の依頼を受けて、東京日々新聞に經濟財政に關する論説を寄稿して居るので、新聞を讀む場合には、普通の讀者よりも、大なる注意を以て、種々の新聞紙を比較し、其長短を考へて居る。自分が新聞に對して持つてる關係は是れだけで、隨て專門の記者や經營者の如く透徹した批評を下すことは出來ないが、半素人論にも多少の取る可き所もあらうかと思うて、心付いた三四の點を述べるのである。

既に新聞改良論と云ふ以上は、現在の新聞紙に或る缺點の存在することとを前提としなければならぬ。自分が每日通讀する新聞は東京日々、東京朝日、國民、報知、萬朝、大阪每日の六新聞であるが、是等の新聞全體を通じて、第一に不滿を感ずることは市井の雜事に重きを置き、然も其内容を誇張し過ぎる傾のあることである。何處の妓樓で痴漢痴婦が情死をしやうが、往來で自働車が人を轢殺さうが、社會の全體から云へば一人か二人かゞ死傷したゞけのことで、意に介するに足らないに拘はらず、翌日の新聞紙を見ると、恰も天下の一大事でもある如く、二號活字で見出しを付け、一段位の記事を掲げて居る。殊に或る新聞で一時盛にやつた樣な殺傷事件や、強盜事件を一々見取圖で説明したり、醜怪な死體の寫眞を掲げるのは、畢竟世間の好奇心に投ずる積であらうが、自分共から見ると、俗惡の感に堪へないのである。

第二に今日の新聞紙は新聞の主張を實際に貫徹させて、新聞の權威を重からしめる工風に缺けて居りはしまいか。新聞社が社説で或る主張を立てた以上は、新聞の全力を擧げて、其實行を謀らなければならず、其實行に堪へないやうな無能な內閣であれば、全紙面を擧げて、之に攻撃を加へ、何度でも內閣を瓦解交迭させるだけの見識がなければ、新聞の權威は高くならないのであるが、今日の新聞紙中、是れだけの見識を備へて居るものは果してあるであらうか。此間東京の重なる新聞社が良民殊に新聞記者傷害事件に就て、內務大臣原敬を攻撃したが、新聞紙と云ふ最も有力な攻撃の武器を備へて居りながら、正面から原を攻撃せずして、原の不始末を宮中に奏聞したと云ふが如きは、自分をして云はしめれば、新聞社自から新聞紙の權威を蔑視したるやの嘆なきを得ない。自

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

分は新聞が艶種記事や、人身攻撃に於て、感情的挑撥的なのは感心しないが、社論を實行する爲めには、今少し感情的に熱誠であつて貰ひたいと思ふ。

第三、外國の新聞殊に英吉利の新聞には必ず毎日一二欄を割いて、「主筆（メースター、ゼ、エヂター）に對する公開狀」と云ふ項が設けられ、時の問題に對する各方面の寄稿が掲載されて居る。時には其新聞の社説に對する攻撃があれば、之に對する駁論もあり、甲論乙駁殆ど盡きる所を知らない。事情の許す限り寄書には署名させ、匿名にする場合にも、本名は必ず編輯局に知らせることにして、議論の無責任に流れることを防ぐ。自分は日本の新聞紙に斯る討論的寄稿を收容する欄のないのを以て、誠に遺憾とするのみならず、此設備が缺けて居つては、眞實新聞が輿論の代表機關たる職分を盡すに足らないかと考へる。

第四、今日の新聞紙に於て自分が甚だ目障りに覺へるのは、所謂名士の談話なるものである。例へば大隈が內閣を組織するとか、加藤が大隈內閣の首腦者に爲ると云ふやうな場合に、大隈加藤の責任ある談話が掲載されたならば、讀者の興味を惹くこと大なる譯であつて、又新聞紙の職責を盡す所以であるが、今日の新聞紙には事件に關係もなく、責任もない人の盲評駄論が麗々しく掲載される。夫れも署名してあれば、何ほ可なり、某大臣談とか、某議員談とか、匿名のものであつては、讀者に感興を與へないばかりでなく、三文の價値をも認めることが出來ない。英吉利の新聞紙などには、個人の談話なるものは殆ど見當らない、其代りに冒頭に「本社は斯く信ずる理由を有す」と記した重要記事がある。自分は所謂名士の談話や、匿名氏の放言よりも、有力な新聞の斯る冒頭付の記事に大なる信用を置かざるを得ない。

第五、以上擧げた種々の改良を行ふに最要の條件たるものは、新聞社の會計の豐富なることに外ならない。今日の新聞紙が賣高增加の必要から、漫に俗衆に媚びんとし、新聞其ものゝ俗惡ならしめるのも、新聞社の會計狀態已むを得ざるに出づるし、新聞社會に學識經驗兼備はれる人物の少ないのも、待遇の宜しきを得ないから生ずる事實である。大新聞を代表する記者が大臣に會見して、之を光榮としたり、經濟記者が銀行會社の走狗と爲り、會社濫設の時代に權利株の裾分に與かつたり、相場記者が仲買人から手當を貰つたり、堂々たる大新聞の主宰者が時の政府に迎合して、勅選議員を狙つたりする狀態であつたならば、到底新聞改良の實は擧らないのである。而して斯る不眞面目なる新聞記者の輩出する一原因は新聞社の會計狀態が記者を厚遇するに堪へないからであつて、又新聞社の會計の不良なるは、現に東京市の如きに就いて云へば、新聞紙の數が多過ぎて、競爭が劇烈であるからである。自分は此點から考へて、東京で或る程度まで新聞社の數が合併滅亡其他の事情から減少することを希望して已まない。自分が多年前記六種の新聞（尤も東京日々と大阪每日とは寄贈を受けるのであるが）を閱讀するばかりで、其他の新聞は幾ら廉價で配達すると申込んで來ても、頑として之に應じないのは以上の六種を以て、比較的讀む可き新聞であると考へる理由がある

外らであると同時に、新聞社合併、新聞紙減少の理想に到達する一助たらしめたい微意に外ならないのである。

二三年前萬朝報の社說で、黒岩周六氏が今日の新聞社の會計狀態では新聞社が種々の副業を營んで、利益を謀るのは、已むを得ないと云ふことを論じた論文を讀んで、同新聞の如き比較的ポピューラーで、賣高多く、廣告料も亦不廉なのに拘はらず、尙ほ此嘆あるかと云ふ感を懷き、益々他新聞の困難なることを想像した。隨て自分は無暗に高尙一天張りの改良論を主張することを避けた次第である。若し私如き素人の所望にも取る可きものあり、又現下の會計狀態に於て其の實行を許されるならば、採用せられたい。私は其新聞に對して、熱心なる同情者たることを辭さない所存である。

# △予の觀むと欲する新聞

高島米峰

## (一)公の機關か私の機關か

新聞は、導いて呉れるものか、迷はせて呉れるものか、信賴すべきものか、畏怖すべきものか。導いて呉れるものなら、信賴することも出來るが、迷はせられるものなら、畏怖しなければならない。

新聞を稱して、天下の耳目となし、社會の木鐸と言ふのは、たゞ、理想を語つた言葉にしか過ぎないのではなからうか。公の機關だなどゝ、誰もお世辭は言ふものゝ、私人が、營利を目的として經營して居る以上、矢張り、一種の商品であつて、勿論、賣ることに腐心しなければならない。賣らむがためには、衆愚の弱點に乘じて、その御機嫌を取り結ばなければならない。苟も御機嫌を取り結ぶには、あたら天下の耳目も、磬の如く、鐸の如く、折角の社會の木鐸も、鳴りを靜めて居なければならぬ。啻に然るのみでない、時には、虛構もしなければならぬ、威嚇もしなければならぬ、讒謗罵詈、中傷陷擠、有らゆる不德に、正義の鍍金をかけて、堂々として衆愚を瞞過するだけの、糞度胸がなくてはならない。新聞なるもの、若し、果して、此くの如きものであるならば、公の機關は、畢竟それ、私の機關ではないか。私曲を行つて、私腹を肥す道具ではないか。

## (二)新聞の勢力

善につけ、惡につけ、新聞の勢力の大なること、今更らしく言ふまでもない。英國のボルクは、その下院に於ける新聞記者席を指して、「彼は、英國議會を組織して居る、貴族、僧侶、平民の三大種族の、力を合せたよりも、更に偉大なる勢力を有する、第四の種族である。」と叫んだといふことである。又、千八百十三年、英、普、墺、露の四國同盟軍が、ナポレオンと戰つた時、『レーニッツシ・マーキュリー』といふ一新聞は、「第五

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

の同盟軍と稱せられたといふことである。たゞ僅に一葉の紙片である、しかも、第四の種族として重ンぜられ、第五の同盟軍として恐れられる所以のもの、誠に、新聞の勢力の絶大なることを、想はしめるではないか。この勢力を擧げて立つ、向ふところもとより前なく、攻むれば取り戰へば勝つこと、正にそのところである。取るも好し、勝つも妨げず、たゞ、正を以て邪を攻め、直を以て曲と戰ふことを忘れてはならない。私心を以て、公論を枉げてはならぬ、黨心を以て、眞理を二三に取扱つてはならぬ。眞理は唯一である、眞理の前には、王侯もなく、權勢もなく、威武もなく、富貴もない。

## (三)新聞と輿論

眞理は、多數決のみで、きまるものでない。ガリレオの地動說、今や、三歲の兒童へ、亦よくこれを理會する。しかも、彼が當時の社會は、彼を殺してまでも、彼をして、その說を放棄せしめやうとしたてはないか。世を擧げてこれを非なりとする時、吾れ獨り、これを是なりといふことの、必ずしも妄斷として排斥することの出來ないことは、この一事でも證し得られるのである。謂はゆる輿論といふもの、たゞ單に、多數人の意見であるといふだけのものならば、そは必ずしも、價あるものではない。多數人中の、最も優秀卓越な思想が、多數人を提撕し、啓發し、指導して、こゝに一種の纏まつた力となつて活躍するところの議論にして、始めて眞の輿論といふことが出來るのである。

今の日本の社會に、眞の輿論といふものがあるであらうか。まづ、國民輿論の活躍するところであるといふ議會を觀よ。成る程國民の選良、國民の意志を代表する代議士といふものが、自由に且つ有効に、その意見を發表し得るところであるといふ以上、どうしても、國民の輿論は、議會に於て、實現せらるべき筈である。然るに、その謂はゆる代議士なるものは、或る程度の納税者によつて、選出せらるゝところのものであつて、この種納税者の中には、無知なるもあり、無識なるもあるから、これ等の人々から選出せられた代議士は、未だ多數有識階級から選出せられ、有識者を代表するものとは言はれない。從つて、その選擧も、或は一票何圓何十圓といふが如く、金錢を散ずることの多少によつて、決定するのであつて、毫も國民多數の意志を、表明して居ないのである。多數人中、最も優秀卓越なる思想の表現などゝは、全く以て、思ひもよらぬところである。

極めて寛大にこれを解釋しても、今の代議士の多數は、或る程度の納税者の代表者であつて、決して國民全體の代表者ではない。從つて、議會に於ては、或る程度の納税者の輿論の實現は、或は出來るかも知れないが、國民の輿論など、到底、これを聽くことは出來ない。……(ここで、選擧法改正のことや、普通選擧のことなどを論ずるのは、餘まりに、主題と遠ざかり過ぎるやうだから、省略する。)

然らば、今の議會に於ては、國民全體の輿論は聽くことが出來ないとしても、少くとも、或る程度の納税者の輿論だけでも、確實に實現せら

るゝかといふに、未だ必ずしもそうでない。手近い一例を擧げると、今期議會に於ける廢税問題は、國民の輿論でもあり、又或る程度の納税者(謂はゆる有權者)の輿論でもあつた。しかし、政友會といふ多數黨は、黨議として、姑息なる少額の減税を可決したではないか。果して然らば、議會に於ては、多數黨の輿論は實現せらるゝが、國民の輿論も、或る程度の納税者の輿論も、行はれないといふことになるのである。此くの如くンば、折角の輿論政治も、代議政治も、たゞこれ、多數黨の御都合政治ではないか、一部の愚論政治ではないか、寧ろ、暴論政治といふの當つて居るかも知れない。

輿論實現の最高機關とも言ふべき議會が、已に此くの如き狀態だとすると、吾輩は、何處に眞の輿論の活躍を看得るのであるか。索め求めて、遂に、新聞に到達せざるを得ないのである。新聞の勢力から考へても、新聞の天職から察しても、眞の輿論は、新聞の上に現はれて來なければならない。否、天下の輿論は、常に新聞に依つて指導せられ、訓整せられなければならないのである。

然るに、近時、日本の謂はゆる輿論は、衆愚が新聞を恐怖して、新聞の所説に附和雷同し、新聞をして製造せしむるところの輿論であつて、新聞の所説が、多數人中の、優秀卓越な思想でもなく、又、多數人を提撕し、啓發し、誘導するといふ、力もないのである。

交番燒打が、天下の輿論となつたこともあつた。しかし、これは全く、新聞が製造した輿論ではなかつたらうか。某々新聞社の燒打も、輿論の實行だと稱せられたこともあつた。しかし、これは、反對派の新聞が、御手製の輿論ではなかつたらうか。同一市民が、同時に、或新聞からは暴徒と罵られ、或新聞からは義民と賞せられ、同一行爲が、同時に、一方からは公憤と讃せられ、他方からは兇行と判ぜられる、新聞も當てにならぬ、輿論も賴りにならぬ。新聞の輿論呼ばゝり、寧ろ、片腹痛き極みではないか。

## (四)新聞と言論の自由

言論の機關としては、演說會もある、雜誌もある。しかし、新聞の便利にして有効なるには、比ぶべくもない。然るに、この便利にして有効なる機關も、時の政府の御機嫌に適はないと、隨分、猛烈な抑厭を蒙るのである。最近に於ては、山本內閣の言論抑厭など、實に、その力を極めたものと稱して差支ない。

國家が、國民に與へた言論の自由は、無條件でない。從つて、或る條件に牴觸すれば、こゝにその自由が奪はれるのである。これは、日本の如く、低級なる民衆を有する國家の存立上、或は止むを得ない處置かも知れない。

然り、國家が、言論の機關に向つて、抑壓を加ふるといふことは、或は多少の理由があるかも知れないが、その謂はゆる言論の機關たる新聞が、個人の言論の自由を抑壓するといふに至つては、實に慨歎すべきことであると信ずる。乃木大將自刄の當時、二三の學者が、乃木大將の匪

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

誠純忠なる人であつたといふことのために、その至誠發表の手段として執つた、自殺といふ形式までをも讃嘆するの愚を、非とする旨の論を公にするや、或はこれを無血性兒と罵り、非國民と罵り、小人他の美を成すを好まずと嘲り、或は鐵拳を加ふべしと云ひ、或は天誅を下すべしと論じた新聞が多かッた。これ等新聞の言論は、遂に無知の徒輩をして、それ等學者に脅迫狀を送らしめ、それ等學者の家に投石せしめ、それ等學者の職業までをも、奪はしめやうとしたのである。此くても尙、言論の機關たる新聞を以て任ずることが出來やうか。否、新聞それ自身が、言論の自由を尊重すると言ひ得るか。

世に、曲學阿世の徒と稱するものがある。しかし、翻つて考へて見るのに、此くの如き態度の新聞を有する社會に於ては、沈默するか、世に阿ねるかするより外に、道はないのである。敢然として硬論を唱へ、學者の本分によりて世を指導せむとすれば、精神的にも、物質的にも、その生命は危からしめなければならない。こゝに於て、利に敏なるものは、學を曲げ、世に阿りても、その生活の安固ならむことを欲するの、止むなきに至るのである。即ち謂はゆる曲學阿世の徒は、多く今の新聞の言論抑壓によりて生じ來るのであつて、新聞の罪や、實に重且つ大である。

新聞を向ふに廻はして、これと戰ふといふことは、火を携へて、火藥庫に入るよりも危險である。火藥の爆發は、たゞ肉として我を亡すのみであるが、新聞の暴力は、靈としての我をも滅ぼすのである。勿論、新聞の迫害を恐れて、自分の所信を發表し得ないといふのは、弱い人である。しかし、人をして弱からしめる新聞の勢力、――勢力と、新聞の狹量とは、十分にこれを責めなければならないではないか。

## (五)事實を事實とせよ

不偏不黨は、どの新聞でもの表看板である。しかも、裏面は、官僚の助けを受け、長閥の助けを受け、薩閥の助を受け、政友會の助を受けて居るものも少くはないが、賣るには、不偏不黨が、一番都合がよいといふのである。夫の『中央新聞』が、政友會の機關新聞なるが如く、しかく旗幟の鮮明なるものは、あまり多くを見當らない。

不偏不黨が、新聞實際上、利するところが多いといふならば、一黨の機關たることを標榜するのは、損である。損德の打算から言へば、謂はゆる不偏不黨は、利に偏し、金に黨して居るのであるから、利黨の機關新聞、金黨の機關新聞とも言へる。旗幟を不鮮明にして、その日〳〵の風次第、今日は向ふの岸に吹く浮草的の態度は、或は嚴正中立、公平を持して居るやうにも見えやうが、さて、昨是今非、無主義、無方針とも見えて、讀者は、これによつて、指導もされないし、益も與へられないといふことになりはしなからうか。

健實に、不偏不黨の態度が持たれるものならば、その記事が、公平であるべきこと、もとより言ふまでもない。然るに、現に不偏不黨を標榜して居る新聞が、事實を枉げて報導するといふやうなことは、決して珍らしくない。殊に、國に政變起るが如き場合、必ず、指嗾慫慂の言を弄

ねて、輕卒にもこれを讀者に報導するといふが如きことは、殆ど日常の茶飯事となつて居る。更に、一黨の機關ともなつて居る新聞になると、その反對派の言動を記述する場合、成るべく不利の地に陷れやうといふために、全然、無根の事實を捏造し、或は少くとも、事實を非常に割引して報導する位のことは、新聞道德上の罪惡とは、考へられて居ないらしい。曾て、日比谷に、國民大會の催された時に、味方の新聞は、會するもの二萬と報じ、反對側の新聞は、會するもの數十名、頗る寂寥を極めたと報じて居る。二萬人と數十人とは、孰れが眞であつたかは、その時の實際を目撃しなかつた僕には、判斷が出來ないけれども、これは恐らくは、兩方とも嘘ではなからうか。青年會館に、二千人以上の人間を收容することは、頗る困難である。然るに、聽衆無慮五千餘名などといふ報道は、屢々見受けるのである。議會の記事も、新聞によつて全く違ふ、どれを信じてよいか、事實の眞相を知りたいと思ふ場合には、頗る當惑せざるを得ない。二種の新聞を併讀するから、かういふ迷惑を蒙るのであるとするならば、たゞ一種の新聞のみを讀んで、全然、虚構の事實を盲信するか。……かくの如き人甚だ多かるべし。——若くは、更に第三の新聞を求めて、多少にてもこの迷惑を輕減すべきか、何れにもせよ、新聞を信頼することの出來ない社會は、不祥な社會である。

一黨の機關にてもよし、不偏不黨にてもよし、たゞ事實を事實として報道するといふことが、新聞の天職でもあり、又生命でもあるといふことを、忘れては濟むまい。事實を事實として、しかもその評論は自由である。事實を無色のまゝに紹介して、これが論評批判に於て、新聞各自の強烈なる色彩を施すことは、もとより妨げないばかりでない、寧ろ望ましいことである。

## （六）新聞の煽動力

博士リーパーは、その著書『政治道德學』中に於て、新聞に關して、多くの有益なる議論と忠告とを發表して居る。その一節に、「社會少しく激する時、多くの新聞は、たゞこれを激し、これを騷がせることを以て、その義務と思惟し、努めて危激の言論を弄し、以て社會の風紀秩序を紊し、大害を生ずることがある。」と言つて居る。日本に於ける謂はゆる示威運動が、常に、モツブ的になるのは、即ち、新聞記者の煽動力に、基くものと見ることが出來る。煽動も、時に可なることがないでもなからう、たゞ煽動し放して、あとの締めくゝりをつけて呉れないならば、そは無責任である。リーパー博士の謂はゆる、社會の風紀秩序を紊すものである。罪惡である。

何と言つても、日本の國民の多數に、まだいろ〳〵の點に於て幼稚である、訓練が缺けて居る。この國民に對する新聞の態度は、教師が生徒に對する態度でなくてはならぬ。親切なお友達といふ態度でなくてはならない。更に慾を言へば、裁判官のやうに、國民の疑獄も斷じ、立法家のやうに、律令をも制定し、大聖人のやうに、國民の罪惡を彈劾し、世尊のやうに、國民の靈的苦痛を救濟しなければならない筈のものである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

然るに、悲しむべし、日本の今の新聞の大多數は、國民をお客様として居るのである、御機嫌を損じて、賣高の減らむことを恐れて居るものである。既に新聞に主義なく、定見なく、讀者に理想なく、判斷なし、危いことの極みてはないか。

## (七)新聞の權威

日本の新聞には、最初から、權威などゝいふものはないのだと言へば、それまでだが、文明國民のためには、衣食住の如く、殆ど缺くべからざる必要品の一つとなつて居る新聞が、聊かも、國民の政治思想を養成せむとはせず、社會道徳を涵養せむとはせず、國民の常識を發達せしめやうとはせず、たゞ狂人を追うて、不狂人も走るの走馬燈的態度は、眞に醜陋である。

そは尚ほ忍ぶべしとして、さて、海軍々人の收賄を攻撃し、シーメンス會社の贈賄を筆誅しつゝあつた新聞が、シーメンス會社に誘惑せられ、多少の黄白によつて、その攻撃の手を緩めむとして居るといふ風說を耳にしたのは、一ケ月以前のことである。爾來、僕等は、新聞記事の割引率を、大に低減せざるべからざるを感じたのである。シーメンス會社が、この際、成るべくその信用を傷つけざらむがために、有らゆる手段を講じて、新聞記者を買收せむとすること、事實有りげに思はれるではないか。天下の名士と、自他ともに許して居る某でさへ、千金に滿たざる端下金で、その節操を賣つたといふ事實から考へても、修養なく、信仰なく、殊に薄給なる低級の新聞記者輩が、一夜の遊興位で、筆を曲げること、有り得べきことのやうに思はれる。しかし、有り得べきことであると言つて、これを寛假して居ては、際限がない。國民道德の紀綱が破れる、國家存立の根抵が動揺する。

## (八)新聞記者の墮落

或は曰はく、コンミツションを取ることが、善いの惡いのと言つて、いくら議論をしても、檢擧しても、刑罰を加へても、石川や濱の眞砂はよし盡きても、世にコンミツションを取るといふことの、根絶されるといふことは考へられない。寧ろ、コンミツションを取るのは、惡事でないときめた方が、問題の解決が、餘つ程早いではないかと。成る程、今の社會は、政治界でも、實業界でも、敎育界でも、宗敎界でも、一事を行ふ毎に、何等かの形式を以て、コンミツションの伴はないといふことはない。小さいところで、賣り出しの福引景品は、商家がお客に渡すコンミツションであるとも見られる。かゝる時代に、海軍のコンミツションを攻撃するのは、野暮かも知れぬ。況んや、新聞記者が、黄白のために、その筆を曲げるのを責めるのは、更に一層野暮かも知れない。しかし、金さへ出せば、どんな惡事でも、醜行でも、包み隱すことが出來る、地獄の沙汰も金次第といふ考は、頗る危險な考である。社會の有らゆる罪惡は、大抵この考から出立して居る。天下の耳目、社會の木鐸たる新聞の記者たるものが、かゝる考を持つて居て、又、實際にこれを行ふと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

いふことになつては、眞に世は常闇である。獨りシーメンス會社ばかりてはない、今や、裁判所の手は、三井にも及んで來た、三井が新聞記者を買收するに巧なること、世の定論である。昨日まで、半黄色の青廣一着、昂然として天下を横行して居た青年記者が、今日は、俄に流行の美服を纏ひ、狭斜の巷に豪遊を試みるといふやうなことがあるとすると、そこに、何等かの秘密がなくてはならない。

出版業者に、隷屬して居る新聞記者もある、呉服屋から、捨て扶持貰つて居る新聞記者もある。化粧品屋から、盆暮のつけ屆けを受けて居る新聞記者もある。劇場から寄席、料理屋から待合、役者から相撲取、落語家から浪花節語り、それ相當の關係を結んで、幾何かの收入を得て居るものもある、甚だしきに至つては、何々新聞記者といふ一葉の名刺を以て、脅迫もする、强請もする、洋服も無代で着る、袴も無代で穿く、米屋も、酒屋も、料理屋も、たゞブル／＼慄へて、只で御用を勤め來る。眞一諾と言はねば、新聞で攻撃すると出られては、大抵のものが、往生してしまふのである。新聞の攻撃は、事實の有無に拘らず、致命傷となるのであつて、正誤をしやうが、辯解をしやうが、決してそれを回復することの出來ないものである。これを怖れて、新聞社員とさへ言へば、廣告取りから、集金人に至るまで、大に世人に畏れられるのである、コワモテするのである。このコワモテを唯一の資本として、不當の利得を企つる新聞記者の墮落は、最早眞人間として、これを取扱ふことは出來ない。

熱柿が腐柿を弔ふといふことがある、カツタイのカサ恨みといふこともある。今の新聞記者が、他の收賄を攻撃するもの、誠に、窃盗が强盗を罵るの奇觀である。世の新聞を讀むもの、まづ、その眉に唾することを忘れてはならない。

## （九）新聞を監視する新聞

新聞同志は、同業のよしみとあつて、お互にその非を庇ひ合ふやうになつて居るといふ譯では無論なからうが、相互に摘發し、彈劾するといふやうなことだけは、斷じて無い。從つて、新聞の罪惡は、誰でもこれを攻撃するものがない、廓清を叫ぶものもない。彼が、ます／＼暴威を逞しうして、害毒を天下に流すもの、全くこれがためである。

僕をして、志を達せしむれば、天下の新聞を向ふに廻はし、これと縱つて、これを征服し得る程の實力ある新聞を出して、新聞界に一大新紀元を劃し、常に他の新聞を監視して、彼等をして、罪惡を行はしめないやうにしてやりたいと思ふ。それにつけても、惜しいことをしたと思ふのは、三宅雪嶺博士の『我觀』新聞の流産したことである。（大正三年四月十四日）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

# △新聞紙の改良よりも讀者の改善

安部磯雄

昨年の憲政擁護運動に於ても今年の内閣攻擊運動に於ても、最も異様に感ぜられたのは在野黨がノベツ幕なしに演說會を開いたり示威運動を企てたりして居る間に、政府黨が議會以外に於て殆んど全く沈默を守つて居たといふことである。勿論政府黨にも二三の機關新聞はあつたが、到底其勢力に於て反對黨の新聞に及ばなかつた。政府黨は四面楚歌の裡に在つても尙ほ國民に對して語るべきことがあつたに相違ない。如何なる刑事上の罪人であつても法廷に於ては出來得るだけ自己の立場を明にして辯護を試みるのが普通である。まして政府黨の人々が國民の法廷に立つて訴ふべき相當の理由を有せぬ筈がない。然も彼等は反對黨の矢面に立つて自己を辯明するの機會を得なかつた。若しこれが歐米諸國に於て起つたとすれば大臣は必ず歌舞伎座や青年會館や國技館の樣な場所に於て演說會を開いたに相違ない。然るに昨年も今年も殆んど申し合はせた如くに政府黨が沈默を守つたのは立憲國に於ける如何にも奇怪なる現象である。言論の自由を許さない立憲政治！これが我國に於ける政治の現狀である。

今年の政府攻擊運動は隨分激烈であつたから、政府もこれに對して盛に新聞雜誌の發賣禁止を斷行した。これは慥に言論の自由に束縛を加へたもので、新聞が筆を揃へて政府の蠻行を詰責したのは無理もない。而し言論の自由を妨害したのは獨り政府のみであつたらうか。私は先づ新聞の態度が如何であつたかといふことを問ふて見たい。新聞には各一定の主義があるから其社論に於て堂々と政府を攻擊するなり或は辯護することは當然である。然し同時に反對黨の意見を紹介するといふ雅量がなくてはならぬ。殊に事實を傳へるに當ては極めて公平なる態度を採るべきで、少しでも愛憎の念を挾むべきでない。私は今日の新聞が餘りに感情的、煽動的であるのを見て、果して事實の眞相を有の儘に報告し得るや否やを危んで居る。政府攻擊と言へば社論から三面に至るまで全紙殆んど政府黨の惡口を以て滿されて居るといふ有樣である。若し政府黨の機關新聞をも併せ讀むといふ餘裕なければ、大抵の人は政府に對して惡感を懷く樣になる。新聞記者はこれを見て「我事成れり」と喜ぶかも知れぬが、これでは新聞の職責を盡したものとは言へまい。我國の新聞は何故に今少しく公平に反對黨の意見をも紹介して國民が是非曲直を判斷し得る樣に材料を供給しないのであらうか。議會の議事錄を見れば政友會議員の中に堂々たる演說をして居る人が少なくない。然し在野黨の新聞には何時も非政友代議士の演說が比較的詳細に報告されて、政友會代議士の演說は默殺されるか若くは冷笑的に批評されて居る。無邪氣なる多數の讀者がこれがため誤られるのは已むを得ない。盲目が盲目の手引をするのは實に危險である。今日の新聞に指導されて居る國民は正にこれ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

と同一の危險を踏みつゝあるのではないか。

若し新聞が少しも吝色せずに政府黨の意見をも紹介する樣であれば、大臣も喜んで其意見を公にするに相違ない。新聞が公平なる法廷であれば何人か此處に立つて自己の意見を陳述せぬものがあらうか。新聞が此の如き雅量を以て山本首相に懸る疑雲を排除せんとしたならば、首相も或は胸襟を披いて其言ふべきことを語つたかも知れぬ。私は今日の新聞が公人に對する相當の途を盡して居らぬと思ふ。普通の被告に對してすら法廷は充分なる言論の自由を與へて居るではないか。然も新聞は公人に對して充分辯護するの機會を與へて居ない。よし公人が意見を發表しても新聞は忠實にこれを報導しない。甚しきに至ればこれを默殺する。されば言論の自由を束縛するものは政府ばかりでない。新聞も亦同一の過に陷て居る。

新聞の傳ふる事實が果して信實であるか否かに就ても疑を懷いて居る人が少なくない。私は彼の刄傷事件に就ても新聞記者毆打事件に就ても今少しく公平に双方の意見が紹介されなかつたのを悲むものである。例へば刄傷事件に就ては政府側に於ても言ふべきことが多くあつたに相違ない。然し一二の新聞の外何等の機關をも有しなかつた政府は、在野黨の新聞が雅量を示して呉れない限り沈默を守るより外ないのである。私は政府側に於て左樣な喊聲を洩す人のあるを聴いて尤ものことだと思ふた。新聞記者毆打事件に就ても記者は政友會の代議士と見誤られて毆打されたのだといふ風說も傳つて居る。勿論此の如きは新聞社に於て充分に調査されたことには相違ないが、新聞の職務としては充分に双方の意見を紹介せねばならぬことゝ思ふ。

今日の新聞にも反對黨の意見を充分に紹介するだけの雅量がないのであるが、國民も亦此點に於ては同一である。昨年や今年の政治運動最中に若し政府黨が國技館や青年會館に於て演說會を開いたとしたならば其結果は果して如何であつたらう。聴衆は辯士に謹聴したであらうか。演說會は無事に終りを告げたであらうか。聴衆の怒罵喧囂、辯士の立往生、修羅場の出現！　これは何人も容易に想像し得る所である。これを豫想したるがため政府黨は演說會を開かなかつた。立憲政治にあるまじき此の如き奇怪なる現象を見たのは誰の責任であらうか。私は其罪を國民に歸することを躊躇しない。法律の威力を以て新聞の發賣を禁止するのも、腕力を以て反對黨の言論を威壓するのも其弊害は同一である。先づ此弊害を除去せずして單に憲政の發達を希望するのは大なる撞着である樣に思はれる。

獨逸の政治は英國及び米國の政治に比して甚しく官僚的性質を帶びて居る。然も國民が言論を重んずる點に於て吾人が大に學ばねばならぬ所のものがある。總選擧の時に於て各候補者は政見發表演說會を開き、充分に己れの意見を陳述する。司會者は聴衆に向つて若し辯士の政見に對し批評を試み或は反對意見を陳べんとする人あらば進んで演壇に立たれよと勸誘する。これに應じて數人の辯士は遠慮なく前辯士の說に攻擊を加へる。斯の如くして聴衆は双方の意見を比較して何人に投票すべきか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

を決することが出來る。これは實に正々堂々たる態度ではないか。自黨の説のみを聽いて他黨の論議に耳を貸さぬといふことは啻に其人の臆病を示すのみならず、識見開發の上に大なる損がある。私は我國の新聞が率先して此の如き態度を採るに至らんことを希望せざるを得ない。

然し新聞の態度を攻撃するのは聊か酷に過ぎるかも知れぬ。新聞の勢力は近來著しく増加して來た。内閣の運命も殆んど全くこれに左右せらるゝといふ有様である。然も私共は新聞が常に讀者に左右せられて居るといふことを記憶せねばならぬ。新聞は慥に社會の木鐸に相違ないけれども、營業の上から讀者の嗜好に投ぜねばならぬといふ興味を有つて居る。新聞記者としては理想的な新聞を造りたいのであらう。然し讀者がこれを喜ばなければ、已むなく讀者の嗜好に合ふ樣な新聞を造らねばならぬ。何となれば賣れぬ新聞は永く其存在を繼續することが出來ぬからである。讀者の一部には所謂三面記事を見て新聞記者の理想の如何に下劣であるかを憤慨して居る者があるに相違ない。勿論記者の中には好んで此の如き記事を書くものもあらう。然し幹部の人々までが斯く墮落して居らうとは考ふることが出來ぬ。私はかゝる見地から今日の新聞記者に對して少からぬ同情を寄するのである。一面から見れば三面記事位風俗を壞亂して居るものはない。藝者や女優の寫眞が掲げられる許りでなく、彼等に關する如何はしき記事までが載せてある。甚しきに至りては知名の士までが醜事を語つて少しも耻づる所がない。先般長谷場純孝氏が逝去した時某名士は壯年時代屢長谷場氏及び故中江兆民氏と共に妓樓に登つた時のことを面白おかしく語つて居る。斯る談話が臆面もなく新聞に掲げられるといふことは何たる無作法のことであらう。新聞の三面は實に醜事の陳列場といふ觀がある。然も私は新聞のみを責むることが出來ない。何となれば實社會に於ては三面記事以上の醜事が公認せられて、新聞に現はるゝものは唯其一小部分に過ぎないからである。故に三面記事の改良を叫ぶ前には先づ讀者の改善を謀らねばならぬといふことになるではないか。然し新聞の改良は必ずしも行ひ難きことではない。政府にして斷乎たる處置をなせば直に效果を奏することが出來るではないかと論ずる人があるかも知れぬ。これは一應尤なる議論ではあるが、決して徹底したる意見ではない。私は政府が三面記事を取締る前に何故公娼や藝者の處分をしないかと問ひたくなる。政府が三面記事の根原たる藝娼妓制度を改めずして、單に三面記事を取締らんとするのは撞着の甚しきものである。要するに讀者を改善せずして新聞を改良せんとするのは全く本末を顚倒したるものと言はねばならぬ。

私が今日の新聞に對して飽足らず思ふのは三面記事ばかりでない。新聞の調子が全體に嘲笑的、冷罵的、諷誣的であるといふことである。嘲笑も冷罵も上品であれば左程人々の惡感を激起することはないが、我新聞は此點に於て極めて下品である。公人の名を呼ぶに井の角とか武と金とかいふが如きは新聞の態度として決して恕すべきことでない。山本首相を『權兵衛』と呼捨にするが如きも決して公人に對する途ではないと思ふ。殊に人々の失敗談などを列べて快を呼ぶが如きは苦々しきことである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

然しこれとても私は新聞のみの責任ではないと思ふ。若し我讀者が斯る記事を喜ばないことが明白であれば、新聞は決してこれを掲載しないのである。

以上陳べたる所より推論すれば今日の新聞が政治に關して極めて狹隘なる態度を採つて居るのは全く讀者の要求に應ぜんがためであると言ふことが出來る。昨年といひ今年といひ絕對的に政府に反抗したる新聞は讀者の歡迎を受けたるに反し、政府黨の新聞若くは政府黨に買收せられたりとの評判を受けた新聞は多く讀者を失ふたのである。私は新聞に一定の主義があるといふことを信ずる。然し新聞政策としては否應なしに政府を攻擊するのが得策である。公平なる態度を採りて讀者の嫌疑を受けんよりも寧ろ發賣禁止を賭して政府に突喊するに如かずとは、どの新聞にも起る所の考へであらうと思ふ。兎に角我國に於ては被攻擊者の位置に立つよりも攻擊者の位置に立つ方が人氣役者となることが出來る。而も攻擊は激烈なる程讀者に歡迎せられる。これがため新聞は殆んど反對黨の意見を公平に紹介するといふ緩慢なる手段を採ることが出來なくなるのである。私は我國民の政治思想に一大欠陷があると思ふ。彼等は政黨といふものを非常に誤解して居るらしい。

東京人は種々なる機會によりて二三政黨の比較硏究を爲すことが出來るが、地方の有權者は殆んど自黨以外の事を何も知らない。彼等は唯自黨の機關新聞を讀むのみであるから、反對黨は恰も國賊であるかの如く考へて居る。故に反對の黨派に屬する二人が軒を並べて住んで居ても、彼等は交際すらしないといふ有樣である。若し英國の自由黨と保守黨の如く、或は米國の合衆黨と共和黨の如く根本的に異なれる政綱の上に立つて相爭ふのであれば、其政戰の激烈なるも當然であるが、我國の政黨には政權爭奪の外何等相戰ふべき理由はない。まして政黨を異にするがため社交の上に影響を及ぼすに至りては驚くべき弊害と言はねばならぬ。政黨は國家の福祉を增進する手段に過ぎない。故に何れの綱領が最も國家を益すべきかを考へて其去就を決すべきである。理が非でも一の政黨に附屬することは決して國家の爲に盡す所以でない。有權者は常に政黨よりも國家を重んずるといふ考へを有つて居らねばならぬ。政黨は決して完全なるものでない。其採る所の政策が其當時の國家に適合せぬことがあらう。或は時勢の進運に伴はぬこともあらう。斯る場合に其黨を脫することは決して節操を賣つたのではない。變說ではあるが決して變節ではない。國民に此の如き批評眼があつてこそ政治は永久に發達することが出來る。然るに我有權者は斯の如くに政黨を見て居ない。彼等が政黨に屬して居るのは恰も源氏と平氏、足利黨と新田黨と對立して居る樣に考へて居る。太平記時代の思想を大正の今日に持込んで居るのだから堪らない。彼等は全く喧嘩でもする樣な積りで自黨の爲に力瘤を入れて居る。これだから反對黨の意見などを聽く雅量がないのである。

我國民は政治上ばかりでなく、すべて勝負事に於て其度量が甚だ狹い樣に思はれる。私は我國の野球試合などに於て見物人に雅量の缺けて居ることを著しく感ずる。試合の勝敗に重きをおかず、技術の巧拙といふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ことに趣味を感ずれば、敵の妙技に對して喝采するといふことは當然のことである。私は米國に於て敵味方の區別なく妙技を喝采するの美風を見たけれども、我國の見物人には此の如き雅量がなくて、却て敵の失策を喝采するといふ卑劣なる行爲がある。要するに此狹隘卑劣なる精神が政治運動にも現はれたのである。政黨の勝敗といふことのみに心を勞すれは到底反對黨の意見を聽くといふ雅量は生じて來ない。我有權者は此誤れる思想を脱却して、反對黨の長所を認むるだけの雅量を有たねばならぬ。私は新聞の改良を熱望する一人であるけれども、讀者の改善なくして新聞の改良を望むことは無理な注文である樣に思ふ。讀者が感情的な、煽動的な、嘲笑的な、冷罵的な新聞を好まぬ樣になれば、今日の新聞が公平な上品な理性的なものとなることは疑なきことである。

## △日本の新聞紙と歐米の新聞紙

鎌田榮吉

現今我國に於ける新聞紙に就いて改良すべき點は多々あらうと思ふが、大體に於て一般的の事よりパーソナリチー卽人身に關する記事が餘り多過ぎるといふ事である。人身に關する記事其者が必ずしも不良いのではないが、人の名譽を毀損するやうな人身攻擊が平氣で行はれてゐる。そして讀者も之を面白がり、攻擊せられる人も仕方が無いといふので諦めてゐるのか、大てい其儘に打捨てゝおくといふ事だ。獨り我國に於いてのみ見らるゝ珍妙なる寛容の現象を示してゐる。それが慥かな根據の上に堂々と攻擊するのではなく、多分そうだらう位の處で無暗に攻擊するのは亂暴至極である。素より新聞記事は惡事に對する社會的制裁中の最も勢力あるものである。眞の不正者に對しては新聞の筆誅が最も必要である。何よりも大なる効果を有する。但だ今日の如くいゝもわるいも滅茶苦茶に之を攻擊するのでは益よりも却て害を貽す方が多い。若し今よりも世人に名譽を重んずる觀念が一般社會に行亙つて來たならば斯程まで之を不問に附する者は無くなるであらう。又社會も之を擯斥するであらうと思ふ。

次に今日の新聞はいかにも野卑な、いかにも露骨な、下劣な文字が使はれてゐる。挑發的な淫猥な文字を使用するのみか、故らに大きく、二號活字などで麗々しく揭げてゐるなどは隨分ひどい話である。何れの國に於ても此種の事件が無いのではない。外國の新聞を讀んで見ても中にはそれらしい記事に出會はす事もある。然しながら其等の醜事をムキダシに公の前に出すことを憚つてゐる。例へば昨年在英の時の事だがこんな記事が出て居た。それはロンドンからブライトンへ行く汽車の車室に一人の若い女のみが乘つてゐたが、其所へ途中から一人の男が乘込んだ。突然其の男は右の女の胸のボタンを外しにかゝつた。そこで女は聲を擧げて「汝は何を要求するか？」と叫んだ。「マニー！」と答へた。女は見

車の手を遁れんとて車窓から飛降りて終に氣絶をした云々と書いてある。そして特に若い女の若いと云ふ字の頭字たるYとマニーのM丈を大きくカピタル文字であつた。其外に何も猥褻な文字はない、何氣なしに讀めば盜賊としか見へないようだが、これは家庭では此のやうな記事を娘達に讀む事を許さない所から見ると矢張り猥褻な事だなと思つたのである。日本の新聞であつたなら何の憚る所もなく、女を辱しめたとか、強姦又は強淫とか故らに二號活字か何かで之が露骨に書き立てたであらうと思ふた事があつた。

東京の新聞はまだしも地方の新聞に至つては一層甚だしいようだ。そして此等は毎朝窓から面々の家の中に投り込んでおくものだから誰彼れなし手に取つて見る。展くと直ぐ大きな活字で書いてある。又如何はしい書が出て居るから子供でも婦人でも直ぐに眼に附く。一家の父母達が注意をしやうと思つても出來ない。とても家庭の讀みものを正す譯には行かぬ。然しながら是れは必ずしも新聞のみが不良いといふ譯には行かぬ。新聞は經營上廣く賣るといふ事をも主なる目的の一に數へねばならぬのであつて、此等の記事が歡迎せられるから爭つて載せるといふ事になるのである。其原因は社會が此等の記事を歡迎するからである。社會の程度が低いからである。其根治策は一般教育に依つて國民の程度を高めるより外はないが、併しながら苟も社會の木鐸を以て任じ、指導を以て旨とする新聞雜誌たる者は世俗の人氣にのみ投ずるを以て事とせず、國民の品位を高め、社會の風紀を改善するだけの親切と理想とを持つて欲しい者だと思ふ。新聞も社會教育の最大機關であるは云ふ迄もない。

社會の風紀が一般に高上したならば此等の記事は從つて排除せられて行くに違ひない。英米も卑しい下品な猥褻な三文文學やペニー・ショッカーとか、ポリス・ニュースとか稱する如何がはしい新聞が、今も或階級の者に讀まれてゐるのは事實であるが、少しく上品な家庭に於いては無論禁じられてあるのみならず、汽車の内に於ても同乗客からこれを讀むことを拒絶せらるゝも仕方がない。即ち同乗者は讀む者に抗議を申込む權利を有つてゐる。そして拒絶された人は其命令に從はなければならぬ事になつてゐる。是等は文明國に見る社會的制裁である。

新聞等に於て名譽を毀損された者は告訴を怠らない。其の罰金の過重なるが爲めに新聞社は破産の運命に遭ふくらゐの大打撃を蒙らなければならぬから、いよ〳〵突止めた上でなくてはウカと人の事を書かぬのである。是れは人々の名譽を保つて行く上に非常な功力のあるものである。

或は又或報酬を貰つて特に或人の爲めに提灯を持つなども同じく不都合な事と謂はねばならぬ。人文の程度に依つて、筆を曲げる程度も自ら差があるやうである。或米人が之を實地に經驗したとの話であるが、以太利では僅か十法か二十法の端金を添へて自己を交際社會へ紹介すべき自畫自贊の記事を新聞社に送ると翌朝の紙面にそれが屢々と掲載されて送つて來る。而して金は何とも云はず其儘取る。それに反して、英國の新聞に至つては上等の新聞は勿論だめだが第三流の新聞ならばやつて吳

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

れるが、併し千磅即我一萬圓程の金を提供しなければ其目的を達する事が出來ないそうである。

それから次に廣告の事であるが、此廣告の掲載にも餘程の注意を要するものと思ふ。卑猥な廣告や中傷的廣告は素よりであるが、西洋に於いては往々廣告を悪用して表面何の不都合もないような文面で、それが泥棒同志の合圖や符牒になつてゐたりする事がある相である。そんな怪しい廣告なんぞは社で受付けない。廣告ならば何でも歡迎すると云ふ譯のものでない。

新聞が何時迄も現在のやうな狀態を續けてゐるならば、終には立派な見識なり學識なりを具へた人は新聞記者たる事を厭ふやうになり、從つて益々新聞は下品になり、原因が結果となり、結果が原因となつて終には救濟する事の出來ぬ破目に陷るであらう事を虞れる。文化の程度、國民の品位は其國に發行せらるゝ印刷物に依つて判斷せらるゝといふ事を知つたならば、文筆を以て一世を指導せんとする新聞記者の職責や重く、深く此點に留意しなければならぬと思ふのである。

## △新聞改良の二大急務

田川大吉郎

新聞改良は、僕の宿昔の希望である、希望と謂ふよりは主張である、

曾て政界革新の相談を受けたことがある、その主唱者は新聞記者であつた、僕は言下に答へて政界を革新せんとなら、先づ新聞界を革新せよ、新聞界革新せば、政界の革新は自然に成らん、新聞界革新されずば政界のみ革新さるゝ望みなしと曰つた、僕は夙くから斯様な意見である、隨つて御提案には至極滿足と感謝の至りである。

去り乍ら談豈容易ならんや、凡そ天下の至難事といつて、これ程至難な事はあるまい、隨つて僕は今その明白なる回答に、窮する者である。

多分、世論に反對するであらうが、僕は新聞經營の基礎を、もつと營業的ならしめたい、即ち、營業的若くは實業振の方針方法を新聞社の各部面に、もつと應用し充實したいと希望する。

失禮だが、日本の新聞で、五十萬の資本を擁して起つたものは曾て有るまい、然し乍ら、その營業の實際は、どうしても、五十萬以下の資本で、經營さるべき筋合のもので無い、例へば、新聞記者を、世は一面に薄給だと笑つて居るが、事實、新聞記者ほど、金の多くかゝる社員若くは從業者が、他のいづれの事業に在るか、凡そ、五十萬圓以下の銀行と曰ひ、會社と曰へば、その從事員の數も、給料も知れたものである、新聞社ではそうは往かない、のみならず、相當の建物が要る、十分の機械が要る、活字が要る、多數の職工が要る、日々の紙が要る、とても、五萬や、十萬の端た金で思ひ立たるべきもので無い、然るを、多くはそれらの端た金で以て打ち立つた、無理はこゝに在る、無論、無理を押す人も世に無くてはならぬ、天下の大事は動もすれば徒手空拳の間に企てら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

るゝのである、とはいへ、これだけの大規模、大仕掛の事業だもの、たまには、それ相當の資本を備へてかゝる人も有り相なもの、而して其人殆んど無く、多くは、微小の資本を抱いて、慷慨氣を負ふて企てた人、企てられた新聞社ばかりである（それが現に發達して今日の勢力を成して居るのは別として）そこに、僕の營業的でない、實務的で無いと思ふ第一點の短所がある。

總ての新聞社と、總括的に言ひ兼ぬるのは、勿論だけれど、その應接間が、銀行の應接間よりも、進歩した設備の所を見たことはない、その社員の執務振り、若くばその椅子机の排列の仕方が、銀行などよりも、もつと進歩したやり方の所を殆んど見ない、その廣告通信の取扱ひ振りが、極めて進歩した近世的、若くば二十世紀式とも謂はるべき簡便、敏捷の仕組に爲つて居る所を殆んど見ない、その會計其他、記帳の仕方が、當今の最新最利、最有効の方法に爲つて居る所を殆んど見ない、凡て此の如きは必らずしも大事で無いかも知れぬ、然し乍らかくの如きも、新聞經營中の一要素である、而して新聞を一世の耳目、社會の指導機關であると謂ふからは、新聞社は、かくの如き點に於ても、亦進んで一代の流行を起し、模範と爲る準備、抱負、組織が無くてはならぬ、而して僕の見る所、聞く所の殆んど總ては、總てそれに叶はない、これで、僕の、營業的主義方針に缺けて居る、此主義方針を、もつと擴大せねばならぬと思ふ所以の一部である。

轉じて編輯の方面に移り、倫敦に在るの日、倫敦タイムスを毎日々々、始めて深く注意して讀んで、而して僕の得たる第一印象は、これ新聞にあらずして、雜誌なりとの感じであつた、僕は今も此感じを抱いて居る、こゝに、日本の新聞と、特に倫敦タイムスとの差別の點がある、僕は、日本の新聞を讀み馴れて、新聞とは凡て此の如きものなりとの概念を、漠然ながら得て居た、その新聞の體裁、傾向に對し、倫敦タイムスは、雜誌だ、雜誌的だとの感じを、諸種の點から、むら／＼と與へたのである、その話は永くなるから省くとして、但、此く言ふことは、タイムスの記事が、太だ古いと謂ふ意味で無いことは伺斷つて置く、例へば、ロード、ローアボンは、世に進歩派の政治家と目されて居る、其人が、愛蘭自治案を、兩黨の圓卓會議に由つて決せよと主張した意見は、第一にタイムスに掲げられ、而して一世の議論の種子と爲つた、米國の大統領ウイルソンが、墨國事件に對する米國の態度を世界に聲明するに當つては、特に先づタイムスに掲げた、のみならず、タイムスの紙上には、世界各國の特電が、日々滿載されてある、斯様な點に於て、僕は、タイムスの努力と光彩とを十分に賞揚する、然も、雜誌的と稱する所以は、その記事の取扱ひ振に對してゞある、何か例に擧げやう、例へば英佛間の海峽横斷計畫はいかゞであらう、此海峽を、隧道で通すか、浮き橋（フヱリーボート）で通すかの問題があつた、以前もあつたらうが、僕の滯在した昨年八九月の交にもあつた、而してその頃のタイムス紙は、日々、その投書を掲げて居た、旅客の位地から論ずる人もあり、技術家の位地から論ずる人もあり、軍事上から論ずる人もあり、財政上から論ずる人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

もあり、商業上から論ずる人もあり。而して其人々は、官吏もあり、軍人もあり、代議士もあり、英人もあり、亦佛人もあるといふ工合に、雑多な人、雑多な意見が、雑然、紛然として、長く、短く、強く、やさしく、交換されてあつた、例へば、日本の新聞紙の記事は、日々、月々に變るに對して、タイムスの紙面には、二ケ月越、三ケ月越の記事が、尚興味饒き主要の記事として、取扱はれて居た、即ち、研究的の記事、專門的の記事が頗る多かつた、タイムス紙自ら、タイムスの歷史は、英國の歷史であると誇る如く、その記事が、較々歷史的に取扱はれて居る趣があつた、そこに、彼の記事には重い所があり、日本の記事は、概してその重さを缺いて居る。

序ながら申す、タイムスは此程値下げをして、四錢新聞と爲つた（從來八錢であつたのを四錢に下げた、その四錢は日本での一錢程度であらう）之を此く引き下ぐるに、いろんな言ひ譯をして居る、其の内に「公人の私事」を決して掲げ無いことが、タイムス從來の方針であつた、吾等は此場合に於ても、從來の此本領から離れない。タイムスの取扱ふ事項は、依然として國民的事項であると高調して居た、公人の私事を掲げぬといふには、注意を要する。時代の傾向、程度にも斟酌を要する、簡單に、一概には嚥み下し難いが、それにしても、一面に於て、此本領あり、一面に於て以上の如き歷史的、研究的、記實的取扱ひ振りの所に、僕は深く感服した、少くとも、彼我の相違點を見出した。

日本の新聞紙中、僕は、萬朝報を、萬重寶と稱して居る、如何にも小器用に出來て居る、編輯者の格段の苦心と力量とを認める。去り乍ら、總ての記事に、餘りに社の意見が交り過ぎるやうに思ふて居る、重ねて言へば、社に一定の成見があつて、總ての記事を、その成見に引きつけて取扱ふのではあるまいか、その弊がありはしないかの感じに捉たれて讀む場合が多い。然し、その記事は、如何にも活き〳〵して居る、いつも著く活かしてある、その働きを忍らしと思ふ、都新聞は、僕に緣故のある新聞だから、進んでは言ひ兼ぬるが、僕は都新聞の、おつとりした、穩かな、いら〳〵しない態度をいゝと思ふ、同新聞には、種々の缺點があるけれど、此點から觀察すると、同新聞にも頗る貴ぶべき所がある、僕は同新聞の此氣持が、永く繼續され、一層高調されんことを祈つて居る、而して此樣の氣分、心持が、日本の新聞に充實さるゝ日のあらんことを希ふて居る、萬朝報と、都新聞とを打つて一丸と爲すことは（新聞の作り方に於て）頗る難い、これは出來得ることか、どうか分らないが、若し出來ることなら、都新聞に見ゆる、穩やかな調子を以て、萬朝報の五分の隙もない流の記事を取扱ひ、而して黑岩氏の沈痛勁烈な意氣を吐いたら、どうかと思ふ、それが、現代に適した、而して日本を指導するに適した新聞では無いかと思ふ、つまり、萬朝報の記事に、雜報は神聖なりとの感を、もう一段、持たせて貰ひたいやうに思ふ。

昨年の憲政擁護の運動以來、著るしく感ずることは、日本の新聞が、頗る黨派的に爲つたことである、獨り各社が黨派的に爲つたのみならず、各社の中に黨派の出來たことである、僕の知る所、各社ともに此傾向が

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ある、現に、比較的穩かな調子の都新聞の中にすらそれがある、況や、其他をや、隨つてその記事には、黨派的色彩が太だ强い、今日の時勢は之を要するのかも知れないが、僕は、此傾向を良き傾向とは思ひ得ない、新聞記者としては、機關新聞の記者たらざる限り、黨界の感情利害の上に超出したる意見本領が無くてはならぬ、僕は此種の意氣の人を多く見ない、或は其人あるもそれを知らないのであらうが、記事の上に見る所、どうも、其人が少いのであらうかと思ふて居る、それだけ殘念に堪へない、僕は、此氣合を各新聞記者の間に養ひ高めることを、今日の最急事と認めて居る。

僕は、機關新聞の記者としても、一々、他動的に、黨の方針を謳歌し、誇張すべきものでは無いと思ふて居る、即ち、黨からも、新聞紙、新聞記者の天職に、十二分の敬意を拂ひ、機關新聞の記者だから、何も、かも、黨の一切を辯護すべきもの、その目的と、精神如何を領知せざるも、尙、形式的の辯護を爲すべきものと思ひ卑めないやうにと、僕の見る所、斯樣な誤解が、今日の黨界に有りはしないか、それだけ、新聞記者の獨立が大切である、機關新聞の記者にしても、記者としての天職如何を思ふことが大切である、黨界の秘密は秘密として之を守り、政略は政略として之を含むにせよ、その主張には、男子の面目、良心の權威を伴はしむることが大切である、機關新聞の記者尙然り、更に況や、獨立せる新聞の記者をや、僕は、此眼目の權威が、記者の自ら衒ふを待たずして、自然に、廣く認めらるゝ迄に、發達せんことを祈つて居る。

要するに、僕は、實業振の空氣、方針を新聞界に、もつと、濃く、强く注入すると共に、堅實なる基礎を据へ、その、實情は、天下何人の前に表白するも耻なき覺期、備へを爲し、內、營業の神聖を保つの外、新聞記者に、黨派の感情利害に制されざる、高尙の氣品と、冷靜公平なる情緒の修練を願ひたい、日本の新聞界革新の端緒は、差當り、此二大要處から、手を着くるの外は無いと思ふて居る。

## △米國式營利主義の弊

早川鐵冶

日本と云ふ國の地勢を考へて見るに、或一方から云へば大變よい。例へば貿易の發展と云ふ方面から見ると、東西に支那と米國と云ふ大國を控へて居る。日本の人口は年々增殖する所からして、其增殖した人口を海外に送れるか送れぬかを心配する人もあるやうであるが、之は一種の杞憂であつて、東西に支那と米國との大國を控へて居る以上、決して心配するを要しない。現に獨逸に於ても先年までは每年二三十萬人位づゝ海外に出て行つた。が近來は出て行かない。それは人口の增殖が止つた爲めではなくして、國內に工業が勃興したからである。即ち國內に澤山仕事が出來て、海外に出て行くよりも高い勞銀を取ることが出來るやう事になつたからである。日本の政治家などは只人が殖える〳〵と云うて零して居る。八方塞りで移民が困難であるのに斯んなに人口が殖えては困ると云ふが、吾輩の見る所では、日本は工業を盛んにし、商業を盛んにして、支那と米國に向つて大市場を求むれば、元來器用な人種であるから、强いて海外に行かなくても、海內に於て十分生活が出來ると思ふ。固より食物は足らぬに相違ないが之は海外から仰げばよい。故に工業さへ盛んにすれば、貿易關係上では甚だよい地勢を占めて居るのであるが、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

只困つた事には、支那でも米國でも、國家としての風儀が甚だ感服出來ぬ國であるが、我日本も次第に其惡影響を蒙らんとすることである。支那が三四年前につまらぬ騒ぎをやつた其革命の氣運が、元來雷同性の强い我國民にも影響して、兎もすると、革命とか、現狀打破とか云うて騒ぎ廻ることになつた。然し今日の支那は未だ文明が後れて居つて、總ての事が日本を師とする位であるから、日本人も支那人を尊敬せず、從つて其感染力も少いのであるが、米國の方は日本のお師匠さんであつた丈け、非常な勢力と速力を以て我國に影響するのである。

ペルリがやつて來てからと云ふものは、文物制度悉く米國を師と仰いだ。教育なども一時は米國に倣つたのである。吾輩なども全く米國の教育を受けて來たもので、地理でも歴史でも幾何でも代數でもすべて米國流にやつた。彼の帝國大學の基礎をなした所の開成學校なども元は米國式にやつたもの、又當時の洋行歸りのチヤ〳〵といはれた鳩山和夫でも、齋藤修一郎でも、高松豐吉でも小村壽太郎でも團琢磨でも、總ての方面の人材は皆アメリカ仕込であつた。近來では稍ゝ米國を疎んじて、學問とか藝術とかは米國式でなくなつて來たが、而し商賣上──營利事業では總て米國の眞似をする。そこで御覽なさい。デパートメントストアの流行。又どえらい汚ない廣告を山紫水明の京都の東山に出す。之などは全く米國式である。それから所謂新らしき婦人の輩出──之も眞に米國の女のやうになり切るのでなくして只皮相の上つ面の、突飛な所ばかりを眞似をする。總て何でも米國式にかぶれて居る。

然しながら就中最も甚しく米國にかぶれたのは新聞紙である。一體日本の新聞は元はなか〳〵よかつたものだ。汚ない事を書かず、私事を摘發せず、自殺强姦等に力瘤を入れず、良家の子女に讀ませても一向に害が無かつたものである。勿論西洋に於ても自殺とか强姦とかを書かぬ事はない。然し之はポリス・ガゼット──詰り警察事項と云つて、之を讀むのは良い家庭でないとしてある。然るに米國に於ては例のイエツロー・ペーパー──黄色新聞が流行り出して、新聞は一の大いなる營利事業となつたので、何でも人の忌諱する所を書いて多く沽らん哉主義を採るやうになつた。日本今日の新聞の大多數は即ち之を眞似るものであつて總ての弊害は此根本理由より發生するのである。

昔の日本の新聞記者はなか〳〵氣位の高いもので、今の倫敦タイムスと同じやうな意氣込で、論說なども書いだものである。今日から見れば新聞として誠に幼稚なものに相違ないが、少くも論說記者などは國務大臣と同じ位の位置に自分を置いて居つたものである。現に小松原の英太郎でも尾崎正三位閣下でも犬養の宿禰でも何れも皆新聞記者出身で、記者時代から大臣同等を以て任じて居た連中である。然る所今日では純然たる營利事業となつて、米國のハースト式の營利法でやり出すことになつたからして、總ての着眼點は、何でも世の耳目を聳動し、好奇心を挑發して、一枚でも多く賣らうと云ふ事に變化した。數年前には比叡山の頂にサンライスかの廣告が出たとて騒いだものだが、今ではそんな事は珍らしくない。すべての秘術を盡き、すべての突飛な事を企つるのみならず。若しそんな事實が無い時は、之を虛構捏造してまでも、只面白可笑しい新聞を作らうとして居る。社會の風教に害あらうが、紳士の面目を傷けやうが、そんな事は一向にお構ひなしである。こんな有樣で進んで行つたならば、從來日本の誇りとした特殊な國柄──帝室と臣民は親子の如く、又水魚の如き、萬國無比の我國體も多少破壞せられざるを得ぬと考へる。新聞を改良せんとするには、先づ如何にして、此米國式營利主義より脱却すべきかを研究すべきである。━

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

蘆花徳富健次郎著（第三十五版）

# みゝずのたはこと

語に曰く唯貢故新。土の常に古くして常に新らしきが如く、雲雀の歌の去年のまゝながら今年の耳に嬉しきが如く著者の實生活より流れいでたる『みゝずのたはこと』は恒に新なるべき書籍の階級に屬す。未讀の諸子は速かに一本を購ひ閉づれば默し、開けば即ち綠麥を撫する春風の如き音をもて諄々と慰藉の言葉を語る此耐久朋を諸子の身邊に座せしめよ。

□定價壹圓五拾錢（郵税十六錢）

發行所 東京市銀座通新橋際（振替東京二〇〇番） 新橋堂

東京日本橋呉服町八（振替二〇七七六番） 服部書店

第十四版

◉狩野病院長 狩野謙吾先生著

# 神經衰弱自療法

本書は腦神經、背髓神經、心臟神經、胃神經、生殖器神經等各神經衰弱症の自療法を詳細に説明したるものなり其内容を示せる目次は往復ハガキにて御申越次第無代進呈す

□定價六拾錢　郵税八錢

故皇太后陛下へ献上

東京大正

# 博覽會寫眞帖

賜天覽台覽

全卷に充てる鮮明なる寫眞版はよく博覽會の實況を示して遺憾なく看るものをして居ながら博覽會に遊ぶの思ひあらしむ。

内容豐富（寫眞百六十余種）　紙質善良（上等アートペーパー）

印刷鮮明（精巧寫眞銅版印刷）　裝釘優美（菊倍版大和綴）

定價一圓二十錢　郵税十二錢

◉大隈伯爵夫人序◉尾崎密藏著

第八版

# 家庭養雞法

大隈伯爵家の模範養雞場に飼養せらるる各種雞は本書の著者が經營せる尾崎飼禽場より供給せるものなり。本書は斯く養雞の事に實際家たる著者の多年の研究より成れるものなるを以て其如何に實際的價値あるかは玆に贅するの要なかる可し。

□定價四拾錢　郵税四錢

（中付一の一）

東京市京橋區出雲町一番地
銀座大通前出雲町電車停留所前

# 新橋堂

電新橋一九一九・一九九一
振替貯金口座東京二〇〇

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

# 日本唯一の俳優通信學校

⦿男女俳優志願者の獨學機關
⦿現代演劇研究者の羅針盤

# 演劇講義錄

第一年第一號 五月五日發行

## 學務顧問

都新聞記者 伊原青々園氏
文學博士 上田敏氏
公衆劇團舞臺監督 松居松葉氏
文學士 小山内薫氏
文學博士醫學博士 森鷗外氏

## 講師

都新聞記者 伊原青々園氏
俳優 井上正夫氏
無名會俳優 東儀鐵笛氏
全 土肥春曙氏
文學士 小山内薫氏
劇作家 岡本綺堂氏
劇評家 岡鬼太郎氏
文學士 茅野蕭々氏
俳優 河合武雄氏

劇作家 吉井勇氏
文學士 高安月郊氏
田村成義氏
文學士 成瀬無極氏
文學博士 上田敏氏
楠山正雄氏
松居松葉氏
俳優 松本幸四郎氏
文學博士 藤代禎輔氏
藤間勘右衛門氏
文學士 小宮豐隆氏
劇評家 饗庭篁村氏
音樂家 北村季晴氏
島村民藏氏
文學士 島文次郎氏
文學博士 森鷗外氏
關根默庵氏
文學士 菅鏡造氏
(其他數氏)

## 目下入會金全免の特典あり

■五月より新學期を開始す 此際最も入學に便なり……
■修業年限僅かに一ヶ年 修業後は種々の特典あり……
■月謝一ヶ月金五十錢 入會金五十錢…(目下全免)…
■講師は劇壇文壇專門大家數十名執筆……
■講義は全部振りかな付平易簡明にして何人にも解し得…
■科目は演劇初步より懇切丁寧に解說す……
■會員は新舊劇觀覽の割引其他種々の大特典あり。

規則書往復葉書にて御申越次第送呈す

東京市京橋區木挽町 玉木商會内 演劇研究會事務所 (編輯事務取扱)

東京市日本橋區數寄屋町九番地 鈴木書店 (規則書及入會申込取扱)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ


# 御忘れに成りました？

本誌愛讀者間に弊部目錄（購買ノ友）を御存じの方に大刷新せる第八號を是非共差上たく本號はポケット形頗る美装を凝し内容は豐富眞に諸君の机上に一大美觀を呈すべし●御希望の方は往復ハカキにて御申越次第送呈す

東京市京橋區南紺屋町十

## 水野通信販賣部

●振替東京九〇九〇番●電話京橋壹九四〇番●

大正三年度第一回 會員募集

寫眞術獨習者無二の好指南

百花爛漫の各寫眞術實習の最好季節は今也。

費用僅少にして修了も亦短期間なり

## 寫眞術速成講義錄

全部完了

本講義は最新式の系統的速成法に依り平易懇切何人も忽ち解し得て速に其道の妙技に上達するを得

此際入會者は種々なる大特典あり（申込次第進呈）

●見本付規則書

東京市牛込區白銀町
振替東京二二五八四番

## 大日本寫眞學會

●讀書せらるゝ諸賢の是非共備ふべき第一の寶庫は是

大正參年改版增訂全部發行

## 分類圖書總目錄

●定價金五拾錢送料金六錢切手代用御注文は壹錢增し

特長 本目錄は往時より本日に至る迄に東京市内は勿論日本全國各書籍出版店より發行されたる各種類の書籍名定價送料等全部詳細に網羅したる者なり故に本目錄を見ればあらゆる書籍名知れ望む所の書

特典 を弊店より壹割引にて求むるを得（醫書教科書は除く）

販賣元 東京神田鍋町電車通 振替東京壹六九八六 明進堂書店


（中付一の三）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品廣告の掲載は謝絶す

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●日本のレクラム出づ！●博士學士等百餘名擔當執筆●毎月數篇逐次刊行●

# アカギ叢書

**特色**

●世界學術の叢淵●
●紳士の標準智識●

(1)紳士の常識を形成すべき事項を集錄し紳士として當然辨知し居るべき深さ及廣さに於て平易に解說せり

(2)古今の科學藝文にして、高價晦澁もしくは庬大なるがため多く讀むべくして讀まれざりしものを廉價、簡明に紹介す

(3)古今內外の名篇傑作を悉く袖珍約百頁にコンデンスして而もその精髓を失はず

●第一篇 歐洲文藝 イプセン原作 村上靜人篇 人形の家（一名ノーラ）

●第十一篇 日本史談 龍居文學士著 文化文政 江戸の世態

●第四篇 社會學叢 ルボン原作 葛西文學士譯 群衆心理（上卷）

●第七篇 哲學叢話 三浦文學士篇 ベルグソンの哲學

●第九篇 哲學叢話 中島文學士著 オイケンの哲學

●第十三篇 歐洲文藝 スチヴンソン原作 齋藤文學士譯 壺の鬼

●第十四篇 歐洲文藝 トルストイ原作 村上靜人編 復活

●以上既刊●

●第二篇 哲學叢話 ジェームス原著 中島文學士著 プラグマチズム

定價（各冊）均一 金拾錢

ポケツト形百頁 一頁字數約四百
郵稅各金貳錢 朝鮮臺灣樺太同

發兌 東京市麴町區三番町五〇番地 赤城正藏
電番二二八〇 振替一〇四三二

●第三篇 歐洲文藝 日野月文學士著 ダヌンチオの劇に現れたる女性

●第五篇 歐洲文藝 ドストイエフスキイ原作 痴人

●第六篇 歐洲文藝 村上靜人篇 ウエデキント傳と其著作

●第八篇 歐洲文藝 オスカアウワイルド 村上靜人篇 サロメ

●第十篇 博物叢話 寺尾理學士編 ダーウインの進化論

●第十二篇 歐洲文藝 フライタッハ原作喜劇 齋藤文學士編 新聞記者

●第十五篇 歐洲文藝 モーパッサン原作 板垣文學士編 レディースマン

●第十六篇 美術叢話 佐々木文學士著 奈良の美術

●以上近刊●

（中付一の四）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN




# 大阪の二大新聞紙

江湖書樓之人

## 一

**◎本邦の新聞界に於て、名古屋以西をその勢力範圍とし、優に東京新聞と天下を等分してゐる大阪新聞の現狀をこゝに記してみる**

◎我輩はこゝに此の稿を起すにあたつて、切に思ひ當らざるを得ぬのは、東京の人達が今でもなほ大阪の新聞をよく會得して居らぬといふ事である、是迄、東京に於て發行される新聞雜誌の、隨分少なからぬ數に於て、幾たびか大阪新聞の現狀といふものが傳へられたけれどもそれは殆んど皆な其の眞相を傳へられて居らぬ、つまり其の新聞そのものゝ表面から見た玄關評に非ずんば、お勝手元から覗いたお臺處評に外ならなかつたのである。眞に大阪新聞の内容、即ち其の堂奥を究極したものは一とつもなかつた、されば我々の如き、眞に大阪新聞の表裏を知り、内容を知つてゐるものから之を見ると、實に淺薄な感を禁じ得なかつたのである

◎併し中には一二、曾つて大阪新聞に關係した事のある人達が、所謂大阪新聞の現狀なるものを二三の雜誌に發表した事がある、けれども之とて實は其の眞相を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

描いてゐないのである、それは何故かといふと、その人達は或る大阪新聞の經營者又は主幹と意見が合はぬとか、社風に合はぬとかて、或ひは自から其社を退き或ひは退社を敢てさせられた、よく云へば勇退者惡くいへば落武者に類した人達てあつたので、其間の筆法に遺憾ながら多少の依姑を存してあつたからである、斯くしてつひに大阪新聞の眞實な內容といふものは、今日まてなほ世間に知られてゐないのだ

◎我輩は、大阪新聞の內容に就て、此の人達に比べてより以上に多く知つてゐるつもりである、亦た此人達の如く、決して左樣な依姑の筆を弄するなどの事は、ないと斷言するに憚らぬのである

## 二

◎大阪の新聞は、殊に大阪朝日、大阪毎日の如き大新聞は、東京の同業者から、いつも其の發行紙數を實數よりもより以下にのみ計算されてゐるやうてある、それは何ういふ仔細かよく分らぬが、兎に角東京の同業者は、大阪朝日、大阪毎日の發行部數を、多く見積つても二十萬前後とより見て居らぬのが實際である、とても大阪朝日が、二十五萬とは出てゐない、大阪毎日も二十萬は越してゐまいとやうに考へてゐるのである、けれどもそれは大きな間違ひてある、東京の同業者は確かに大阪朝日、大阪毎日が新聞紙として非常な勢力がある事を認めて、心ひそかに一種の危惧と嫉妬を懷いてゐるから成るべく之が發行部數を少なく見積つておきたいのは、人情の弱點であるが、不幸にも大阪朝日、大阪毎日の兩新聞はなか／＼そんな事では濟まないのである、今日、大阪朝日の發行部數は、平均十頁乃至十二頁として最も部數の少ない時に於て二十五萬てある、が現在ては二十萬から三十萬を上下してゐる彼れは一月以來どうも餘り成績がよい方てない、殊に地方、即ち中國から四國九州の方面に於て頗る振はない、昨年の十一月から十二月にかけて渡邊霞亭の「渦卷」といふごく趣向のお古い小說が、何うした機みか中級以下の讀者に大歡迎を受けた時分には、優に卅二萬を算してゐたが、實は卅萬位ゐの紙を出してゐたのてあ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

る、然るに今は地方に於て紙數が幾分減じたために、よく出てゐて二十八萬を超えてはゐない筈である

◎大阪朝日は此の如く今や地方に於て幾分紙數を減じてゐるが、大阪市内及び、近畿地方に於てはなほ、紙の分布に於てオソリチーたるを失はぬ、大阪毎日が常に大阪朝日に對して、勝敗を爭うてゐるのは、大阪市内と近畿地方とにあるので、他の中國九州地方の如きは、却つて大阪毎日は大阪朝日の紙數を遙かに凌駕してゐるのは、今日の事實である、故に大阪毎日は大阪市及び其の附近に於て大阪朝日に勝つ事を得るならば最早や此の戰爭は大阪毎日の勝利に歸すべきである

◎大阪毎日の今日の發行部數は、實に無慮卅二萬を下らぬ現狀である、彼れの一昨年來の紙數の增加は、實に莫大なもので、今や本邦新聞紙中に於て、發行部數のレコードをつくつてゐる有樣なのである、彼れは如何にして斯る多大の紙を發行しつゝあるかは、新聞界に於て、殆んど一の奇蹟と云つてもよい位ゐて、今日にあつては大阪朝日を超ゆる事實に一段であるが、何ういふものか大阪市と大阪附近に於ては、遙かに大阪朝日よりも紙數が少ないのは、不思議な現象と云はなくてはならぬ、故に大阪毎日は、今や全力を盡して如何にして大阪市及び近畿の地方に其の紙を一紙半片といへども多く出す事を得るかに腐心してゐるが、由來新聞紙には、殊に關西の讀者には、新聞に對する一の信仰といふやうなものがあつて、容易な事で大朝信者が大毎宗に改宗をしない、また大毎宗の信徒が大朝信者にもならぬ、又た殊に大朝は古く大阪市及び附近の讀者を結束してゐるので、流石の大毎も今の所如何ともなすべからざる模樣である

◎併しながら、久しくその紙數に於て大阪朝日の次位にあるが如く思はれてゐた大阪毎日が、一昨年來常に大阪朝日の發行部數以上の紙を出して來てゐるといふ事は、最も注意すべき事である、又最も東西同業者の注意すべき事であらうと考へる、けれども新聞の紙數と信用とは、必ずしも併行しないものであるといふ事もまた否むべからざる眞理であつて、大阪毎日は今や

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

大阪朝日の紙數を超ゆる事幾ばくではあるが、其の新聞としての信用は矢張り依然として大朝の方が深くして且つ重いのである、大阪毎日必ずしも信用が淺くして輕いといふ譯ではないが、此點になると大朝に一歩を讓らざるを得ざるのは如何ともすべからざる所である

◎とは云へ此の兩新聞の信用、所謂世間の信仰といふものは頗る甚大なものであつて、到底東京の新聞などに望むべからざるものがある、それは其の土地と、其の同業者相互の關係などにも因る事は勿論であるが、關西に於る兩紙の信用の絶大な事は實に驚くべきもので同じ大阪に於て發行する他の大阪時事新報とか、大阪日報とか、大阪日日新聞とか、大阪新報とか、不二新聞とか、大阪朝報とか、大阪報知とか、大阪繪入新聞とかで、同じ記事を其の紙面に掲載するにしても、若し大阪朝日、大阪毎日の紙上に之が掲載されてない場合は、世人は決してこれに信用を措かぬのである、この兩紙に掲載されて初めて事實の確保が一般に認定されそのである

◎大阪朝日、大阪毎日の勢力範圍は、東は愛知縣、長野縣、富山縣を以て界し、西は朝鮮滿洲に及ぶのであるが、東京新聞が常に關西を犯さんとして、非常の努力をなしつゝあるもの、國民、報知を以て最とし、やまと、萬朝わづかに之に次ぐの有樣であるが、いづれもなほ好績成を擧ぐるに至つて居らぬ、此の諸新聞紙は或ひは京都にあつては日出新聞、神戸にあつては神戸又新日報、又は神戸新聞、名古屋にあつては新愛知、名古屋新聞、北國にあつては北國新聞、富山日報其他の地方新聞の幾分を蠶食する事は出來るかも知れぬがなほ大阪朝日、大阪毎日の壘に近く事の出來ぬのは、一に其の努力が足らぬのではなくて、この兩大新聞の讀者の信仰がバカに根ざしが深く、到底尋常一樣の鋤や鍬では堀り返されぬによるものである

◎この兩新聞に對する讀者の信仰が、如何に深甚なものであるかといふ、其の程度は到底こゝに説明する事も出來ぬが、またよし説明した所で東京の同業者の耳には、それは一種の誇張とよりほか聽かれないだらう

と思はれる、なぜなれば、東京の新聞紙と其の讀者とは、勸工場の品物とお客といふ位ゐの關係よなりいから、其間に深い信仰のあるべき筈がない、若し同じ物品を其他の勸工場で、より一割安く賣る所があるか、又はより良い品物を、同じ價で賣る所があれば、お客は隨意に、その方へ移るのである、物が良い、價が安い客がそれに移つてゆくといふのは理の當然であつて、一毫もこの間に不審を挾むべき餘地のない事は無論であるが、併しそゝには相互の親しみ、懷かしみといふものがない、信仰がないのであるから、斯う云ふお客ばかり取扱つてゐる東京の同業者は、大阪朝日、大阪每日の讀者といふものは、この兩新聞に對してどの位ゐ深甚な信仰を持つてゐるかといふ事を、實はまだよく徹底して知つてゐないのである、だから、關西に行く新聞には、關西の記事さへ澤山載せて、關西の出來事て內容を豐富に飾つたならば、關西の讀者は買つてくれるだらうなどいふ、普通一片の淺薄な考へから新聞をそういふ風にこしらへて、關西へ送る、けれども斯(こ)んな事は物品の問題であつて、決して信仰の問題ではない、ない

◎この方針は「やまと」にしろ、報知にしろ盛んに執つてゐる、けれども「やまと」でも報知でも、すでに何年かこの方針を續けてゐるが到底大阪朝日、大阪每日の一角へ嚙りつくことも出來ない、なか〳〵一紙半片と云つてもこの兩新聞の領域を奪ふ事が出來ずにゐる、まア大阪時事や大阪新報、大阪日報あたりと角力を取つて互ひに倒(こ)けたり倒されたりしてゐるばかりであつて、大阪朝日、大阪每日、などの傍(わき)にもよれぬ有樣である。故に、もし東京新聞にして、何うにか此の兩紙の褌(ふんどし)にても摑(つか)まつて角力でも取らうとするには、如何にすれば關西の讀者の信仰を新たに引きつける事が出來るかといふ事を研究してからでなければだめである

◎この信仰の點からして、大阪每日は、つひに大阪市及び其附近に於て大阪朝日の根底を撼がす事が出來かねてゐるのである、況んや他の大阪新聞をや、また東京新聞をや、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

三

◎されば大阪朝日と、大阪毎日の角力は、非常に大きい丈けに他傍から之を見てゐても實に面白いやうである、大朝のした事が、必ず大毎へ響いてゆく、大毎のした事が、それも必然大朝へ響いてゆく、或ひは何かの局外の出來事が、一時に兩社の内部へ影響してゆく事もある、大朝が右の足を動かすと、大毎は左の手を揚げねばならぬ理屈が出來、大毎がクシャミをすれば大朝がオクビを出さねばならぬハメになつてくる、だから一社で企てた事が、必ず他の一社へ如何なる形式によつてか影響してゆく、大朝の建物が、今現に封建時代の遺物たる役所の跡であるが、遠からず渡邊橋の南肥後橋の北へ、東向きに一大建築を起す、これはすでに地形が取つてあり、地均し工事も終つた筈で出來上つたならば宏壯眼を驚かすであらうと思はれる、殊に大阪郵便局の大建築物と相對して、雄を爭ふの偉觀を現ずるに相違ないが、そも／＼この大朝の大建築計畫は一寸見ると大毎の稍や古ぼけた現在の洋風建築に對して、先づ一段の精采を魁げたやうにも思はれるが、實はこの計畫たる、大毎が是より以前に本社の改築を秘密に計畫してゐる事を聞いて、一歩早く建築の發表をして大毎に鼻を明かせようとしたのである、だから大阪の同業者すら、大毎の改築沙汰は大朝の轍に倣つたものだ、これは大毎の負けず嫌ひから詮方なく改築を計畫してゐるのであると信じてゐるのである、けれども事實は全く反對で、建築計畫は大毎が大朝よりも先にしてゐた、だ

◎元來、大朝と大毎の所在地は、地の利から云ふと大朝は頗る有利な地に在るもので、郵便局に近く、鐵道停車場に近く、電車に近く其他いづれの點から見ても大朝は交通機關の利用に就て大毎よりもズッと便宜な地點に在る、たとへば大川町の大毎から郵便電信局に到るには、五分間を要するであらうが、大朝からは一分て行ける、大毎から梅田驛へ十分間で到着するものとすれば、大朝からは五分で到着する事が出來る、新聞社があの繁劇な事務を取る中で、各版〆切の最後の五分

間といふものは實に大切なものである事は云ふを待たぬ、されば、何事にも拔目のない大毎は、疾うから其邊に氣のつかぬ事はない、何うにかして大朝と同様な利便を得たいものだと腐心してゐるのであるが、聞く所によると同社は今度ひそかに梅田驛前に地所を得て斷然本社をそこに移す計畫であるとも云ふし、亦た櫻橋附近に本社を置いて、局へも驛へも近いやうにするといふ説もある、兎に角大毎が今の地點に本社を置くといふ事はいづれの點から考へて見ても餘ほど不利益である事を自覺してゐる以上、彼れは大朝と對抗する地點に乘出してくるだらうといふ事は、必ずしも一片の浮説にとゞまらぬ事は無論である

◎大朝が飛行機の飛揚を前後三回か試みて、頻りに空界に勢力を張らうとすれば、大毎は米國野球團を迎へたり、マラソン競走や東洋オリムピックを擧行したりして、地上に勢力を張る、殊に野球の奬勵は大毎の一手販賣といふ有様であつたが、大毎が一たび大朝の獨占たる空界の事にも指を染めて、海外飛行留學生を募集したので、大朝では是ではならぬと箕面で野球競技を擧行した、而も是より先大朝が大毎の東洋オリムピックに對して、好意から出たとは思へない記事を好意的に掲げたに對し、大毎は亦た大朝の三回目の飛行に對して、これも好意から出たやうな出ぬやうな記事を掲げて報復した、大朝が新活字を採用して紙面を九段に改めると、大毎も新活字を採用してすぐ紙面を九段に改めた

◎これらの出來事は、唯だ表面に現はれて居る事實で別に珍となすにも足らぬが、其の内幕にわたる販賣上の政策に至つては、兩社は實に人の知らざる處に不思議の手段を廻らしてゐる、元來大朝にはどちらかと云へば、學者風(?)の記者が多い、本を澤山に讀んで居るとか、物事を調べてゐるとか、兎に角專門的の智識を持つて居る記者が大毎よりもずつと多いのだが、これがまた新聞紙販賣上の道具(と云つては失敬であるが、假に斯ういふのである)になつて來た事は少くないのである

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

◎大朝ではこれらの記者を利用して、久しい以前から大阪市内近畿地方に講演會を開いて、町や村の青年とか元老株とかいふ手合の信仰をいやが上にも吸集したものである、斯うして少なからぬ根底をつくつた、大朝が今日大阪及び其の附近の郡部などに多大な勢力を扶植し信仰を集めたのも尤もな話である、けれども斯ういふ講演會などは、大阪市内や、近い地方に於ては屢々開く事を得るものであるが、すでに四國とか九州とか、又は廣島下關など比較的遠い所になると、手が屆かぬものである、大毎は早く此の機を見て、其の勢力を遠隔の地方に植ゆべく大阪毎日新聞活動寫眞隊といふものを幾組か組織して巡廻させつゝある、其の活辯は誰あらう松下豫備陸軍中佐である、全體大毎には大朝の内藤湖南博士を準社員とし、多くの文學士法學士を記者に有するに比して、唯だ小川、木戸の兩法學士を有するばかりであるが、軍事記者としては前記の松下中佐と西豫備海軍中佐を記者として有するのは、大朝の多士濟々に比して遜色あるものと云ふ事は出來ぬ、大毎が曾て企てた海流調査事業なども、右の西中佐の發案から出たものである事は云ふまでもなからう

◎斯くて大毎が活動寫眞隊で、大朝の講演會の向ふを張つた次第であるが、即ち同紙が遠隔の地方に勢力があり、大朝が大阪及び附近に勢力があるの理も、又たこの一事を以て推測する事が出來るであらう

◎ところが大毎が近頃になつて、頻りに大阪及び其附近に於て、大朝の領域を削り取らうとアセるが如く、大朝も亦た地方に於て大毎の一角を打碎かうとして盛んに鎬を削つて居る、兎に角大朝が大阪及其附近に於て先づ敗るゝか、大毎が地方に於て先づ敗るゝか、此の一戰が即ち今や兩社の天下分目の關ヶ原今後の勝敗の別るゝ所唯だ繫つてこゝに存するのである

◎大朝は去年の暮前に地方長官の大召集をやつて大會議を開いた、こゝに地方長官といふのは即ち地方の特置通信員の事である、特置通信員といふのは普通の通信員ではなくて、社員同樣の待遇を受けてゐる者、即ち姫路とか、廣島とか、下關とか長崎とか云つたやうに樞要な地方に特置されてゐる者の事であるが、大毎の方のそういふ地方の特置員は悉く社員を特派してある、けれども大朝の方は中には社員でなくて特別に地

方の人を依頼してある所もある、大朝がなぜ右の大會議を召集したかといふとそれには深い仔細のあつた事で、何うも新聞の發行が地方に於て特に面白くない、殊に當の敵たる大毎に比して頗る遜色がある、これは果して如何なる理由によるものであるか、大毎の施政方針が大朝のそれに比して優良の結果であるか或ひは特置員其人の活動振がよろしくないのであるか如何といふ問題について討議をしたのである、然るにその席上、大朝の特派員の活動振は決して大毎のそれに劣つてゐる事はない、唯だ普通々信員の技倆が何うも大毎のそれに比して一般に劣つてゐるのであるといふ事に略ぼ決定したので、大朝はこゝに通信員の給料を増すやつは増してやつて奨勵の訓辭を與へ、沒にするやつは沒として新たに新通信員を設置するといふ大分地方の通信機關に改良を與へたのである、そこで之を見た大毎も亦た從來のまゝ通信員を放つて置く事が出來ぬので、俄かに之も増給沒採の方法をとつて大朝方針にあたつたが、さて其の結果兩紙の地方の成績は何うであらうかといふと、我々黑人の眼から見てもこれと云つてまだいづれにも團扇を揚げかねるが、近來の模樣についていへば大朝のは機敏であるけれども錯誤が多いやうであり、大毎は機敏の點については大朝に及ばぬが、稍や正確であるやうにも思はれる、又兎に角此の成績からいふと、數年前の大朝と大毎を轉倒したやうな狀態になつてゐるのである

## 四

◎小さな新聞社でも、社内には往々閥といふものがあつて常に社員がセリ合つて居るのは普通の事實である、況んや大新聞社になるとそれが必ず極まつてある、地方の小新聞などゝ異つて、大朝、大毎あたりになると此の閥もまた從つて大袈裟だ、小新聞ならば其の内部の組織と云つたところで頗る單純なものであるが、大朝や大毎の編輯局などになると、キチンと其の部署がきまつて居て、嚴重な分業的動作によつて職務を執つて居るから、この分業の繋ぎ目、即ち各部の意志の疏通といふ事が亦た頗る、必要な譯である、然るに大朝の編輯局にはこれが缺けて居るのである、各部の頭梁株が互に相反目して居る結果、往々舉國一致の働きを要する場合に大した不都合を感ずる事があるのだ、それは取も直さず各部各課の意志が十分に通じてないからだ、大朝の編輯局には元來二人の巨頭がある、この二人の巨頭が互ひに暗流をつくつてセリ合つて居るから隨つて所謂二頭政治見たいな現象を呈するのである

二人は誰ぞ曰く、西村天囚(年額俸給四千圓)曰く鳥居素川(年額俸給三千五百圓、以下倣之)この二人が編輯

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

局内に派を作して軋轢して居るのである、即ち大朝の編輯局員はすべてこの二人のいづれかの派に屬して居ないと行立たない、意志の疏通も斯くして缺如する場合が往々ある、然るに一方大毎の編輯局は何うであるかといふと、社長の本山彦一翁が熊本出身丈けに、熊本系に屬する記者が出頭するとか、主幹の渡邊巳之次郎（年額俸給四千五百圓）が水戸の出身であるから、水戸系の記者が跋扈するとか、そんな事は或ひは事實かも知れぬが、大朝の閥弊に比すると殆んど何んでもない編輯局は常に天下泰平で安穩である、それは何故かといふと、大朝の方には圖抜けてエラいと云はれる西村鳥居の二人が居るから、所謂兩虎並び立たざる結果になるのであるが、大毎になると先づ今のところ渡邊の向ふに立つべき人物がない、之と覇を爭ふに足るべき人物がないので先づ以つて丸く納まつて居るのである若し大毎て渡邊と佶抗てもして見ようといふ意氣のあるのは經濟部長の高木利太（年額俸給四千圓）であるが何分渡邊といふ人は世間には知られてゐないが編輯局ては非常に人望のある人で、とても高木にはそれ位の勢望がない、仕事をする點に於ては或ひは高木の方が才幹に長じて居るかも知れぬが、渡邊の如く誠意一貫て押通せる人物てないので、何うしても人氣が渡邊にある、副主幹といふ役目にある菊池幽芳（年額俸給三千五百圓）の如きに至つては、意氣銷沈 とても新聞社の表面に立つて活動し得る人物ではないから、無論大毎社中に派をつくり得るやうな人ではない

◎紙面の調子や色合から觀ると、大朝の編輯局は老成ぶつた人達の集まりて至極平靜なものだらうと思はれるが、事實は反對で、大朝の編輯局は常に人間がイキリ立つて喧嘩もすれば議論もする、其間に猜疑嫉妬などいふ分子も交つたりなどして頗る物騷千萬なのに引かへ、比較的紙面に新趣味、新氣運、新智識を並べて居る大毎の編輯局は、喧嘩も議論もなくてイヤに落つき拂つたものだといふ、實に妙なものである

◎で、大朝の編輯局員が二派に分れて軋轢するが中に、若しこのいづれにも屬せぬては、一時もそこに足をとどめる事が出來ぬのである、其の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

生きた實例について我輩は唯た一つ知てゐる事がある、併しこの例外にも之に似た形は一つや二つあるかも知れぬが、それは我輩の耳には入らぬ事だから分らぬ、生きた例とは曾てこの大朝の[illegible]つた根本吐芳の事である、すると此男はどちらの派にも屬しないで、旗幟が甚だ不分明であるといふので、兩派から疎外された結果、いづれへも緣の薄い神戸附錄の編輯專務に廻されたが、それでも兩派から壓迫がヒドくてとても本社にゐたゝまらず、とう〳〵東朝の方へ逃出した、逃出したのではなくて實はハミ出されたのである、併し根本は兩派に關係しなかつたばかりに、東朝の方では何うにか納まつてゐるといふ事である、これを見ても大朝の編輯局には、どんな險惡な潮流が流れてゐるかといふ事を知るに足るであらう

◎此の大朝編輯局に於る西村、鳥居兩派の軋轢については、社長村山龍平、上野理一の兩氏は非常にこれまで心を苦しめて之が停調——調和を謀つたのであるが、それが今日までつひに寸効もなかつたのである、然らば同社と同じ內輪の東京朝日の方と、人物の入替へでも行つて、いくらか軋轢の鋒鋩を鈍らしたら何うかといふと、そんな事は今日までに村山社長は疾うから氣がついてゐる事である、けれども厄介な事には、大朝の編輯局は東朝の編輯局とは故池邊鐵崑崙時代から非常な確執で、とてもそんな事は出來よう筈はないのだつた

◎ところが大毎は此程になつて、俄然として編輯局員に異動を行つた、此の異動は如何なる原因から來たものであるかそれは別に說明するとして、兎も角も此の大毎の編輯局員の異動といふ事は、大朝社長村山翁をして、其の編輯局に對して或る非常手段を斷行せしむる動機を與へたのである、それは外でもない大朝編輯局に流れて居た、二大暗流の弊竇を除くの手段であつて、取も直さず西村派、鳥居派の軋轢を高壓的に防阻した次第である

## 五

◎然らば村山翁の取つた手段とは如何なる事であるか、これを說明するに先つて、まづ此の村山翁をして非常手段を斷行せしむるの動機を與へた大毎の編輯員異動の顚末をこゝに少しく記すのが順序である、而も此の事實は兩社に於てせられた最近最新の事實である

◎で、こゝに聊か大毎編輯局の組織を記す事とする、大毎の編輯局は政治部、內國通信部、外國通信部、經濟部、社會部、東西聯絡部、電信部、文藝部、附錄係、校正係の十部に區分されてゐるが、主幹は無論いづれにも屬してゐず、總體を統轄してゐる、卽ち、主幹渡邊巳之次郎を別にして、文藝部長は副主幹菊池幽芳、此人は大阪では大朝の渡邊霞亭と相對して隨分名高い人であるが、二三年前佛蘭西から歸つて來てから、頓に勢力を失墜して、今では文藝部長の閑職に居り、手も足も出ないやうな風である、曾

て陸朝早々、自分から望んで社會部長の地位に座つたので、同社では同氏が以前の功勞を思つて、其の云ひなり次第に、當時の社會部長であつた角田浩々歌客を、同社の分身たる東京日々新聞の文藝部長に追ひやつて、菊地を大阪本社の社會部長にしたが、無暗と佛蘭西にかぶれて社會部の紙面をメチャ〱にしたといふので、社内では、非常に不評判であつたところから、本山社長も堪り切れず、仕やう事なしに當時通信部長であつた奥村不染(月俸百八十圓)を社會部長にして、菊地を今の文藝部に追ひこめて樂隱居を仰せつけてしまつたのである

◎大體文藝部といふものは、何處の社でも閑職中の閑職で、菊池には部下の薄田泣菫(月俸六十五圓)を相手にして日曜附錄などを編輯してゐるが最早や大毎ではトテも有邃が揚りさうもないといふ評判である、薄田は人も知る詩人であつたが、近來はすつかりお宗旨を替へたと見えて、唯だ神妙に大毎の爲めに働いて居るばかりだ、何しろ大毎の文藝部はあまり意氣の擧つてゐない事は云ふまでもない

◎社會部長の奥村不染は非常な器用な人で、說に據ると大毎の張子房だといふ事である、同社で催す計畫は悉く此人の方寸から出てくるさうで兎に角大毎に取つては連城の璧とも替へ難いやうに重寶がられて居る、而も社會部長としては、大毎歷代の同部長中最も傑出したもので、大朝の社會課長渡邊霞亭(月俸百六十圓)などは大阪の小說家としてならば、今後二三年の生命はあるか何うか知らぬが、社會部長としてはトテも奥村の新奮な遣口には企及すべくもない、社會部長としての村からいふと奥村ほどの人物は無論大阪の新聞界には絶無である、勿論大朝にしたところが、渡邊を以て社會課長の適任者とは認めてゐなかつたのはいふまでもなく、その副課長として、木崎好尙(月俸百三十圓)を置いた、木崎は先年の總選擧に、同社の府市課長石橋爲之助(月俸百五十圓)と共に代議士候補者として打つて出で、石橋は首尾克く當選したが、木崎はマンマと落選した、其後木崎は演說が好きになつたとかで、何事かあると方々へ演說使ひに出廻つてあるく、此の人は一見温厚の君子のやうだが、なか〱意地の强い理智の勝つた人物らしい、唯だ困つた事には社内の人氣が非常に惡くて受けがよくないさうである、社會部の事などは無論小說家の渡邊などにはよく分らう筈がないので、木崎が引つ構へて萬事之に當つて來たのであるが此人の嗜好が餘りに骨董趣味に傾むいてゐるせいかして何うも成績が宜くないといふ内評があつた

◎木崎は文章家で、雄辯家(?)である、彼れは大阪に於る古文學の研究家であつて、竹山や履軒の事蹟殊に賴山陽は彼れの一手販賣と云つても宜しい、彼れには「賴山陽」や「家庭の賴山陽」などいふ著書があつて、先づ關西では木崎好尙の名を知らぬ者は殆んどない、大阪朝日でエラい人物は西村天囚と鳥居素川、それから渡邊霞亭と彼れとであると心得てゐるものが少くない、而も渡邊の缺陷を補ふ社會部副課長としては決して成功して居ないのは事實である、この點から見ると大毎の奥村の下にゐる社會部副部長齋藤渓舟(月俸百十圓)の方が社會部記者として適材である

◎渓舟は甞て小說家で俳人で、不思議に多藝多能な人物である、

彼れは元東京報知新聞かの出身で最初小説家で賣出し人も亦た小説家だと思つてゐたが、當人は小説家にならずに新聞記者になつて俳諧の研究などを始め「俳諧二百年史」などいふ著書を出してゐる、此男は奥村不染とはいゝ相棒で、張子房不染をして大毎の社會部では後顧の憂なからしめて居る、斯う云ふ譯で大毎の社會部の主脳部は大朝よりは遙かに融通が利く、渡邊霞亭、木崎好尚の名は、關西に於て奥村不染、齋藤渓舟の上に出でるかも知れないが、新聞記者としては無論渡邊や木崎は奥村や齋藤には敵し得ない、けれども大朝の社會課には久保田小塊（月俸八十圓）田井半公（月俸七十圓）大江素天（月俸七十五圓）など多少社會部記者として名を馳せた人物が雲霞の如くに集つてゐるに引替へて大毎にはそれがない、田井半公は中でも社會部記者としては最も適任者であつて、相當な才筆でもあり機敏な人物であるが、何分すつかり大阪化してしまつてゐる、若し田井が今少し奮勵努力したならば、東朝の松崎天民と双び見るべき社會部記者たる事を得るであつたらうに惜しいものである、併し大朝の社會課記者は現在の處田井と大江が花形役者であつて、久保田などはもう骨董的になつてゐる、この久保田の父（亡）は即ち久保田蓬庵といつて、大阪で有名な芦邊踊（あしべをどり）の作歌者でそして有名な歌人であつた

◎要するに大毎の社會部は、名より、實質に於て比較的活動の出來る記者を有し、大朝は實質より、名のある記者が多い、これは社會部のみではない兩社を通じて總體から見てもその通りだ、大朝の記者には記者として有名な人が多いが、實際新聞記者として働く上に於て、大毎の無名の記者は決して大朝の記者に劣つて居ない、我聲の如きも、大毎の社會部では張子房不染と清新優婉な文章を書く渓舟の外に多く知る所はない、唯だ纔かに社會部に屬して居る附録係に小笠原白也（月俸五十圓）井上不二郎（月俸六十圓）といふ二人の専任者がある事と田中某（月俸六十五圓）といふ芝居係が居るといふ事より、外には分らぬ、小笠原白也は曾て大毎の懸賞小説「嫁が淵」を書いて菊池幽芳に採用された人であるさうな、之に引替へて大朝の社會部には右の外江上朝霞（月俸七十五圓）が居る、大森痴雪（月俸七十圓）が居る、岡田翠雨（月俸八十圓）が居る、皆な相當に名を知られて居る者のみてある

◎又而も、今度の大朝の編輯局大異動は、其の發端が社會部の改造に始まつて居る、これは追々と記す

## 六

◎大毎の通信部長高石眞五郎（月俸二百圓）は、年少氣鋭の記者であつて

本山社長の愛護最も深き一人である、兎に角同人は未來の大毎社主幹を以て自から任じ、他もまた之をゆるして居るらしい、或人の評によると大毎紙が常に紙面に新らしい色彩を失はぬのは、此の高石と奥村のあるが爲めであると云つたが 或ひはさうかも知れぬ、唯だ高石はなほ年歯少壯である丈けに擧動に一種の少才子めいたところがあつて、頗る貫目に乏しい感はあるが。其の才氣に至つては蓋し大毎社の第一人である、副部長の岡田某(月俸七十圓)は、電信部長を兼ねて居り、元の電信係長であつた内村鑑之(月俸七十五圓)は校正係長に轉じた、聯絡部長鮫島[illegible]馬(月俸百三十圓)は此程東京日々に轉じたとかで今は空位、經濟部長高木利太(年俸四千圓)の下に副部長をしてゐる佐藤密蔵(月俸百三十圓)といふ人は彼の佐藤紅緑の實兄で、至極恬淡な人だ、肝腎の高木が一向經濟の方に不通であるに係らず、殆んど一人で經濟部を脊負つて立つて居るのみか、主幹渡邊の代理をして政治ござれ、經濟ござれ、社説も書けば記事の材料も集めてくる、勿論その部下には齋藤碁石衛門(月俸七十圓)岩藤勇次郎(月俸七十圓)といふ二人の左右の腕があつて、何の方面にもよく活動するといふ事である、併し大毎の經濟部は大朝のそれに比して何らも見劣りがするといふのは一般の評である、政治部長宮野義太郎(月俸百七十圓)は餘り世間に知られぬ人だが、實際大毎社の元老で、而も實際に役立つ仕事をしてゐるが、これも副部長(?)の岡崎鴻吉(月俸七十五圓)の補助が宜しきを得てゐるといふ評である、岡崎は非常に達筆な人で、同紙の「硯滴」は此人の擔任だ、けれども大朝の「天聲人語」に比しては尚ほ洒脱を缺いてゐるやうである、此他政治部には桑原磊堂(月俸六十圓)小川市太郎(月俸七十五圓)島崎新太郎(月俸六十圓)原桂堂(月俸七十圓)などいふ記者がゐる、原桂堂は器用な人物で、硬軟共に得意と稱せられ、曾て同社の社會部副部長から京都の支局長になつた春秋蕉城(月俸百三十圓)と共に、支局長の候補者を以て目せられたが、當時病を以て選に當らなかつた、蓋し桂堂は今少しく自から努力すれば決して何時までも池中のものではないのであつたが、才子多病で尚は雌伏を免れぬのは氣の毒である、此他通信部の山川美弘、橋詰蟬郎、皆同社での活動分子である

◎ところが此の天下泰平であつた大毎社に、今回俄然として編輯員の異動を宣せられた、即ちそれは京都支局長春秋蕉城を本社編輯局に呼び戻さゞる可らざる事情を生じたからである、春秋は稍や永く京都支局長の椅子に居り、既に多く京都の事情にも通じて決して支局長として不適任な譯でないのだが、これを俄かに本社に歸還せしむる事となつたのは、そこに何等かの事情を生じて來たものであらう、大毎今回の編輯局の移動は實に、春秋を本社に歸還せしむるによつて生じて來たのだ

◎ところが大毎では、春秋に代らしむべき人物の人選に困つたのである そこで差當り政治部の岡崎を以て支局長見習として轉任を命じたのである、岡崎は遠からず政治部副部長に擬せられてゐたのだが、同人のためには幸か不幸か今度城戸元亮(獨逸に留學中)が伯林から歸社して、其の副部長の椅子に座るといふ内議があるので、一にそれらの理由から京都支

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

局長見習に轉ぜしめられた次第である、けれども岡崎に果してそれが旨くゆくか何うかは春秋でなくとも保證の限りではないのだ

◎而もこの支局長見習といふのは、公けに發表されたものではなくて、大毎社の幹部がその積りなのだらうといふ位ゐにとゞまつてゐるので、いつ支局長が別に任命されるかも不明なのである、そこで春秋は本社に歸還するのは、表面榮轉といふべきで内國通信部長を任命され、これまで内外通信部長であつた高石眞五郎が外國通信部長專務になり、社會部の奥村は内國通信部顧問といふ役廻りを仰せつかつた、併し一説によると同社は今後支局長に高給者を置かず、神戸支局長の竹中清（月俸百四十圓）を追つゝけ聯絡部長として本社に歸社せしめ、あと釜には、大朝が曩に其の神戸支局長に名古屋通信部主任を榮轉せしめた例に倣ひ、大毎名古屋通信局主任鈴木茱（月俸九十圓）を轉任し、名古屋には政治部の原又は經濟部の岩藤を轉ずるだらうとの事である

◎大朝の村山翁は、この大毎の社員移動の模様を見て今回また敢然として大朝編輯局に大變更を斷行した、それは「額の男？」長谷川如是閑（月俸百三十圓）と岡野告天子（月俸百四十圓）が同社社會課が大毎の社會部にして、如何にも見劣りがするといふので、其の改造を村山社長に迫つたのである、村山社長はこれを好機會に、年來手こずつて居た同社編輯局の二大暗流を沮止するの目的を以て、寧ろ社會部を改造するにとゞめるよりも、編輯局各部に大改革を行ふ事にしたので、長谷川岡野の二人は、編輯局にかゝる大波瀾を生ぜしめるに至つたのは我々に責任あるものだと、直ちに社長の手許まで辭表を呈出したが村山はこれを許さない、つひ此程左の如く任免を行つた

◎即ち編輯總務の西村天囚は總務の名稱が沒になると同時に編輯顧問に、主幹鳥居素川は主幹を免じて顧問に、土屋大夢（月俸百五十圓）の經濟課長、石橋爲之助（月俸百三十圓）の府市課長いづれも役義を免じて顧問といふ名を附せられて元老株に入り、新たに岡野が整理課長、長谷川が社會課長、整理課員藤澤穆（月俸百十圓）が府市課長、通信課員高原蟠堂（月俸百二十圓）が通信課長、外交副課長稻原勝治（月俸百圓）が外交課長、經濟課副課長、岡部重一郎（月俸百二十圓）が經濟課長に任命された、要するに老年記者が引つこめられて少壯記者が登用された譯である

新たに經濟課長に轉じた岡部は才子肌の方て、國民

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

新聞の經濟部から大朝に轉じて來た人物である、同社には尙ほ淺い新參者であるが、村山翁の眷顧が深く、今同課長の椅子に座る事となつたものである、又た社會課長であつた渡邊は、小說課長といふ新課長に轉じ、副課長の木崎は暫らく遊學として無役、追つゝけ元の圖書係長になるだらうとの事である

◎外交課長の稻原勝次は頗る有爲な記者であつて、亦た大朝のためには重んずべき人物である、兎に角今回の新任命中て、此の稻原と長谷川と岡部は、將來新らしい方面に進むべき人達て、岡野もまた有望な一人といふ事を得る、斯うしてずつと見渡したところては、大朝のこの新進氣銳な幹部は、決して大毎に劣るやうな事はないばかりか、餘程優勢であるといふ事を得るが、果してそれが何ういふ狀態を現ずるかは今後に徵しなくては分らない

◎然るに玆に大朝の編輯局に於て、なほ內證〻紛擾が絕えないといふのは外てもない、今度の大改革によつて一擧に隱居役に葬り去られた西村、鳥居、土屋、石橋、木崎其他の元老連が、如何に社長の命とは云ひながら、今まて立派に大朝の大身代を經營して來た我々を、一擧に押片つけて若輩どもに天下を委せてしまふといふのは沒道義も甚しきものてある、我々は何うあつても此まゝ閉口して豫備に編入せらるべき筈はないと頑張つて昨今尙ほ改革の餘波が收つて居ない

◎けれども社命て決つたものはもう爲方がないのてある、今後大朝と大毎は何ういふ風に競爭してゆくか、それがまた觀ものだらうと思ふ　（完）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

# 結婚のロマンス

柔かな手の政治家‖桂公と加奈子夫人‖中年の戀‖井上侯證文を大隈伯に差入れて新田氏を娶る‖原敬君の先夫人と後妻と‖小說の樣な事實‖比志島中將と雪子夫人‖伊東巳代治子とおみよの滑稽劇‖上村大將下宿の娘と婚す‖閨閥の果報者‖後藤新平男と仕立屋の娘‖加藤外相許嫁を避て三菱の女婿となる‖一篇の抒情詩‖伊集院提督の再婚奇譚‖佐々木博士と雪子夫人の熱愛

月下老翁

場所、某カフエーの午後

人物、G君（少壯政治家）
T君（人物評論家）
H君（詩人）
記者（影の人）

□柔かな手の政治家

『尾崎君は、愈よ法相に就任したね。テオドラ夫人の喜悅の聲が、其の邊て聽えるやうだ。』

音樂のないカフエーの二階から不忍池の夕景を眺めて居た人物評論家のT君は、記者と少壯政治家のG君に向き直つて、斯う云つた。

『さう、テオドラ夫人と云へば、中央公論の四月號に載つて居た「輕井澤からの小包」が思ひ出される。全く尾崎君の早業は、內閣割込み許りぢやない。なかなか隅に置けない人物なんだ。』

と、號外から眼を放したG君は、意味ありげな微笑を湛へた。

『あれは珍種(ちんだね)だ、「彼は如何にして彼女を娶りしか」の中での傑作だよ。』と、G君は記者を見詰めたが、何か不圖思ひ付いたやうに、『緣は妙なものさ』

と投げ出すやうに云つた。

『こりや、面白くなつて來た。內閣の人物評かと思つ

たち、結婚のロマンスなんだね。緣につながる緣かいなて、お互に惚れ箱でも引つ繰り返すことにしようかな。』

　とG君は神經的に眉根を動かす。さうして記者に同意を求めるやうに、眼鏡越に覗き込んだ。

『僕はそんな材料は持つて居ないんです。色彩の豐富な世界に遊んで見やうと思ふが、まだ其處まで實行的の氣分になれないんです。』

　記者は、何が何やら分らぬ事を喋舌つて了つた。が、T君は夫れには耳を傾けずに、皮肉な笑を浮べて自分て自分を嘲ける樣な態度で、

『實際あの時は妙だつた。――某家の宴遊會に、微醉のせゐてもあつたらうが宵の春の放縱な氣分になつて、廊下て邂逅した令妹の手と觸れた手を强く握られた瞬間、幻の美しさに捲かれて唇を吸うて居た……。』

『夫れは醉の戲れだらう。』

　とG君はまぜつ返す。

『處が、然うてないんだ。彼女の心に抱きすくめられたと云ふのか、何う藻搔いても彼女から遁れることが出來ない。是れまで樣々の女も見たが、斯樣に囚はれを感じた事は一二度より外無かつた。中年の戀とでも云はうか、矢張そんな事もあつた。まあ運命の力と云はうか、全く緣は妙なもんだね。』

『夫れから。』

　とG君は促したが、對手は惱ましげな眼に、純白なエプロンの少女を見た。軈て卓を敲いて、ウヰスキイを命じた。昂奮した感情を鎭めようと、沈默の唇を薄い冷たいグラスの緣に觸れた。さうして輕い氣分の面をあげて、少壯政治家の英國風に刈り込んだ鼻下の芝生に目を移した。

『G君は、さうしたロマンスに富んて居るだらう。政治家の柔かな手は黨人のみならず、多くの若い女を殺すからねえ。』

『なるほど、柔かな手――。桂公なども夫れてしたね。加奈子夫人までには、艶生涯の幾十頁かを繰らねばならんのですな。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

と、T君の話に問題の端緒(いとくち)を發見した記者は、一歩々々面白い方面に導いて、夫れから夫れと隱れたる材料を得ようと云ふ好奇心を起した。

『さう、桂はあの人形の手のやうな柔かな手の強い握手と、燃えるやうな接吻とて、澤山の政治家を殺したよ。精力も根氣も强かつたに相違ないが、何處かに人を囚へて放たない魅力があつたんだね。惚れる女ばかりも無かつたらうが、兎に角伊藤などよりも、顏の綺麗な。若い女を得たやうだ。女房運が薄いと云へば云へない事もないが、最後に若い、仇つぽい奴を得た所を見ると、餘り運の薄い方てはなかつたね。』

『さあ、何うかな。』

G君は言葉を挿んだ。灰皿にアルマの白い灰を落しながら、

『彼奴のは、まづ體の可い分捕だね。心から、女の心に接吻する氣分にはなれない男だよ、餘り怜悧だから。』

と、政敵を擊つやうな態度て言ひ放つた。

## 中年の戀

『井上侯は、何うでせう。』

記者は、すかさず話頭を轉した。G君はニヤリと笑つて、人物評論家の、醉に染めれた夕陽(ゆふひ)のやうな頰を見たが、政府委員の揚足を取るやうな口振て、

『ちよいと話せるねえ、所謂王事に奔走した際は、靑樓を家とするやうな有樣だつたから、吳の女も買へば越の女とも親しんだものだ。山縣公は、石川良平の娘に惚れて大騷ぎをやつたが、井上侯は其の時分には本當の戀を知らなかつたやうだ。勿論しみ〴〵と戀を味ふ餘裕も無かつたらうが、あゝ云ふ無風流な男だから戀の對照を見出し得なかつたのだね。唯色を漁つて、酒を呷つて、悲歌慷慨して居たのだね。夫れが後年に至つて戀を知つたから面白いてはないか。あんな親爺てゝ惚れた事があるかと思ふと、可笑しくて溜らないよ。T君、どうだ一つ井上侯中年の戀の一齣を酒の肴にしやうか。』

『夫れは面白い。あの癇癖侯が、大法螺伯に證文を差

入れて、喝を貰つたなぞは振つてゐるさ。近代人なんかは、迚も眞似は出來んよ。』

とT君は短評を加へる。G君は忙しく煙草を吸うて、灰を卓の上に落す。

『恰度井上侯が大藏大丞であつた時分、一日大隈伯を訪問し、座談に時を移して歸らうとする折柄、ふと目に映じたのが、噂に聞いた美人だ。唯其のちらりと見ただけて、性來覺えのない深い印象を受取つたと思ひ給へ。流石の剛膽者も、夢現に惱まされて、胸が火のやうに燃える。二三日思案に暮れて居たが、遂に決心して再び伯の門を叩き、美人の姓氏來歷を尋ねると、淸和源氏の後裔新田の娘と云ふことがわかる。一度は中井弘に緣付いたが、故あつて別れたと云ふ事までわかる。斯う何も蚊も分つて見ると、矢も盾も溜らない。「何うか拙者の妻に貰ひ受けたい、是非とりもちが願ひたい」と手を合せた。が、伯は却々承知しない。「全體君はこれ迄に幾人妻を取換へたか」と手痛い反問を酬いた。之には侯も當惑したが、一度言し出したからには後には引かぬと云ふ性分、到頭伯を說き伏せ、「今後は決して左樣な不心得は致さぬ、一旦妻とした以上は終世苦樂を共にする」と云ふ條件付の一札を入れて、纔かに戀の勝利を得た。確か其の時の正式の媒酌人は金井之恭と聞いてゐる。』

『一說には、中井と共に伯の厄介になつて居た時だとも云ふが、妻女讓渡は餘りに芝居になり過ぎて情趣を失ふから、其の邊にとどめた方が面白い。』

T君は斯う云つて笑つた。さうして、G君の話を受取つて、又言葉を續ける。

『原敬君の先夫人は、此の中井夫婦の間に生れた女だが、井上侯の世話になつて成人した。つまり原君は井上侯を舅父としたので、或時期までは人並以上の出世をした。其の後は自力發展の出來る所から、夫人のヒステリーを口實に、斷然離緣して了つたと云ふ譯さ。』

『隨分冷酷だね。』

と、記者は感情の聲を挿んだ。

『そりやあ、原君の手の冷たさつたらないよ。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

「うむ。」

とG君は反身になつて煙を吹かす。煙は夫人の嫉妬と、家庭のいさくさを思はせるやうに惑亂し、搖曳した。

「今の細君だつて、まだ籍に入れてないさうだ。何時捨てられるか知れたものでない。盛岡邊の評判に據ると、美人で、お世辭がうまいさうだね。君は、會つたことがあるか。」

「いや、見たことがない。」

と記者は、美人烏瞥見記でも書く氣分になる。

「さう安價には見せまいよ、之が原の總魂打ち込んだ女なさうだ。素は黒澤尻の蕎麥屋の酌婦だつたが、築地の花屋の女中となつてから、素晴しい評判者となつた。白頭內相屢々駕を枉げる間に、同縣の好みで手を握り會ふ所か、進行係を要する迄もなく緊急動議が成立して了つた。が、茲に憐れを止めたのは先夫人で、此の女が本邸に入ると同時に離縁となり、病身の淋しい生活を送つて居るさうだ。全體原君は冷熱の激しい男で、女を捨てる段になると、鼻糞を丸めて指先で彈くよりも輕く取扱ふのだ。そりや全く鼻から拔けるやうな怜悧な男さ。」

「成程な、ははは。」

少壯政治家のG君が笑へば、記者も噴き出し、T君自身も亦失笑せざるを得なかつた。

### □小說の樣な事實

人物評論家のT君は、新しいウヰスキイのグラスに、キウラソオを注いで、夫れに渇いた唇を濕しながら、ちよいと、殘紅の消えて行く窓外の空を眺めた。

「斯うした所で、斯うした話をする我々は幸福ですね。彼の騷々しい蓄音機などを聞いて爛醉するよりも、華やかなる夜の來るを待つてゐると云つた風に、靜かな夕暮の情調の中に、多くの人々の戀に泣いたり笑つたりした跡を思ふのは何より面白いですな。……一體原さんは、處女の純潔など云ふ事は何とも思つてないでせうか。」

記者は、微醉のいくらか感傷的の氣分になつて斯う

訊いた。と、G君は大聲に、

「はッは、ははは。處女の純潔？　原君の頭に、そんな問題は曾て浮んだ事があるまい。竹內壽貞の家に寄食した時代から、主人の月給を拜借して芳原に遊んだ位だもの、君の童貞觀と共鳴を感ずる譯はないさ。彼奴の結婚は政略的か、てなければ享樂的か、何れそんな事て、自分勝手の標準から割出した滅茶苦茶なものに過ぎまい。」

「ぢや、芳原でもだいぶ遊んだのてすか。」

「遊んだ所ぢやない。引手茶屋の西の宮を本陣にして、しみじみと蕩兒哲學を味つたものだ。お芳と云ふ女なんかは、まるて原君に夢中になつて、紅涙を揩つたそうだ。何しろ死ぬ時まて、彼奴の艶書を抱いて居たさうだから、尋常一樣の惚れ方ては無かつたらうよ。あのすらりと背の高い、瀟洒な、怜悧な顏が異性の眼を惹いたものと見える。」

T君は話興に釣り込まれて、

「其の時分の事なら、なるこの女將のおらくなぞが、能く知つてるかも知れぬ。――なに、なるこ？　池の端の待合さ。その女將は、もと西の宮の內藝者なんだ。」

と補ふ。G君は愈よ反身になつて、片肱を椅子に凭せながら、

「當時の書生は、粗暴てあつたが、よく蘭燈の情味を解したものだ。そりや各自に大臣參議になる積りて居たから、隨分豪遊を極め込んだよ。君！　早稻田の坪內博士も、あれてなか〳〵通人て、高田半峰等と根津の遊廓に繰り込んだものさ。今の夫人が、卽ち其の記念なんだ。」

と、記者の胸中を讀むやうに、凝と瞶めた。

「現代の所謂名士夫人中に、情海の出身が可なりあるさ。山本伯の夫人は云ふに及ばず、大倉喜八郎君の細君は確か芳原もので、比志島中將の雪子さんは藝者、金子堅太郎子の夫人は地方出の曖昧者と聞いてゐる。今てこそ彼樣に濟まして居るが、前身を洗つて見れば壁に疵のないものは無いさ。ははは。」

「ても、雪子さんは感心てす。日淸戰爭の際、晴著は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

勿論髪飾から指環まで賣拂つて、一頭の駿馬を求めて、戰地の中將に送つたさうです。」

記者は是れだけ云つて、G君の顏を見あげた。

「成程、新しい山內一豐夫人かね。貧乏な亭主を持つと、良妻の美點が擴大されるものだ。……外に何か奇拔なのがないかと云ふのか、夫れはあるさ。戀物語にだつて、ピンからキリまである。奇拔な所と云へば、伊東巳代治子の初戀などは、先づ振つてるね。」

「奇拔な初戀、標題だけでも面白さうですな。」

「處が、內容は滑稽種なんだ。――明治七八年の頃、伊東は西潟訥の處に厄介になつた。西潟は多年判事を勤めた男で、書生の五人や六人は始終世話をして居た。伊東も即ち其の一人なのだが、才氣があるので、家內中から可愛がられて居た。或日のこと、主人の西潟は用事の爲めに外出し、細君も亦下女を連れて買物に出掛け、殘るは伊東と仲働きのおみよと唯二人だけになつた。處で、魚心のある伊東は、「僕も巳代だが、お前もみよだ。滿更他人でも無さ相だねえ。」笑談を云ふと、おみよは含羞(はにか)んで「同じみよでも殿方は御出世遊ばしませうが、仲働のみよは、一世うだつが上りませんわ。」と溢るゝ口元の愛嬌に水心を見せた。「さうかな、僕は出世が出來るか知ら、おみよさんの眼に然う見えますか。」と氣を引いて見る。若い同士の事とて、問題はどし〳〵進行して了つた。と、間もなく主人が歸つて來て、がらりと玄關の障子を開けたが出迎はない。不審を抱きつゝ奧の方へ行かうとすると出合頭に、伊東とおみよとは出て來たが、其の周章さ加減たらない。伊東はおみよが細君から洗濯を言付かつた下帶を鷲摑みにして居るし、おみよは伊東が主人から出して來いと云はれた二三枚の端書を手に握つて居ると云ふ騷ぎ、西潟は思はず「おい何うした。端書の洗濯や、下帶の投函が出來ると思つとるのかい。」とばかり噴き出したさうだ。」

「ぷッ」

記者も、T君も噴き出さずには居られなかつた。

「伊東は其後兵庫縣の雇となり、遂に伊東公に食ひ下

つて、今日の榮達を見たんだ。が、今の正妻は、此のおみよさんでは無いよ。」

と新しいアルマに火をつけた。さうして、旨さうに吸つてゐる。

「夫れは珍種だねえ。」

T君は斯う云つて、

「上村大將夫人は、下宿の娘なんだ。仲働きを占領するよりは、此の方は分捕甲斐があるやうだ。」

「百戰の名將ですからな。」

と、記者は合槌を打つ。

「いや、まだ實戰の經驗のない、中尉か大尉かの時分だ。最う彼れ是れ三十餘年の昔だ。當時芝の田村町に、小町娘で評判の下宿屋があつた。營業主は井口辨五郎と云ふ親爺で、其の次女のさだ子はなか／＼の美人だつた。上村は品川に軍艦が著く毎に、其の下宿に泊りに行つたものだ。止宿してゐる三田の學生連もだいぶ競爭はしたが、金モールの威勢には及ばず、みんな敗北したと云ふ始末。」

「すると、勝利者は上村將軍ですな。」

「勿論。」

とT君は眼を輝やかした。

### □闇隅の果報者

一頻り階段を踏む騒音が聞えると、四五人の男女の群が電燈の下に現はれた。詩人のH君は、其の群の後から眼敏く我等を覓めて、

「やあ。」

と三人に挨拶する。T君は彼れの薄髯を見ると、クスリと皮肉な笑を浮べた。

「H君！　此の頃親分は何うだね。政界の新局面を開く鍵を握らうと焦躁（あせ）つてるやうだが、おい夫れと注文通りには行くまい。君は多年彼奴（きやつ）の睾丸を握つて居たさうだから、裏面の消息に通じて居るだらう。政局新展の歌を代作するばかりが、能でもあるまい。」

「然う眞向上段に出られては恐縮だ、も少しお手柔かに願ひたいものだが……。一體親分とは？　彼奴とは？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『白を切つちや不可い。親分とは、夫れ後藤新平男さ。君の親分でないとは言はせぬ。』

『さあ、さあ、さあ芝居掛りては御免を蒙る。まあ、ゆつくり飲ませて呉れ給へな。』

と、アブサントのグラスを舉げた。少壯政治家のG君は、話頭を轉じて、

『後藤は、あれでなか／＼話せる男だ。癇癪持て、八つ當りするのが短所だが、細君には頗る柔順なものだ。細君を持つ前には隨分道樂もしたし、豪傑がつても居たが、和子夫人を迎へてからは、遊ぶには其の目を忍ぶやうになつたね。あの細君の立板に水と云ふ主義に逢つちや、流石の後藤も閉口してるよ。』

『半ば當つてるね。併し……。』

とH君は辯護しようしたが、周圍の空氣が變なので、其の儘口を噤んで了ふ。

『後藤男の結婚前に、情婦があつたと云ふのは、事實でせうか。』

記者は突拍子もなく云つて、探りを試みた。H君は、ぢろりと見たが、何とも答へぬ。T君は冷かに、H君を見おろす。

『然う、新平が安場知事に伴れて名古屋に赴き、そこの醫學校で十二圓の月給取となつたが、才物だけに若い女にちやほやされた。夫れから追々陞進して七八十圓の報酬を得たが、其の頃から風流界の情味を覺えた。確か仕立屋の娘と聞いたが、此の娘などは後藤に血の道をあげて、末は夫婦になる積りで居た。新平も始めのうちは蜜のやうな甘い語らひに耽つて居たが、功名にのみ急なる彼れは、安場男が其の愛嬢を配すると云ふ段に進むと、全く現金なもので、仕立屋の娘に一顧を與へなくなつた。斯うして一方は得意の階梯を上つたが、一方は失意の奈落に陷つたさうだ。』

『是れだけの材料があれば、乾度H君の脚色を値するよ。常に失戀の境遇にあつたH君は、男ながらも仕立屋の娘の情緒と共鳴を感ずることが出來よう。』

記者は、H君の醉うて、恍とした眼鏡の底の眼を見た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

「悲劇仕立屋の娘——は、活動寫眞の外題めいて面白くない。」

H君は、斯う云つて「ヘッヘッ」と薄ッペラな笑を鼻頭に浮べた。

「後藤男のよりは、加藤高明男の方は、もつと深刻だよ。」

ウキスキイに唇を濕して、T君は話を續ける。

「加藤は、尾州藩の三樹重文の次男で、六七歳の頃に同藩の加藤勘十郎の養子になつた。加藤家では行く行く高明に配する積りで、彼れと同年輩位の養女を貰つた。彼れの赤門在學中に其の約婚が整うた。筒井筒振分髪の若い同士は、互の幸福に微笑んで居たと想像し給へ、處が此の莟の花を吹き散らすべき悲慘なる運命の魔風が襲來したのだ。夫れは外でもない、加藤は岩崎家の娘を頂戴して、功名の途に踏み入つたからで——」

「して、其の養女は何うなつたのです。」

記者は、其の後を促す。

「高明の結婚の報を聞くと同時に、世の無常を感じたのだね。尼になるとか何とか云つて居たが、どつと許りに重き枕に就くと、夫れなり美しい眼は再び開かなかつたのだ。成功の裏面には、斯樣な悲劇が潜んでゐる。」

と最後に批評を加へた。

「岩崎と加藤との間を取り持つたのは、一體誰れでせう。」

H君は、其の關係が大事だと云ふ顏で、訊き返す。

「夫れは、有名な金時計の一件さ。」

T君は無造作に言ひ放つ、本筋には大した關係がないと云つた風だ。と、H君は、

「あの一件ですか。」

「で、話は少し飛ぶが、英國から歸朝後は彼れの窪んだ眼にも活氣が甦り、新智識の颯爽たる風采が、岩崎の娘の胸に燒き付けられた。彌太郎自身が既に男惚れしたのだから、縁談は忽ちに成立して、加藤は三國一の婿殿に座つたと云ふ譯なんだ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『處が、許嫁の娘は失戀――悲劇――病死――精神はみんな加藤に吸ひ取られて了つたんですな。成功と骸骨、何と悲慘な謎では有りますまいか。』

記者は悵然として、若い女の滅び行く悲哀を思うた。詩人のH君は、思はず聲をあげて叫んだ。

『あゝ彼等は、功名の前に青春を葬つて了つた。』

□一篇の抒情詩

少壯政治家のG君は、キウラソオを飲んだ後の粘こい唇に薫の高い莨を吸うて恍惚として居た。が、H君の甲高な聲を聞くと同時に、物に怯えたやうにパチリと目を開いた。

『H君！　何うかしたのか。』

『いえ、抑へ切れない感情を言葉に發したまでだ。』

其の昂奮は眉間に殘つて居るが、眼の光は落ち著いた。H君の斯く云ふ癖を知つてる者は、驚かないが、G君は餘りに能く夫れを知らなかつた。

『H君！　親愛なるH君に、純潔なる戀物語の一篇を獻じよう。由來H君は愛國詩人だから、君の最も好きさうな、愛と劍とて立つ所の將軍の再婚を追想しよう。』

『え、將軍の再婚？　其の將軍とは誰れです。』

とH君は、性急に促す。

『あ、將軍でなく、提督であつた。今の軍令部長の伊集院五郎君だがね、夫れはしんみりした、涙の滲むやうな事實なんだ。』

G君は飽くまで悠長に構へて、片肱を卓に載せて莨を吹かす。

『事、舊聞に屬するが……。』

『面白い材料なら、新舊は問ひませぬ。どんな事實なんです。』

記者は、語るを惜むやうな、悠長な態度のG君をせき立てる。

『話は斯うだ。――先夫人が不治の病に罹つて、斯の世を去らうとする際に、五郎君は「何か遺言がないか」と云つた。すると、「唯一つ御座います、萬望繁子さんを娶つて下さい。是れが私の今はのお願ひで御座います。」と言葉は短かつたが、其の意味や長く、其の眞情

や美しかつたのだ。五郎君も思はず涙にくれて、死骸に犇と抱きついたさうだ。』

『繁子さんと、五郎君は何か關係でも有つたのですか』

H君は斯う訊いたが、G君は言下に否定し去つて、

『そんな浮いた關係はない。――繁子さんは華族女學校の出身で、才貌雙絶の人だ。一たび良緣があつて嫁いたが、不幸にして死別れをした。先夫人とは親しい間柄であつたから、始終往復して其の悲哀の胸を慰められて居た。伊集院夫妻が如何に再婚を勸めても、獨身の志を飜すことが出來なかつた。處が彼の遺言だらう。其の忘れ形見を保育することは、繁子さんの心友に酬ゆる道であつた。つまり彼女の悲哀の涙の中から、幸福が湧いて來たので、心の花は再び白日の前に甦ることを得たのだ。』

G君の眸までが美しい輝きを持つて、室內の電燈の總てを集めたよりも明るい顏になつた。さうして、旨さうに黃色い酒のグラスを擧げた。

『併し、繁子さんに眞實(ほんとう)の愛があつたんでせうか。』

と記者は疑ひを挿んだ。

『滿更愛が無かつたんでもあるまい、幾ら義理でも厭な男と一緒になる譯は無いからな。』

G君は、美しい幻像を破壞されたやうな驚きを其の態度に表はした。と、T君は記者に向つて、

『もつと詩的なのがある。其の戀愛の主人公は歌人だけに、夫れを結婚の三十一文字に作り上げる迄には、非常な苦心を要したものさ。』

『さらにある月並のぢや、面白くないぜ。』

少壯政治家は、からかひ始めた。

『月並よりは新派だ。眞新派とまではいくまいが、其の時代では天下の耳目を聳動させたものだ。其の主人公は、文學博士佐々木信綱君さ。』

『なるほど、ぢや彼奴の親爺が竹柏會の看板を神田小川町に揭げてる時分だらう。』

『然うだ。信綱君の青春時代で、若やかな血潮の搖ぐとか何とか云つて、歌筆を啣んで居た頃の事だ。親爺の弟子には、橘絲重とか、大塚楠緒とか、藤島雪子とか

云ふ若い女が居たと思ひ給へ。すると、朴訥らしく見えて、お世辭の好い信綱に惚れたのが、神經質らしい、瘦せぎすの雪子さんだ。雪子さんは勸業銀行副總裁をやつた正健君の一人娘て、信綱君は佐々木家の嫡子だから、嫁に呉れることも、婿に貰ふことも出來ないのだ。二人の戀は遠慮なしに進んで行くし、正式結婚を許さうとすれば藤島家の斷絶は免れない。是れには兩家とも、殆んど困つて了つた。が、正健君は佛國て領事を勤めた程の男て、なか／＼捌けた所がある。一人娘の若い生命を絶つに忍びないので、信綱君に娶はすことを許した。而して其の許容の條件として、二人の間に生れた第一の子を男女如何に拘らず、藤島家の嗣とすることを誓はしめたさうだ。』

『果して實行されたかね。』

『藤島逸人――彼れは信綱君の第一子だ。これまで聞けば、君には理解が行くだらう。』

　とT君は、皮肉を以てG君に酬いた。

『處が、信綱君にファルストラバアが有つたんだ。姓は一寸忘れたが、北條邊の女で信子さんとか云つたつけ。今でも房州の噂に殘つてゐる。』

　H君は新發見をしたやうに、ウヰスキイのグラスを置きながら叫んだ。

『夫れは面白い、が避暑か何かの時に相知つた女でせう。』

　と記者が信を置かぬやうな素振を見せた。

『なんでも、其の時代の作に、磯馴松（そなれまつ）としてあるのが、女の異名なさうだ。』

　H君は、新發見の無價値でないことを辯護する。T君は、枝葉は問ふ所に非ずと云つた風て、シャンパンを命じた。

『諸君、如上の問題の諸君の健康を祝さう。』

　少壯政治家は透明な酒のグラスを擧げた。四人のグラスがカチリと合つた刹那、みんなが幸福らしい顏をして微笑んだ。

# 政治劇中の人々

鷺城學人

## 一　大隈內閣の出現

○桃の花の凋落する頃、權兵衛が內閣を投出してから、櫻花將に盛りを過ぎて散るに程もなき四月中旬に、大隈伯が內閣を組織するまで、政海の風濤は決して靜穩でなかつた。風說は風說を生み、風說は人を五里霧中の迷宮(ラビリンス)に驅り、策士は種々の筋書を書く、斯くて一喜一憂紛々擾々昨年の政變よりも事が一層面倒なるかに見えた。

○有らずもがなの元老會議は例に依て開かれた。政黨內閣てなければならぬと絕叫する矢先に、淸浦奎吾子が超然內閣といふ二十年前の古看板を擔ぎ出した。昨年は陸軍が啖呵を切つたが、今年は海軍が居直り强盜を極込んだ。

○淸浦內閣の流產は喜劇にして又た大なる悲劇てある。歷代の內閣中、組織に暇取つて半月以上に及んだのもあるが、明日にも親任式を擧ぐるに決定して流產に終つたのは絕えてない。此記錄(レコード)は彼に依て初めて造られた。淸浦の緞帳劇の後に如何なる芝居が見られるかと、觀物人は片唾を吞んで待つて居ると、大隈といふ老優が時勢粧を凝らして舞臺に上ることになつたので、世間は茲に陽氣になり、淸浦の時に下落した株は大隈の聲を聞て暴騰し、新聞も概して好意を以て迎へた。

○併し評判が惡くないといふのも比較上の話てある。蓋し淸浦內閣は餘りに力を入れて攻擊するのも大人氣ないほど無勢力にして又た滑稽てあつた。棒鱈の後には少々不味い魚ても我慢すると同じ道理、大隈を喜ぶのも畢竟一種の反動て、皆が皆な滿足して居るのてない。

○これにつけても我輩は人物の拂底を切に感ぜざるを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

得ない。花柳界にも一時に尤物の輩出する時代があるが、時に依て跡を絕つことがある。新橋でも柳橋でも其他東西いづれの敎坊にも今日は嬌名一代を壓するの雪兒が居ない。政界もそれと同じて人物の缺乏を告げて居る。人間はゴロ／＼散在しても、帶に短く襷にも短く、眞に此人ならばと國民全般から望みを囑せらるるものは一人もないと言つて好い。或は將來出るかも知らんが差當り困る譯てある。困つても居なければ致方ない。

○元老會議に於て專ら大隈起用を發議したのは井上てある。が、裏面の作者は山縣てある。蓋し清浦內閣流產後彼は進んで發言するを難んずる立場に陷り、松方は腹に思惑があつても口に出せず、大山は何等の定案もなく、恰も三すくみの形てあつた。

○然るに一方政友會は自黨中心の內閣を造らんとし、權兵衞は居据り運動をしさうな形勢が見えたので、山縣は愚圖々々して居られぬと、應急策として大隈を推す氣になつたらしい。處が年來の行懸上、自ら發議する譯に行かぬので井上に說いたものと見える。そこで乳母車に乘り襁褓を用ゐ、小兒に還元した井上が嘗て大隈と板垣を推薦した故伊藤の役割を十五年後の今日に勤めたのである。

○蓋し山縣の腹を解剖すれば、昔の大隈ならば危險てあるが、今日の彼は桂にも寺內にもお世辭をいひ、隨て自分に對する心理狀態もが一變して居る。此際彼を出すのは第一淸浦推薦に對する世間の反感を緩和するのみならず、長閥防禦の道具に使へると考へたのてあるまいか。

○今一つ彼等が決定を急がねばならぬ必要に迫つたのは。皇太后陛下の崩御てある。此大切なる場合に、每日小田原評議をして內閣の目鼻が附かぬとあつては、至尊に對して申譯ないのみならず、差當りいろ／＼支障を生ずる譯てある。

○たとひ何樣の魂膽があるにせよ、大隈には元老が時勢の要求に餘儀なくされて自分に屈服したのだといふ誇(プライド)があるに相違なく、隨て乃公出てずんば蒼生を奈

何せんと謝安氣取りになる道理だ。

## 二　西園寺と原敬

○過ぐる二十日餘りの間、いろ／＼な人間が政治劇の舞臺に出頭沒頭した。首相職に擬せられたものだけても德川・淸浦・大隈の外に西園寺・原・平田・寺內・松方・二條・高島・伊東等殆んど一打に近い。

○そこで更に大隈內閣論に及ぶに先んじ、首相に擬せられた人々や、政局の上に出沒した大小の人物に說及ぶのは、政治劇の內容を知る上に於て必要でもあり、又た興味なきにあらずと思ふ。

○如何に政治の中心力が定まらぬからとて、今更超然內閣でもあるまい。今直ちに英國流の政黨內閣を實現し難いにしても、少くも政黨を基礎とした內閣でなければならぬことは言ふまでもないことである。

○然るに政友會以外の政黨は國民黨なり、同志會なり、中正會なり孰れも小黨分立の有樣で、單獨に天下を取ることは思ひも寄らぬ。たとひ打して一團としても議會に多數を制し得ないから、やはり內閣を組織する實力を缺いて居る。

○政友會の側からいへば原內閣を希望し、原も得べくんば出たい腹が十分にある。併し彼は前內閣と政治上の責任を頒たねばならぬ位置にあるのみならず、少からぬ手瘡を負ひ、甚だしく不人氣であるから、此際出るといふことは餘りに露骨である。

○若し强ゐて原が後繼內閣を組織せば、益々政局を紛糾せしめ、啻に彼の手瘡を一層大にするのみならず、政友會は活きんとして却て死する結果になるかも知れぬ。それ故に暫く政權より離れて傷を癒す方が原の爲めにも又た政友會の爲めにも得策で、彼も斯くするの利なるを自覺したらしい。

○併し西園寺は少しく原と事情が違ふ。彼は原の如く周圍に敵がない。政友會といふ有力なる地盤もある。多少の面倒はあつても比較的安全なる位置に立つことが出來る。

○權兵衞が閣下に骸骨を乞ふに際し、自分に對して比較的好意を有する後繼內閣の出現を欲する意味より、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

又た昨年西園寺の推薦に依て桂公の後に出た關係より、必ず西園寺を推薦するであらうと十人が十人豫想したのは無理もない、が權兵衛は一言も彼に言ひ及ばなんだ。

○近頃政友會も西園寺を思ふことと以前の如くないといふが、若し西園寺內閣が出來れば之れに越したことはない。が肝腎の元老會議に臨むことすら避けた。元老が內意を徵したか徵さぬか知らぬが、假に徵しても駄目に定まつて居る。政友會が黨勢維持の必要より彼の出廬を熱望すればするほど後ずさりをする形である。

○彼は病氣といつても身體の動けぬほどでない。全然政治に意を斷つたかといふに、必ずしもさうと思はれぬ。併し昨年の政變以來、彼の心理狀態は妙になつて居る。言ひ換ふればコジレて居る。

○昔しなら違敕といふことがあつたが、立憲政治の今日左樣なことのあるべき道理もなく、又た西園寺の爲した事柄は違敕の名を下すべき性質のものでない。而も皇室の謀叛人呼はりしたのは反對黨の復讐的毒言である。有體にいへば西園寺其人よりも政友會を困らす目的である。

○彼には言解くべき理窟があつても、此違敕の二字は少からず神經を衝動した。皇室との關係が深いだけそれだけ頭に障つた。

○若し西園寺が大命を拜するを餘儀なくされたとすれば、同志會及び其系統に屬するものは必ず違敕問題を持出して攻擊するに相違ない。出れば之れが爲めに忌な思ひをせねばならぬし、殊に自分の內閣を倒す原因となりし國防といふ危險なる暗礁が未解決のまゝ橫はつて居る以上、尚更起つ氣にならぬ。それと定まれば政友會も諦める外ない。

○我輩は西園寺の人格と識見とを認め、殊に廉潔なる點に於て歷代の首相中其の右に出づるものなしと思ふが、政治家として餘りに澹泊である。尤も執著心の强い餘り、手段を選ばないのも善くないが、西園寺のやうでも困る。

○凡そ政治家たるものは朝に立つと野に下るとを問は

ず、常に國政を念とせねばならぬ。然るに西園寺は總理大臣になれば政治に携はるが。一たび野に下れば俳諧の宗匠化し、政治を忘れるといふ風がある。本人はさる事なしといふかも知れぬが、人にはさう見える。此點は甚だ感服しない。

## 三、寺内・平田・高島・松方・伊東

○政變の起る毎に其一擧一動が世間視目の中心點となり又た批難の標的となるのは山縣公である。昨年もさうであつたが今年も其通りである。前年桂の宮中入りは山縣の敬遠策に出でたといひ、増師案の爲めに西園寺内閣の潰れた時も椿山莊を一味徒黨の策源地の如くいひ、今度淸浦を推薦したのも公の仕業だといひ、其他何につけ彼につけ公を引合に出す。

○其間に多少の寃罪もあるに違ひないが、人物の無邪氣でないだけは事實である。今日磨餅を喰つて居ても精神は却々確かで、智惠の廻はる點は迚も他の元老の及ぶ處でない。

○併し流石の公も寺内を推すことだけは遠慮せずに居られぬと見える。寺内の憎まれ兒であるだけ一しほ可愛さの憎し、可愛いだけそれだけ露骨な眞似を避けることになる。

○寺内は世間で貶すほど惡人でなく、案外の正直者、臆病者であるが、長州に生れたのと昨年來の行懸りとで、廻つて來る筈の椅子が廻つて來ない。今度も寺内を用さうと目論んだもゐもあるらしいが、いくら喉から手が出さうになつても、未だ世間の不評判が免疫にならぬと自覺して居るから、呼聲だけで自ら進んで運動せなんだ。

○然し註文通りの内閣が出來ぬなら、ナマナカのものを出すよりも寺内にやらせるのは時に取つて一興かも知れぬ。我輩は長閥の復活を憂へるよりも、之れに依て長閥の大團圓を告げしむるの意味より寺内内閣を望んだ。又た寺内も出るなら此際で、今後は益々形勢變り、今までの如く元老の指圖を仰がずに濟むかも知れぬから、終に乘出す機會を得ないことになる。

○寺内が長州の正系を代表するに對して、平田は傍系を代表し、幸俱樂部に據て貴族院の官僚系を率ゐて居る。山縣の腹の中には淸浦でなければ平田でもといふ考へがあつたかも知れぬが、彼が出れば世人は長閥復興といふ疑ひを起し、其露骨なる點に於て寺内に異らぬ。

○殊に平田は山本内閣破壞の參謀長である。權兵衞が貴族院に注意を怠つたのは、最初彼に相談した時、樂觀的の言を信じたからで、マンマと彼の策に乘せられたのである。

○斯くの如き結果になつて見れば薩派も平田に快からず、政友會は尙更である。彼ならば貴族院は心配なしに行けるが、衆議院を敵に廻はされねばならぬ。此點に於て或は寺内・淸浦よりも一層困難であるかも知れぬ。

○昨年彼は首相に推されたけれども辭退した。今度も初めより何等の野心もなく、寧ろ山縣なり松方なりの間を往復して助産婆役を勤めたらしい。蓋し彼は第三期の肺病患者で、第一健康が許さぬのみならず、彼の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

多智なる遊んで苦勞の種を播かない。

○其思想といひ遣方といひ、寺内よりも彼の方が山縣に酷似し、本人も第二の山縣を以て任じて居る。桂内閣の時は初めに農商務大臣、後に內務大臣となり、桂も彼の献策を用ゐたが、山縣と桂の間に面白からぬ感情の蟠つたと同時に、彼と桂の間も以前の如く親密でなかつた。

○謹厳家を装ふても彼は淸浦ほど僞善家でない。一木の如く學問はないが大浦の如く無學でない。用心深いから策を行ふにしても尻からバレるやうなことをしない。其代り人間が陽氣でなく、智恵があるだけに陰險に見える。

○高島は長い間埋れて居るが、今でも野心がないかといへば大にあるから、推薦すれば辭退せずに起つかも知れぬ。現に政界の一部には彼に意を傾けて居るものも絶無でない。

○人物が人物だから案外人氣を引立たすかも知れぬが、新時代の政治舞臺に泳ぎ出るには餘りに古過ぎる。尤も古いといふても松方に比すれば血も通ひ頭も働いて居る。

○松方は昨年山縣から勸められて俄に筆を把る氣になり、兒孫の諫止に依て斷念した。今度も初めから呼聲があつたが、殊に淸浦內閣の流產するに及び、彼の蹶起すべきを傳へた。薩派關係のものは彼の出づるを便としたであらう。

○彼は自動車の中に炬燵を入れるといふ齡でありながら、ボロ〳〵私生兒を製造する上に政治の色氣があると見える。今度山縣が人を介して暗に松方の出廬を促したといふのは其起たざるを知つての惡戯か、それとも彼に色氣あるを看取したからであるか。若し周圍のものが引留めなければ煽動に乘り易い彼は二つ返事で內閣組織を引受けるかも知れぬ。

○伊東も今では月給が上つて居る。此男の油の乘つた絶頂は內閣書記官長時代で、それ以來油が減る一方である。三十三年伊藤內閣の農商務大臣となりた以外に廟堂の經驗なく、それも手瘡を負うて中途に罷めた。唯だ昔しの虛名と、子爵といふ肩書だけで首相に推立てるのは如何なものであるか。

○尤も今の樞密顧問官から脈のあるものを選べば巳代治位であらうが、肝腎の彼は意を政界に絶ち盆栽いじりをして居る。若し野心ありとすれば宮內大臣になることであらうが、これも波多野がなつたから駄目である。今度いろ〳〵浮名を傳へられたが、本人は少しも動いた模樣がない。

## 四　二條公と德川

○二條公を擔いて大禮內閣を造る運動をしたのは、世間に傳へる如く果して後藤なるや否や知るを得ぬが、公は案外野心があつたさうである。公は九條家より二條家へ養子に行き、嘗て英國ケンブリッヂ大學に遊び、二十三年貴族院に入るや近衛公及び谷・曾我子等と共に土曜會を組織して硬派といはれ今も尙ほ土曜會幹部の一人である。

○近衛公に比すれば二條公は役者が二三枚下である。近衛は人格といひ識見といひ時流の間に一頭地を抽き、外政上の智識と趣味に加ふるに、貴族主義よりも野武士肌の點があつたから、對外問題に關して國民的運動の起る毎に隠然首領の位置にあつた。纔に四十二歳にして逝き、先月十週年祭を行つたから、生き居れば本年五十二に達し、最も油の乘つた時で、今度あたり大命を拜して居るかも知れぬ。

○二條公を以て劣るとするは近衛公に比べてのこと、而も公卿華族一般の評價からいへば勝つた方で、進歩黨の如きは嘗て公を首領に仰がんとしたことさへある。殊に關白家の出で皇室との關係も密切であるから、御大禮内閣の首班としては相應しからぬでもない。が政務と引離した意味の一時的内閣を造るといふが如きは無意味である。

○二條は金を貯めることばかり考へて困ると、近衛公も常に嘆じて居たが最近の公は貯めるどころの騒ぎでなく、質の惡いものに欺されたり擔がれたりしていろいろな事業に手を出した結果財政紊亂の極に達して居る。若し公が二條内閣を夢みたとすれば、恐く其方の必要から來て居るかも知れぬ。

○徳川公は以上數子者に比すれば、首相候補者として有力なる一人であつた。徳川内閣は今日に始まつた話でなく、兩三年前から唱へられ、殊に政友會は西園寺に代はるべき總裁として意を囑したこともある。

○公は門地の高きのみならず、聰明にして人格高く、平民的の中に己れは宗家の嫡流であるといふ氣分がある。未だ嘗て何人も公の口より政治談を聽かず、隨て政治上の野心はないかも知れぬ。殊に世が世ならば第十六代將軍になるべき人であるから、總理大臣になつたからとて格別名譽とも思はぬだらう。寧ろ貴族院議長の職に忠實なるを以て國家に盡す所以として居る。是れも一見識といへばいへる。

○併し周圍の形勢が公を煩はさねばならぬといふことになり、又たチャンと膳立をして据えたなら、それでもと箸を把らぬほど引込思案の人であるまい。公は何

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

の團體にも籍を置かず、又た團體に依て愛憎あるが如き偏頗心なきを認めるが、強て色をつければ政友會に近いかに思はれる。豫算會議の時、德川賴倫が海軍擴張費について贊成演說を試みたのは公の身代りと看て好い。

○それ故に德川內閣ならばたとひ何樣の形を以てするも政友會に異存なく、他の政黨も清浦內閣に加へたる如き深刻なる攻擊を敢てせなんだてあらう。が公としては義理にも斯くの如き推薦に應ずるを得なんだ。

○山縣は清浦を玉手箱から出すについて公を手品の種に使つたのである。表面奏薦の手續をしながら、裏面では幸俱樂部の配下を使つて公に說かしむるに、德川內閣には貴族院內に少からぬ反對者があるから熟考したら好からうと、御爲ごかしに豫防線を張つたさうてある。

○公が大命を拜辭したのは必ずしも家憲あるが爲めにあらず、又た一門舊臣の不同意の結果にもあらず、公は元老の推薦が誠心誠意にあらざるを直覺して居る處に、斯ういふ惡戯をしたので尙更不快を感ぜずには居られなんだからてあるまいか。

## 五　流產したる清浦

○最初元老會議の銓衡方針は在來の惡慣習に囚はれつゝ、人其物を得るを主眼とせずして、彼等を中心とする狹き範圍の事情に制せられた結果、人もあるべきに清浦の如きを推薦したのである。山縣の仕打の惡いのは勿論のこと、清浦が輔相としての經綸も準備もなくして飛出したのも大それた振舞である。

○大命を拜しても流產すれば履歷を飾る譯でなく、世間から正無謀と已惚れを嘲笑され、一週間餘りの間に少からぬ金も使ひ、今までにない心配苦勞もし、草臥儲けの骨折損に終つたのは、自業自得とはいへ氣の毒な話である。

○超然內閣は清浦自身の發意といふよりも山縣の註文に出て、一說には寺內も其要求者の一人だと傳へる。孰れにせよ此看板で押切る積りであつたから專ら元老と貴族院を後援とし、內閣員も歷々を網羅して大向ふをヤンヤといはせる腹であつたらしい。

○然るに曾我・阪谷・目賀田・黑田を始め意中の人は先方が御免を蒙り、こんな時でなければ大臣になる見込みのない次官上りの第二流第三流を以てするの外なきに至つた。是れが第一の違算である。

○いくら超然內閣でも全然衆議院を無視する譯に行かぬ。若し政黨の援

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

助を仰ぐとすれば同志會よりも政友會に目を着けるのは當然のことである。

○蓋し原は元と同じ官僚仲間だから懇意であるし、昨年文官任用令改正案が樞府の議に上つた時、通過に盡力した關係もあるし、殊に九州派の一部には彼に心を傾けて居るものもあるし、曾て山縣內閣が自由黨と肝膽相照らし、桂公が政友會と情意投合した程に行かずとも、少くも好意の交換を爲し得るであらう。今日直に之れを實現するの難きにせよ、議會開會までには何とかなるだらうと思つたらしい。

○そこで彼は權兵衞を介して秘密に原と會見し援助を乞ふたが、流石の原も體好く斷はつたらしく、又た熊本の代議士を通じて幹部を動かさんと試みたけれども不成功に歸し、斯くて今まで靈犀一點相通ずるかに思ふたのは淸浦の片思ひに過ぎなんだ。

○それよりも一層思惑違ひなるは海軍大臣の入閣交涉である。陸海軍は山縣と松方が肝煮を引受けたからといふので案外樂觀し、多少の困難あるにせよ是程までとは夢にも想はなんだであらう。

○中將加藤友三郎は最初から不人氣なる淸浦內閣に入るの將來の爲めに不利なるを思ふて、態とあんな提議をしたかとも思はれるが、それは人の心術上の問題で、表面には入閣の條件として持出したと見るの外ない。

○加藤の提議は難題の如くして難題でない。其文たると武たるとを問はず、苟くも國務大臣として責任の衝に立たんとする以上、國務に關する自家の意見を披瀝し、意見にして容れられゝば入閣するし、容れられなければ入閣しないし、情實に依て出處進退を爲すべきでない。加藤の此態度は寧ろ立派である。唯だ場合が場合故に背後に或る勢力の潜めるかに疑はれたのである。

○國防問題は何人が內閣を組織しても必然逢着すべき政治上の暗礁で、淸浦も初めから其覺悟を爲すべき筈である。而も加藤と折衝するに及んで俄に狼狽し、恰も豫期せざるもの丶如く感じたのは餘りに迂遠ではないか。

○殊に超然內閣といふ看板其物が既に立憲の本義に悖つて居る以上、今更加藤の責任支出及び臨時議會召集の要求を非立憲呼はりするのは滑稽である。毒喰はば皿までといふこともあるから、非立憲序に何でも遣るが好いてはないか。土俵際に腰を拄いて物笑ひになるよりも此方が男らしい。斯くするもせざるも立憲が非

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

立憲になり、非立憲が立憲になる譯でもあるまいに。

○清浦といふ男は一人に保險を附けない。固より山縣が一番大口であるが、松方にも井上にも大山にも一口づゝ付け、大隈にもお世辭を言つて居る。彼が兎に角此處まで出世したのは諸方に保險を付けた結果と見るべきである。今度も其筆法で誤魔化して行かうとしたが、其手は誰にも彼にも通用するものでない。

### 六　宗像壇の浦將軍

○清浦も馬鹿を見たが、それよりも一層憐むべきは閣員に內定した內務宗像政・外務內田康哉・大藏荒井賢太郎・遞信田健二郎・農商務押川則吉・司法松室致・文部福原鐐二郎等である。是等は胎內の半成兒で闇から闇に葬られた。

○幕僚には林田龜太郎・神山潤次・小橋市太等の肥後人も居たが、宗像は初めより參謀長の位置に立ち自分の官邸を策源地に充て、理想的超然內閣だと大氣焰を吐きつゝ頗る得意であつた。

○是等の顔觸れの中で、半世の閲歴の波瀾ある、人物上の特色あるのは彼である。明治十年熊本人にして西鄕の亂に應じたものは多かつたが、一を池邊吉十郎を首領としたる敵愾隊とし、一は支那革命屋の宮崎滔天の兄宮崎八郎を首領としたる協同隊で、宗像も隊長の一人であつた。

○敵愾隊は多く保守派で佐々友房ら之れに加はつた。此系統のものは後に紫溟會となり更に轉じて今の國權黨となつた。協同隊は宗像を始め有馬源內・高田露・池松豐記・田中賢道等いづれも急進的民權家で、十四年相愛社を起して紫溟會に拮抗した。是れが政友會の前々身である。

○當時自由黨主義の溫和派に屬する山田武甫・嘉悅氏房等は別に立憲自由黨を造つたが、宗像・池松等專ら畫策奔走した結果、十五年公議政黨を組織するに至つた。然るに間もなく九州全體の同主義を打して一團とするの議起り、公議政黨が主人役になつて福岡の玄洋社、立憲帝政黨、柳河の友朋會、鹿兒島の自治社、公友會、三州社、博愛社、長崎の佐賀開進會、唐津先憂社の聯合大會を熊本水前寺に開き、九州改進黨を組織した。

○宗像は自由黨の起るに及んで之れに加はつたが、黨の名稱について星亨一派と喧嘩し、長谷場純孝・武富時敏等と共に脫黨して立憲革新會を造り、其後對外硬の六派相合するに至つて進步黨に入つた。二十七年頃田村姓を稱したのは代議士運動をするについて選擧資格を得る爲め單に戶籍面の養子になつたからである。

○松隈內閣の時、進步黨幹部に於て次官局長にはなれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ないが、田舍の縣知事なら勤まりさうな人間の名簿を造り、之れを內相樺山の手許に廻した。其名簿中に加へられた宗像は入選して埼玉縣知事となり、內閣の末期に青森縣知事に轉じた。

○進步黨が薩派と提携を絕つに及び、尾崎より辭職を勸めると、彼は壇の浦まで行くんだといつて應じなんだ。次の伊藤內閣の時、敎科書事件の嫌疑の爲めに免職になり、牢に入る處を淸浦に救はれ、日露戰爭後高知縣知事になつた。是れも淸浦の盡力らしい。

○彼は久しく獨身生活をして居たが、二度の勤めをする前に淸浦の媒妁で女房を迎へた。此夫人は廣島縣知事時代に死んだ。同鄉の上にこんな關係があるから淸浦と親密であり、又た自由黨の出身であるから政友會にも關係があるといへばあり、官僚派と政黨の間を巧みに泅ぎ、第二西園寺內閣の時、廣島縣知事から熊本縣に轉じたのは國權黨に備ふる爲めだと傳へられ、又た熊本から東京府知事に榮轉したのも原の時代てある。

○進步黨時代に相場に手を出したが、松隈內閣のゴタ〳〵して株が暴落すると、彼は內閣さへ潰れなければ再び株が上るに相違ないと思ひ、薩派を援ける氣になつたのだといふ。こんな單純なる頭であるから無論政治上の經綸はない。

○宗像は何ても彼ても大きい事をして人を驚かすを好み、又た之れを正しい事だと思ふて居る。言ひ換ふれば掏摸や竊盜は惡いが、强盜なら差支ないといふ流儀である。それ故に淸浦內閣の內相になつたとすれば、議會の解散、選擧干涉、壇の浦行を斷行するかも知れぬ。

○故高橋健三は九州人は正邪の觀念に乏しいと、一々名を擧げて言つたのを記憶して居るが、或ひはさうかも知れぬ。然らば宗像は非常な惡黨かといふに、單純だけに人間の質は決して惡くない。

○得意の高潮に達しただけ失望も甚だしく、內務大臣に定まつたものが今更知事として居るのも極り惡いと見え、流產後直ちに辭表を出した。聞けば半年後には

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

恩給年限に達するとやら、斯くては全く虻蜂取らずてある。

## 七　六箇の半成兒

〇清浦内閣の中堅と目せられたのは宗像に亞で内田・荒井・田の三人である。内定閣臣中、今まで大臣の經驗あるは内田と松室の二人で、殊に前者は清浦と同僚である。同郷の關係がある上に、同じく山縣系であるから入閣を肯じたのであらう。

〇西園寺内閣に入るまでは多少嘱望されたが、外政を擔當するに及んで案外なるの知られ、殊に對支政策については自家一定の考へなく事毎に山縣に相談し、他國の政體にまで干渉するが如き間違つた方針を以てした。

〇大藏大臣には阪谷か目賀田を持つて來る計畫であつたらしい。荒井の内定は自ら運動した結果だと傳へるけれども、多分目賀田が推薦したらしい。若槻と同時に大學を出て、大藏省に入つてから共に田尻に引立てられ、最初略〻互角の勢ひで進んだが、中頃から若槻に先を越された形がある。

〇主計局長の時朝鮮總督府の參與官に轉じ、日韓併合後度支部長官に進んだ。此間に若槻の一身にはいろ〳〵變化があつたが、荒井は極めて單調である。同じく大臣になつたけれども、一方は日本一方は朝鮮。

〇荒井は眞面目にして正直であるから、政府委員として議會に臨んでも知らざるは知らずといひ、若槻の如く胡麻化しをやらぬ。夫故に大藏省でも朝鮮でも評判が好かつた。財政經濟は一通り分つても事務家の方で、識見抱負ある財政家でない。次官として申分ないが大臣としては物足らぬ。

〇デンケンといへば獨逸人の名の如く、之れにフホンの三字を冠すれば一層獨逸人らしく聞える。今まで大臣を望んで得ず、之れを得る爲めにいろ〳〵爽藝をしたのはデンケンである。

〇十八年保安條例を發布した時、神奈川縣警部長として政府の爲めに大分働いた。それから遞信省に轉じて書記官より通信局長に進み、三度遞信次官になつたから遞信方面の事情に通じて居る。其間或は郷里丹波より推されて衆議院議員になり、或は關西鐵道會社長になり、二三年前まで九州炭鑛汽船會社長であつた。

〇初期の政友會に黨籍を置き、第一桂内閣の増租案が第十八議會の問題になつた時、潰の家組を造つて自黨に不利なる行動に出た爲め除名され、それ以來官僚系になつた。現に幸倶樂部の一員である。

〇彼は巡査上りであるから總て探偵式の小策を好み、人間の險にして、執念深い點は猫が雀を狙ふやうである。大浦の小なるものと見れば可。

〇嘗て桂と寺内を兩天秤に操りつゝ一方大浦に結び、保險を附けて廻る處は清浦にも似て居る。彼は武井守正・沖守固等と相計つて、男爵議員を官僚系に網羅し、依りて自分の勢力を造らんとした。さる四十二年高利貸を使ひ、貧乏華族を金縛りにして木曜會を破壞したのは大浦と彼の擔當である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

○海軍問題の起つた時、彼は野武士的の辯力を以て貴族院豫算委員會に首相權兵衞と海相齋藤を難詰し、曾我・目賀田と共に政府破壞の急先鋒といつて好い。

○同じ油斷がならぬにしても、平田・仲小路の如く表面謹愼の態度を持すれば好いが、餘りに饒舌に過ぎるから重んぜられず。幸俱樂部のものも陽に相和しつゝ陰に卑んで居る。

○押川は駒場出の農學士で技師上りである。薩人であるから當然山本内閣の何職にか就くべくして就かなんだのは、大浦の配下に屬し隨て長化せるが爲めである。農商務次官になつたのも内務次官になつたのも、桂内閣の時にして、共に大浦の下に於てし、從來淸浦にも惡くない。

○これまで略ゞ同格で進んだ同郷の床次が親任官になつたので、多少口惜しく思うた。然るに今度此方が其上を越して大臣になる筈であつたのに、一場の夢と化したので一層口惜しい譯である。

○松室は淸浦の司法大臣たりし時から宿交がある。殊に平沼騏一郎が檢事總長の職を離れ難い事情ありとすれば彼を採るべき順序である。第三桂内閣の司法大臣としては極めて短命であつたが、檢事總長として大逆事件を擔當し、其他日糖事件に就ても其遣口の峻烈なる人をして戰慄せしめた。

○海軍の薩派は若し松室が平沼と心を一にして海軍の大淸潔法を斷行するが如きあれば一大事だと危惧し、加藤をして駄々を捏ねさせたので、淸浦内閣流產の主因は松室の入閣にあると傳へるものもある。が是れは餘りに穿ち過ぎた議論である。

○福原は大臣といふ柄でないが、人間も一寸風變りだし、局長として將た次官として長く文敎の實務に當つて居るからナマナカの伴食を持つて來るよりも勝つて居る。殊に大岡に比すれば遙に好い。今になつて見れば居心地が惡いから、大隈内閣が成出したら次官を罷めるかも知れぬと思はれたが、一木新文相の懇請によつて其儘留任と決したとも傳へらるる。

## 八　大隈・井上・三浦

○十數年間政治の中心から離れた大隈伯に大命が下らうとは、世人の意外に感ずるのみならず、恐らく本人も夢の如く思ひ、元老も今更伯を推薦せねばならぬ場合に至つたのを不思議に感ずるであらう。

○昨年の山本内閣を以て憲政擁護の副產物とすれば、權兵衞は故桂公に恩がある。大隈内閣も一面に於ては海軍問題の副產物で、此騷ぎがなければたとひ百二十五歲まで生延びてもお鉢の廻るべき筈がない。さすれば一番に權兵衞に感謝狀を出して好く、次に淸浦に禮を言うて好く、更に其源に遡れば獨逸の鐵窟に呻吟しつつあるリヒテルの庇蔭と稱しても好い。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

○大隈内閣の眞價は閣員の顔觸れと政綱の如何に依て定まるべきで、一時の空な人氣と實質とは全然別てある。併し空にせよ人氣の好い惡いは内閣の强味にして又た弱味てある。

○伯はさる四十年以來事實に於て政黨と無關係てある。國民黨員てもなければ同志會員てもない。併し嘗て進歩黨總理たりし歴史的關係より國民黨と萬更垢の他人てもなく、地方には今尚ほ伯を國民黨の人の如く思ふものもある。

○最近に及んて伯と國民黨との間は甚だしく疎遠になり、寧ろ同志會贔屓に傾いた。蓋し加藤高明は一は伯と三菱との舊關係より、一は嘗て外相秘書官たりし舊緣より伯と親密てある。其他大石なり武富なり箕浦なり島田なり孰れも伯の舊子分て、國民黨よりも同志會に相識のものが多いから自然之れに傾き、彼等も國民黨に對する黨略から、伯を同志會の人の如く振舞ふ譯てある。

○中正會は歴史的に伯と緣もユカリもない。唯だ嘗て伯の麾下たりし尾崎が居るのと、尾崎及び大竹貫一等を中心とする灰色の一派が同志會に接近せるに過ぎぬ。

○大隈は乃公一たび起てば此三派を大風呂敷の中に包容して立閣の基礎とすること易々たるべしと信じた。それ故に意見を交換すべく諸元老と會見した時、如何にして内閣を造るかと井上が問ふと、斯く〱の方法に依て三派を聯合せしむるにありと答へたので、元老もそれならばと安心したのである。

○無遠慮なる井上は大隈に對して、他派の感情を害せぬ爲め加藤と豫め相談するを避けよといひ、内閣組織の出來ぬ中に新聞屋にいろ〱な話をせぬが好い、一體君の處には人が來過ぎるよと、ブチマケて言つたさうである。然るに伯は其歸途に蹤跡を晦まして秘密に加藤と萬事の下相談をして居る。

○此場合大隈内閣出現と三浦將軍との關係に少しく言及んて置く必要がある。三浦といふ人は長州の繼兒て惡まれ口を叩き、横紙破りもするが、彌次馬趣味の人

だけに問題が起れば飛出し、一肌脱いで男を見せることもある。

○桂が同志會を造る四年前に政黨組織を勸めたのは將軍である。そんな關係から桂は將軍の名を以て入黨勸誘狀を出さうとしたが、穢多の皮剝ぎの手傳は眞平だと叱り付けた。

○清浦が出た時も將軍は椿山莊に怒鳴り込んだ。山縣が彼の男もそれほど買倒したものでないといふと、將軍は『お前は自分の全盛時代に使つた清浦を見て近頃の清浦を知るまいが、乃公は一から十まで承知して居るから言ふだ』と散々油を絞つたので山縣も弱つたさうである。

○最近同志會の策士は將軍の邸に日參して大隈說得及び同志會と國民黨との連鎖になつて貰いたいと賴んだ。將軍も蒼蠅く思うたが、大隈とは非增租運動策の知合てあるし、國民黨の旋毛曲り仲間とも懇意てあるし、殊に彌次馬好きてあるから、其間に立つて肝煮をしたのてある。

## 九　大隈伯と三派

○併し三派聯合は大隈の己惚れたほど容易く運ばない。第一の問題の國民黨は考へる處があつて入閣を拒絕した。尤も內閣の成立を希望し且之れを援助すとの決議をしたが、是れも解釋に依ていろ〳〵に言へる。體好くいへば好意の中立、打割つていへば反對である。

○國民黨は數こそ四十人なれ、政黨中一番無疵にして信用と人氣を民衆の間に有し、其一擧一動は政界の大勢を左右し得るの實勢力を握つて居る。人氣を愛する大隈にして同志會に深入りした爲め、國民黨との關係を有利有効になし得なんだのは大なる失錯である。

○中正會尾崎の入閣に依て必ずしも纏まるものといへぬ。尾崎は中正會を我物の如く吹聽し、伯もさう信じたかも知れぬが、舊亦樂會中尾崎が自己の入閣を熱望する餘り中正會を踏臺にしたとて立腹し、今まで彼を擔いだ舊政友俱樂部の一部（後藤系）にも反感がある。

○斯くの如く三派聯合は事實に於て成立せず、政界の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

疵物たる同志會が大隈内閣の根據の主體なりとすれば、政友會といふ大敵を向ふに廻はした政府として餘りに薄弱である。

○それは別として大隈擔上げ運動の盛んになつた頃、伯は萬一お鉢が廻つて來れば、加藤男を推薦すると言つて居たが、其實自分にも萬更色氣がないでもなかつた。愈々其事が本物になると同志會一派が極力伯の蹶起を促すと同じ程度に、裏面に於ける反對運動も可なり盛んであつた。

○其時も是等の人々に對し、加藤推薦を口にしつゝ、『然れども』の語を挾み、國家の大事とあれば一身の利害は言ふまでもなく學校の爲めにも代へられぬといひ、八九分まで腹を定めて居たらしい。

○いくら老人でも目の前に美人を見れば萬更惡い氣はしない。況んや女の方から据膳すれば尙更である。殊に伯は据膳の箸を把らぬほど野暮でない。總理大臣になるのは二度目であるが、久しく權力から離れた身には初物のやうな氣もし、初物を喰つて若返りたくもな

る。

○さる四十年進步黨總理を罷める時、政治は余の生命である終身政治を止めないと宣言した。政治を生命とするものが政治の色氣を出したからとて、格別不思議でもなければ非難すべきでもない。

○年齡からいへば松方より少いが、山縣・大山より多く井上と同年で、元老が出馬したと同じである。併し松方の如く自動車に炬燵を入れない。山縣の如く磨餌を喰はない。井上の如く小便の垂流しをしない。

○毎日入代り立換り押懸ける客を煙に卷いて居る。足の自由を缺いても諸方へ演說に出懸ける。人が擔げば何でもござれで引受け、煽動もすれば彌次りもする。時々脫線するが七十七に似合はぬ元氣がある。伯の健康は攝生の力にも因るが大部分氣力で持つて居る。そこで老後の思出に一花咲かせる勇氣を出した譯である。

### 一〇　大隈内閣の實質

○總理大臣になつて自家の抱負を行ふも男子の事業であるが國家に獻替する道は必ずしも廟堂に立つの一事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

に限らぬ。他にいくらも手段がある。伯は本業の政治よりも本業ならぬ教育家として相當に成功して居る。政治家以上の政治家を以て任じて居る伯の身には、總理大臣となるもならぬも格別名譽の上に増減ない。寧ろそんな物にならぬ方が却て値打がある。

○殊に伯は口程に實行力はない。無遠慮にいへば口の上の經綸家である。傾聽すべき意見もあるが隨分出鱈目も多い。伯は飽までも社會的教育家にして批評家である。木戸御免的に言ひたいことを言ひ、早稻田大學といふ好箇の城廓を守り、斯くして晩年を全うするの望ましきに、之れを棄てゝ不得手なる實行政治の土俵に上つたのは老人の力自慢、老人の冷水の形があつて、結局大瘡の元になりはせぬかと憂へる。

○既に時代の要求に促されて奮起した以上、流石なりといはれるだけの内閣を造つて民心を新たにすべきである。而も大隈内閣に對する人氣は組織の出來るまでと、蓋を開けて見れば二度吃驚し、恐らく味方のものも其案外なるに失望したであらう。

○此顔觸れの中で唯一人

○陸海軍以外の顔觸れは同志會四人、中正會一人、貴族院一人の割當てである。外務の加藤、農商務の大浦、大藏の若槻は孰れも第三次桂内閣の大臣であつた。

○新顔の一木は第二次桂内閣の内務次官にして山縣系の色彩最も鮮明なるもの、而して陸軍の岡は長州のチヤキ〳〵て增師運動の有力者である。

○純政黨出身は遞信の武富と司法の尾崎だけで、新内閣の重なる椅子は悉く官僚系の手に渡つた。武富は最初から入閣すると定まつた譯でなく、研究會から官僚系のものを入れる積りであつた處が、交渉が纏まらぬ上に國民黨から入閣御免と肱鐵砲を喰ひ、二つの空位を生じたので、間際に武富を補充することになつたらしい。

○同志會本位なら本位で好いが、それならば何故に思ひ切つて政黨出身者を採らなんだか。嚴格に評すれば同志會本位でなく、大浦の率ゐる舊中央黨本位である。河野・大石・箕浦・島田以下の面々は大骨折つて鷹の餌食の馬鹿を見たのである。

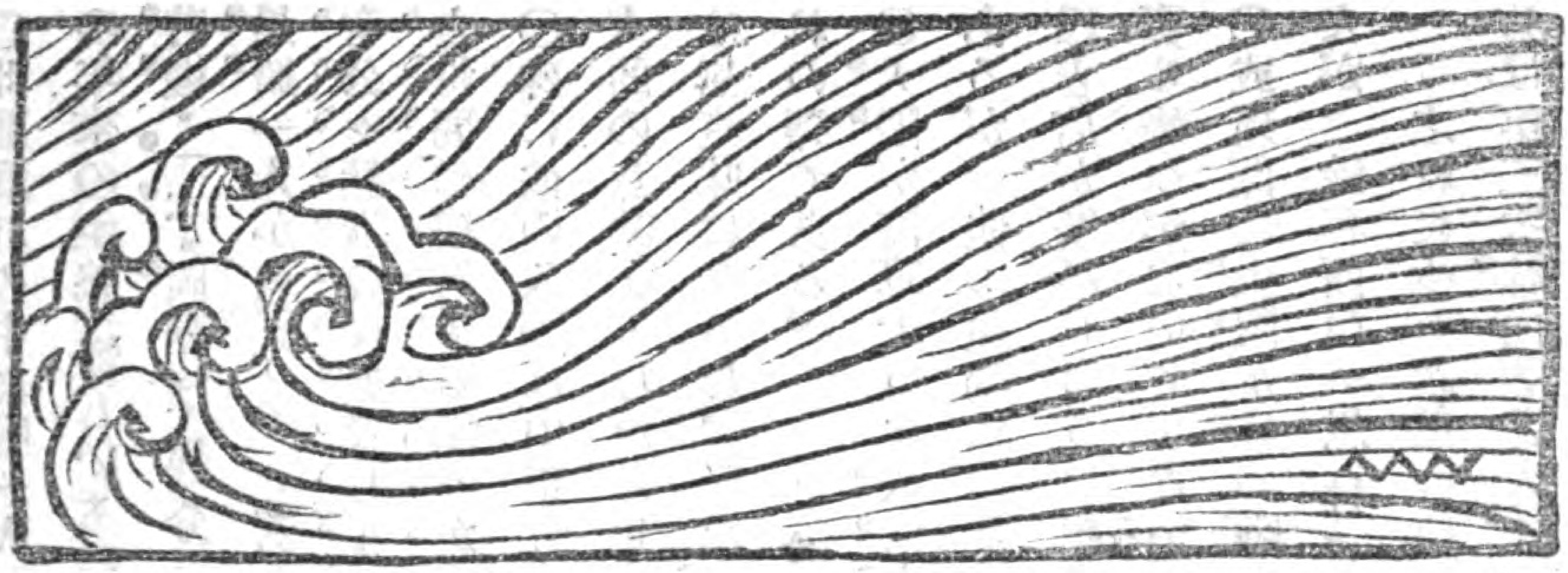
Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

○此顔觸れの中に唯一人尾崎の交れるは變てある。彼の年來の主義(怪しいものだが)からいへば加藤・大浦・若槻・一木・岡等は異分子てあるが、彼等からいへば尾崎一人が異分子てある。彼は陸海軍擴張不必要論を公々然議會に發表しながら、今更此内閣に入つて何と世間に辯解する積りか。

○殊に彼の入閣は中正會の代表者にあらずして單に個人的の意味よりしたとせば、第一大隈が彼を採つたのは無意味になるし、又た尾崎もペテン賣込師の譏を免れぬ譯てある。

○大隈が海軍大臣に八代六郎を生擒つた一事は成功てあるが、他の顔觸れが是れては觸出しの大業てあつたほど店が繁昌しさうに想はれぬ。羊頭を揭げて狗肉を賣る嫌ひがないても無い。

○或新聞に大隈が桂の幽靈と握手して居る漫畵を載せたが、餘程面白い思付てある。桂と大隈の首を取換へ、之れに少し政黨の白粉を塗つたといふだけて、實質は第三次桂内閣と大差なく、山縣の臭がプン〱鼻を突く。是れては民心を新たにしさうになく、特に伯の出馬を煩はしたことが無意味に歸しはせぬか。



# 亡き妻の骨を抱いて

東京朝日新聞記者 天民 松崎市郎

「亡き妻の骨を抱いて」、何時まで返らぬ愚痴ごとを語るのか、最うこんな事を書くのが苦しくなつた。「五丁目五番地」の夕から、「死を待つのみ」の晨となつて、「三人の忘遺兒」に、涙催す夜半を過ぎては、最う何事も云ひたくない、語りたくない。櫻花が咲いて散つた今、「同棲十三年間」の思ひ出は、餘りに苦しく、餘に悲しく、餘に果敢く、餘に痛ましい。出來ることなら、暢達とした氣持になつて、大きな聲で哄笑したい、我と我が生の愚さを、嘲つて見たい、罵つて見たい。「孤獨の悲哀」に泣く弱さから、「孤獨の自由」を誇る强さに入つて、其處に充實した「自我の生活」を發見したい。——

## 外篇 孤獨の悲哀を

哲郎と達郎とが退院すると直ぐ、善福寺て葬儀を營むだ後、遺骨は故郷の美作の山中へ持て歸り、祖先の墓地へ埋葬する豫定であつたが、何も彼も手筈が狂うてしまつた。

去年の夏歸省して、于蘭盆會に墓參をした時には、未だ一人や二人を埋葬するだけの餘地があると思つて居つたが、此の程歸國された堀大人よりの通

知に依ると、最う墓地が手狹になつて居て、新しい石碑を建てる餘地は少しも無いさうな。先祖からの墓地と云つても、木村家と松崎家の共有になつて居るし、それに十四五坪位の廣さしか無いから、お前の骨を埋めるだけの餘地は、或は最う無いのかも知れない。

私が此の事を知つたのは、皇太后陛下の御違例で、社から沼津へ出張を命ぜられた其日であつた。お前の葬儀と埋骨の二つが、殘つた氣懸りな仕事であるのに、子供が二人退院しても、種々な事情で葬儀を營まうとはせず、私は今日まで打過ぎて居たのであつた。お前の死んだ當時は、まだ二人とも病院に居て、お母さんの死んだことなどは、もとより夢にも知らう筈がなかつた。彼の時、直ぐ葬儀を營んでさへ置けば、何も彼も早く運んで、櫻花が咲いて散つた今日まで、思ひ煩はなくても宜かつたものを。なまじ子供等三人に、母の死と云ふ事實を力強く刻み付けると共に、心殘りなく回向をさせたいばかりに、今日まで葬儀を營まなかつたのが、今となつては愚であつた樣にも思はれる。

それにしても、故郷美作落合町は旭川のほとり、本覺寺山の公孫樹下に、お前の骨を埋めることが出來ないのは、何よりの遺憾である。備前岡山で生れ大阪で育ち、大阪で私の妻になつたお前は、遂に其の良人の故郷を知らずに死んだが、出來ることなら私の故郷に、お前の永久の床を置きたかつた。お前にとつては知らぬ他郷に等しい落合町でも、私のためには生れ故郷であり、思ひ出の里であり、墳墓の地である。故郷の人々はお前と逢つた事がなく、お前と語つた事がなく、お前とは終に未知未見の間柄であつても、松崎市郎の妻と云ふ事實は、知らぬ郷人との間にも、淺からぬ因緣を結んで、一種の親し味を生じたに違ひない。都會に放浪すること二十年、半生の過半を他鄕で過して居ても、夢寐にだも忘れ得ぬ美作の山中に、新にお前の墳墓を置いて、より深い親し味と懷しさとを、故鄕の天地に植付けやうと思つたものを、それも今となつては空徒なる希望に歸した。

大阪で生れて、東京で育つて居る三人の子にも、機

會あらば「父の故郷」を見せたいと思つて居た。生れた土地が故郷ならば、子供等のためには、大阪が故郷であり、東京も故郷であるが、都會を故郷とする者に、何うして「故郷の眞趣」が解らうぞ。向三軒兩隣の他には、一町内に住て居ても、路傍の人に等しい都會の生活に、何うして「故郷の情味」があらうぞ。都會は人生苦闘の檜舞臺、これを故郷として眺めるには、餘りに廣漠として據り處がなく、これを故郷として思ひ出に浮かべるには、餘りに荒凉として悲しいではないか。都會を故郷とする者は不幸なり、たゞ私には、山青く水白い美作の山中に、少年の記憶忘れ難い故郷がある。花にも、月にも思ひ出深い、美しい故郷がある。其處へ子供等を連れて行つて、「こゝがお父さんの生れた故郷です、哲ちやんや達ちやんや俊坊の故郷も、この本覺寺山の麓、旭川の畔です」云ひ聞かせるに、無くてならないものは「お母さんのお墓」であるものを。幾千代までもお前と私とを結び付け、お前と子供等を離さぬ所として、唯一つの故郷を選んだものを、其の故郷には墳墓の地があつても、新しい佛様を迎へる餘地は、一つも無い程に繁昌して居るのである。

先祖からの墓地は手狹だけれど、他の共有墓地なら購ひ得られる、是非とも落合町に埋骨したいのなら、共有墓地の一廓を買つても宜い、と堀大人からの手紙にあつた。共有墓地と云ふのは、青山や雜司ヶ谷の狹いので、知らぬ佛様同志が、垣一重を隣り合つて眠つて居る様は、餘り心持が好さ相にも思はれぬ。私のお父さんやお母さんの墓畔には、大きな公孫樹が聳えて、秋になるとそれが如何にも綺麗に見えた。お前の骨も、其の公孫樹下に埋めるのなら、風情があつて宜いけれど、共有墓地を購つてまでも、故郷で埋骨するには及ぶまい。それよりも子供等が墓參に便利な、東京の青山か雜司ヶ谷か、又は骨を納めてある善福寺の墓地へ埋葬する方が、反つて供養するに便宜で宜いとも思つて居る。兎に角、お前の骨を埋めて了はなくては、暢達とした氣持になつて、大きな聲で笑ふことも出來ないし、甘い酒に舌鼓打つ事も出來ない。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

四ヶ月半も學校を休んで居たが、哲郎も逹郎も及第して、毎日壯健で通學して居る。俊坊が幼稚園へ行く様になるのも、近い内の事であらう。たゞ此の上の問題は、私の行末である。お前を失つた私の現在と行末とを、お前は、何んな顔をして眺めて居るであらう。

## 一 夫婦者を呪ふ聲

妻に死別れてから後、僅に百五十日經つか經たない間に、彼の云ふ事や爲る事は、大分變つて來た。細君の生きて居た時分には、好んで惚け話をして居た男が、近頃は世間の夫婦者を見ると、何だか斯う呪はしい様な氣持がしてならない、などゝ云ふ様になつた。

電車の中などで、夫婦者が並んで腰掛けて居る様子を見ると、殊に種々の事を考へるさうな。彼の男があんな女を妻にして、納り返つて居るのが可笑しいとか、彼の女があんな男を亭主にして、滿足らしくして居るのが不憫だとか云つては、能く笑つたり嘲つたりする様になつた。亭主は立派な風をして居るのに、細君は流行遲れの姿をして居たり、女房は寸分の隙も無い扮裝をして居るのに、旦那はみすぼらしい様子をして居たり、そんな事が兎角眼に付いて困るさうな。縦から見ても横から見ても、似合の若夫婦に見えるのが、ツンと澄まして居る様子を見ても、吹き出したい程に可笑しくなつたり、好い夫婦だなと羨ましい氣持になる時もあると云ふ。妻に死別れてからの彼は、餘程、何うかして居るに違ひ無い。

三人の子を遺して、妻に死なれた彼の悲嘆と困難は、昨日も今日も同じであらう。此の後二年、三年、五年、今の儘の生活を續けて行く以上は、彼の悲嘆と困難は、何時まで續くことやら判らぬ。彼は同棲十三年の間、常に細君に苦勞を掛けた、其の報酬が今日の悲嘆であり、今日の困難であるならば、甘んじて泣きもしやう、苦しみもしやうと云つて居る。然し彼はまだ三十七歳の若さである、三人の子はあつても、此の後獨身生活を送り得るか何うか、思ふに彼自身でも、疑問として

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

居るに違ひない。世間の夫婦者を笑つたり、嘲つたりするよりも、自分も第二の妻を娶つて、一身一家の幸福の基礎を定めたら宜かりさうなものであるのに、彼は其の妻の死後、男女の夫婦關係を、呪咀する樣な口吻を漏す男になつた。妻に死別れて、悲しいと云ひ、寂しいと云ふ口で、世間の夫婦者を笑つたり嘲つたりするのは、淺間しい劣け惜みに違ひないが、女房に死なれた男は、必ず一度はさうした氣持になるのかも知れない。妻に死なれても、男たる俺には俺の世界がある、女一人を失つた爲めに、何時までも弱い音を吐くものか、と云ふ樣な一種の强がりが、彼の淋しい心の一隅に萌したのかも知れない。

世間の夫婦者が、妻の生前よりも强く眼に映る樣になつたのは、矢張り孤獨の寂寥に堪えないからであらう。彼自身では、夫婦者の姿が、滑稽に見へたり、悲慘に眺められたりするのは、夫婦その者の關係が、滑稽であり悲慘である爲めだと云つて居るが、決して左樣では無い。彼自身も亦、細君が壯健で居さへすれば、滑稽に見られたり、悲慘に眺められたりする連中の一人であるのに、そんな事は忘れて了つて、今まで獨身生活を辿つて來た男の樣な態度で、夫婦者を眺めて是非し居るのは、如何にも小面の憎い氣持がする。

「世間の奴が、皆、女房に死なれて、俺の樣になると可いなア。女房なんか、要するに餘計なものだ。餘計な子供など生んで、餘計な苦勞を殘して、お先に死てしまうなど、全體、男を馬鹿にして居るよ。俺一人の女房が死ぬる理由はない、世間の奴等の女房も、俺の女房の樣に死ぬと可いに」

彼はこんな事まで云つて、世間の夫婦者を呪ふ樣になつた。心の中では人知れず、死だ妻の思ひ出に泣いて居ながら、妻もまた女である、女が何だ！と云ふ平生の持說が、何時の間にか頭を持上げて來たらしい。此の世界に女が無いならば、如何に淋しく生き甲斐のない事であらう、と云ふかと思ふと、また女を卑しみ果た樣な暴論を吐く。彼はほんとにこの頃、何うかして居るに違ひない、全狂になる樣な、思ひ詰める男で

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

は千萬無いが、氣が焦燥して居ることだけは、何うも事實の様である。

弱い様に見へても、女の力は强い。

## 二　智情意の三つ巴

一家一族に十一人と云ふ腸チブス患者が出來て、彼の妹と彼の妻とが死んだと云ふ事實は、放縦な生活を送つて來た、飄逸頓興な彼にとつては、生涯に復と有るまじき大事件であると共に、また彼の精神生活にも物質生活にも、非常な大打擊であつたらう。

こんな大事件と大打擊とに處して、周章し狼狽しながらも、良人たり父たるの任務を果し得たのは、これを彼一人の力と云ふよりも、主として彼の勤める新聞社と、其の先輩と同僚の高誼に負はねばなるまい。彼は自分自身の無學無能を自覺して居ながらも、十餘年の新聞記者生活に馴れて、相應に慢氣も出て居るし、惰氣、衒氣もこれを否定する事が出來なんだ。身の程知らずの不平でも、附ければ相當の理窟があつて、何を爲るのも物憂く、何を考へるのも馬鹿らしく、遂には自個虐待とは知りながら、度を外して酒を飲む様になつたし、無智な女の群にも出頭沒頭して、一度ならず二度までも健康を損ね、世間體を憚る様な病院窓下て、苦しみ悶掻いたりした事もあつた。

彼に對する信任と同情とが、彼の周圍から遠去り初めたのは、彼の最大愚書「淪落の女」が、書店の店頭に並べられた頃からであつた。種々な事情で、新聞社に於ける彼の仕事が、行詰つた様な觀を呈した時、彼は志望を新聞社に得ずんば、知己を江湖に待つと云つた様な氣持になつて、努めて其の名を雜誌の上に刻み付け様とした。彼の書くものは文學で無く、彼の勞作は藝術で無くても、其の舞臺が好かつた爲めに、彼の作品は相當に讀者の興味を惹いた。彼自身に本根を吐かすれば、何の自覺もなく、何の自信も無い愚な勞作であつても、彼は相應に調子に乘つて、大膽露骨に其の愚作を公にした。他方に於ける不平と不快とを、この方で取返さうとする名譽心ばかりでなく、彼は其の頃

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

から何か雜誌に書いて、原稿料を得なければ、其の生活費の全部を支へる事が出來ないのであつた。

さうして生れたのが、「淪落の女」にも劣らぬ愚書「女八人」であつた。「女八人」の一卷が、新裝して世に出やうとした時、彼の妹睦子の病死となつて、一大災厄は引續いて彼の一家を襲ふたのであつた。單り物質上の打擊ばかりでなく、この一大事件に依つて蒙つた彼の精神的打擊は、時が時なり場合が場合なり、一層激烈沈痛なものがあつたに違ひない。一家族三人、枕を並べて病院窓下に呻吟した時、彼を物質上から救ふたものは、彼の勤める新聞社と、彼の先輩同僚と、彼の少い知己親友達であつたが、彼の苦痛と悲哀とは、遂に何人にも慰められる事なくして、今日に及んで居るらしい。彼は妻を失つた寂寥を、三人の愛子に依つて慰められやうと云つて居るが、それは道德の前に云ふ理性の聲であつて、若い彼の本能は、異性に據らなければ慰められもせず、滿足する事も出來まいと思ふ。亡妻を慕ふ心と、愛子を不憫に思ふ念と、異性を欲する情とが三つ巴をなして、この日頃の彼を苦しめて居るらしい。若い時から新聞配達をしたり、活版の輪轉廻しを遣つたり、人力車夫も遣れば、荷車曳きも遣つて、相應に苦勞の味は知つて居ても、眞の人生の苦痛を味はうのは、今度が最初であるかも知れない。

妻を失つてから後の彼が、何う云ふ風に變るであらうかとは、彼を知る者の異口同音に私語き合つて居る言葉である。あの位の打擊で、性格と一變する様な弱い事では不可い、君は何處までも今までの君で通すべし、と云ふ人があるかと思ふと、君も今度は少し位考へたらう、ほんとに眞面目に考へなくては不可い、最う直ぐ四十の聲がかゝる、と云ふ人もある。極端な個人主義に見へる、自我の强い彼の性格や言動が、糟糠の妻を失つた事に依つて、何う云ふ影響を受けるかは、これを今後の歲月に問ふの他はあるまい。

平凡な世間並の道德家になるか、我儘な度外れの放埒者になるか、彼の前途は謎である。

然り、たゞ一つの？である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

## 三 歡樂を追ふの心

この頃の彼は、死んだ妻の上を思ふのが、最も苦しいと云つて居る。忘れ遺兒の三人の子を見るのも、思ひ出の種となつて、堪らなく悲しいと云つて居る。俺は一人て生れて、一人て育つたのだから、一人て暮すのが運命だなど丶、時々變な事を云つて困らせる。

妻が壯健て居た頃から、彼は社用にかこつけて、夜更けて家に歸ることが多かつた。時には興に乘じて歸るを忘れ、一日も二日も外泊する樣な事があつた。其の度毎に彼の妻は笑つて、「お父さんにも近頃、情婦が出來たのですね、女優ですか、藝妓ですか、娼妓ですか、顏を見て遣りたいわ」と嘲ける事もあれば「一度宅へ連れていらつしやいよ、おすしでも取寄せて御馳走をして遣りますから」と、眞面目顏で云ふ事もあつた。彼はたゞ恐縮して「馬鹿な事を云ふな、そんな者が何處にある」と苦り切るのが例であつた。

彼の妻は、彼が外泊する毎に、三度に一度は、必ず情人の許へ行くものと極めて居たらしい。我が愛する者は、異性にたゞ一人の妻あり、同性に三人の男子あり、此の他に愛する者も無ければ、愛せらるゝ者も無いとは、常に彼が口癖の樣に云つた言葉がある。單り口癖の樣に云つたばかりでなく、全く彼の愛する女も、彼を愛してくれる女も、廣い世間に唯一人の彼の妻があつたのみであつた。酒に醉つて興に乘じた時々、白粉の女の群に戯れて、歸るを忘れる夜半があつても、仇し女に囚はれる彼でも無ければ、仇し女に許す彼でも無かつた。たゞ家に糟糠の妻あり、安んじて勤め、安んじて遊んで居たに過ぎないけれど、度重なれば疑惑の雲を呼て、風となり雨となることも稀ではなかつた。女房妬くほどに持てもせぬ亭主の眞面目を、不幸にして彼の妻は看破し得ずして、死てしまつたらしい。

妻が世に在る頃から、燈火癖のあつた彼は、妻を失つて以來、百ケ日ほどの間は、それでも神妙にして居たが、博覽會の開ける前頃から、また燈火の巷に歡樂を追ふ人になつた。家には三人の子が、親戚の塊君母

子に擁せられて、子供心にも淋しい月日を送つて居るものを。父たる彼は子を愛する情が、人一倍に强いだけに、母無し兒の顔を見るのが、堪え難い悲痛であるらしい。母の無い子供も不憫だけれど、妻を失つた彼も淋しくて遣る瀬が無からう。家へ歸つて子供の顔を見るのも悲しいし、女氣の無い二階に獨り居て、莨の煙を吹くのも寂しからう。彼の足は、夕暮に社の門を出ると、青山の宅の方へ向かはずに、若い女と美味い酒のあるカフエーの方へ吸ひ付けられる樣になつた。妻の生前と死後と、彼の斯うした燈火癖には、何の變化も無いけれど、歡樂を追ふの心に至つては、其處に非常な相違がある樣に見える。妻の生前には、生活の單調を破つて、淡い逸樂を貪らうとしたに過ぎないものが、妻の死後に至つては、無味な生活に濃い色彩を塗らうとする樣になつた。前には要求の一部であつたものが、今では全部の欲求となつて、沒頭するらしい傾向が見へ初めた。

燈火の巷に歡樂を追うて行く彼の姿には、少しも浮いた影がなくて、一歩は一歩よりも陰森に見へる。酒を飲んでも、女に戯れても、慰めらるべき寂寥ではなく、慰らるめべき煩悶ではないのに、彼は何を求めに行くのであらう。若い女の秋波を浴びやうには、餘に額が廣いではないか、美しい女の頬に接吻せんには、餘に唇が乾き過ぎて居るでないか。たとへ其の一顰一笑に、會心の微笑を購ひ得たにしても、それが何の歡樂であり、それが何の生命であらう。戀の月日は彼一人を取殘して、最う遠くの方へ落のびて居るものを。

何も彼も知つて居ながら、暗がりの物思はしさに堪えないで、明るのみの華やかさを追はうとするのが、彼の今日此の頃である。「孤獨の悲哀」を慰め得るものは、たゞ「孤獨の自由」であるものを、慰藉を人間にのみ求めて居る彼の現在は、禍なるかなである。

孤獨の自由、それは大自然の姿である。

## 四　後妻難と繼母難

彼は最う、再び娶らぬと云つて居る。子供が可愛想

だから、半生を獨身で過すのも宜からう。第二の妻を娶つても、幸福が來るか來ないか、それも謂ば一つの冒險である。第一、娶るにしても、來てくれる者が有るか無いか、考へて見れば、それも心許無いであらう。

娶らぬと云つて居ても、惡戯好きな歳月が、何んな辻占をあぶり出すやら、今から餘り口幅つたい事を云はぬ方が宜からう。後妻を娶ると云ふ事が、子供のために良いか惡いか、世間に有觸れた問題でありながら、何時も事新しく繰返されて居るのは、彼の今日の樣な場合てある。死だ女房へ義理立やら、子供への感化影響を主として考へると、無論貰はぬ方が理想的かも知れないが、人事世事は左樣に單純ては無い。第一後妻を娶らねば、何うにも斯うにも遣つて行けないのは、一家の生計向てないか、寂しい「お父さん」てないか。

死だ女房への義理立やら罪亡しやらて、後妻を娶らぬと云ふ程に、彼は古風な思ひ詰めた男てはない。同棲十三年の間、常に苦勞のみ掛けたとは云ふもの丶、一度も質屋の門口をくゞらせた事はないし、借金の申譯をさせた事も無いと云ふてはないか。世帶の苦勞は世話女房が當然の當り役、一年に一度、流行品を買つて與へなかつたと云つても、それが亭主の權威に關る大問題とも思へない。何時までも死だ女房の思ひ出にのみ惱んで、第二の妻を娶ると云ふ事を、何か淺からぬ罪でも犯す樣に思ふのは、世間を知つて居る彼にも似合はない事である。三人の子供があるのも承知なら、彼が新聞記者として、家に何等の恒産も無い事を承知の上で、奮つて後妻たるを甘んずる女があるなら、喜んで娶つたら宜かりさうなものであるに、彼は何うしても、第二の妻を娶らうと得云はない。

彼が三人の忘れ遺兒を擁して、三十七歳の若さを獨身て送らうとするには、もとより種々の事情もあらうし、又それ相應の理由もあらう。其事情の一つは、生さぬ仲の母親に養ひ育てられる子供の行末が、溫順に成育する野中の一本杉の樣に、率直に雄々しく成人し得ないとの、世間普通の杞憂に過ぎなからう。然し、彼が獨身て世を過さうとする主なる理由は、三人の子供

にかこつけての殊勝さからでもなく、「父たる自覺」の上に立つた、道徳的の見地からでも無い。彼は其の一面に於て、死だ女房に苦勞を掛けた十三年間の債務を、第二の妻を娶つてからの後半生に償却することが、何か知ら苦しい様な、濟まない様な、餘計な事の様な氣持がして居るらしい。第二の妻たり母たる女に氣兼氣苦勞して、死だ女房に對したよりも、より眞面目な態度と情愛とを以て同棲するのが、何だか眞實で無い様な氣持もして居るらしい。第二の妻たり母たるべき女の立脚地が、深く同情するに價あることを知つて居ながら、彼は死だ女房にあれだけの苦勞を掛けたのに、第二の妻たるべき女に、苦勞を掛けさせない様に努めるのは、何だか馬鹿らしい様な、餘計な事の様にも思へるのであらう。

生活上の便宜と經濟上の利益からのみ打算して、彼の爲めには第二の妻たり、子等の爲めには第二の母たるべき女を娶るのは、到底彼の堪え忍び得る處ではあるまい。後妻を娶り、繼母を迎へると云ふことが、彼のためにも子等のためにも、幸福ある行末の月日となるにしても、それが何の眞の幸福であらう。父子四人、女氣のない落漠たる家庭に、淋しい味氣ない月日を送るの遣る瀬なさに、物狂はしい心で悶えて居ながら、彼は依然として、第二の妻を娶らぬと云ひ、第二の母たるべき女を迎へぬと言ひ張つて居る。

彼が後妻を娶らぬと云ふには、たとへ種々の事情や理由があるにせよ、聖書の前や佛壇の前には、殊勝な事として合點され、奇特な事として承認されやう。これを詩歌として誦し、これを小説として讀み、これを戯曲として眺めても、其處に多少の意義はあらう。

## 五　醉心地と涙の味

種々の意味に於て、彼は今、一代の危機に立つて居るのだ。日暮れて燈火遠い斷崖絶壁を、足もと危な氣に辿る旅人の姿が、恰も今日此の頃の彼自身である。一歩を踏み迷ふたなら、家庭と云ふ重荷を投げ捨て、しまつて、「自我」の淵瀬に溺れ沈むのみである。

平凡に云へば、三人の子供を主とした家庭の人に爲り得るか、或は自分自身を主とした放浪の人に爲つてしまうか、彼は今、其の危い瀬戸際に立つた一人である。妻を失つたと云ふ事は、廣い世間から見て、新聞の六號雜報にも價せぬ一小事件でも、彼の生涯にとつては、伯爵山本權兵衞氏の内閣が總辭職をしたよりも、もつと强い大事件であつたに違ひ無い。平凡人の一生に見る平凡な一小事件でも、これを「意義ある生活」の一部として眺める時、初めて人生問題の眞諦に觸れやう。妻を失つた彼が、それを運命と觀ずるあきらめの一面に於て、運命そのものに反抗する氣の態度を執つて、悲しみ悶え苦しみ煩つて居るのも、强ち彼一人の愚のみてはあるまい。

妻を失つてより五ヶ月、未だ其の葬儀を營まず、まだ其の遺骨を埋葬らない間に、彼の生活は隨分放縱を極めた。三人の子に對する愛着の念は、世の父たる人に劣らぬほど有つて居ながら、彼は子供の顏を見るのが悲しいと云つては、能く外で夜を更かして歸つた。母を亡つた幼兒の寂しさ不憫さは、人一倍思ひ遣つて居ながら、彼は子供の姿を見るのが苦しいと云つては、能く家を空けることがあつた。母の無い子は淋しくても、俺と云ふ父があつて、縋るには餘りあるものを、俺には妻がない、愛する女が無い、愛せらるゝ女が無いとばかり、彼は種々の理窟を付けて、家に居る夜を空しうすることが多かつた。理性も感情も、三人の子に絡まれて居ながら、彼は其の手桎足梏から免れ樣として、今日まで痴者にも等しい生活を續けて來た。彼自身では、こんな弱い事では不可い、こんな意氣地の無い事では不可い、こんな女々しい事では不可い、と考へて居ながらも、日が暮れて電燈が點く頃になると、彼の足は自然に明るい方へ〳〵と吸ひ込まれて行つた。

明るい電燈や瓦斯が輝いて、强い煙草の煙が濛々と渦卷き、芳烈な酒の香が溺つて居る所、彼は其處を夜の世界、歡樂の家として、好んで出頭沒頭した。そこには紅白粉を着けた若い娘が澤山居て、出入りする多

くの男へ、一樣一概に愛嬌を浴びせ掛け、惜し氣もなく秋波を送つて居る樣が、寂しい彼の心をそゝりもし波立せもした。何を求め何を探ぬると云ふても無いに、一人ぽかんとしてバーの一隅に腰掛け、異る國々の色樣々な强い酒を仰ぐのが、彼にとつては何よりの慰藉であり快樂であつた。壺中の酒味に心醉して、舌鼓打つて興がる程の酒徒てはないが、彼は酒そのものゝ味ひよりも、醉うての後のそゞろ心地と、醉ざめの淋しい氣分とに懷しんで、好んで强烈な酒を呼んだ。眞面目て居るには、餘りに物思ふこと多い今日此頃を、彼はたゞ酒の醉に依つて、忘れ樣として居るらしい。

醉ざめの佗しい心地に、淚催す夜半があるのは、酒を解する人達の身に覺えあることであらう。覺めぬ前の醉心地は、戀知り初めた昔に若やいて、たとへば盛りの春の夕を、そゞろ歩くにも似て居るものを。總ての悶えを酒に遣らうとして飮みながら、彼には樂しい醉心地が無かつた。兎もすれば感傷的の氣持になつて、華やかな空氣の中に浸りながら、ほろ／＼と落淚する樣な事も珍しくなかつた。彼は此の醉心地の淚の味を身にしめて、自分自身の姿を眺めたいばかりに、好んて酒の香漾ふ燈火の巷を彷徨ひ歩くのであつた。

さうした世界に耽溺して、慰め得られる樣な煩悶ならば、彼の全生活を擧げて過ごすも、更に悔る處がなからう。けれども、彼は慰められず、安んぜず、何處かに潜む物足りなさに、何時も焦燥して落着かず、何とは無しにあせつて居るのが、昨日今日の狀態である。「物足りなさ」、それは何てあらう。

## 六　異性を見る態度

笑はう、興じやう、慰められやう、安んじやうとて、好んで賑やかな所や陽氣な世界に沒頭しても、彼は容易に滿足しなかつた。心の奧に潜む一つの物足りなさが、平衡を失つた彼の生活を、益々荒廢させるのみて、何の得る處も無い月日が過ぎ行くのみてあつた。

彼は其の物足りない、佗しい、賴りない心持を、「孤獨の悲哀」だと云つて居る。其の物足りなさを充實さ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

せて、心も身をも擧げて歡樂の寵兒とするには、獨身者の寂しさに泣く現在から脫けて、獨身者の自由を誇り得る將來に向はねばならぬ、とも云つて居る。彼自身では、たゞ醉心地を懷しむとのみて、それと明ら樣には自覺して居ずとも、彼が殆ど每日每夜の樣に、燈火の巷を彷徨ひ步いて居るのは、他に一つの大きな欲求があるからであつた。其の探ね求る者を得ない間は、二年、三年、五年の歲月が經つても、彼は遂に安んずる處なく、慰めらるゝ處なくして、侘しい遣る瀨ない今の生活を續けねばなるまい。

　他に一つの大きな欲求がある、それを得さへすれば、彼の物足りなさは充實されて、初めて慰藉あり安心ある生活に入ることが出來る。其の大きな欲求とは何であらう、彼は戀を求めるので無いと云ひ、戀を戀するので無いと否み、異性に知己を探ねるので無いと强辯しても、彼の謂ふ物足りなさが、「女」を措いて他に何があらう。三十七歲の中年にして、三人の子の父であると云ふ事實は、「戀」の一字を彩るべく餘に滑稽であり、餘に非詩歌的であつても、彼が異性に會心の友を得んとして、焦燥した月日を送つて居るとの事實は、彼自身と雖も肯定せずに居られまい。彼が酒の香高い燈火の巷を彷徨うても、兎もすれば一脈の哀思に淚催すと云ふのは、深い昨日の追恨に泣くよりも、淡い明日の憧憬に嗚咽するからである。妻を亡くした三十七歲の彼は、三人の子供を忘れ樣として、苦しみ悶えて居ると共に、戀を戀する氣分になつて、物狂はしい月日を送つて居るのである。

　要するに彼は、「孤獨の悲哀」に堪え得ないで、「孤獨の自由」を望んで徘徊して居る、弱い愚な男であるに過ぎない。日々夜々に目擊する世間の夫婦者を、或は滑稽視し或は悲慘視して居ながら、彼は亡くなつた妻の面影を、女の群の中に探ね求めて居るのである。電車に、路傍に、劇場に、音樂會に、カフヱーに、料理屋に、待合に、彼が異性を觀る眼と、異性に對する態度とは、非常に强い執着力を有つて來た。總ての女を女自身の地位なり身分なり職分なりに置いて、極めて

氣輕に傍觀して居たのは、彼の妻が壯健にして世に在る間だけであつた。今は最う何んな身分の女に對しても、何んな職業の女に向つても、彼自身を第三者の地位に置いては、眺めることが出來ない様になつた。妻以外の女に就いては、更に心を動かされなかつた彼が、其の妻の死後は態度急轉して、如何なる女を見ても、彼自身と相對的のものとしなくては、差向いになることが出來ない様になつた。更にこれを露骨に云へば、如何なる種類の女に對しても、彼は先づ其の女を、後妻候補者として觀察することに、一種の興味を覺える様になつた。妻を失つた中年男が、何うせ一度は通らねばならぬ險はしい道を、喘ぎ〳〵辿つて居るのが、恰度、今の彼の姿である。

後妻は娶らぬ、繼母は迎へぬと云つて云ながら、異性に對する彼の態度は、こんな風に變つて來た。彼の理智と感情とは、世間の義理人情に服從して居ながら、彼の心の底に潜む本能の叫びは、異性を要求して休まない。醉うても歡を成さず、心慘として傷む朝な夕なを、何人かに依つて慰められやうと、東に奔り西に走る彼の姿を見る時、誰か其の愚を嘲けらぬ者があらうぞ、誰か其の痴を憫まぬ者があらうぞ。

子供に依つて生きる家庭の人となるか、本能に依つて生きる自我の人となるか、彼が今の危機は、斷崖に立つた旅人の姿にも似て居る。

## 七　人道生活に還れ

戀の月日に取殘されて、其の額のみ徒らに廣くなつた彼に、若やいだ春の日は、容易に廻つて來さうに見えなんだ。何者にか追立られるやうに、都會の夕を彷徨ひ歩いても、彼の爲めに「戀の甘酒」を吸む様な女は、戸惑ひしたとて、出て來さうに見へなんだ。

彼は其の妻の死後、殆ど生活の全部を擧げて、隨分方々で飲て歩いたし、隨分いろ〳〵の女に接して見た。彼が社から受ける處の給料は、漸く其の生活費を支へ得るのみで、美味い搽蕢を購つたり、美味い酒を求めたりするには、別に大に働かねばならなんだ。一本の

萬年筆と百枚の原稿紙と、それも最初の間は興味に動かされて書き、名を賣らんが爲めに書いたのが、近頃はたゞ金を得んがために書くと云ふより他には、何の意義も無いと思ふほどに荒み切つて來た。百圓に足らぬ給料と、五六十圓に餘る稿料と、彼はそれに依つて食ひ、それに依つて飮み、それに依つて浮かれながら、此の日頃を過ごして來た。

一字、一句、一行、一枚、悉く苦しい汗の勞作に依つて得た金を、彼は惜し氣もなく酒と女とに代へた。醉うても歡ばず、逢つても微笑み得ない償ひとしては、餘に貴く餘に高い金であつても、彼は何の悔る處なく費消し浪費した。斯て報はれる最後の鞭は、心身の疲勞と困憊と失望と悔悟と、たゞそれのみである事を知つて居ながら、彼は何の顧慮反省する處なく、思ふが儘に振れ舞つて來た。さうして、酒を飮ても醉ひ得ない彼自身の姿を、涙に曇る眼鏡て眺めながら、淋しく笑ふのが例てあつた。妻が死て以來、廣いこの世の中に、一人の愛し得る女もなく、一人の愛してくれる女も無い、彼自身の悲慘な姿を、胸迫る思ひて眺めながら、淋しく笑ふのが例てあつた。二人の子はあつても、孤獨に等しい心の寂しさを、彼は酒に依つても慰められず、女に賴つても慰められず、たゞ疲れ切つた幾日かを今日まで過ごして來たに過ぎない、世にも憫れな弱い男の一人てあつた。

妻に死別れた男が、假に身境の寂寞を感じて、自暴自棄に等しい幾月日を送る樣な例は、廣い世間にも稀有の事てはあるまい。彼も亦その一人として、普通人の歩く一つの道を、歩いて來たまでのことてあるが、其處には人知れぬ樣々の悲哀と痛苦とがあつた。人類の第二位に逌つて居た女、娼婦か然らずんば母婦か、何れにせよ男の腕に賴らねば、生存し得ざる者、これを女として待遇して來た彼には、妻の死と云ふ事實が、其の女性觀の根本義を破壞する大事件てあつた。彼を生だ母と彼の妻と、此の二人を措いて、世に尊敬すべき女が何處にあらうとの持說は、明かに矛盾し撞着して居ても、彼は心からさう信じて居たのてあつた。妻

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

と一般婦人との間に、淺からぬ溝渠を構へて、相對的と傍觀的との區別を寬恕(ゆるかせ)にしなかつた彼も、愛する妻を失つたが爲めに、總ての女を相對的に觀る樣になつたのを、何んなに淺間しい事に思ひ、腑甲斐ない事に思つて居るであらう。女に依つて慰められんとし、女に依つて滿足せんとするのは、まさに恥づべき降伏的態度であると知りながら、生活の全部を擧げて、女の群に探ね求める樣な月日を送つて居るのが、彼の今日此頃の淺間しい心である、取亂した姿である。

第二の妻を娶らぬと云ふ事と、慰藉を異性に求めると云ふ事と、此の相容れぬ二つの爲めに、悲しみ悶え苦しみ煩つて居るのが、彼の謂ふ「孤獨の悲哀」であらう。其の理性は、後妻を娶ることを肯定(うけが)はなくても、其の本能は、異性を欲求して休まないのが、彼の謂ふ「孤獨の自由」であらう。悲哀に泣くも宜からう、自由に誇るも宜からう、たゞ酒を飲み步いたり、無智な女の群に戯れたり、それが何の意味ある月日であらうぞ、それが何の慰藉ある生活であらうぞ、それが何の滿足ある生の充實であらうぞ。

人道的生活に還れ！ 戀をするには、餘に額(ひたひ)が廣すぎるではないか。——

## 八 小自我と大自我

大概の男は、女房の他に一人や二人の隱し妻とか、情婦とか云ふ樣な者を有つて、自分の生活の一部を彩つて居るさうなが、憐れな彼には、人目を忍んで帝劇へ連れて行く樣な、浮いた世界もないし、華やかな月日も無かつた。彼が其の妻の死後、俄に周圍の落寞を感じて、孤獨の悲哀だとか、酒を飲でも醉はないとか、女を見ても滿足しないとか云つて居るのも、考へて見れば決して無理な事ではない。

三人も子供があつて見れば、後妻を娶らうとしても、大抵の女は氣兼氣苦勞を思つて、二の足を踏むに違ひない。彼にした所で、こんな家へ後家に來る樣な女は、何うせ其の前生涯に、碌な事は無かつたらう位に考へて、心を安んずる事が出來なからう。六つかしい理窟

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

を離れて、何うしても後妻を娶らぬと決心するなら、三人の子供を家庭の王者にして、父子四人水入らずの月日を送るより他に仕方があるまい。これが若くて二十四五とか、取つて四十を越えて居ると、また其處は何とか然るべく折合ふ工風もあるが、三十七歳と云ふ中年では、彼自身も淋しからうし、また辛抱の出來ない事もあらうし、種々と苦み悶えるのも、決して無理な事とは思はない。

然し彼が考へねばならぬ第一の問題は、自分が可愛いか、子供が可愛いか、この二つである。もとより自分自身も可愛からうし、子供も可愛からうが、總ての事件は、此の問題の解決次第で落着する筈である。子供を可愛がつて、自分と云ふ者は第二位に置いて、人道主義的生活の人となるか、或は子供を後にして自分を本位に置き、個人主義的生活の人となるか、この二つさへ極めて掛れば、孤獨の悲哀も自由も、問題にしなくて濟む。子供が可愛いならば、快樂も幸福も先づ子供を主にして、自分自身の不便や寂しさなどは、子供の滿足に依つて忘れてしまはなくては不可い。若し又子供の生涯よりも、自分自身の半生を榮あるものとしたいならば、後妻を娶るのも宜からう、妾を圍ふのも宜からう、藝娼妓の群に戯れるのも宜からう。其處には何の理窟も入らない、たゞ彼自身が己れを欺かず、良心に恥る處ない程度に於て、何れかへ旗幟を鮮明にしたら宜からう。酒を飲て歩いたり、女の顔を見て歩いた處で、こんな問題や事件が、容易に解決するものではない。

後妻を娶つて、いろ／＼と苦勞をするよりは、一つ老人の氣持になつて、子供の生育を樂みながら、後半生を送つた方が宜からう。三人の子供をそれ／＼教養して、世に有爲の材として出すと云ふことは、死だ妻への何よりの回向となるばかりでなく、意義あり生命ある大事業である。異性を得て彼自身が樂しむ月日は、五年か十年の短い間であるが、三人の子に依つて受ける滿足は、永遠にして且つ不朽である。彼の血と彼の名とを、此の大地の上に刻み付けるものは、彼の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

短い一時性の著述てなくて、實に生きた三人の子供てある。三人の子は今幼くて、寂しいお父さんを慰める言葉を知らぬけれど、齡長じ後、必ずや今の彼が苦勞に酬ゐる處多いに違ひない。母無し兒は孤兒に近いと云ふが、繼母の手鹽に掛けるよりも、父一人の手て敎養されたと云ふ事の方が、齡長じて後の子供等に、何れほど深い感銘を刻み付けるか判らない。自分自身を主にした自我的生活にも、現代素を含んだ新意義を認めるけれど、子供等のために彼自身の慾望を殺して、父たる自覺の上に立つた生活には、尊敬すべき涙の意味が強い。彼自身を眞の希望ある生涯、慰藉ある生活に導き入れる者は、異性の柔い腕てなくて、三人の子の手枉足梏てある。女のために苦勞する男は、痴者と呼ばれ愚人と笑はれても、子供のために辛苦する父は、滅多に親馬鹿と罵られるものてはない。

孤獨の悲哀を轉じて、彼と其の一家を光輝ある樂しさに復らせるの道は、彼自身が小なる自我を捨て、大なる自我の生活に入ることてある。彼の謂ふ「充實した生活」が、異性の一顰一笑にのみあると思つて居るのは、女を人類視して居る痴人の世迷言てないか。

## 九　彼は終に彼なり

いろ／＼に云ふもの丶、迷へるだけは迷ふて見る方が宜からう。彼の樣な場合にぶつ突かつて、樣々に思ひ煩ふと云ふ事は、不幸な樣て決して不幸な事てはない。神樣にはそれ相應の思し召があつて、人を笑はせもしたり、泣かせもし苦しめもするのてある。

凡ての審判は、これを歲月に委ねるより他に仕方があるまい。娶らぬと云つて居ても、何んな風の吹き廻して、結婚披露の案內狀を出す樣になるかも知れぬし、娶ると云つて居ながら、一生涯獨身て暮す樣になるかも知れない。自分の爲めだ、子供のためだと云つて居る間が花て、考へやうにも何うしやうにも、手も足も出ない樣になつては、それこそ萬事休す矣てあらう。

彼は彼の個性が命ずる儘に從つて、自分の行くべき道を步いて居さへすれば、運命と云ふ正體の知れぬ神樣

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

が、遠い所から神秘の糸を繰つるてあらう。

それにしても、彼は少し落着かなくては不可い、落着いて靜に觀じ、靜に考へなくては不可い。可愛い三人の子を遺して、彼の妻が死だと云ふ事實を、神の啓示としても沈思しなくては不可い。人間の生死は、今の科學萬能論者が云ふ樣に、然く無意味なものでもなく、無意義な一現象でもあるまい。宿命を支配する大きな力、我等は其の前に跪いて、常に戰慄して居るてないか。敬虔なる態度を持して、生死の前に對する時、我等は常に天來の默示に、傾聽して居るてないか。平凡なる彼の妻が、平凡なる其の一生を終へた事は、これを人間の記錄に見てこそ、何等の意味も爲さゞれ、神の前には總の事が、意味深い言葉となつて居やう。遺された三人の子にも、彼の上にも、神の攝理は廣大無邊てあらう。彼は徒らに思ひ煩ふことを休めて、總てを全能者の前に暴露するが宜い。神は孤獨の悲哀にも、祝福を垂れ給ふてあらう。

彼とは誰ぞ、彼は終に彼てある。

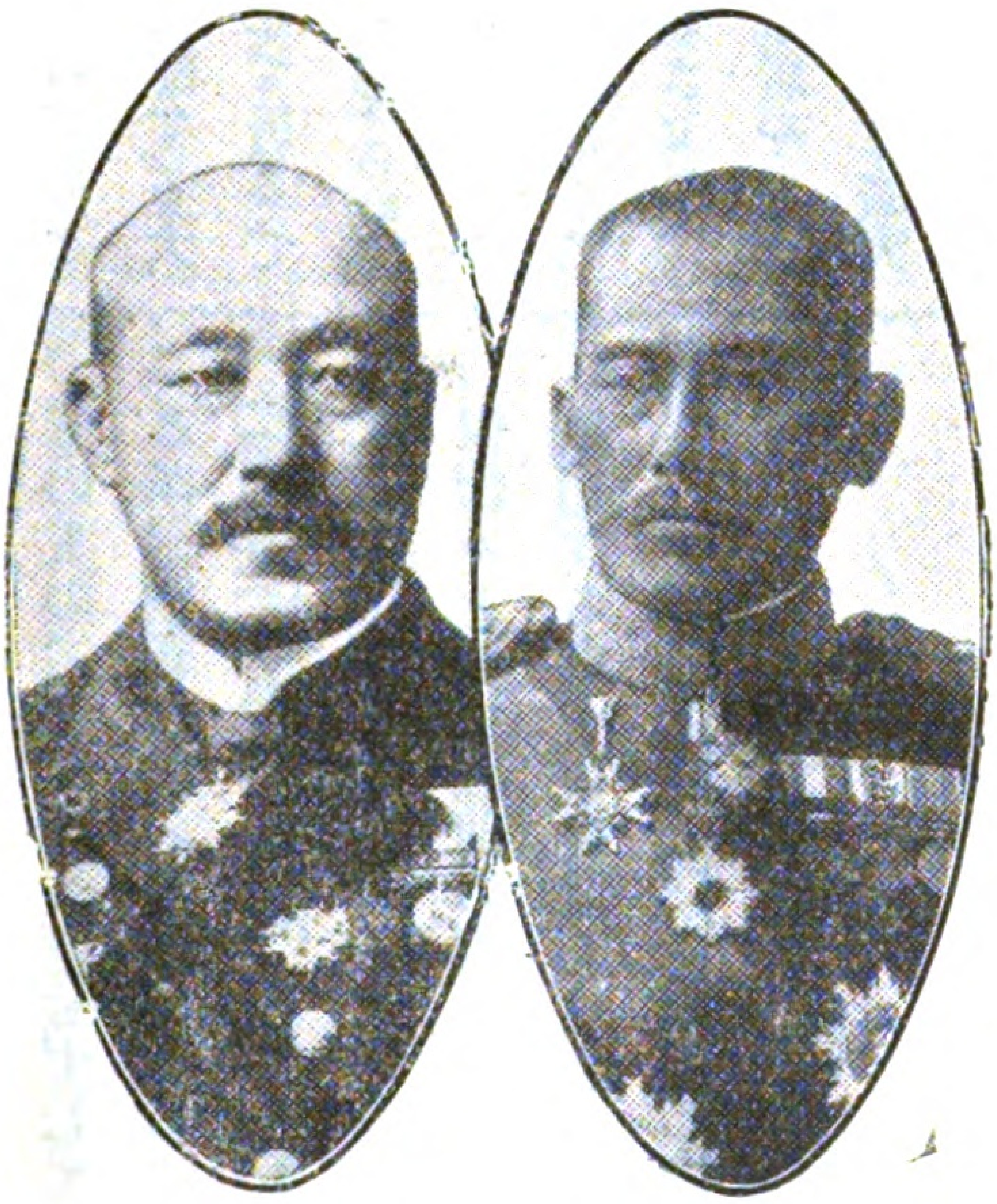
——（大正三、四、一五夜）——

附記、これは「亡き妻の骨を抱いて」の外篇なり。妻死後に於ける「彼」を描かんとせしも、構想、筆路共に意の如くならず。たゞ中央公論社に對して、文債の一部を償はんとするのみ。稿成れば從つて送り、前後顚倒、文調必ずしも一ならず。書かんと欲する處のもの、半にだも達せずして、筆を擱くに至りたるは、讀者に對して深く愧づる處なり。六月號には「同棲十三年間」の長篇を記して、以て此の愚なる亡妻記を完結せんとす。江湖未見の諸家より、尙續々として慰問の書狀を寄せらるゝは、衷心より感謝する處、併せ記して謝意を白す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

# 岡陸相と八代海相

人物評論（四十八）



△岡陸相と八代海相

鵜崎鷺城

今までの陸海軍大臣は内閣が更迭しても次の内閣に留任し、殊に齋藤などは第一西園寺内閣の時初

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

めて海相になつてから、第二桂內閣、第二西園寺內閣、第三桂內閣を經て山本內閣まで押通したが、今度の大隈內閣は兩相とも新顏である。陸軍の方は寺內が朝鮮總督專任になつてから、姬路の石本、日向の上原、金澤の木越、土佐の楠瀨と四人も他縣人を以てしたが、今度岡市之助が大臣になり、參謀次長の大島健一が次官になつたので、長州の色彩は再び濃厚になつた。之れに反して海軍大臣は歷代とも薩人若くは准薩人であつたが、今度初めて他縣人の八代六郎を迎へた譯である。此事も一寸面白い對照(コントラスト)である。

岡は陸軍停年名簿に京都府士族とあるので、何人も京都人と思うて居るが、正眞正銘の山口人で、殊に父は山縣と親密であつたから、尙更山縣の寵を得て今までに出世した譯である。戰歷は日淸戰爭の時、少佐を以て大山司令官の麾下に屬し、團匪の亂には司令官福島安正の下に參謀であつたかと思ふ。少佐時代から隊附生活をしたことがなく、總務部長から靜岡の第二十五旅團長に爲るまで參謀本部に勤務し、旅團長より軍務局長になつてから、昨年次官を罷めて名古屋の師團長になるまで軍政の方に關係し、軍令軍政共に重要な位置にのみ廻はつた。

彼は人間が地味で用心深いから、何をしてもボロを出すやうな事をしない。道を行くにも山や谷を越えるやうな危險を冒さずして、迂回しても安全な途を選ぶといふ質である。派手嫌ひであるから、何事も表面に立たずして裏面で働き、畫策の才も相當にある。一昨年増師問題で騷いだ時、岡は次官の職にあつて増師派の有力なる一人であつた。當時軍務局長の田中義一などは後鉢卷でワツショイヨツショイと跳廻つたけれども、岡は專ら內部で働いたから少しも世間の目に立たなんだ。彼の山縣若くは寺內に於ける關係は、恰も細川忠興の德川家康に於ける關係の如く、いつも陰で仕事をして居る。こんな風であるから陰險なる策士の如く見られ、又た實際陸軍に害を與へた點は罪が深いといはねばならぬ。

彼を大隈に薦めたのは無論山縣である。事務が出來るから次官にして役に立つかも知らぬが、大臣といふ器でない。併し山縣、寺內といふ有力なる後見役があるし、相談對手に大島といふ山縣の忠實なる子分が居るから心配なしに勤まるだらう。而して一方參謀本部には長谷川の下に寺內の寵臣明石中將が大島に代つて次長になつたから、愈々長州萬歲である。

海軍の方は淸浦の蹉跌があるから、大隈も此暗礁に引つ掛りはせぬかと案じられたが、思ひの外容易に話が纏まり、而も八代を得たのは手柄である。他の顏觸れは妙な臭氣を放ち、感服の出來ない代物揃ひであるが、八代一人異彩を放ち、萬綠叢中紅一點といつて好い。

彼は尾張の人で初めから權兵衞閥に入らず、卓然として自個の眞骨頭を持し、初めから海軍部內で評判が好かつたが、日露戰爭の時、淺間艦長として仁川沖の初一戰に參加し、千鳥の曲の尺八を吹いたといふ風流談が傳つてから俄かに有名になつた。我輩は日露開戰の數日前、彼を淺間の艦長室(ケビン)に訪ひ、いろ〱談話を交換したことがあるが、青々句々の

中に一種の眞氣が籠り、少しも衒つたり高慢振つたりする風のないのを見て至誠の人たることを直覺せずに居られなんだ。

最初兵學校の試驗を受ける時、若し落第したら俠客になる決心であつたといふが、彼の花も實もある行動は任俠の精神に由來して居る。彼は嘗て海中に飛込み溺死せんとする水兵を救ひ揚げた。日露戰爭の功に依て貰つた金を戰死した部下の將校下士卒の遺族に與へた。彼の言ひ且つ行ふ處は總て精神的であるから、部下に大なる感動を與へる。人物が人物であるから權兵衞一派も彼を粗末に扱ふことが出來ぬと見え、甚だしく不遇の位置に廻はさなかつたけれども、軍政方面に近づけなんだ。是れも敬遠といへばいへる。

今まで多く軍令の方に居たから、軍政の事に不慣れかも知らぬが、此難局に當るに肯んじた處を見ると、胸中何等かの確信があるに相違ない併し彼の就任に依て忽ち海軍廓淸が行はれ、權兵衞の首も齋藤の首も飛ぶやうに思ふのは少し早計である。權兵衞一派は大搖損を負ふたにせよまだ〱勢力があるから、之れを敵として短兵急に飛離れた仕事の出來るものでない。併し腐敗した海軍に八代の如き人格の立派な大臣が入つたといふ一事だけでも、世間の感情が違ふ。

# △二個の未知數

某提督

増師と海軍充實問題は、大隈内閣の前途に横はる稀有の大難關である、或は又其死活問題となるかも知れぬ、此厄介なる大事件を解決すべき當面の責任者として、甘んじて俎上の人となつた岡陸相と、八代海相の勇氣は、我輩の先づ大に感服して措かざる處である、彼等果して能く此大問題を料理し、大隈内閣の位地を安泰ならしむると同時に、陸軍に在ては多年國民の感情と背馳して居た陋習を打破し、海軍に在ては近く國論を沸騰せしめた廓淸問題を解決して、眞個に國家の干城、國民の陸海軍だる實を擧ぐる事が出來るか、否か、是れ我輩の國民と共に監視して怠らざるを期する處である。

實際の手腕は兎に角、人氣丈は却々に高い新内閣大臣の顔觸れ中、八代、岡兩中將の評判の存外に善いのは、大に軍人の爲に氣を吐くに足る殊に八代中將が、例の尺八とか、柔道とか、軍神廣瀨中佐の兄分とか云ふ七つ道具を擔いで來て、ひどく大向ふの喝采を博し、權兵衞伯の後を襲いで帝國海軍を背負つて立つ者は、彼を措いて他に人なきが如き評判を立てられて居るのは、蓋し先生得意の擅場であらう。

八代中將は果して現下の海軍問題を解決するに適當なる大臣であるか否か、新聞紙などに現はれて居る處を以て見ると、世間では未だ彼の人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

物殊に海軍部内に於ける位地に就て、十分の智識を有て居ないらしい、依て此に我輩の知て居る丈を話さう。

八代中將は島村、加藤、吉松、藤井、坂本、松本等各中將の次のクラスで、先頃海主陸從主義の國防論を書いた豫備のハイカラ少將竹内平太郎や、永く侍從武官をして居た男爵西紳六郎や、吉野艦と共に名譽の最後を遂げた佐伯閑や、砲術學校で餘り振はぬ井手麟六などと同級の明治十四年の兵學校出身である、卒業の成績は三十五人の中の十九番と云ふ餘り好い方では無いが、人物が如何にも眞面目なると、其見識の一段變つた處があつた爲め相應に重用されて、何時も好い位地に置かれて來た彼が夙くも我國の敵が露國なる事を感知して、進んで露西亞語み學び、請ふて露國公使館附武官となつて同國の海軍を視察し、殊に近世海軍戰術のオーソリチーたるマカロフ提督に私淑して、深く其戰術を研究し、後年彼に學んだ處を以て、彼の海軍を撃破するの策を建てた處などは、全く其人物の凡ならざる事を示すもので、中將が今日あるを致した基礎は實に此の如き點に存すると思ふ。

此に可笑しい一の逸話がある、中將が未だ中尉か大尉の時分某艦に搭じて浦鹽須徳に行つた事がある、他の士官が悉く英語しか話せない中に彼のみ獨り流暢に露西亞語を話すと云ふので、其歡待方は非常である、一夜同地の新聞ダリニー、オストーク（絶東）の社長某の宴に招かれた時、座中第一の花と目指された社長の令嬢、芳紀正に十九ばかりの美人が羞かし氣に中將の傍へ寄て、何卒一所に舞踏を踊つて呉れと申込んだ、前程から此令嬢の舞踏の相手たる光榮を荷はんと、逸早く申込んで見事敗を喰つた浦鹽在住の青年紳士は、同國人たる自分達を振棄てゝ此怪し氣な黄色士官を好遇する令嬢の心事を疑つたが、更に驚いたのは當人の八代中將である、此任務が當夜第一の名譽たる事は能く分るが、好男子惜むらくは舞踏を知らず、一人で行る事なら活惚れでも踊るが、相手があつては左様も行かず、迂濶にワルツの相手をして靴を踏んだり、尻を打突けたりなどしては、此場合夫こそ大にして國家の恥辱にもなる、コリヤ大變な事が持上つたと、仁川沖でワリヤークやコレーツに出合つた時には眉の毛一本も動かさなかつた豪傑も、此時許りは眞に閉口したが待てよ、巧く踊らうと思へばこそ弱りもすれ、此方には流儀があると、腹が決まれば心にも餘裕が出て、それでは一つ御相手しましやうと、令嬢を相手に八代一流即席發明の落納式ワルツを踊り廻つたので、群がる來賓は始めの内こそその珍妙な手振足振に驚いたが、流石に中將の心事を悟つて其膽略と機智とに敬服して、拍手して彼の成功を祝したと云ふ、之れ亦彼が人物の一端を知るに足る話してはないか。

八代中將は數々歐洲に遊んで泰西の事情に通じ、殊に露國式海軍戰術を學んで比類なき戰術家となつたが、彼の眞の人格は飽まで日本式、武士道的である、日露開戰中の逸話などは新聞に傳はつて居るから此に蛇足を添へぬが、一言にして言へば彼は頗る乃木式の男である、其意氣を尊とび實踐躬行身を以て衆を率ゐる處などは如何にも乃木大將と似て居る、謹嚴精刻の内に多少の衒氣あり、芝居氣を出す處なども能く似て居

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

る、由來我が武士道と云ふものゝ中には、頗る痩我慢と芝居氣とを含んで居る、之は決して惡い意味で云ふのではない、或る場合には之あるが爲に常人の企て及ばざる行動をも爲し得るのである、中將の如きは即ち其花であると云て宜しい。

海軍大臣として、八代中將は果して何事を爲し能ふか、今日までの處では、評判は頗る善い、世人の中將に期待する處は却々に大きいやうである、然し新任當初の評判の的にならぬ事は、前の上原中將を以ても分つて居る、若し中將にして、世人は皆吾に興せり、などゝ己惚れたら夫こそ大間違の原である。

先づ中將の左右から見やう、最近の海軍辭令で、相當の處は大部變つた樣であるが、海軍の首腦と云ふものは、大體に於て矢張り元の儘である、然も夫が殆んど皆中將の先輩である、先づ軍令部長の伊集院大將の如き、其積年の聲望と卓拔の識見を以て多年軍令の要職を占め、周圍には有爲の將校を率ゐて、常に軍令を以て軍政を壓迫せんと試みて居るではないか、飜つて鎭守府及び艦隊の方を見れば、之が他縣の者なら疾に豫備にでもなつて居る横須賀の山田彦八中將の如きは論外として、呉の吉松、佐世保の藤井、新たに舞鶴に行た坂本三中將は皆八代中將より一級上の出身である、加之も此級には今度教育本部に來た島村中將、淸浦内閣の海軍大臣を斷はつた第一艦隊の加藤中將、艦政本部の伊地知中將の如き傑物が揃つて居るので、八代中將如何に豪なりとは云へ此等多くの先輩を向ふへ廻して、巧みに之を統卒して行かうと云ふのは、決して容易な業でない事は何人にも了解されやう。

島村加藤以下の前記各中將が、揃ひも揃つて明治十三年出身で、久しく帝國海軍の主腦となつて居るに引代へ、八代中將の級友（クラスメート）が頓と振はず、多少暢しさうに見えた竹内、西、佐伯、井手の諸提督漸次に凋落し盡して、今は只八代君一人に依て其級の威望を代表して居るのは、如何にも心細い次第である、互に良い歳になつて種々な境遇に立つた者が、昔しの同級生の事などは忘れて了いさうなものだが、事實は決して左樣でない、何歳になつても矢張り机を並べた仲間は懷かしいもの、人間の出處進退、比附引援する具合を見るには、級友と云ふ事は却々に輕視する事は出來ぬものである。

此の如く八代海相には親身の仲間が少ない、加ふるに彼は軍政の事に掛けては殆んど全くの素人で、又決して適當な素質を具へて居ない、此事は彼自身も自認して居て、只至誠奉公の念を以て行ると云て居るが、政治の事は單に至誠のみで行けるものでない、財部を止めて鈴木を納れ野間口に代ふるに秋山を以てしたるが如き、其意氣は如何にも立派であるが、困難なる將來の海軍々政を料理するに果して適當な變革であるか如何か、我輩は彼に於て奉公忠誠の好武人を見る、不幸にして未だ錬達精緻なる好海相を見る能はざるを惜しむ。

更に中將の爲に憾みとするは、其任官前後の事情である、彼が今回の就任が全く其同鄕同庚の友人加藤高明男の推擧に依るは明白な事實である、男の知遇に感激した中將は、殆ど現今家國の大問題たる海軍充實

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

案、及び廓清問題の曲折を盡す事を爲さず、一言の下に海相の任に就いた、人格高潔なる中將が大臣の椅子に眩惑したなどとは何人も邪推せぬ事であるが、官僚政治家の泰斗たる加藤男の言を以て、前後も省みず直ちに就職するなどは聊か其早計なりしを惜まざるを得ぬ、或は中將に十分の確信あり抱負あつて、人目を聳動するに足る事が出來るか、他日をつて拜見する事と致さう。

海相の批評が長くなつて、岡陸相の事を記すべき餘白が無くなつた、陸相の事に就ては更に他に適當なる評家のある事であらうが、元來岡と云ふ人はあの漆黑の顔、炯々たる眼、百萬の敵でも睨み殺すやうな風采をして居るに似合はず、其聲は柔しく、其頭腦は非常に明敏精緻な人で同じ軍人であつても彼は攻城野戰の人でなく、運籌畫策の人である、否寧ろ執務折衝の人かも知れぬ、山縣元帥が彼を抽て長州陸軍の中堅としたのは全く理由のある事で、田中義一、大井菊太郎、西少將の今少し大きくなつて來る迄は、彼の位地は却々に固いと思ふ、今度の就任も、此前清浦内閣の時と同じく、直接の責任者からは何の相談もない中に、目白の大御所から、今度はお前やれ、と高飛車に厳命されて、否も應もあつたものではなく、只ハイと許り畏まつて了つたのであるから、其任命や頗る容易であつたが、愈々實地の政務と云ふ時になると、夫こそ樣々な困難が内閣と陸軍との間に發生して、大隈首相を困らせ倂せて陸軍を激昂させる事であらう、岡陸相其間に立て果して何等の手腕を揮ひ、如何なる解決を附けるであらうか、今度の任官は元より彼の死活問題であるが、同時に彼は内閣に向つて死活問題を抱擁すべき任務を有て居るのである、想へば危險千萬な次第ではない乎。(十八日)

## △岡新陸軍大臣

黑澤無冠人

寺内總督の陸軍大臣時代に田中義一氏が大佐で麻布三聯隊長から陸軍省の軍事課長に轉じてめき／＼評判を上げた時、其生れ場所と云ひ、才幹と云ひ、寺内大臣との關係と云ひ人をして氏は將來の陸軍大臣だらうと思はしめた、併し直に寺内伯の後に据ると云ふ事は氏の閲歷が許さぬ事であるから假令氏が陸軍大臣になるとしても年月を要するとで寺内伯と氏との中間に矢張長州人で陸軍大臣になる人がなくてならないが世間では其人は長岡中將であると判でも押したやうに確然と認めて居つた、それで内閣更迭と云ふ際には何時も新聞に陸軍大臣候補者として長岡中將の名が見えた、所が其度毎に外れて長岡中將に運がなか／＼向いて來ない、今度も矢張其通りで月桂冠は長岡中將を避けて岡中將の有に歸した。

長岡中將の陸軍大臣になれない理由は椿山老の胸中を知つて居る人には分明して居る、椿山老の胸中を知つて居る人には又陸軍大臣の候補者として岡中將の方が始めから有望であつた事も亦分明して居つた、椿山

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

老、寺内總督、岡中將、田中少將——長州正系は先づこうである、長谷川大將や長岡中將は傍系と云つてよろしい、岡中將の原籍は京都になつて居るけれども是は中將の嚴父が京都を愛して移籍したからの事で中將は全く長州の人である、嚴父は陸軍々吏（今の主計）をした人で謹嚴な性質とて能く椿山老に信ぜられたとの事であるのに見ても中將と椿山老との關係の密にして一朝一夕の謂にあらざるとが知られる。

中將の士官學校を卒業したのは明治十四年で現時北海道の師團長をして居る林太一郎中將、重砲兵監の山口勝中將、今度參謀次長から陸軍次官に轉じた大島健一中將など何れも同期生である、少將級の同期生を數へると先年朝鮮の間島問題で働いた齋藤力三郎氏や露國通で名高い荻野末吉氏などそれで以上の諸氏は何れも陸軍部内の人才と稱せられて居る、岡中將は士官學校卒業後大阪邊で隊附勤務をやつて陸軍大學卒業後には士官學校教官もやつたが中將の經歷の多くは參謀本部と陸軍省とに費された、總務部員、總務部長、軍事課長、軍務局長、陸軍次官と役は甘いふもの許り務めた、中將は頭腦極めて明晰に組織的で寸分の疎漏がない、動員に關する事務の如きは持て來いと云ふ長所でそれは〳〵敬服すべきものである、元來參謀本部の總務部は動員及び編制など作戰上尤も樞要なる部分に屬する機密事務を掌る所であるが中將は久しい間此動員の事務を取扱つていざと云ふ場合の準備を用意周到至れり盡くせりキチンと整頓した計畫振りは見事なものであつたさうな。

左れば事務的才幹、立案的長技は中將に許す所であるけれども勇斷に至りては如何、果決に至りては如何、斯る事は硬腕鐵手の人に求むべき所で中將には到底望むとを得ない、中將の遣り口は地味一方で寸を得れば寸を守り、尺を得れば尺を守り、嶄新なく、奇抜なく、小心翼々として安全、穩健、確實を是期すると云ふ極く堅い遣り方である、斯う云ふと何となく陰氣な引込み思案の人のやうに聞えもするが決して左樣な人ではない、なか〳〵如才のない、行き屆いた、辯のよい交際家で人をそらすやう事は萬萬ない、吸ひ付け煙管でスペリ〳〵やつては話を續ける應對振りは練れたものでそれに其舌端よりする白銀にも譬ふべき一種の音聲は人に快感を與へる、早く兩親に分れ貧乏をして世の中の甘い辛いを人一倍嘗めた經歷は中將をして斯く圓熟さした一原因であらう『おれにはなか〳〵繋累が多くて今迄に葬式を八回出したし嫁も八人呉れたよ』などの身の上話しは時々聞くことがある。

現在我陸軍には中將は五十人程あるが其中岡中將は彼是三十番位の順位で楠瀬前陸軍大臣から見ると二十番程も下になつて居る、即ち古參株ではない、中將になつたのが明治四十五年であるから足かけ三年にしかならない、然るに多くの先輩を凌ぎ一躍して大臣になつたのであるから得意思ふべしである、扨こゝに難題があると云ふのは例の二個師團問題で中將は大臣になつた以上は何とか之を解決しなくてはならぬ、此二個師團問題は人も知つてる通り近時我政界に於ける中心的問題で風雲は毎々此邊から湧く、近時の陸軍大臣は代々此問題の爲に倒れた、即ち上原中將が倒れる、木越中將が倒れる、今度又楠瀬中將が倒れて一向に解決

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

が付きさうもない、元來二個師團増設と云ふ事は陸軍の輿論で何人も其必要を認めて居る、中將亦然りで本當を云へば朝鮮には三個師團なくてならないと語つた事さへある位だから増師は中將が陸軍大臣として是が實現を計るに力を盡くすてあらうと思はれる、所が今度の内閣には増師不必要論者中の權威たる尾崎行雄氏が居る、今假りに中將も尾崎氏も平常の主張を枉げず押し通さうしたら衝突は必ず免れない、其時中將は如何なる態度を取るであらうか、中將は議論は好まない成るべくそれを避ける人で眉を昂げ臂を張り舌端火を吐て論じ立るなどは中將の性格が許さない、解決が付かないからとて一氣に辭職もしまい、中將の人となりから考へると四角張つた事は云はずに當り障りをうまくして解決の道を見出すの策に出るであらうと思はれる。

岡中將の下に大島中將が次官となつた、岡中將も椿山老系統の人、大島中將も亦椿山老系統の人、唯大島中將は岐阜の人で長州の産ならざる丈が、岡中將よりも對椿山老關係が幾分薄きのみ、岡中將は何れかと云へば廟堂の器と稱するよりも事務官と見るの當れるに若かざれども今日の我陸軍が有する大中將に就て陸軍大臣を求むれば中將などが先づ適才とせざるを得ない、大島中將の次官に至りては選を得たとは思はれない、中將の爲めにも參謀次長で居つた方が優しであつたらうに事の此處に至つたのは用意の存する所で是は椿山老の方寸に出てたものと了解される。

# △隈閣の陸海兩相

鐵　拳　禪

## 半官半民内閣の禍根

現下何人が内閣を組織するにせよ、その人選に至難を感ずるは陸海兩相なり。曩に清浦内閣の海相を得るに由なくして流産せる、現に大隈内閣の前者の覆轍に鑑みて陸海兩相の人選を先にせる、皆這般の消息を語るものに非ずや。隈閣の如何に輿論内閣なり、人氣ありと云ふと雖も、若し陸海兩相の孰れか一方を得ること能はざらんか、到底成立せざるべかりしなり。

内閣組織の當初、伯大隈は公山縣と議りて陸相に中將岡市之助を推擧し、男加藤の言に聽きて海相に中將八代六郎を拔擢せり。而して後、民黨三派合同の名の下に、其他各相の人選に及び、多少の波瀾曲折あり、不平不滿の聲ありしと雖も、兎に角官僚乃至黨人を驅り集めて、半官半民の腕揃内閣を組織せること、七十七歳の伯大隈の大骨折にして、且は芽出たき限なり。然れども其の頭腦を見る時は、渾然一和の難かるべき形相あり〳〵と見ゆるのみならず、少數黨を味方とせるだけ、頗る脆弱ならずやの觀あり。而して更に仔細に觀察する時は、陸海兩相を首尾克く得たるものの、國防方針の未だ確立せず、二個増師及び海軍充實の兩問題未だ解決せざるものあり、何日何時陸長の虎獅又々反噬せずとも限

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

らず、隈閣の禍根は法相尾崎、外相加藤の徒に非ずして、此の陸海兩相の衝突如何の問題にありとす。老船頭を以て自任する伯大隈の、此の一大暗礁を顧みずして船を行らんと欲せば、唯夫れ覆沒と、破滅と、瓦解とあるのみ。

吾人は、何故に思慮分別ある伯大隈が、陸海兩省の間に蟠れる根本問題を解決せず、或は解決せんと試みずして、徒らに元老等の頤使に甘んじたるかを疑ふものなり。海軍の廓清、陸軍の革新を成さんと欲せば、先づ其の官制を改正して、軍閥の跋扈跳梁と、武人の暴横とに向つて一撃を加へざるべからず。軍人の政治に容喙するの僻事たるは云ふ迄もなく徒黨を組みて軍規を紊亂せんとするが如きは、軍人五個條の勅諭に背くの不臣の行動と謂はざるを得す。彼の薩の海軍、長の陸軍と云ふが如き帝國の國防を私する所の情弊は、根抵より一掃し去らざるべからず。

## 陸海兩省の併合

當局の辯明に待つ迄もなく、國防の方針は四圍の形勢と、國力とに順應して確立せざるべからざること明かなり。されば國防上の新計畫は、時に陸軍に薄く海軍に厚きことあり、時に海軍に輕く陸軍に重きことあり。其の大體の方針に於ては偏輕偏重を許さずと雖も、時勢の實際に於ては四圍の形勢と國力とによりて緩急の差別はある筈なり。兩翼兩輪の譬喩もさる事ながら、強ひて海軍と均衡を得しめんが爲めに無用の增師を成し、強ひて陸軍に拮抗せんが爲めに尨大なる海軍擴張を敢てせんとするが如きは、決して國防に忠實なる所以に非ず。然るに、從來の遺口を見るに、陸海兩軍相對峙し、相拮抗し、甚しきに至りては互に反噬して、增師對海軍擴張の聲を大にし、以て時局をして紛糾せしむるの醜態を演ずるに至れり。

第二次西園寺内閣は、陸相上原の二個增師を強要せるによりて斃れ、第三次桂内閣は海相齋藤の海軍擴張を確執せるによりて不成立に歸せんとせしが、增師の中止を條件として辛くも折合を發見せるも、陸相木越は爲めに四苦八苦の窮地に陷れり。桂内閣瓦解の後を受けて、山本内閣は海軍擴張の一部を斷行し、陸相楠瀨は拱手成すなきの爲體なりしか、第三十一議會に於て尨大なる海軍充實案が衆議院を通過し、貴族院の阻止する所となりて、終に山閣の運命は盡きたり。而して今回成立せる所の隈閣は、幾許か海軍を抑へて、陸軍を揚ぐるの傾向なきに非ず。陸相岡の山縣系なる、次官大島健一、參謀次長明石元次郎の新任せられたるに見到れば、長の陸軍の色彩顯著なるを覺ゆ。斯の如くにして、近年の内閣は陸海兩省の暗鬪、陸海兩相の確執によりて起仆せるなり。輿論自慢の隈閣と雖も、恐らく其の例に洩れざるべく、陸海兩相の鎬を削ることよりて、自ら傷くに至るなきを保せざるなり。

如上の事實は、要するに陸海兩省對立の情弊を語るものなり。由來國防の本義は、一元にして二元に非ず。國家の爲めの國防にして、陸海軍の爲めの國防に非ず。陸海兩軍を對峙せしめ、拮抗せしむるが如きは、國防の本義を滅却するものなり。近年陸海兩相の確執より、政局の紛糾を來すた

至りては、國防を以て權勢爭奪の具に供するものと云はざるを得ず。是に於てか吾人は、國防の本義に鑑み、刻下の情弊を一掃し、且は政費を節減すべく、陸海兩省を併合して、軍務省と改正せんと欲するものなり。

## 官制改正の斷行

明治新政府の下に兵部省を置き、以て陸海の軍政を統括せしが、明治四年に至りて海軍省を特立せり。爾來海軍は陸の手中に握られ、遂に今日に迨べるなり。されば、今日陸海兩者を併合して軍務省となすは、所謂軍政の復古にして退歩なるが如きも、其の實際に於ては軍政の一維新ならずんば非ず。

軍務省には他の諸省と同じく大臣、次官を置き、之を全然文官をなすにあり。其の下に陸軍及び海軍の兩局を置き、現役の軍人を用ゐることなほ他の諸省の局長以下を事務官となすの例に準據するなり。而して玆に截然軍政、軍令の區別を明かにせざるべからず。現役軍人の本務は策戰用兵の上にあるが故に、軍政に對して容喙せしめざるは、却て彼等をして武を輝かすを得しむる所以ならずんば非ず。今日の如く軍政の陸海兩省と、軍令の參謀本部及び軍令部との關係相錯綜し、兩軍相對峙して下らず、サーベルを以て内閣を威嚇し、政務に干渉するに於ては、到底國防方針の確立を望むべからざるなり。

陸海兩相にサーベルを据ふるの弊は、縱令政黨内閣を組織するも、其の兩個の椅子を例外せざるべからざるにあり。爲めに、自黨の主義政見に合する大臣を擧ぐる事能はず、内閣の成立を期すべく軍人の鼻息を窺はざるを得ざるなり。辛らじて陸海兩相を得たりとするも、彼等の要求を容れざらんか、侯西園寺の上原に背負投を喰はされたるが如く、公桂の齋藤に强要せられ海軍同盟を以て威嚇されたるが如き馬鹿を見ねばならざるなり。彼等は國防上の大方針は扨置き、陸長勢力の均衡上より、陸海消長の感情上より、將師或は海軍擴張を提げて肉迫し、其の强要の容れられざるや直ちに挂冠し去るの擬勢を示す。實に陸海兩相は、近年内閣の一大暗礁なり。此の暗礁を除却するに非ずんば、政黨内閣の自由航行は頗る危險なりとす。伯大隈の海軍廓淸に重きを置きたるの結果、却て陸軍の乘ずる所となりたるが如く、其の前途の險惡なる蓋し想像に餘あり。曾ては藩閥打破を呼號し、憲政の樹立を期せんと傲語するの彼れは、何故に内閣組織の當初に於て、陸海官制改正の言質を元老に取り陸海兩軍の積弊に向つて斧鉞を下すの計を成さざりしや。吾人は伯大隈の蹶起に同情を表するも、人心一新の途を講ぜず、或は非政黨的口吻を洩すが如きは、伯の爲めに聊か惜まざるを得ず。

## 增師問題の張本人

現官制の下にありては、陸海兩相をサーベルより拔くの當然なるも、同じく之を擧ぐるとせば、陸閣は宜しく非山縣閥、非山本閥の、人格あり手腕ある軍政家を擧げざるべからず。然るに其の人選を見るに、海相八代は稍其の輿望に副ふも、陸相岡に至りては、一種厭ふべき臭味な

きに非ず。何となれば、岡は公山縣の乾兒にして、第三次西園寺內閣の陸軍次官となり、増師問題の爆彈に點火せる張本人なればなり。

素より二個増師は、彼れ一家の私見に非ず。長閥全體の意見なるべし彼れが軍務局長田中義一等を引いて謀士となし、陸相上原をして遂行を餘儀なくせしめたるは、國防上の必要と云ふの以外に、政友會內閣破壞の謀略を加味せるや疑ふべからず。桂內閣瓦解の後、彼れは第三師團長に轉じ、軍政の埒外に立ちたるも、今次再び本省に入り、而も陸相の椅子を占めたる以上は、先年來の懸案たる二個増師を解決するの責任を有す。今や彼れは自ら蒔ける種を收穫せざるべからざるの秋に際し、政局の當面に蟠れる所の紛糾を裁斷し、陸海反目の禍根を除き去るに努力せざるべからず。

然るに、岡は人物穩健にして圭角なく、怜悧に如才なく立ち廻ると雖も、長閥の陰險を蔽するに似たり。彼れは田中の如き豪傑肌に非ず、舞臺面の闘將に非ずと雖も、思慮周密にして、黑幕の裡にありて籌畫するの才幹あり。加ふるに一種の凄腕辣手を有するを以て、陸相としての活動頗る注目に値するものあり。而して其の下に配置せる所の人物、悉く長閥の寵兒にして、増師問題の急先鋒たるを思はば、彼等が再び之を提げ來らんこと必せり。果して然らば、現下の紛糾を裁斷するは愚か、却て其の紛糾を甚しからしむるやも測るべからず。知らず、陸相岡は、如何にして國防計畫と國力との調和を圖り、斯の紛糾せる時局を圓滿に解決せんとする乎。

## 海軍廓清の篏り役

陸相岡の適任なるに拘はらず、長閥臭味ありとの非難あるも、海相八代は世人の以て篏り役と歡迎する所の人物なり。然るに、薩閥の徒は奇怪にも中將八代の前海相齋藤、若くは軍令部長伊集院に何等の相談なくして海相就任を諾せるを攻擊すと雖も、斯の如きは敗者の怨言に過ぎず。何人か自ら信ずる所あり、身を挺して其の任に就かんとするもの、將來の安全を豫圖すべく左顧右眄して、媚を先輩に呈するものあらんや。八代の知友の情に感激するや、國家の爲めに蹶起せんとして心中既に決する所あり、中將加藤の如く一身の爲めに考慮し、逡巡するの要を見ざるなり。深慮加藤の如きに比すれば、八代の獨斷就任せるは怜悧なる遁口に非ざるに相違なきも、其處に彼れが古武士的性格と、殉職的精神の流露せずんは非ざるなり。

八代は素より軍政家に非ず、其の適處を求むれば、艦隊司令長官の如きならんとは、既に定評の存する所なり。然れども、軍政の經驗なきが故に、未だ以て海相の器に非ずと做すべからず。彼れに卓拔なる經綸眼を有すとも思はれざれど、己れを責むるに酷にして他を容るゝの宏量あり。而して毫も薩閥の色彩を帶びず、愛錢癖なきを以て奸商の誘惑に逢はず、超然人格を持するの人なり。腐敗墮落せる刻下の海軍廓清を斷行せんには、斯の人を措いて他に篏り役を發見する事能はず。免官大佐太田の如きは極力八代を賞揚し、其他海軍部內の純白派の舉りて八代を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

讃美するに見るも、彼れの如何に勇氣あり、人格あるの武人なるかは明かなり。

然れども、人格の人必しも手腕家に非ず。縱令勇氣あり、人格あるも大處に着眼するの明なくして失錯を演ずる者なきに非ず。八代の如きも亦、實際海相として何程の手腕を揮ひ得るかの疑問なきに非ずと雖も、次官に直情徑行にして事務を苟もせざる鈴木貫太郎あり、軍務局長に剛直にして果斷に富める秋山眞之あり、其の血精療法の目的だけは兎も角も達し得らるべきを信ず。唯懸念に堪へざるは海軍充實問題なり。彼れは飽迄も前内閣の方針を踏襲して、海軍充實を期せんとするか。或は別に同志會案を參酌して、充實計畫を建てんとするか。陸相岡の增師問題を提げ來るの際は、如何の態度を以て之に處せんとするか。今後彼れの手腕を試みるべきの難關一にして足らず、折角の輿望を負ひて蹶起せる八代たるもの、餘りに極端なるサーベル式を發揮して、一世の物笑となちざらん事を望まざるを得ず。(四月十八日)

## △長州系での適材者

閑蛙亭主人

新任陸軍大臣岡氏は京都の產である。そして今も尙籍を京都に置いてゐる。であるから戸籍の上に於いては紛ひもなき京都人には相違ないが、人は總て純然たる長州人と信じて殆ど誰一人京都人である事を思ふ者が無い位所謂長州系に屬する人である。それは彼の父は舊と茶袋を拵へなどした一個の商人であつたのが、維新の際に長州に行つて毛利公などに出入し、遂にそこで役人に取立てられた關係から、彼が陸軍に入つても同じく長州系の庇護を受け、殆ど純然たる長州人として今日に至つたのである。今日彼の京都產である事を知る者の尠いのはそれが爲めである。

大臣としての彼は素より未知數である。大學を出て永く次官として行政の事に學つてゐたといふ事のみでは解らない。然しながら、若し大臣を長州閥より採らねばならぬものとしたならば、今の場合彼が或は最も適任者であるといふ事が出來るかも知れぬ。由來長州系に屬する者には大學出身の若手には隨分遣り手もあるやうであるが、差し向き中將あたりには其人物が乏しい。氣の毒ながら山縣、寺内の後を繼いで行く程の大頭が無い。其意味に於いて彼は長州系中の出色の者であつて、山根長岡などより遙に優つた技倆を有つてゐる。單に腕ばかりではなく、其人格に於いても彼等に比して勝れてをるものがある。綿密で着實な、恐らく人をひつかけるやうな事はしないであらう。先づ長州系の軍人中で大臣の候補を物色するとなれば、こゝらに落ちて來るのは其順序であらうか。

彼は極めて緻密な頭腦を有つてゐる。動員計畫などを精確に精密に掌る事の上手な人で、從つて大勢を達觀するといふやうな事に於いては果して何らか。これは疑問であるが、兎も角も事務官としての彼は相當に

仕事をする遣り手である。次官としても、政府委員としても比較的危げがなかつた。唯大臣としての技倆は之を今後の成績に見るより外はない。

斯らいふ性質の彼が、從つて山縣や寺内の氣に入る處となつたのも不思議ではない。恐らくは山根長岡よりも萬事に細心な彼の方がどれほどか氣に入つてゐるであらう。同じ長州系でも山根長岡に至つては少しく流儀が違ふ。然しながら、由來政務官と事務官とでは其性質を異にする。此樣に細かく、萬事自分で切り盛りしなければ承知のならぬやうな、人に任せておく事の出來ない性質の者は、行政事務には適當であらうけれど、政務官としては果して如何であらうか。仕事を各部下に分擔して、自らは大綱を統べるだけの度量の無い者は、上に立つて統率の任に膺る事が六ケ敷い。

元來軍人には二つの典型がある。武人として、死も亦辭せざる底に部下を心服せしめる所謂良將も、行政の事に與つては何の仕事をも爲し得ない事もあるし、行政に關しては拔群の手腕を有する者も軍隊に入つては部下を統御する事の出來ない人もある。德望と手腕と、此兩者を兼備へてゐる者は眞に尠らしい。腕のたつ人は德に於いて缺けたり、德はあつても仕事が出來なかつたりするもので、素より立派な軍人として、理想を言へば兩者兼備の人でなくてはならぬ譯であるが、先づ決して無いと言つて差支へなからうと思ふ。そして岡氏は孰れかと言へば武人としてよりも行政官である。一口に言へば仕事師である。是れは陸軍部内に於いても敢て異議を挾む者は一人も無からうと思ふ。であるから、行政官として彼を働かせる事は彼を活かして使ふ道であるが、夫の萬事自分の手一つで遣らねば濟まぬ氣質は、餘りに部下に干渉を試みたり、部下の些細な過をも指彈し摘發して假借しなかつたりするならば、それが重なり重なつて終には困る事になりはしないかと思ふ。兎も角大臣として何ういふ風に遣るか、それは今後の見物であるが、何と言つても陸軍の大勢力を後楯に控へてゐる事であるから、大した失策も遣らないであらうし、假令少々の不出來があつたにしても隱蔽されて了つて、先づは成功する事になるであらうと思ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 幸田露伴先生新著

新刊

# 修省論

## 吾人が實際生活上の最大助言者！

曩に『努力論』を著して、識見の精と、講說の妙と、天下百萬の讀書人を震駭せしめたる幸田博士は、愈々其該博深邃の蘊蓄を發揮して本書を公にせらる。『努力論』の如何にして吾人は生くべきかに對し『修省論』は如何にして生存の價値を高むべきかを示したるもの、題して『眞に修省せずんば、眞の努力は爲せず、眞の努力爲せねば、眞の天祐は至らぬのである』と喝破せらる。大正の新時代は最早空論の時代に非らず、世は既に空疎なる教訓書の多きに倦めり。曩に努力論を讀めるの士は勿論、然らざるの士も、亦必ず此學界の巨人が半生の經驗を基礎とせられたる我實踐修養的修養處世哲學は一讀せられよ諸賢は單に此等の目次を一瞥せられたるのみにても其得益の深大なるに驚かん

箱入美本全一冊四百廿餘頁 正價壹圓六十錢 送費二十錢

幸田露伴先生修養二大名著

■努力論（大形本）正價壹圓六十錢 送費十二錢（縮刷本）正價壹圓 送費八錢

■潮待ち草 價八十五錢 送費八錢

（中付二の一）

發行所 東京牛込見付前 東亞堂 振替東京一七二一 電話番町五三七（移轉）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

▼全一册總クロース七百餘頁▼

妻木忠太先生編著

# 維新後大年表

▼正價金壹圓拾錢・送料金八錢▼

現代に活くる者は現代を知らざるべからず本書一卷は光榮ある現代史實の巨細を網羅して一點の餘蘊なきもの眞に國民必備の寶典也

## 本書の内容

本書に採錄せる事項は無慮一萬八千餘に達し、上 皇室の御事より下は憲法・法例・公式・議會・官制・官等・給與・任用・分限・服務・服制・徽章・禮樂・忌服・文書・地方制度・司法・行政裁判・外交・衛生・警察・社寺・宗教・理財・土木・學事・軍事・馬政・產業・著作權・出版・運輸・貿易・通信・電信等に關する諸法令を始め任官・建議・奏請・贈位・追諡・置府縣道廳及び公使館・領事館・鐵道・燈臺・燈明船・浮標・海水底電線・無線電信局・學校・病院・銀行・會社・會議所・取引所・諸會・諸官の施設、並に發明・諸擧行式・來朝外人・外人傭入・歸化人・戰亂・暴動・災難等に及び、慶應三年十月大政奉還の事ありてより大正二年十二月に至るまで、前後約四十七年間の史實、巨細小大一として網羅せざる無し。

## 附錄と索引

索引は第一・第二の二大別とし其の第一は 皇室及び法令を採りて之を三十三項とし、其の第二は任官・贈位・死歿及び鐵道・銀行・會社の設立等諸般の事項を採りて之を二十九項とす。分類整然直ちに所要の事件を檢索すべし。本書の附錄亦分つて二となし、其の一には 天皇御略系・宮家御略系・御陵一覽表・詔勅等を載せ、其二には明治二年戰功賞典・諸藩石高・士卒祿制・改置府縣・官國幣社一覽等を載す。

惟ふに維新後の史籍の完備せるものは、未だ世にこれ有るを見ず。本書は一面より見る時は最も詳細精密を極めたる之が編年史たり、而して又其紀傳史の絕好資料と稱すべし。あらゆる階級あらゆる職業の人士を通じて、一日も缺くべからざるもの也。

(中付二の四)

發行所

東京市神田區錦町一丁目

**有朋堂書店**

電話本局 一一三四〇・一二六五
振替口座東京 二一七五八

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

# 評論

## 文藝時評

# ローマン、ロラン

中澤臨川

ローマン、ロランは先づ第一に獨立獨行の作家である。彼は總ての流派を超越し、時代に先驅する自由思想家である。彼は未來を拓く爲めに過古を苦しみ、世界に出づる爲めに民族を苦しんだ。彼はその修養と趣味に於て眞の意味のコスモポリタンである。

ロランは一八六六年、中部佛蘭西に生れ、巴里と羅馬で敎育を受け、暫く獨逸にも滯在した。彼の最初の事業は演劇の改良と云ふことであつた。その爲め彼は四五の脚本に筆を染めたことがある。その後は美術及び音樂の批評家として立ち、今日までソルボン大學で有名な音樂史の講座を續けてゐる。彼は努めて古來の天才の生活に眞の人生の意義を發見しようとした。彼の見解によれば、時代精神の奥に隱れて、常にその社會を活かし、衆人に眞生活の意義を吹き込む者は天才である。天才は豫言者であり生命の闡明者である。彼等の一生は The heroic の探求にほかならない。彼等は『絕對眞理の人』である。彼等はいかなる事情のもとにいかなる犧牲を拂つても、眞理を探ね眞理を談らねばならない。かるが故に天才は地の鹽であり、生命の泉である。ロランは斯樣な意味に於て古來の天才の事業を研究し、そしてそれを發表した。『ビートーベン』、『ミケル、アンゼロ』、『ユーゴー、ウオルフ』、『フランソア、ミレー』、『トルストイ』などの評傳がそれである。彼の唯一の小說『ジヤン、クリストフ』も亦同じ理想のもとに生ひ立つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『何事を措いても眞理！。私は虛僞の代價を拂つてまて私の友達の幸福を豫約せなんだ。私は寧ろ幸福の代價を拂つても彼等に眞理――永遠の心靈を形造る剛壯の眞理――を約束した。その空氣は荒いが、然かし潔い。我等をしてその中で我等の血の貧しい心臟を洗はしめよ』と、彼は『ミケル、アンゼロ傳』の中て言つてゐる。少壯、ロランは故國の都會の輕薄な、頹廢した空氣に居堪らずして羅馬に去つた。その頃の彼はトルストイの思想に育くまれて人道的の情熱に燃えてゐた。有名なマルヴィダ、フォン、ウェーセンブルグ夫人が當時の彼を評して次のやうに言つてゐる。『この若い佛蘭西人に於て、私は私が既に他の國民の偉人の中に發見したと同じ理想、同じ崇高い情熱、總ての偉大な智的顯象に對する同じやうな深い洞察力を見出した』と。彼は虛僞を惡んだ。彼は眞理を欲した。あらゆる犧牲を拂つても眞理の表現を欲した。斯うして彼は『ジャン、クリストフ』を産んだ。丁度その頃から彼の一生を費すべき大作が彼の心に芽ざし始めたのてある。

私は孤立させられた。佛蘭西に在る幾人かの他の人士と同じく、私は道德的に有害な世界の中で窒息した。私は空氣を欲した。私は不健全な文明に對し、似而非才人に由て汚された理想に對して挑戰しようとした。私は斯う彼等に言ひたかつた、『汝は僞る、汝は佛蘭西を代表してはゐない』と。その爲めには、私は淨い心と曇らない視覺をもち、發言の權利を充分備えてゐるほどその心靈の潔白な一人の主人公を要した。そして彼の聲は他人の耳に徹するだけ存分高くなければならない。私は忍苦して漸く此の主人公を探し當てた。

と、彼は『ジャン、クリストフ』の第七卷の序言に言つてゐる。

要するにローマン、ロランの信念は、人生に於ける眞勇の理想と剛正な眞理の探求に在つた。彼は田園畫家ミレーに於て純佛蘭西の天才を發見し、悲哀と勞働との沈痛な教訓をみた。て其一生を評して、『彼の曆には祭日が無かつた、それはたゞ勞働と民主の福音』てあつたと言つてゐる。また彼はミケル、アンゼロに於て、『勇壯な天才と怯懦な意志、或は命令的な情熱と意志せざる意志との間の劇切な矛盾』の偉きな戰を見た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

復た彼はトルストイの一生に於て、近代的な最も深酷複雑な天才の努力を讀んだ。殊に彼はビートーベンの一生に於て偉大な意志と運命との戰の驚くべき力を發見した。その誠實と勇氣が彼を醉はした。『世上の善惡の庸凡事に對する不斷の戰から倦怠が我等を襲ふとき、斯の力と信仰との海に浸たることは言ふべからざる快である。ビートーベンの身邊には傳染的の勇氣、戰の歡喜、身内に神をもつことを自覺する者の狂醉がある』と彼は言つた。

從てロランにとつては是等の天才の一生を費すに足りる藝術とは、『あらゆる下劣な行路者にまで公開された下劣な娛樂ではない。そは確かに一個の所有（une Jouissance）である。しかも總ての所有のうち最も魔力のある所有である。但し其所有は頑强な鬪爭の後にうる賞品であり、力の勝利を飾る桂冠である。藝術とは征服された人生である』。また彼は斯うも言つた。『眞にその名に値ひする最高の藝術は時代の法則を超越する。そは無限を横ぎる彗星である。或はその力が實生活の見地から見て有用な事があり、また不必要にして危險な事もあらう。さもあれ、そは力であり、運動であり、火である。そは空に輝く稻妻である。唯だその爲めにそは神聖であり、唯だその爲めにそは慈悲である』と。

藝術は常に彼にとつては神聖である。『ジャン、クリストフ』は實に斯樣な信念から産まれた著者の努力の全部であつた。『私はまだ其一語も書き下さない數年前からこの作を構案してゐた。私は彼の終りを見屆けうるやうになつてから、初めてクリストフを旅に上せた』と著者は言つてゐる。我等はその中に著者の崇高い理想と稀なる經驗の總てを見るであらう。殊に我等は視覺の明らかな佛蘭西の天才が、現代の社界を忠實に瞰下（みおろ）した全く飾りのない告白を貴しとするであらう。

前後十卷、幾千頁から成るこの浩澣な小説は、初めから或る小雜誌の續物として掲載された。完成には實に數年を費した。從て之を一個の完結した作品として

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

見るときには幾多の缺點が發見されるであらう。然かし著者の意は初めから些しも人工の結構(プロット)を弄さないことにあつた。極めて自然に、趣くが儘に主人公(ヒーロー)と其周圍(ミユー)とを推移させた。彼はその主人公の生活を水の流になぞらへた。行くがまにまに其流は増し、眺望は開展した。その清い水面にあらゆる人生の相を寫して、やがては海に入(はい)つた。

天才は徐かに芽ざす稀有の華である。幾代かの神秘な準備の後に彼は世に現はれる。『自然はその子に於て現實される天才を發達させる爲めに、幾度かその父の上に彼女の手を下し試みる』とロランは『ミレー傳』の中で言つてゐる。獨逸聯邦の田舍町に於て斯樣な自然の試みが、宮廷の音樂師クラフト父子の身の上に落ちた。子クラフトはその爲めに身を持ち崩して不慮の最後を遂げた。然かし彼と深い心を持つた百姓娘との間に出來たクリストフが、遂々(とう／＼)自然の試みに及第した。彼の額には生れながらにして『貴人(エレガント)』の烙印が捺された。斯樣な者は遂に打克つであらう。天才の一生には常に二重の努力が負はされる。第一は彼が自己と其才とを意識することである。それから第二には其自覺を提げて世間の虚僞と戰ふことである。天才は價値の創造者である。彼に採つて總ての固陋な物、卑近な物は皆虚僞(いつはり)である。從てあらゆる世間は彼の敵である。彼はその一生を通じて強く高く其理想の旗印(ペンナー)を掲げねばならぬ。孤獨は彼の運命である。之に對するクリストフの答は決して失望的ではない。彼はビートーベンのやうに『運命の喉元を握まへて之を引倒さう』とした。まだ十歳の彼は初めてビートーベンの音樂を聞き乍ら非常に動かされた。

彼はその響を耳の底で聞いてゐた。それは怒の喚叫である。野蠻の咆哮である。彼はその齎す熱情と血の騷擾とが自分の胸に波打つを覺えた。彼はその嵐の狂的亂打をその額に感じた。進みつつ、破壞しつつ、そして偉大なヘルキユラス的意志によつて急に停められつつ。その巨大な靈が彼の身體に浸み込んだ。て、彼の四肢と心靈を吹いて急に之を膨大させたやうに思はれた。彼は全世界を踏まへて立つた。彼は丁度山のやうであつた。怒の嵐、悲の嵐が彼の心を襲

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

がした。……何の悲ぞ……何するものぞ。彼は今左樣に強く自分を感じた。……苦しめ、益々苦しめ……強い人間たることがいかに善いことぞ……人間が強くなる爲めに苦勞するのはいかに善いぞこと。

彼の全身は力である。彼は若い頃からそれを自覺してゐた。彼は一歩は一歩、自分の前に横はる障害を蹈碎いて進んだ。彼はあらゆる事物を自分の經驗に掛けた。彼は何物をも盲目に承認しなんだ。何處でも彼は妥協と虚僞に衝突した。苦難に出會へば出會ふ程彼は自分をより強く感じた。

何時しか彼は打克ち始めた。そしてより偉大に成つた。世間は漸く彼の天才を認め、自然に同情者が集つて來た。然かし彼の身邊にはそれと同時に幾多の危險が湧いた。青春の不安、情慾、孤獨の恐れ――その中でも一番危險であつたのは成功と、傍觀者の同情であつた。『感謝を表することを惧れると云ふことは實際稀な德であつて、たゞ下級から上つた顯著な人達ばかりがそれを心得てゐる。彼等は何時も援助を受けることを餘義なくされ、その度毎に恩人の卑吝に由て汚されたことを知つてゐるから』とゲーテが冷笑的に言つてゐるが、クリストフの一生にも度々斯樣な苦がい經驗が試みられた。然かし彼は所謂『恩不知の德』を備へてゐた。最後に成功が偉人を墮落させる最も大きな魔である。彼等は孤獨と敵には耐えうるが、成功の醉ひに迷はされない者は尠ない。それが彼等に與へられる最終の試錬である。クリストフは能く其戰を勝つた。

これがクリストフの運命であつた。

我等はクリストフの生ひ立ちを其搖籃から追ふことが能きる。無自覺の暗から徐かに醒める赤兒の心、その恐れ、淋しい泣聲。ライン河の靜かな流に沿つた小窓。やがて少年期が來た。小さな友、初戀、音樂、柔しく悲しい母、昔氣質の祖父、漂浪と解脱の叔父、放埒な父の死……これが『曙』及び『朝』の二卷を成してゐる。ここではロランは殆んど叙情詩人の態度を採つてゐる。

やがて迫る生活の苦、青春(アドレッセンス)の懊惱、情欲の發作、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

信仰の迷、自我の眼醒め……『幕は破れた。稻妻の光のやうに彼は暗のどん底に神を視た、彼自身が神であつた。……神のアビス！　神の淵！　實在の火！　生命の嵐！　生存の狂喜！……健やかに、强く自由な人性のほかに如何なる德があるか』……その靑春の喜びの前には『何事も可能であつた。何事も尊とかつた、罪ですらも』。……、それから可憐なサバンの戀、彼女の死、輕薄なアダとの戀、失戀、危機。

再び彼は我に歸つた。自由、孤立！『孤立すること、彼自身であることが如何に幸福であるかよ。……生活の餌食とならずに遂に生きうること、自己の主人たりうることが如何なる喜びよ』。クリストフは漸くその天才を自覺し始めた。彼はその全身を撼り動かす創造の力に戰慄した。『肉體または心の領域に於て創造することは、肉體の囹圄から脱れることである。それは生命の嵐に乘ることである。それはまた「實在する神」たることである。創造することは死を征服することである。』

自我に歸り自我の力を意識し始めたクリストフが世間に對した時、最初に其眼に映つたのは自國民の生活の虛僞であつた。昔から獨逸國民の生活を取扱つて、ロランほどに峻烈な批評を加へた者は無い。彼はおもに音樂の智識を透して獨逸精神の眞髓を會得した。昔から其邦に榮へた音韻の詞が彼をして其國民性の弱點を正確に把持された。彼等は麥酒と腸詰と一緒に、どんなに違つた音樂をも瞬もせず一息に飲みほす――ビートーベンとメンデルゾーンとニコライとメーヤービーアと。斯の如き『獨逸的不誠實』の源はその神經過敏、病的感傷性、似而非理想主義から起つて來る。それが詩歌、音樂、日常生活にまで侵入して濕つた空氣を造る。『病的な甘さやさしさが苔むした洞穴から滴る水のやうに獨逸人の精神を吹ひ取る。』クリストフは黴の生へた凡らゆる Lieder, Liedchen, Liedlein を憎んだ。Sehnsucht（情熱）Heimweh（家郷病）an den Mond（月に）an die Sterne（星に）an den Frühling（春に）Frühlingslied（春の歌）Frühlingslust（春の喜）Frühlingsgruss（春の讃へ）Frühlingsnacht（春の夜）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Stimme der Liebe（戀の囁き）Sprache der Liebe（戀の詞）Trauer der Liebe（戀の悲）Geist der Liebe（戀の魂）Fülle der Liebe（戀の溢れ）Blumenlied（花の歌）Blumenbrief（花の玉章）Blumengruss（花の挨拶）……數限りのない斯樣な詞を憎んだ。『何時この泡沫は熄むであらうか。はろう！　默せよ、沼の蛙！』斯う彼は叫んだ。理想とな？。彼等の理想とは正面に男らしく人生を觀ることを惧れる事を意味する。『何處へ行つても同じ怯懦、同じ男性的快豁の缺亡。何處へ行つても同じやうな冷たい熱心、同じやうな仰々しい僞りの尊嚴——その愛國にも、その飲酒にも、その宗教にも。』"Du,herrlich Glas……"（汝、尊き盃よ……）斯う彼等は歌ふ。何處まで彼等は僞りつゝ——理想化しつゝ——行くつもりか。

殊にクリストフの忍ぶに堪えなかつた事は、自分に對する彼等の敵愾心でなくて、その煮え切らない態度であつた。壓せば歪みながら、直ぐまた舊にもどるくらげのやうな人間を誰が相手に出來るか。クリストフは彼の周圍に斯樣な人間ばかりを見た。彼等は政治、文學、宗教に於ても、日常の生活に於ても、愛することも憎むことも、信ずることも疑ふことも能きないほど弱い人間であつた。彼等は調和の能きないものを調和させようと一生の力を空費する人達であつた。殊に一八七〇年の戰勝後は、昔の理想主義と新に興つた現金主義、物質主義との調和に腐心した。『戰敗國の位置に立つ時我等は言つた、獨逸は人道を其理想とすると。次に我等は相手を征服した。そして言つた、獨逸は人道の理想郷であると。……それが我等の手に在るとき、力は神聖となつた。力が總ての理想、總ての智慧となつた。』

これが獨逸的不誠實の頂點である。クリストフは斯樣な社會に容れられずして巴里へ去つた。

そこで先づ第一に彼の眼についたのは所謂「市場」である。『死骸の香』のする世界人の社界である。今日の人、流行の人、文學者、音樂家、新聞記者、猶太人、銀行家、代言人、貴女、娼賣婦……あらゆる種類の人

間が派手と贅を盡して、何んな立派な宴會にも、競馬場にも、場末の小料理屋にも集合し、塵を上げ耳を聾しながら『佛蘭西を代表して』ゐる。殊にクリストフの眼に奇異の觀を與へたのは斯樣な社會で婦人の占めてゐる優越の地歩であつた。『彼女は法外な不平均な位置を占めてゐた。男の仲間であると云ふだけでは彼女は滿足能きなんだ。男と同等になることでさへまだ滿足能きなんだ。彼女の誇は彼の法則となる事であつた。そこで男の方が服從した。……昔から久遠の女性は優れた男性の上に向上的な影響を及ぼしてゐる。然かし普通人の場合は、殊に頽廢の時代に於ては、却て男を墮落させる別種な久遠の女性がある。これが巴里人を支配し、併せてこの共和國を支配する女性である』と、ロランは言つてゐる。

斯樣な頽廢の空氣は、割合に正直な獨遊的僞善よりも、猶ほクリストフの堪えない所であつた。然かし『市場』は佛蘭西を代表する全部ではなかつた。クリストフは次第に『家の中』へ這入つた。

騷々しい都の裏に隱れて、ゴール人の古い土がある。その土の中には昔乍らの信仰と犧牲と勞働的誠實とが潜んでゐる。彼等は暗い家と土とに埋れながら忠實しく日常の義務を果してゐる。彼等はその邦の不幸を繕ひ未來に備へる。是等の無名の英雄こそ實に其國民の生命である。クリストフは自分の貧しい下宿屋の同居人の間に斯樣な人達と知合になつて、漸く隱れた佛蘭西を知り始めた。

然かし猶一つの疑問は彼等の孤獨癖と醫すべからざる高慢心とであつた。是等の善良な人達の間には猜疑の空氣が全般に漲つてゐた。彼等は一人々々の自我を守り立てて、人を疑ひ人と離れた。百姓は些ばかりの自分の土地に高く檣をして耕した。都人士は自分の小さな借間を金城鐵壁とした。隣同士でさへ詞を交へ微笑を替はすに躊躇した。『何と云ふ孤立の態だ。何たる國民力の消費だ。』斯う思つてクリストフは奮慨した。『私にはお前達の心が判らない。お前達は最も善き邦に住み、至て人情的な最高の智腦を賚まれてゐる。それ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

てゐてお前達はそれを活用しようとは思はない。お前達は惡漢等の支配に甘んじ、彼等に辱められ、彼等の足蹴に掛つてゐる。確かりしよ！。自分に歸れ。神やナポレオンの救を待つてゐるな。起て、互に結べ、そして皆んなて働け。お前達の家を淨めろ。』て、クリストフはこの國民の衰滅をさへ疑ひ始めた。然かし彼は一日偶然の事から佛蘭西國民の偉大な潛勢力を目擊し驚嘆する破目に立到つた。それは斯の國民が時どき世界を驚かす狂熱の嵐の一つてあつた。ある日、開戰の噂が國內に傳はると、總ての佛蘭西人が一夜にして變つた。誰も彼も閉された窓を明けて街へ出た。猜疑も、意趣も、小理屈も拭つたやうに忘れられた。最も極端な平和論者までが武裝すべく用意した。全國民が大きな濤になつた。クリストフは驚いて斯の國民の前途を祝し誓つた。

クリストフはまた遠く故國を顧みて、自ら棄てた獨逸の美點をも會得することが能きた。『凡ての民族、凡ての藝術はみなその僞善をもつ。世界は僅かの眞理と多大の虛僞から成立つ。人の心は純粹の眞理を迎合するには餘りに弱い。その宗教、その道德、その國家、その詩、その藝術の總てが虛僞の味を附けて現はされる。……眞理はいづこでも同じてあるが、銘々の國民は其理想と稱んでゐる所の各自の虛僞をもつてゐる。我等は產れるから死ぬまて之を呼吸し、それが生活の條件のやうになる。たゞ二三の天才者のみが勇敢にして孤獨の苦戰のあとて彼自身を開放し、その思想の自由の世界に離れて住むことが能きる』と、ロランは言つてゐるが、ジャン、クリストフの經驗が丁度それてあつた。彼は獨逸に生れて獨逸の虛僞に反抗し、佛蘭西へ行つてから佛蘭西の虛僞に反抗した。かくて彼はあらゆる國民性を採入れるとともに之を超脫して自由の天地を開いた。後年クリストフはまた以太利へ渡つて、特種な南國の文明、その藝術をも自分の物にした。蓋し著者の意は其主人公をして、ニーチェの所謂『歐洲的修養』を積ましめるに在つたのであらう。

扨て、巴里の塵に隱くされたクリストフは何うなつ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

た。彼は驚いて諸方に突き當つた。彼は過度文明の都會の中へ一人ぼつちで離された自然兒、否な野獸のやうであつた。彼は殆んど度を失つた。然かし彼には力があつた。彼はあらゆる障害を突破して進んだ。彼はその父の死以來、たゞ最小限の生活の權利だけでも得ようと努力しながら、まだ得られなんだ。絶食の幾日かが續くことゝさへあつた。然るに彼は、快豁と稱ふ戰鬪者の尊い德を具へてゐた。ビートーベンの強い性格の一つであり又彼の晩年の作の色調であつた“heroic and joyful scorn”が、クリストフをして惡戰の苦を忘れさせた。

漸く勝利と光明の朝が近いた。拗執な世間も何時までも彼の天才を認めずに置くわけにはいかなんだ。やがて友が來た。彼の半身たるべきオリバーが現はれた。冷索な彼の天地は急に一變した。

私は友を持つた!……吁、困苦の中ばに手賴るべき親切な心を持つことの喜よ。柔しい胸の靜かに波打つ所で、再び呼吸しうる温かく確かな安息所を得た喜よ。最早孤りではない。最早不斷に武裝する必要がない。最早、疲れて敵の手に落ちるまで、燃えるやうな張詰めた眼で斥候に立つ必要もない。……幾星霜かの人生の重荷に疲れ果てたとき、友の身體を通して再び新しい出產と新しい青春を發見することよ。その友の眼を通ほして淨められた世界を觀ることよ。彼の五官を通ほして凡らゆる物の愛らしさを視ることよ。彼の心を通ほして生の輝きを喜ぶことよ。……彼の苦みを苦むことすらよ。……吁、若しもそれが領たれるときは苦みも喜である。

クリストフはオリバーの友情を通ほして廣いフューマンな世界を發見した。二人の性格は丁度正反對の對照をなして互に引き附けた。力と天才との小供のやうなクリストフ、智的で感情的で華奢なオリバー――そのどちらも著者の性格の一部を自叙傳的に現はしてゐる。然かし何れかと言へばオリバーの方がロランの天質に近く、クリストフは寧ろ彼の憧憬の方面を具象したものである。

生命の頂點、創造の杯の溢れ。クリストフ今彼の勝ち誇つた天才に駕して高くから世間を見下した。……やがて友の戀、結婚。若き妻の不信、オリバーの失望、彼の死……クリストフの生活にまた悲嘆と不安の蔭が

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

さし始めた。親友を失つた悲よりも更に大きな悲を彼は作つた。偉大な情欲と恥ぢと悔恨の魔が彼を試みた。彼は瑞西で恩人の妻と姦通した。さんざん運命に蹴られ、運命に追はれた彼は、死ぬにも死なれず、跣足のまま谷を越え森を分けた。孤獨の山中で彼は神に出逢つた。クリストフは丁度ヤコブが天使としたやうな格鬪を『彼』に挑んだ。その戰から再び新たなクリストフが生れた。彼は次のやうな神の囁きを耳にした。『汝は孤獨ではない。汝は汝自身の物ではない。汝は私の聲の一つだ。汝は私の一つの氣だ。私のために叫び、私のために撃て。若し汝の氣が折れ、汝の聲が嗄れても、猶私は私の位置を保つてゐる。私は汝以外の幾多の聲と氣とを以て戰ふ。よし、汝自身は破れても、汝の屬する軍隊は決して征服せらるることがない。されば汝はこの事を感銘して、死ぬまで戰へ。』

靜平がクリストフを訪つた。彼は自分の敗戰を尊重し、自己の力の界限を意識した。彼は自分の賦へられた力の範圍に於て勞作を續けた。やがてみのりし收穫の時がきた。グラジア——久遠の女性——が靜かな以太利の天地に育くまれて彼の晩年を祝福した——丁度ミケランゼロに於けるヴィトリア、コロナのやうに。彼女の靜かな眼の奥には熱い火が燃えてゐた。彼女はGrace その物であつた。彼女はオリバーの缺いてゐた物——喜——をも持來した。クリストフの天才がグラジアの透明に溶けた。おゝ生よ、なぜ私は汝の與へて呉れる物に不足を言ふとが能きよう。藝術、汝もまた彼女のやうに美しく喜ばしくはありえなんだ。ジョコンダ、私はいとせめて貴女の微笑を愛しよう……。』彼等は手を携へて日の蔭から出た。そして幸福の丘に立つた。其處には過去と現在と未來が三人の女神のやうに互に手を束ねた。其處には靜かな心が、一瞬にして産れ花咲きそして死ぬ悲みと喜びを見るとが能きた。其處には凡てが調和であつた。

クリストフの音樂は、最早掻き曇る春の日の嵐ではなかつた。白い夏の雲、雪と金の山巓、靜かに流れる光の鳥、九月の太陽の野に實る穀物であつた。理智と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

本能のシンホニーてあつた。徐ろに開かれた記憶の香筐てあつた。

時は流れる、時は流れる。『いかに早く萬の物が過ぎるかよ、數時間が幾代の勞作を破滅させるに充分てある。』たゞ音樂のみが殘る。否な音樂も何も皆な逝く。斯うして彼は、丁度文藝興期の大家が、十年後には彼等の一つの製作も殘らないとを知りながら、喜んで建築の壁を描いた』やうに、靜かに其創作にいそしんだ。

實際、クリストフは今日の時代の變遷の劇しい事を能く知つてゐた。思へば、彼は十九世紀と云ふ嵐の時代の凡らゆる努力、悩み、失望を一々自分の經驗に懸けて通つて來た。て、その晩年に新しい理想の潮流が各國の青年の間に湧きがけたのを見た。それは力と幸福との復興に就ての憧憬てあつた。彼は稍や奇異の眼を睜つて新古典主義、新カソリズム、未來主義、シンディカリズムなどの叫を聞いた。佛蘭西からは『戰好きな豪慢と行爲との叙事詩』が起つた。復興した以太利は力の福音を説いた。彼等はトルストイの虚無的憐憫、イブセンの破壞的豪慢、ニーチェの狂酔、ワグナーの肉的厭世主義に面をそ向けた。彼等はルナンやアナトール、フランスのやうなディレッタントを唾棄した。彼等の思想の神ベルグソンやジエームスてすらよろめき始めた。て、クリストフは靜かに是等の新氣運を迎へた。彼は十九世紀から廿世紀に跨る橋梁てあつた。『汝今日の人よ。我等を越して進め。汝の脚下に我等を蹈め、そして奮進せよ。汝は我等よりより偉大で、より幸福てあれ。』斯う著者はクリストフに代つて言つてゐる。文明の『正午』は近いた。

各國民は今その力を集中し、その決算表を作り上げる切實な必要を感じてゐる。なぜなら、過古百年間に、凡ての國民は新道徳新智識新信仰を築ぎ上げる爲めに、世界のあらゆる頭腦の交換とそが無限の寄與とに由て改變せられたから。今日は何人も彼の良心を檢め、彼が在る所のもの、彼の持つ所のものを正確に知悉せねばならない――彼が他の人々と與に新しき時代に入る前に。然り、新しき時代は來た。フューマニチーは今生命の新しい借用證に捺印した。社會は新しい法則を以て新しい活動に入りつつある。翌日は日曜日である。誰人がその週間の勘定を濟ませ、家を淨めてゐる、伴れ立つて

我等に共通の『神』のみ前に進み、『彼』と新しい確固な同盟を作るために。

然かし斯様な新時代はいかにして生れたか。勿論それは前世紀の『超人的努力』の結果にほかならない。『彼等の喜びは我等の涙の實であつた、彼等、豪慢な力は全一世紀の勞苦の華てあつた』と、クリストフは言つてゐる。而して彼は實に斯様な犠牲の代表者てあつた。

クリストフの一生にはいかなる苛責（オーディアル）も緩められなんだ。彼は一生偉大な孤獨を守り、單獨の手で運命を拓いて進まねばならなんだ。彼の天才は生の經驗からのみ磨かれた。彼はビートーベンのやうに『悲の後の喜』(Durch Leiden Freude) を知つた。彼の樂天主義は安價な諦らめてはなかつた。彼は恐れず、ひるまず克實の人生を視た。『世の中に唯つた一つの勇氣（ヒロイズム）がある、それは在るが儘に人世を視て——そしてそれを愛することてある』、とロランは言つた。それはラマルチンの所謂『悲惨な然かし尊い處世術』てあつた。クリストフは夙くから其術を覺つてゐた。彼の父は彼がまだ十五歳の時、泥醉して溺死した。若いクリストフは無言の儘父の死骸を見守つた。彼は氣弱い父が生活の戰に堪えないで悶死したその一生を憐んだ。すると、ふとその父の死骸が彼自身に見え出した。『吁、こんな態になるよりは寧そ世界のあらゆる苦勞を忍ぶ方が可い——自分自身を裏切し、死んでまて自分を輕蔑するよりは』と、彼は考へた。人生が戰の形をとつて彼に現はれた。そは世界と自己とを對手にする戰てある。此時少年の耳は明白と神の聲を聞いた。

『進め、進め。決して休むな。』

『しかし神よ、何處へ進めばよいのか。私が何をしても、何處へ行つても同じ事ではないか。この通り死が終局てはないか。』

『行け、死ね。汝死ぬべき者よ。苦しめ、汝苦しむべき者よ。汝は幸福を受ける爲めに生れたのではない。汝は私の法則を充す爲めに生れてゐる。苦しめ、死ね。然かし汝の正にあるべきもの、即ち男であれ。』

ローマン、ロランには多分の宗教的氣分がある。彼

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

は小說家である前に道德家であり、道德家である前に先づ宗教家であつた。しかし彼は如何なる教會に屬する信者でもなかつた。彼はトルストイに私淑した自由思想家であり、ニーチェの傾向を豐富に有した無道德家(アモーラリスト)であつた。たゞ彼はその全的努力に於て『眞理』を信じた。『人間の大きな敵は疑である。我等が善または眞と信ずる物を疑ふことは已めねばならぬ。我等の考へた事は之を信ぜねばならぬ。また我等の信ずる事は之を把持せねばならぬ』と、言つてある通り、彼は天性、强い信ずる意志を有つてゐた。

　ロランの神は無限至上の完體ではない。『永久に戰ふ自由の意志』である。

彼(クリストフ)にとつては、神は冷靜の創造者ではない。金(かね)腦の高樓から自分で火を附けた町の燃えるのを觀てゐるネロではない。神は戰ひつゝある。神は苦みつゝある。凡て戰ふ者、凡て苦しむ者と與に戰ひつゝ苦しみつゝある。なぜなら、神は即ち『生命』であり、闇に落ちた光の一滴であるから。その光は擴がり、突き通し、夜を飮みつゝある。しかし、夜は無限であるから、神の戰は已むことがない。

　この點はジエームスやベルグソンの哲學と相通つてゐる。ロランは嘗てジエームスの著書を讀んで、その思想が彼の『燃ゆる叢』(『ジヤン、クリストフ』第九卷)で現はしたそれと酷似してゐるのに驚かされた。て、彼は次のやうに言つてゐる。『それは、世の中には偉大な見えない潮流、思想の波があつて、非常に違つた色々の精神をも、知らない間(ま)に推流し推上げて進むと云ふ證據である』と。

　或る批評家の言つてゐる通り、ロランは忍苦の德を非常に重く視て之を謳歌してゐる。彼にとつては忍苦は總ての善き物の母である。『病氣をしない者は彼の全自我を知らない』とさへ彼は言つてゐる。然るに忍苦の讚美は基督教の眞髓である。ロランは基督教徒であらうか。否、彼は前にも述べたやうな自由思想家である。この矛盾の謎は彼の生ひ立ち、性癖を見なければ解くとが能きない。

　ロランは中部佛蘭西に生れた土着の生粹の佛蘭西人であつた。彼は畫家ミレーのやうに生れながらの基督

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

教徒たる遺傳を具へてゐた。即ち彼は悲哀と憂鬱と厭世の血を多量に有してゐた。彼が「餘りに弱かつた」トルストイに同情し、ミレーやミケルアンゼロの天才を讀み得たのも、全くその爲めてあつた。彼は稍やルツソーを思はせる自然神教者(ダイスト)てあつた。

海外時事評論

# 英國政界の大動搖

懷沙隱客

## 一

愛蘭自治問題は俄然奇峯千丈の峭、長風紫瀾の壯を英國政壇に現出し、一時は九年間繼續せる自由黨政府の沒落機も迫り來れるかと見えたりき、他無し、政府對軍隊の衝突を惹起したればなり。

顧みるに首相アスキス氏は、前號記載の如く三月九日ウルスターを向ふ六箇年間愛蘭自治より除外する案を建て、之を議會に報告したりしが、統一黨は之に反對し、ウルスターの愛蘭自治除外を永遠的たらしむ可しと主張し、ウルスター人民も、若し政府此種の小讓歩をなすに止まり、飽く迄ウルスターの究極的屈服を期するに於ては、寧ろ戈を執つて起ち、武力に依りて自治法の實施を防止せんと決意するに至りたり、事茲に及んではアスキス内閣も聊か狼狽氣味無きを得ず、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

蓋しウルスター義勇兵數合計十一萬（ベルファスト郡十八大箇隊ダウン郡十個大隊其他合計六十五大隊より成る）、老少强弱を問はざる粗雜なる烏合團體のみ、リチャードソン中將司令官たり、ハッケットペイン大佐參謀總長たりと雖も、之等に依りて有効なる軍隊を造らんこと、石を化して金と成すよりも困難ならん、然れども政府の恐るゝ所はウルスター軍の實力如何にあらず、寧ろ官叛兩軍衝突の瞬時に於て如何なる反響を英國の民論に及ぼすかに在り、首相アスキス、海相チャーチル、陸相シーリー諸氏竊かに以爲らく、如かず愛蘭案未だ議會を通過せず、ウルスター人の反抗準備全からざるに先ち、斷乎彼等の武裝を解き、以て將來の禍根を艾除せんにはと、

茲に於て出動命令は先づ愛蘭ダブリン、カーラーの陸軍に下りぬ、然るにガフ將軍以下將校連ウルスター行を肯んぜず、三月下旬辭表を提出し、政府の計畫は俄然挫折したりき、蓋し英倫、蘇格蘭は勿論、愛蘭軍隊と雖も、其將校は多く英人たり、從つて心中英國を厭ひ、成る可く英國より分離せんとする一般愛蘭人よりも、誠意英國を愛し、英國を離れざらんとするウルスター人に其同情を傾注す可きは、自然の理なるを以て也、況んや彼等の砲劍は國家守衞の具たり、英國の忠臣を征伐せんとするものにあらざるに於てをや。

是時に於ける政府の狼狽は絶頂に達したり、陸軍卿シーリー氏は內閣の同意を得ず、專斷にもゴフ將軍以下愛蘭軍隊に與ふるに「彼等をウルスター征伐に使用せざる可し」との保障を以てし、以て將校連の辭表を撤回せしめたりき、愛蘭軍隊は一應之に依りて鎭靜したりと雖も、政局は之に依りて一大變動を見ずんば止まざらんとす。

## 二

先づ英國內閣は陸相シーリー氏が妄りに「軍隊をウルスター征伐に當らしめざるを約せる」を非とし、首相アスキス氏は此旨を議會に聲明し、陸相シーリー氏辭職し、首相陸相を兼任するに至れり、之が爲め參謀總長フレンチ元帥も亦辭職し、陸軍部內に一大變動を

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

生じたりき、次て陸相兼任の首相は下院議員を辭し、東フアイフ區に於て新選擧を求むるに決す、蓋し下院議員にして新に官職を得れば、一旦議員を辭し再選擧を求めざる可からざるの原則なるを以て也、而して之が爲め愛蘭自治案は、一時其重なる戰闘士を失ひ、議會の形勢、鎭靜の姿なきにあらざりき。

首相アスキス氏の立候補に對しては、統一黨は一大雅量を示し、無競爭にて之が選出を期せしめんとす、然らば則ち其肅颯たる雄姿を議會に見るは近きに在る可く、愛蘭案の議事も甚しく遲延すること無かる可し、左れど其根本的解決の希望は、茫漠として千里の外に存するの感あるを奈何せん。

軍隊に對する保障の取消は、軍隊の服從を意味するものにあらざる也、一たび出動命令を發せん乎、將校逆の辭表雨の如くなる可きこと、誰か亦疑ひを容る可けんや、知らず斯くの如くにして政府の威信、保たれ得可き乎、ウルスターの反抗、鎭壓せられ得可き乎、是時に當つて政府は如何なる措置を執る可きぞ。

決然總選擧を斷行し、事を民論に問ひ、政府勝たば現在の自治策を實現し、敗れなば之を放棄して辭職するも一方法ならん、蓋し統一黨と雖も、總選擧の結果に對しては、一言も無く屈服すること明瞭なるを以て也、是れ第一策也、然かも自由黨政府にして政權に戀々として總選擧を肯んぜずんば、此際聯邦主義を採用し、ウルスターを愛蘭の他の部分より分離し、茲に二箇の自治區域を出現せしめ、他日英倫、蘇格蘭、威斯をも自治區域とするの策を執ること、是れ第二策ならん、固より之には愛蘭黨領袖レッドモンド氏等の反對無きにあらず『愛蘭は一のネーションなり、一にして二にあらず』とは彼等が絶叫したる所なり、又たウルスターは愛蘭財政の寶庫にして租税收入上之を分離せんこと他の愛蘭地方の苦痛とする所なる可し、然かも今日は尋常の秋にあらざる也、頭腦明敏なるアスキス氏、恐らくは愛蘭黨に處するの妙策あらん、吾人は徐ろに氏の巧妙なる措置の如何なる可きかを見んと欲する也。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

# 米墨關係紛糾

米墨關係は、四月中旬、俄然紛糾の度を加ふるに至れり、他無しタムピコ墨國司令官の米國水兵捕縛事件、延ひて米國大西洋艦隊の南下を促したるを以て也

衝突點は禮砲問題に在り、墨國大統領ウエルタ氏は已に陳謝する所ありたるを以て足れりとし、米國旗に對する禮砲發放を肯んせず、之に反し米國は謝罪的禮砲を要求せしが、愈米艦隊出動するに及び、獨佛兩國公使は墨國政府に對し米國の要求に應ずるの可なるを說き、ウエルタ氏遂に動かされて、禮砲を承諾せるも、其代りに米國も右禮砲を承認する答砲を發せんことを求め、今(四月十九日)猶未決定の裡に在り。

吾人は米兵捕縛の問題を說くの意無し、是れ些事のみ然かも認承せざらんと欲するも得ざるは、米國の對墨政策一變の時機に際せることと是れ也。

蓋し米國大統領は昨年七月末駐墨米國大使ヘンリー、エ、ウイルソン氏のウエルタ氏援助說を斥け、雜誌記者ヘール博士の北方憲政軍援助論を採用したるに、其結果は失敗なりしと言ふも不可無し、憲政軍大統領カランザ翁は言論に雄にして實行的手腕を缺き、同軍司令官ウイラ將軍は殘虐酷薄、到底文明政治の人にあらず、殊に本年二月米國は憲政軍に同情を表し、對墨武器輸出禁令を解除し、其武器供給を十分にしたりと雖も、同軍の南進捗々しからず、國內徒らに騷擾を加ふるのみ、次ぎに北方の英人ベントン殺害事件及び之に關する米國の無爲無能が殆んど英國の活動を惹起せんとし、今日迄其事なきを得たりしは、實に英國外相サー、グレーの親米主義の賜に外ならず、然かも最近タンピコ方面の油井、油精砲擊を始め、英國以下列强民の事業にして、損害を蒙むるもの頻々たり、米國にして猶無爲ならん乎、英國以下歐洲も其臣民保護上、止む無く遂に干涉し、累をモンロー主義に及ぼすに至らんこと昭々瞭々たり、是豈米國が其對墨政策を一變す可き時期にあらざる乎。

從つて米艦隊の急派が如何なる結末を見るに係ら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ず、米國は必らずや最早や斷乎たる措置を避くることを得ざる可し、知らず、干渉か、ウェルタとの妥協乎、ウイルソン氏は抑々孰れを執らんとする乎。

## 米哥謝罪條約

米國大統領ウィルソン氏、南米哥倫比亞共和國と謝罪條約を締結す、是れ一九〇三年大統領ロオスヱルト氏執政時代に於て、巴奈馬獨立を煽動し且つ之を援助したる不當行爲を遺憾とする旨を述べ、且つ巴奈馬に關する賠償金として金五千萬圓を支拂ふを約したるもの也。

顧みるに一九〇三年哥倫比亞上院がヘイ、エラン運河條約批准を拒絶するや、米國政治家之を激怒し、爲めに哥國の一州たる巴奈馬の叛亂を敎唆し、紐育を策源地として之に對し米國より軍需品及び軍隊買收資金を供給したりき、殊に哥倫比亞が國家正當の權利として其内亂を鎭撫せんとするや、米國海軍省はボストンナッシュビル以下諸艦に訓令するに哥倫比亞軍の巴奈馬上陸を制止す可きを以てし、又た巴奈馬が獨立宣言を發するや、米國は僅々三日の後之に假承認を與へ、九日の後公式承認を與へたりき、眼中國際法なく國際道德なし、唯た腕力あるのみ、宜なるかな滿天下の輿論深く之を罪したるや。

米國が後れながらも、其不法を承認し、謝罪と賠償とを斷行せんとするは、以てウイルソン氏の良心がロオスエルト氏程痲痺せざるの證左となす可き也、ロ氏曾つて詭辯を弄して曰く「余は巴奈馬を取れり、然かも予の行爲はリンコーンのそれの如く淸し」と、今に於て如何なる感かある。

## 英領と東洋移民

英領コロムビヤ首相サー、リチャード、マクブライド氏及び下院議員若干、三月末加奈陀首相ボーデン氏を訪問し、亞細亞人排斥法制定を主張す、首相、英本

國との關係を說きて之を容れず、爲めに排斥派は三月三十一日期限滿了の英領コロムビヤ勞働者職工入國制限命令を向ふ半年間繼續し、徐ろに移民問題の永久的解決を期せんとすと。

亞細亞人と言ふ、其日本人、印度人及支那人を意味することと言を俟たず、支那人は少焉らく之を措き、印度人は同じく英國皇帝の臣民たり、日本人に至ては同盟の友邦に屬す、首相が容易に其排斥を承諾せざるもの、亦た故無しとせざる也。

遮莫、英領の東洋移民問題は、必らずや今後の難問題たらずんば止まざる可し、況んや加奈陀、濠洲に於てば東洋移民問題解決の爲め加奈陀、濠州、南阿の聯合會議を催うし、聯合決議の勢力に依りて英本國を壓服せんとの意見あるに於てをや。

## 勃國王族米國行

「不幸なる巴爾幹の王」フェヂナンド及王族、米國に遊ばんとすとの說あり、而して王后は本月(五月二十一日)ソフヰア出發、紐育に向ふ可しと言ふ。

アドリアノープル陷落一年祭來れども、其地今や土耳其に復歸して、勃牙利人占領の樂みは、夢幻の如く淡かりき、不信義の塊國、冷酷の露西亞、反覆常なかりし隣邦羅馬尼、塞爾比、何の恃む可き所ぞ、故國を後にして杖を歐洲の山水に曳くも、滿目傷心の種ならぬは無し、如かず、無緣の米邦に向つて、愁腸を太西洋の浩濤に洗はんには、あゝ斯くの如きもの勃國王家の心事にあらざる無き乎。

遮莫、勃國の事も、左許かり痛心するの要あらざる可し、今春選擧はラドスラウオフ內閣に幸ひし、豫算通過、借款契約等、略ぼ既定の事實と言ふも不可ならず、國王と人民と今後協心以て國運の發展に力めば、今日の禍はやがて他日の福となる可き也。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

# 大正博覽會を觀て最も深き印象を得たもの



○　近松秋江

一、全體より得たる印象は、日本帝國の領土が膨脹したといふこと。即ち朝鮮、滿洲、臺灣、樺太を殖民地として所有してゐるといふこと。——どうかして南洋にまで手を延ばしたいこと。

二、臺灣の物産の豐饒なること。就中阿里山材の富麗なる事。

三、染織別館に飾られたる美麗奢澤なる友禪及び刺繡類を見て、國民の趣味上の發展の目ざましきを認めたる事。その華美將さに德川時代を再現せんとす。

○　杉村楚人冠

大正博覽會を觀て僕の最も深き印象を得たる點は到る所に美人を利用せんとせる努力の跡也、演藝館、美人島は言はずもあれ女看守女案内人各種飲食店の給仕に及ぶ限り美人を用ひんとし、看板用の寫眞や人形や殆ど美人を用ひざるはなく殊に美術館の繪畫に今回の如く美人を題材としたるものゝ多きは未だ曾ていづれの展覽會にも見ざる所なり、慥に一代の傾向を窺はしむるに足る。

此の美人渴仰の傾向は早晚一轉して美少年渴仰の傾向に變ずべし、希臘羅馬の末年即ち然りき、今の佛蘭西獨逸亦やゝ此の傾を見る、日本とて末竟に然らざるを得んや、僕は其の喜ぶべきか悲むべきを知らず。

（四月十九日）

○ 上司小劍

博覽會なんて、餘り好きでありませんが、一種の義理のやうに思つて人込みに押されながら、一覽した後に、第二會場(?)にあつた鐵道院出品の汽車の模型、あれを欲しいと思ひました。

○ 中澤臨川

一、各府縣の出品を見て、矢張日本は農業國、生糸國、織物國たるの感を深く致候。

一、機械館に於て餘り珍らしと見し物なきは遺憾に存候。

一、第一會場の建物は氣に入り申候。

一、美術館では餘りの雜沓のため滿谷國四郎君の畫の前に立停りたるのみに候、同君の新畫風は賀するのほか無之候。

○ 笹川臨風

押しつ押されつ、塵埃を吸ひながら、人波とともに徂徠した、大正博覽會では之と云ふ印象もありません。

若し何かと强ゐて問ひ給へば、人形好きの某、高島屋吳服店の人形と其のうしろに玉簾の瀧のやうに水を落した涼しさうな背景とが一番氣に入りました。

○ 沼波瓊音

建築のきたなく粗末極まるのに憤り候。かりに今日京都、大阪等に於てこの程度の博覽會を開くとせむに、必ずこれよりはドッシりしたものを建てることゝ信じ候。

東京人があまりに「間に合はせもの」に平氣になり行くにたゞ〳〵呆れ申候。

申すもかしこけれど明治天皇御大葬の調度も靑山にて奉拜すれば言語道斷の粗品なりしことをも思出され候。

萬乘天子の葬具なほ斯くの如し博らん會の紙細工の如き怪しむに足らざるか。

相當の金は出てゐて、その金の幾分の一だけで物が出來上りあとの金はどこかへ無くなる云ふやうな事は無きかとひがみ心も起り候。

○ 松崎天民

深き印象と云ふ事が、快感に非ずして不快をも意味するならば、即ち速時に答ふるを得べし。博覽會その物の内容に至つては、何等吾人の前に、深く强き印象を與ふるものなしと雖も、その附隨物たる餘興の美人島探險館なるものは、醜惡、劣穢無比のものにして、到底大正の新時代に東京の市中に公開すべき類のものならず。予は大正博覽會を想ふ毎に美人島なるものを聯想して、限りなき不快を感ぜずんば非ず。若夫れ第一會場より第二會場に通ずるエスカレーターなる交通機關に至つては、美人島博覽會當事者の文明心を疑ふに足るべき最大最愚のものにして、美人島

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ど併せて、大正博の二大最劣のものとなす。右のみ。

○ 小川未明

私はまだ開會期間の長いのと、もう一つにはあまり陳列品が多いと見るのが大儀に感ぜられて、つい行く氣になれないのとの二つの理由で未だに行つて見ません。けれど大正の文明をシムボライズしたものとして是非行つて見るべきものゝやうに考へてゐます。印象と申しましては、去月三十一日の夜既に一日の午前二時頃車で上野停車場前から、池の端が通りました時に晝を欺くやうに電燈が街を明るく照らしてゐました。これを見て壯なことゝ思ふうちに、贅澤なごとだといふ感じがいたしました。人一人通らない街が空しく照らす、これも皆な金だからであります。

○ 高安月郊

別に無し、唯朝鮮館の高麗時代の茶碗には暫く足をとゞめ候。

○ 林田源太郎

一、主催者は博覽會を興行的に取扱つてゐる、本館の建築の如き、新意はあらうが威嚴(デグニチー)がない、恰度(ちやうど)見世物小屋でもあるやうに見える、其の他(ほか)、福引をやつたり、協賛會で活動寫眞を營業したり、體育館の踊(をどり)に場内を練(ね)り歩かせたり、又は興行物の醜い建物を正門前に許可したりなどして、眞面目に博覽會の利益を世間に與ふるといふことよりも、お祭騷をやつて低級趣味に媚びるといふことを主眼としてゐる、前號の貴誌に載つた山脇春樹氏の博覽會論は、此の傾向に對して警告したアイロニーであるやうに思はるゝ。

一、出品の蒐集とか配置とかといふ設備の方面に就ては、多少此部當事者の努力を認めらるゝが、出品そのものに至つては、特に此の博覽會の爲めにしたといふ何物をも見當らない、明治四十年の際(さい)と今回とを比較すると出品者の意氣込(ごみ)に非常な相違があるやうに見える、又、陳列でもさうだ、四十年の際には、人形を應用したのが極めて多かつた、然るに今回は餘り見受けられない、然らば、それに代つて、何(ど)んな新陳列法が現はれたかといふと、それは何にもない、それだけ、今回の陳列は振つてゐないのである。

○ 中村吉藏

拜復。旅行や何かで忙しくて、まだ一度も見に行きません、唯夜の暗に美しい光の點線で描きだされたイリユミネーションだけは遠望しました、その中見に行きませう、見ない中が樂みのやうにも思はれます。(四月二十日)。

○ 田村俊子

御返事おそくなりました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

南洋館の番人の踊りがをもしろくつてたまりませんでした。蜜柑を一とつまんなかにおいて、剣を持つた男がその周圍をいろ／＼な動作を現はしながら廻つてゐたのが一番をもしろかつたのです。蜜柑を取らうか何うしやうかといふ心持を動作に見せた踊です。どの踊りも小供が馬鹿踊りの眞似をしてゐるやうでおもしろいのです。

○　武者小路實篤

貴社から御電話をおかけ下さつたさうですが不在で失禮いたしました。實はまだ博覧會にゆきませんので、行つて何か感じたことがあつたら御返辭しやうと思つてそのまゝになつてをりましたのです。まだ博覧會に行かないと云ふと何とか思ふ人もあるかも知れませんが、その内に行かうと思つて何時でもゆけると思つてつひまだゆかなかつた許りなのです。その内に田舍から人が來たら一緒に行かうかと思つてゐます。恐らく博覧會にゆけば一番着かざつてゐる多勢の見物人に興味をもちさうな氣がしますしかし行つて見ないのですからわかりません。

○　正宗白鳥

小生博覧會は外を一度花見がてら廻りしのみにて内部はよく存ぜず候故お返事差上げかね候。

○　岩野泡鳴

第二工業館第十一號にある如意輪塔の模型を或日、わざ／＼見に行きました。製作者は上司氏の小説の材料にもなつたお宮師で、僕の家の女中の父に當る人。ちよッと天才じみたところがあつて、この模倣若しくはほんのただの實存物再現の爲めにも、殆ど日常の起臥を忘れて一生懸命になつてゐたのです。そして出來上ると、成るべく安い方が買ひ手が付くと云つて、實地見聞費いくら、銅張り賃いくら、うるしいくら、木材いくらとし、實費賣却二百五十圓とつけてある。これを見て、僕は左甚五郎でもこのやうな職人であつたらうと思はれました。ただ後者には幸ひにも、もッと獨創の才があつたので、後世までも名人と歌はれた。模倣と獨創とは、實に、ちよッとした違ひで千里の差を生じます。僕はこの如意輪塔の製作者を以つて、さう云ふ人を要求する時代であつたらきッと名人になれたものにと思ひ爲しました。今日では、もう、さう云ふ人は模倣しか要求してゐないのです、たとへば能や淨瑠璃に新作を要求しなくなつた様に。これが時勢の一方面を示めしてゐるのでしよう。

○　高島米峰

拜復。小生三月末より大多忙にて未だ一度も博覧會場に入りしことなく從つて折角の貴問に答ふる何ものをも有せざることを遺憾と致候、たゞ一夜所用有之上野へ參り候節池の端の夜の粧を瞥見して電氣と瓦斯との威力の强大なるに一驚を喫し申候敬白(四月十七日)。

○　有島生馬

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大博美術館の洋畫部を見る。所謂二科運動なるものゝ有意義なりしは誰も公開されたる事實に照して、今や最も明かなる證明を與へられたるを感ぜしならんと信ぜし事。

○ 徳田秋聲

博覽會は未だ見る機會がありませんから、殘念ながらお答申すことが出來ません。如何いふものか、あゝ云ふものには私は興味を感じません。

○ 木下杢太郎

博覽會をみて小生の感じたることは、少くとも造形美術の範圍で日本の今の文明が安價な模倣的なものだといふことでありました。

○ 長田秀雄

博覽會にはたつた一度行つたばかりですがもう決して行くまいと思ひました。建物と云ひ看守の服裝と云ひ氣持が惡いばかりです。日本全國が不忍池の近傍へ一緒に壓し付けられてゐるやうで誠に不調和な厭な感じがしました。私は朝鮮館と云ふ處を見るのを樂しんでゐました。そしてそこの朝鮮娘から人參湯を呑まして貰ふのを夢想してゐました。併しそこには時代の色も周圍の光景もありませんでした。安價な物悲しい女が藥のやうな味のする湯を持つてきただけでした。博覽會はお役所の統計表のやうな無趣味極まる物ですよ。

○ 石井柏亭

大正博覽會に關係して居ながらまだ全體を悉しく觀ないので、何が最深い印象を自分に與へたか分りませぬ。第一會場のムーア式音樂堂は奇麗に出來ました。滿開の櫻と相映じたときは殊に奇麗でした。

昨夜耕餐軒に會があつて、はじめて夜の博覽會を觀ました不忍池を取卷くイルミネーションは今迄にない奇麗さだと思ふのに諒闇中と云ふ譯でもあるか人出の少いのは惜しいものです。

## 新刊批評と紹介

今月は甚だしく事務の繁忙を來し、爲めに寄附の書籍に對して一々閲讀紹介するの機會を得ませんでした。寄附者諸君には御氣の毒ではあり、讀者諸君に對しても餘りに不深切なやうな氣がして記者自身に於いても甚だ不本意ですが、今回に限り左に書名のみを列擧して批評に代へることに致しますから何卒諒とせられんことを希ひます。

△ノア、ノア（定價金壹圓）　小泉鐵著　洛陽堂發行

△都會病（定價金壹圓二十錢）　永代靜雄著　北文館發行

△財界の人百人論　矢野滄浪著　時事評論社

△シユライエルマッヘル宗教論（定價金二圓）　石原謙譯　内田老鶴圃發行

△藝術と民育（定價金一圓二十錢）　西田宏譯　冨山房發行

△未來（定價金六十錢）　西村寅次郎編　東雲堂發行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

△理想の青年 ジョン・ハリファックス（定價金壹圓五十錢） 山崎直三譯 尙文堂發行

△通俗講話 秋の天地（定價金壹圓） 五學士著 東亞堂發行

△財政十年（定價金壹圓二十錢） 山縣明七著 籾山書店發行

△大禮要義（定價金五十五錢） 手塚虎太郎著 博文館發行

△東京の印象（定價金八十錢） 本間國雄著 南北社發行

△ショーペンハウエル隨想錄（定價金壹圓廿錢） 增富平藏譯 玄黃社發行

△通俗教育道話（定價金三十錢） 安藝愛山著 大日本雄辯會發行

△紺青の夜（定價金六十五錢） 岩井鱶汀著 シャルル社發行

△火の娘（定價金六十五錢） 荒木郁子著 尙文堂發行

△"Manchuria & Chosen" (an Official Guide to Eastern Asia VoL-I) 鐵道院發行

△カンディダ（定價金六十錢） シヨー著 河竹繁敏譯 早稻田大學出版部發行

△二どめの獨逸（定價金八十五錢） 志賀潔著 南山堂發行

△エルジエ・リントネル（定價金八十錢） カンリ・リヒアエリス著 佐藤緑葉譯 以文館發行

---

△智慧と運命（定價金壹圓） メエテルリンク著 大谷繞石譯 南北社發行

△戀人（定價金五十錢） 吉井勇著 橘屋書店發行

△露風集（定價金九十錢） 三木露風著 東雲堂發行

△バットラー夫人（定價金五十錢） 矢島楫子著. 警醒社發行

△いき馬の目（定價金九十錢） 萬丈洞主人著 東亞堂發行

△幸（定價金壹圓八十錢） カール・ヒルティ著 平田元吉譯 東亞堂發行

△信仰の歸趣（定價金一圓九十錢） 高田道見著 佛教館發行

△近世文學三人（定價金一圓四十錢） ゴーリキー著 吉江孤雁譯 早稻田大學出版部

△現代哲學藝術の起源（定價金一圓八十錢） イルジョー・ヒルン著 本間久雄譯 早稻田大學出版部

△縮刷修養（定價金壹圓） 新渡戶稻造著 實業之日本社發行

△雨江全集（定價金二圓三十錢） 武島羽衣 大町桂月 編 博文館發行

△徒然草講話（定價金二圓八十錢） 沼波瓊音著 東亞堂發行

△犧牲（定價金壹圓七十錢） ダンヌンツイオ著 加藤朝鳥譯 植竹書院發行

△岩崎彌太郎（定價金九十錢）

△太閤の豐臣秀吉 卷上下（定價金壹圓二十錢） 山路愛山著 東亞堂發行


Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

△碧堂絶句（定價金三十五錢）
△山水と人物（定價金五十錢）
△郊外（定價金四十錢）
△第一歩（定價金六十錢）
△海の夫人（定價金九十錢）
△慶應義塾大阪講演（定價金九十錢）
△名家短篇叢書第一編春の鳥（金五十錢）
△ヘロドトス（金二圓五十錢）
△白中黃記（定價金七十錢）
△基督教の根本問題（定價金一圓六十錢）
△基督教大意（定價金五十錢）
△帝國憲法の話（金六十五錢）
△家庭紛爭の研究（金七十五錢）
△心理學審義（定價金四圓八十錢）
△動的青年訓（定價金七十錢）
△新自由主義（定價金一圓廿錢）

綠圖著 東亞堂發行
田邊俊三郎著 東京堂發行
高橋竹迷著 鴻盟社發行
水野葉舟著 岡村盛花堂發行
相馬御風著 創造社發行
イプセン著 島村抱月譯 早稻田大學出版部
慶應義塾出版局編 籾山書店發行
長田幹彦著 塚原書店發行
阪本健一譯 隆文館發行
內ケ崎作三郎著 實業之日本社發行
富永德磨著 警醒社發行
田村直臣著 警醒社發行
清水澄著 實業之日本社發行
石田孫太郎著 日東堂發行
稻來友吉著 寶文館發行
茅原華山著 東亞堂發行
ウイルソン著 關和知譯 勸學社發行

---

△世界風俗大觀（金一圓五十錢）
△末路のナポレオン（一圓半）
△國民經濟學原論（定價金一圓六十錢）
△佛典の研究（定價金九十錢）
△高杉晉作（定價金一圓）
△滿蒙處分論（定價金一圓）
△靖献遺言講話（定價金一圓）
△親分子分浪人篇（定價金八十錢）
△芳水詩集（定價金四十錢）
△蝙蝠第八編（定價金十錢）
△復活（定價金七十錢）
△ショウ警句集（五十五錢）
△新時代の青年（一圓二十錢）
△警句集女と惡魔（定價金四十錢）
△へちまのかは（壹圓廿錢）
△不朽の戀（定價金八十五錢）
△米國膨脹論（定價金二圓）

前田太郎編 東亞堂發行
長瀨鳳輔著 隆文館發行
グスターウ・シュモラー著 山田伊三郎譯 富山房發行
松本文三郎著 丙午出版社發行
村田峰次郎著 民友社發行
クロパトキン將軍著 大井包孝譯 民友社發行
加藤咄堂著 東亞堂發行
白柳秀湖著 東亞堂發行
有本芳水著 實業之日本社發行
福田重作編 蝙蝠發行所發行
トルストイ作 島村抱月脚色 新潮社發行
荒畑寒村著 泰平館發行
石田新太郎著 籾山書店發行
安成二郎譯 新潮社發行
杉村楚人冠著 至誠堂發行
ピエール・ロチ作 矢口達譯 新陽堂發行
正岡猶一著 隆文館發行

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

△趣味叢書 都市の美觀と建築（一圓）黒田鵬心著 趣味叢書發行所發行

△紅あざみ（定價金一圓）尾島菊子著 日比谷書院發行

△現代文藝叢書第三十五篇 蛇つかひ（廿五錢）江馬修著 春陽堂發行

△榮譽（定價金壹圓）ズーデルマン著 蘇武利三郎譯 山陽堂發行

△婦人と道德（定價金八十錢）エレン、ケイ著 本間久雄譯 南北社發行

△近代西洋文藝叢書 死の如く強し（壹圓）モウパッサン著 中村星湖譯 博文館發行

△ロダンの藝術觀（一圓五十錢）木村莊八譯 洛陽堂發行

△戀女房（定價金壹圓）泉鏡花著 鳳鳴社發行

△艶（定價金八十五錢）谷崎潤一郎著 鳳鳴社發行

△罵倒錄（定價金一圓廿錢）村上浪六著 至誠堂發行

△男日女日（定價金五十錢）むら子著 磯部甲陽堂發行

△機智の妙用（定價金七十錢）破魔禪居士著 東亞堂發行

△平民詩人（定價金五十錢）內村鑑三 畔上賢造 共著 警醒社發行

△世界的新偉人 ウヰルソン（七十錢）横山時彥著 發賢堂發行

△清朝全史上下（各金二圓五十錢）稻葉君山著 早稻田大學出版部

△詩集 太陽の子（定價金九十錢）福士幸次郎著 洛陽堂發行

△趣味叢書 趣味雜話（定價金一圓）黒田鵬心著 趣味叢書發行所發行

---

△現代文藝叢書第三十四篇 古都情話（廿五錢）後藤末雄著 春陽堂發行

△アカギ叢書 人形の家（拾錢本）イプセン作 村上靜人譯 赤城正藏發行

△現代文藝新語辭典（八十五錢）大畑匡山著 東條書店發行

△近代西洋文藝叢書 處女地（定價金壹圓）ツルゲーネフ作 相馬御風譯 博文館發行

△國民性の上より觀たる鏡の話（定價金並製五十五錢上製六十五錢）石橋臥波著 人文社發行

△小泉八雲（定價金壹圓八十錢）田部隆次著 早稻田大學出版部

△全譯ドンキホーテ（定價金壹圓五十錢）佐々木邦譯 東亞堂發行

△文藝と人生（定價金壹圓卅錢）藤代禎輔著 不老閣書房發行

△ニーチエ（定價金九十錢）久津見蕨村著 丙午出版社發行

△ベルグソン哲學の眞髓（定價金壹圓廿錢）稻毛詛風 市川虛山 共著 大同館發行

△秋風の歌（定價金六拾五錢）若山牧水著 新潮社發行

△英和對譯脚註近代劇叢書第一篇 ポオラ（定價金八拾錢）ピネロ作 中越新二譯註 敎文館發行

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

# 外人にして日本を紹介したる——
# ——世界的文豪を見よ

小泉八雲夫人校閲 田部隆次著

新刊

# 小泉八雲

（岡野畫伯裝釘）

菊版布製全一冊
紙數五百三十頁
寫眞版十八葉入
正價金壹圓八拾錢
郵稅金拾貳錢



LAFCADIO HEARN
（小泉八雲）

●自ら「**日本人以上に日本を愛す**」と言つて日本の爲めに十五年を捧げ十三部の傑作によりて日本の紹介、辯護、解釋を務めし世界の文豪**ラフカデイオ、ヘルン**又の名小泉八雲の「**事實は小說よりも奇**」なる事蹟を讀め。

●英人を父とし希臘人を母とし希臘に生れ、幼にして父母に別れ英國と佛國に成人し米國に立身し最後に**歸化して日本臣民となり佛教を以て葬られたる最初の西洋人**なりし此の世界的奇人の面目を見よ。

●その著書二十餘種歿後其文名益々上り今や一部の原稿數萬圓を以て市場に取引せらるゝに到りし、盲目に近き片目の文人が如何なる努力修養を積んで一步一步世界の文壇に於ける其地位を占むるに到りしかを知れ。

●著者は忠實に此天才の一生を普く江湖同好の諸君に語らんと欲す。

發兌 東京牛込早稻田 振替一一二三番 **早稻田大學出版部**

（賣捌） 神田 東京堂 京橋 北隆館 其他 日本橋 至誠堂 大阪 盛文館

（中付三の一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

# マツダ電燈球

●電球界に於ける
優秀、堅牢、耐久、なる語は
チーイー マツダランプの
獨占する所となれり

●大正博覽會會場に煌々として
輝く十六萬燈は悉く之れ
チーイー印マツダランプなり

營業部東京出張所
東京銀座尾張町
電話新橋(三二一二)

東京電氣株式會社
神奈川縣川崎
電話川崎(一〇一、一〇二、一〇三)

關西九州代理店
バグナル、エンドン、ヒレス合名會社
大阪出張所、門司出張所

北海道代理店
三井物產株式會社小樽支店

(中付三の二)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■智慧と勇氣と幸福とに渇せる日本の思想界に薦む

文學士 阿部次郎著

# 三太郎の日記

●紙數六百頁布裝函入
●定價金壹圓送費八錢

自己と人生とに信頼を失ひたる暗黑と疑惑の時代より漸次に其信頼を恢復し遂にやみがたき生命の渇望に向ひたる三太郎の力强き心の開展の記錄なり。弱くしてやがて强き人間の心を示せる書なり。この書を心讀するものは純樸にして雄々しく熱烈なる神に近づかんとする人間の姿を見るべし。その他著者の人生と文藝に對する評論隨筆及附錄として若きゴオホ、ゴオホの藝術の二篇を添ふ。新思想界最初の蜂火なり。

平塚明子序 伊藤野枝譯

# 婦人解放の悲劇

●菊半截三百頁美本
●定價金六十錢送費六錢

■附錄 エンマ・ゴルドマン小傳 エレン・ケイ小傳

婦人を解放せよ、婦人よ自覺せよ、といふ叫びは漠然と聞へる。けれども眞實なる解放とはいかなるものなるかに就て我々は眞に理解ある忠告をきかない。この書、エンマゴルドマン、エレンケイ二女史の婦人問題論四種を譯輯し混沌たる日本婦人の前途に一道の光明を與へんとするものである。

■五月號出來

# 生活と藝術

毎月一回一日發行
定價一冊金拾八錢
三ヶ月分金五十四錢

(中付三の三)

發行所 東京市日本橋區檜物町九番地 (振替貯金東京五六一四) 東雲堂書店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

# 厨川白村著

上下二千年歐洲思潮の變遷を概觀し現代文學の根柢に對する文明史的解釋を試みたるは本書也

新刊

# 文藝思潮論

曩に「近代文學十講」に於て未だ說かざりし最近の新傾向にも論及して全篇を結べる明快の論斷に願くは一讀の榮を賜へ

四六判二百五十頁　一冊清裝函入

價壹圓

地方小包八錢

廚川白村著　近代文學十講　價壹圓八拾錢

小山內薰著　近代劇五曲　價壹圓

東京京橋區銀座壹丁目　大日本圖書株式會社　郵便振替東京二一九番

（中付三の四）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

# 鮮血

小川未明

## 一

醫者が來たのは夜中てあつた。電燈の光りのよく屆く處へ、其の病氣に罹つてゐる女の兒を床の儘、靜かに引摺つて來てから、醫者は仔細に體に觸れて見た。而して猩紅熱てあると診斷したのてある。

醫者が歸ると急に家の裡が寂寞を感じた。今迄て何處かに潛んでゐた病魔が、急に頭を擡げて來るやうに思はれた。正助は明日になつたらこの兒を避病院へ送らなければならぬと心の中ては決めたものゝこの一夜を何うして送るだらうと思ふと不安てならなかつた。

また舊臥かして置いた三疊の室に病兒を引摺つて來た。茶の間に臥てゐる弟とは、座敷一間を隔てゝゐるものゝ弟に傳染しはしないかといふ心配が一通りでなかつた。

弟が四つて、姉はまだ六つてあつた。妻は病兒一人を病院へやるに忍びなかつた。これについて正助と相談をしてゐると、獨りて臥てゐた弟が眼を醒まして泣き出した。毎夜、弟は母親とでなければ眠らぬ癖が付いてゐたからてある。妻は直に起つて、弟の臥てゐる茶の間へ行つた。

細い小さな聲て子守唄をうたひながら子供の脊中を叩いてゐる妻の聲が聞えた。正助は何時になく其の聲を哀れに感じた。いつしか其の聲は弱はつて行つた。細い糸のやうになつて切れてしまつた。もはや聞えなかつた。正助はしばらく經つてから、妻を呼んで見た。けれど返事がなかつた。

病兒もいつとなしに眠りに陷つた。けれどたへず惡夢に魘されてゞもゐるやうに時々聲を立てた。また熱のために體を悶掻いて、手足を動かした。顔は蟹の甲良のやうに赤く、無數の發疹があるにかゝはらず、唇の周圍だけがくつきりと眞靑になつてゐるのも氣味惡かつた。

正助は、かうして病氣に罹つてゐる兒の枕許に坐つて、苦しさうな樣子を見守りながら藥も與へずに、空しく明日を待つてゐるのは見殺しにするものゝやうな氣がした。

彼は雨の降る日に外から着物を濕らして入つて來た女の兒を叱つた。其の日の夕方晩飯を食べる時に少女は體が倦怠いと言つて箸を取らなかつた。其時も彼は叱つたことを思ひ出した。正助はもしこの病氣が癒らずに病兒が死ぬやうなことがあつた時にはいろ〱叱つたことを後悔するに違ひなからうと思ひ、是れからも決して子供を叱らないやうにしやうと考へながら、音のしないやうに雨戸を開けて外を眺めた。

庭の新綠は闇の裡に蹲まつてゐる魔物のやうに漠然とした形が浮き出てゐた。草も、木も眠つてゐる

やうてあつた。香氣は淡く空氣に漂つてゐた。空は夢のやうに茫然として、知覺の鈍さうな星の光りは、極めて遠い處に微かに瞬きしてゐた。眼に見えない、霧が折々懸ると見えて、星の光りが消えることもあつた。世間はすべて死の如く靜かである。人間はかゝる夜の間に精神と肉體とを休めて置いて、日が二たび地平線を視いた時に起き出て活動するやうに出來てゐる。然るになぜ自分等ばかりは、この夜を平靜に眠ることが出來ぬのであらう、かうして、隣家も、近所の家々も眠靜つてゐるのに、而して健康て、平和であるのに、なぜこの忌はしい、怖るべき病魔は自分の家にばかり訪れて來たのだらう。人間はかゝる自然の不公平な處置に對して、誰に向つて訴へ、また怨んだらいゝのであらうか。

正助はしばらく、窮りない侮辱を被つた時のやうな腹立しい感じを抱いて、庭頭(にはさき)に突立つたまゝ空を睨んだ。無關係に微かな星の光りが見えたり、見えなくなつたりしてゐる。病兒も、また妻も、今自分が此處に苦しい、惱ましい、また腹立しい思ひに悶えて茫然として立つてゐることを知らない。自分の外は自分のことを知るものがない。せめて彼の星だけでも、自分を氣の毒だと言つてくれたならばと思つた。この默つた、欝陶しく、黑い木立でも、「私だけは知つてゐる」と言つてくれたなら、自分はどんなに嬉しいだらうかと思つた。正助は胸が塞つて來て、咽喉を堅く締められるやうにたぢ〳〵となつた。

## 二

けたゝましい泣聲がした。

「お母(かあ)さん――」とつゞいて叫ぶ聲がした。

正助は慌てゝ其の聲のした病兒の枕許に驅け付けた。妻も、走つて來た。見ると顔が血に染つてゐた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

「鼻血が出た‥‥」と妻は言つて勝手許へ急いで行つた。
「熱のせいだ。明日になつたら直に癒る‥‥」と子供を慰はりながら額際に觸れて見ると熱のために手が燃えるやうであつた。やがて銅盥の中の水は赤く染つた。
「早く夜が明けるといゝがな」と正助は小さな聲で言つた。
「それまで、かうして置いてもいゝものでせうか‥‥」と妻は氣遣はしさうに、またいつしか眼を閉じて眠りに付きかけた病兒の様子を見て言つた。
「何うしていゝか分らない。醫者は明日の朝届けを出すと言つたから、午前の中に病院へ送られるだらう。其の方が傳染する心配もなくていゝ。お前が從いて行くのだ。後は何うにでもするから」と正助は言つたものゝ、何うしたらいゝかと直に心の中で思ひ惑ふのであつた。
「弟が、獨りで毎晩眠ますか知らん。』と妻は長い間、殆んど生れてから今日までさうして來た子供の習慣が容易に改められるものでないと信じて、其れだけが氣にかゝるらしかつた。
「まあ、よく言ひ聞かすより他に仕方がない』と正助は言つた。彼はたとへ子供にせよ大人に共通した靈魂がある。たゞ慈愛と誠意とを籠めて、其の靈魂の眼を開かなければならぬと感じた。
「この兒は不憫な兒です。早くから乳離れをして、後が出來たゝめに、夜も獨りで寢せられ、またこんな病氣に罹るなんて。もし死にでもしたら、私は思ひ切りが惡るくてなりません。きつと私の一心でもこの兒の病氣は癒して見せます。』と妻は泣いてゐた。
薄紙を剝ぐやうに、夜は漸く明けて、窓が白んで來た。雨戸を繰ると鼠色の光線が音もなく忍び込ん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

て來て、何時の間にかすべて室中を占領した。庭頭の木立は物憂く曇つた空に脊伸びをして、濕つぽい風が葉蔭に囁いてゐた。其處にはまだ闇が斑點になつて、逃げ後れて殘つてゐた。彼は昨日と變りのない黄色く褪めた壁紙を見た。埃のかゝつた額を見た。いづれも生々とした光りがなく永久に其處でくすんで居るべき運命を思はせた。

何時、區役所から車が病人を迎ひに來るか分らなかつた。正助は妻に持つて行くべき着物などを弟の起きぬうちに行李へ入れて置くやうに言つた。弟が眼を醒ましても、決して姉の臥てゐる室には入れてならぬと堅く注意をして置いて、自分は帽子を取ると慌てゝ家を出た。

心配と睡眠不足のために氣がいら〳〵した。重苦しい程に緊つた濃い色の厚味のある羅紗を被つたやうな新緑の梢から、香りの高い滑らかなうす絹のやうな、曉の靄が離れつゝあつた。街に出ると昨夜からの電燈が力なくぼんやりと夢のやうに幾つも點つてゐた。靜かな空氣に早くから傳はつて來る電車の軋り音が、空虚な頭に刻むやうに神經を焦立たせた。正助は橋の上に來た時に、ふと醫者を迎ひに通つた時分のことを思ひ出した。賑かに光りの海が望まれて、着飾つた女が通り、車が過ぎ、活動寫眞の樂隊が聞えた、其等の幻象は何處にか消えてしまつた。かういふ跡形もない幻象が繰り返へされる。其の間に笑ひ、叫び、悲しんだ人間が死んでしまひ、また新しい人間が生れて來る。やはり同じい幻象が繰り返へされる。人間は笑ひ、叫び、悲しむ。而してまた、其等の人々も死んで行くのであらう。正助は醫者に出すために苺を買つた橋の袂にある果物店を振返つて見た。夜深くまで商賈をしてゐたので、まだ店が閉つてゐた。

『玩具屋もまだ起きてゐなからうか？』と疑ひを感じながら、狹い通りに入つて、二步、三步行くと、赤い旗が白い淡い靄の中から冷たく瞳に染んだ。

玩具屋の女房は三十二三であつた。まだ床から出たばかりと見てえ、頭髮が壞はれた儘であつた。肉の心持ち落ちた、白い頰の上に亂れた髮が艶めかしくかゝつてゐた。正助は玩具を手に取ると直に寂しい病院の硝子窓の下の白布のかゝつた寢臺の上で、弄ばれることを思つた。其れに適當したものには、何か好い音色のするものと、怠屈を紛らかすやうな種々の取合はせのあるものゝ方がいゝと思つた。其れて啼く人形と、お勝手道具とを女の兒のために買つた。他に弟にやるつもりて男の兒持の玩具を買つた。

店から外に出ると、往來には漸く勞働者の仕事に行く姿が見られた。太陽は東から上つて、またこの世間に起る一日の活劇を見守らなければならぬといふやうに、黃色な光りが町の瓦家根を明るく彩つた。

三

正助は病兒の枕許て紙包みを解いて中から玩具を出した。赤い着物を被た人形は、驚いた眼付きをして、見慣れぬ世界を見る樣子である。子供は直に其の人形を取り上げて、さも可愛らしさうにして、顏に近く持て來て其の美しい顏に見惚れた。熱のある眼の中が血のやうに紅かつた。晝間見ると一層唇の周圍が靑かつた。

『他が赤くて、此處だけ靑白いのが猩紅熱の特徵です』と昨夜、醫者が言つたのを思ひ出した。大分煤けてゐる窓の障子から射す光線は室の中を、また不幸な子供の上を物哀れに晒らした。正助は、

『この人形と、お勝手道具て獨りて遊んでゐるのですよ。お前の病氣が坊ちやに染ると可哀さうだから、

おとなしく獨りで遊んでゐらつしやい。』と子供の顏を覗き込んで言つた。まだ鼻の下には血の跡が僅かに付いてゐた。子供は默つて頷いた。何處かにあきらめなければならぬといふ小さな心の働きが覗はれた。彼は弟が入らないやうに間の襖を閉めて、手を消毒してから茶の間へ來た。弟は鐵砲を持つて嬉しがつて遊んでゐた。妻が正助の所へ行つた留守に、今日からおとなしく父親と二人でゐることを言ひ聞かしたと見えて、

『お父さん、今日から二人でお留守居してゐるんだねえ』と顏を見ると子供は元氣よく言つた。

『あゝ、さうだ。』と正助は力なく其處に坐つた。小さな行李には、子供の着換へと妻の着換へが入れられてあつた。彼は其處に昵としてゐることが出來なくて、二たび町へ出て行つた。狹い家と家との細道を入つて、突當りの汚ならしい口入宿に來て、彼は女中を頼んだ。血眼の頭髮の薄い四十前後の女が足尖から頭の上まで正助の身形をぢろりと見て、處を帳面に扣へて置いた。彼は子供のあることも、隔日位に病院へ使ひに行かなければならぬことも語つた。

もう、日にまし太陽の光りが强くなつた。乾いた土の上に白く煙り、新綠の木立を銀のやうに燃やした。水色の絹の洋傘を透して、日の光りは女の顏を明るくした。すべてが夏の近づいたことを感じさせた。

『坊が言ふことはを聞かんで、姉の臥てゐる室へ行きたがつて困ります』と妻が歸つて來た正助を見ると言つた彼から弟によく言つてもらひたいと言ふのであつた。

其時、弟は閉め切つた襖と此方に立つてゐて襖の柱の隙間から、姉の方を覗いてゐた。彼は昨日まで

共に二人で遊んでゐた姿を思ひ出した。急に二人の間を分けることの無理なのを思つた。默つて背後に立つて、子供の樣子を見守つた。伸び上つた脊はやつと引手の處までしか達しなかつた。縮れた頭髮は柔かで香りのする枯草を思はせた。少しばかり光線の洩れる間から、內側の樣子を探らうとしたけれど、姉の顏は見えなかつた。今迄何の氣にかけずに開け閉てした襖が、急に子供等には怖しい關門となつた。而して、二人はもはや決して遇ふことが出來ない、或は永遠に相遇ふことがないかも知れぬと正助にも考へられた。弟は姉に物を言ふのさへ惡いことだと思つて、憚つて聲をもかけずにたゞ見やうとしてゐた。

　室の內側から、人形の啼聲がした。其れは弟のまだ見ない、何んだか氣の付かないものであつた。

「坊ちや、これ何か？」と姉は淋しさに堪へられず言つた。弟が其の音に誘はれて、平常のやうに襖を開けて來るのを待つてゐた。弟は直ぐ襖一重を隔てゝ其處に來てゐたけれど入つて來なかつた。やはり僅かばかりの隙間から懷かしい小さな影の絕へず動いてゐるのが姉には分つてゐた。

　また、ピッ、ピッと人形の啼く聲がした。

「これ何か？」と姉の淋しさうな、賴りない聲で弟を呼ぶのが聞えた。弟は引手に小さな手をかけて、ほんの一二寸開けにかゝつた。

「姉ちやんは病氣なのだから、行くとお前も病氣になるのだから、傍へ寄つてはいけない。其處を閉めて置くのだ。」

「姉ちやんも、おとなしくて臥てゐるんですよ。」と正助は言つて、無理に襖を閉めた。けれど眼に涙の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

染むのを覺えた。なんといふいぢらしいことであるかと思つた。

この姉弟は、果して二度顔を見ることがあらうか。彼は女の兒を是迄叱つた、一つ一つの記憶を呼び起して、無理由なことで叱つたこともあつたと後悔した。

姉は、二たび弟を呼ばなかつた。人形の啼聲ばかりがいつまでも聞えて來た。其の細いやるせない、哀れな啼聲は、この灰色の室から、はてしない遠い世界へ孤獨の旅をつゞけても行くやうに消えて行つた。

空がどんよりと曇つた。垣根の唐橘の新芽が白く、身動きもしない寂然とした空氣の裡に光つてゐた。時間は物憂く經つた。午後一時頃、家の前に洋服を着た男と、巡査と、人夫と人力車が一臺に、他に大きな箱車と消毒罐が、怪しい侵入者の如く一固りとなつて眼の中に集つた。正助は豫期してゐたことであるが急に胸が騷いて、其れと同時に其等の人々に面會するべく戸口まで出た。巡査は默つて立つてゐた。役人が帳簿に職業と家族の年齡及び原籍などを書き止めた。罪人のやうに鋭い注意と警戒で病兒は人力車に乘せられ、今迄着てゐた衣類や、夜具は一束に荒繩で括られて箱車の中に収められた。妻は慌てゝ病兒に從いて車に共に乘り合つた。妻の顔には血の氣がなかつた。頭髪は亂れたまゝであつた。何物も考へなかつた。生と死の境に立つてはすべての餘のことは無價値であり、また考へにすら上つて來なかつた。黑い幌が母と兒の頭に掛けられた時、友人の某が茫然としてゐた正助の手に細かく折つた紙幣を握らせて去つた。彼は出て行く車を夢中に呼び止めて、幌の中の妻に傍の者に見えぬやうに紙幣を渡した。

戸口を入ると、家の中には巡査と役人が上り込んで、石炭酸の臭ひが烈しく鼻を衝いた。外では石灰が鑵の中で、人夫に溶かされつゝあつた。室に入ると人夫が其處ではポンプ仕掛けて石炭酸の霧を天井板や、壁や、疊の上に吹きかけてゐた。彼等は正助の顏を見ると、簞笥の上の物を片附けるやうに言つた。子供に買つて來た人形が疊の上に落ちてゐて、石炭酸の溜りの中に漂つてゐた。

『あ、これを忘れて行つた』と正助は慌てて人形を拾ひ上げた。紅い色や、靑い色が落ちて、疊の上が染つてゐた。

人夫はちらと其れに眼を付けると、

『玩具をよく消毒して置きました。』と言つた。いかにも其の場を繕るやうな言ひ譯がましいのが癪に障つた。最後に正助の體に器械の口を向けて、石炭酸の霧を吹きかけた。其處へ巡査が來て、

『小さなのは何處へ行きました。あの方にも消毒せなければならぬ。』と言ひながら、茶の間の方を覗いたけれど其處にも弟の姿が見えなかつた。

四

正助は血眼になつて子供を探した。勝手許を過ぎると既に一面に白い石灰が撒かれてゐた。水瓶にも白い飛沫がかゝつてゐた。人夫は彼を呼び止めて、

『どうか後から、水で洗つて下さい』と言つた。正助には其の言葉を聞く間も子供は何處へ行つたらうと氣が氣でなかつた。

横手には唐橘の垣根に新芽が繁つてゐた。垣根の隅には竹や、俵などが立てかけてあつた。其處に子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

供は竦んで、震へてゐた。父親を見ても物も言はなければ、また泣きもしなかつた。父親すら一種親しむことの出來ない敵のやうに思つて、白眼で見上げて、小さな自分の體を警戒してゐる樣子であつた。

『お、此處にゐたのか、怖(おつか)なくないんだよ。お父(とう)さんがゐるぢやないか？　さあ此方へお出なさい。』と言つて子供の手を取つた。

子供は柔順(すなほ)に父親に從いて來た。而して尙ほ其處に見知らぬ人々がゐるので急に怖氣を催うして泣き出した。人夫は泣いてゐる子供の體に用捨なく石炭酸の霧を吹きかけた。

『さあ大抵にして置くだ。もう切り上げやうぢやないか。』と役人が言つた。

巡査は佩劍の束を握りながら戶口を出た。子供の三尺には雫が光つてゐた。正助は子供の手を引いて、机の置いてある座敷に入ると本箱の硝子も濕れてゐるのが直ぐ目についた。器械を片附けてゐた男は、

『ほんたうにお氣の毒なことです。』と眞に同情して言つた。荒らされた室の中に途方に暮れて相抱いて佇んでゐる二人の姿を見ては、誰れしも憐れに思はざるを得なかつた。來た者は歸つて行つた。役人の帽子が垣根の上に見えた。人がゐなくなると正助は、子供を抱いたまゝしばらく暗涙に咽んだ。この賴み難き世の中に、せめても今日の友の情に感じて、これまで他人のために盡したことのなかつた自分を恥かしく思つた。勝手許へ出て石灰を洗ひ流し、水を汲んで來て疊を拭いた。

昨夜からの疲れて氣が遠くなつてゐた。傍に坐つて默つて俯いてゐる子供の顏を見ると可哀さうになつた。

『今日から二人でゐるのだよ。後程(いんまに)、町へ行つてお菓子も買つてやれば、坊(ぼ)ちやの好きな玩具も買つて

やるよ』と言つた。けれど子供はやはり俯いてゐた。つまらなさうに曇つた顔付きをして領いたばかりであつた。

正助は病氣の子供が忘れて行つた人形を持つて來た。鼻に當ると強い石炭酸の臭ひがした。着物がまだ濕れてゐた。其れを手に持つて眤と見詰てゐると悲しくなつて來た。指頭で胸の邊りを押して見ると、やはり細い鋭い啼き聲を立てた。あてなく、灰色のはてしない空へ、何處ともなく其の音は顫えて消えて行くやうであつた。其處からは、新緑の梢の頂きに雲の出た空が覗はれた。正助の眼にはまだ見ない病院の硝子戸の閉つた窓際の飾り氣のない冷かな病床が浮んで來た。其の人形を子供の手に渡すとしばらく鳴らしてゐた。

『誰か來たやうだ。待てゐるんだよ。』と言つて正助は玄關に出て見た。

其處に見慣れない風をした二人の男と一人の若い女が立つてゐた。正助はちよつと判斷に苦しんだ。

『女中を連れて上りました。』と一人の先に立つてゐた男が言つた。正助は領いて直に女の方に瞳を向けた。

『さあ、此方へ』と言つて、彼は座敷に通した。知らぬ人々が其處に來ると、人形を弄んでゐた子供は急に怖しい者に襲はれたやうに脅えた樣子をして、人形を疊の上に置いて、次の茶の間の方に逃げて行つた。正助は、今日のすべての光景が子供に異常な感動と孤獨な自覺とをへ與たことを知つた。けれど、其れをこの場合に靜かに言ひ慰めて安心させることも出來なかつたので、小供の逃げて行つた儘にして置いた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

彼は始めて、落付いて、三人の者に對して坐つた。而して心で、何んな人であらうと知るべく批判の眼を向けた。一人の男はお爺さんと言つていゝ程に脊が曲つてゐた。一人の男は脊が低く、もつと若かつた。けれど顏に痘痕があつて獰惡らしい面付きをしてゐた。女は二十前後で愛嬌があつた。顏に厚く白粉を塗つて、銘仙の着物と羽織を被てゐた。何處となく小さな料理店にゐる女の種類のやうな人慣れをした處があつた。

「この娘ですが、奉公は始めてなんて、此の方は叔父さんなので、いつしよに來て下すつたんで、よく此方とお話をして頂きたいものです。」と、かう見えても長い間いろ〳〵の社會を渡つて來たことを思はせるやうに、後に坐つてゐた爺が言つた。

「お兒さんは、お一人ぎりなんてげすか」と三百代言のやうな痘痕のある男が濁聲で言つた。女の黑い瞳がたへず自分の顏に向いてゐることを正助は其の男に向ひながらも感じた。彼等はこの女を囮にして金を取るのだなと思つた。自分はどんな危險を冒しても、やがて其れが經驗になるので悔ゆることもなからうが、子供が可哀さうだと思つた。うまく彼等を此家から追ひ拂うのには、何ういつたらいゝかと惑つた。正助は、此方から脅かしてやつて、先方から逃げて歸るやうにさせやうと考へた。

「實は傳染病患者があつたもので、消毒した爲にこんなに臭ふのです。」と正助は男の顏を見た。

「さうと見えて、甚く石炭酸の臭ひがする。」と痘痕顏の男は獅子鼻の孔を大きくした。

「はあ、傳染病なんてすか」と爺も驚いたやうな様子をした。

「消毒したから傳染する氣遣ひはないと思ふが、其れを承知て來てくれますか」と正助は彼等の慌てた

のを見て、うまく行つたと思つた。けれど女は其の割合に體も動かさなかつた。彼女は茶の間を覗くやうにしてゐた。

『坊ちやん一人置いてゐらしたのですか。』と女は正助を見て始めて口を開いた。

『いや、實はちよつとお家へ上つてお顏を出して、これていゝと被仰るなら、今ちよつと他へ行つてゐるのですが、其方を斷つて、明日からでも上らうといふ考へなんです。』と男は既に腰を浮かして言つた。

『此方は誰でもいゝのです。たゞ子供を可愛がつてくれて、隔日位に病院まで使ひに行つてもらへば其れていゝのです。』と正助は餘計な口を聞く必要もないやうな氣がした。

『ぢや改めて、今晩にでもご返答をいたします。』と爺も言つて、三人は立ち上つた。

一足男共よりも先に玄關へ出た女は素早く下駄箱の蓋を上げて、其中に收つてある下駄を見た。正助は其れと氣付いた時分には、女は何知らぬ顏付きをして、絹の日傘を取り上げて突立つてゐた。女の日傘も、穿いてゐる下駄も、普通の女中は持たないやうな氣の効いたものであつた。

何か言ひながら、危險の場處から逃げ出すやうにして彼等は歸つて行つた。

五

晩方病院へ電話を掛けに町まで、正助は子供の手を引きながら行つた。子供は、はぢめて自働電話の箱に入つた時、怖しがつた。其日の出來事は何も、かもまだ漸く四歳の子供の心には始めてゞ、且つ恐怖を催うさせることばかりであつた。

『怖くはないのだよ。今、お母ちやんと話をするのだから、坊は、此處に入つて聞いてゐらつしやい』

と正助は、自分の體から子供を離さないやうにした。

「いつお母さんは歸るの」と子供は顔を見上げて言つた。

「今、お母さんに聞いて見るから、この戸を閉るのだ」と正助は、戸を閉めてから、自働電話をかけた。けれど附添人は電話口に出ることが出來ない規定といふことであつた。看護婦が取次いでやると言つた。彼は病兒の様子を聞いたばかりであつた。

「同じことですが、この病氣は時日が長くかゝるから」といふ妻からの返答であつた。

「お母さんはいつ歸つて來るの」と子供が顔を見上げて問うた。

「姉ちやんが病氣がよくないから、今夜は歸つて來られないつて。其の代りおとなしく待つてゐると直に姉ちやんと二人て歸つて來ると言つた。」と正助は子供に言ひ聞かしながら手を引いて町の中を歩いて來た。子供はつまらなさうな顔付きをしてゐた。お菓子を買つてやつたけれど氣が浮かなかつた。馬が來たので魂消て菓子の袋を道の上に落したものだから、正助が家まで持て行つてやるからと言つたけれど、子供は言ふことを聞かなかつた。急に、母親がゐなくなつてから子供の性質が僻んで來た。誰にても警戒を怠らずに、自分の體を守つてゐるといふやうな風が見えた。

其日から、子供の氣に向くやうにしなければ泣いて仕方がなかつた。正助は機嫌を取るのに殆んど苦しんだ。けれど母親が留守て可哀さうだと思つて、成たけ子供の言ふまゝにして來た。來る女中にも、來る女中にも子供は決して親しまなかつた。

母が行つてから、二三日は母のことを聞き明かした。けれど四五日經つと忘れたやうに言ひ出さなく

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

なつた。獨り室の片隅に坐つて玩具を出して淋しさうに遊んでゐる。正助が傍へ行つても額際に皺を寄せて不快さうな顏付きて睨んだ。物も言はなければ、外へも出ないやうになつた。

「お母さんは?」と正助は却つて知らぬ振りをして、反對に子供に聞いて見ることがあつた。

「お母さんはゐないの」と子供は玩具を弄びながら言つた。

「いつ歸つて來る?」と問ふた。

「もう歸つて來ないの」と子供が言つた。

正助は思はず慄然とした。もう決して歸らないものと心にきめてしまつた子供の心が何となく不憫を感ずると共に怖しくなつた。

「そんなことはない。直に姉ちやんと歸つて來るから、坊は下婢やと仲よくして遊んでゐるんだ」と言つた。

「厭、坊ちや一人て遊んでゐるんだもの」と子供は言つた。

「何て下婢やが嫌ひなのだ。あんなにやさしくしてくれるのに……。」と聞いた。

子供の顏付きは暗くなつた。

「何うしても厭だ、坊ちや、一人ておとなしくして遊んでゐたいのだもの」と子供は言つた。

近所の子供が、日數を經るにつれて、もはや傳染する危險がないと知つたと見えて、また常のやうに戸口に來て遊んだ。獨り弟は家の内に隱れてゐて、呼ばれても顏を出さなかつた。

日にまし、太陽の光輝は強くなつて、新綠の鬱然とした梢は溶けるやうに見えた。

六

夜は子供に體を附けるやうにして眠つた。子供は母と思つて、父の體に抱き付いた。而して顔を胸の邊りに摺り付けた。けれど様子が異つてゐるので、眼を閉じてゐながら、手を出して母の顔か否かたしかめるやうに正助の顔を撫でた。而して始めて母でないことを知つて、絶望して聲を上げて泣き出すことがあつた。

「いゝ見たから、泣くんぢやない」と言つて、何うして子供を慰めてやつたらいゝか彼は途方に暮れることもあつた。

子供はしばらく泣き止まなかつた。父親が慰めれば慰める程大きな聲を立てて泣いた。正助は默つてゐた方がいゝと知つて、子供の泣くまゝに委して置いた。子供は獨り床の上に坐つて泣いてゐたが、疲れて其儘前に伏つて眠つてしまつた。正助は子供の體を氣遣つて正しく眠らしてやらうと體に手をかけると、不意に眼を醒ました子供は二たび火の付いたやうに泣き立て、父親のすることに反抗した。正助はいつか子供に對して、甚しい憎惡を感じて來た。彼は堪り兼ねて子供を擲つた。しかし、直に可哀さうになつた。自分も床から起きて着物を被換へて、茫然として獨り涙に暮れたまゝ共に坐つてゐたこともあつた。

其の明る夜からは、子供は父親に寢衣すら被せさせなかつた。晝間着てゐた衣物のまゝで床に入つた。正助は、子供の體に觸れることすら出來なくなつた。神經の病的にまで過敏になつた子供は少しても誰か觸ると眼を醒まして、逃げるやうに床から脱け出て疊の上に轉がつたまゝて苦しさうな眠りをつゞけ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

た。正助に終に自分が疊の上に出て寢て、子供を蒲團の上に寢せて置いて、少しも其の聲に觸れないやうに力めた。小さな小供の體が甚しく危險な物體のやうに感じられて來た。

「お母さん」と言ふ聲に、不快な眠りを破られて眼を開くと子供が獨り坐つて、泣いてゐることもあつた。

子供の姿は日に窶れて、顏付きが險しくなつて、眼が異樣に光つて來た。

毎日夜の來ることが正助にとつて苦痛になつた。また子供にとつても苦痛に異ひがなかつた。

正助は晝間はいろ〳〵のことに煩はされた。其間には病院へ見舞ひにも行かなければならなかつた。夜は仕事をする時間ときめて、子供の床に付くのを待て机に向つたのである。

「もうお前眠たくないか。」と夕飯を食べると青白く照らす電燈の下て、二人は退屈さうに玩具などを出して遊びながら、暫らく經つと正助は子供に聞くのであつた。

「まだ、眠むくない。」と子供の顏が急に曇つて來た。

「また明日遊ばう。もう眠たくないか。お父さんも直に眠るから」と正助は何とか言ひ聞かして眠させやうとした。それが子供の體のためにもいゝと思つた。

「坊ちや、眠るのは厭た」と言つて、子供は泣き顏になつた。正助は、子供に泣かれるのは身を切るよりも辛かつた。

「眠るのが厭なら起きてゐればいゝ。お父さんは少し仕事をしなければならないから、おとなしく一人て机の傍に遊んでゐるんだよ」と言つた。

彼は机に向つて、ペンを動かす前に思想の湧くのを待たなければならなかつた。瞑想する場合には精神を虚空の一點に集注しなければならなかつた。しかるに險しい、小さな眼が傍にゐて眤と自分の顏を睨んでゐる。其の眼は自分に早く仕事をしてしまへといふことを促してゐるばかりでない。其れを待ちつゝあつた。とても其の眼は五分と長く其處にこの眼の持主か待つてゐられるものでないといふことを刺すやうに感じさせる。

『少し外を散歩して來やう。歸つたら、おとなしく眠るんだよ』と正助は子供を連れて家を出かけた。

晩春といつても、もはや初夏に近い夜は酒の香でも漂つてゐるやうに人の心を醉はした。空の何處かに尙ほ黄昏の明るみは殘つてゐて、重々しい喪服の裾を曳摺つて、默つて佇んでゐる年若い僧侶のやうな姿した新緑の木立は路の行手に見えた。成たけ木の澤山な靜かな方へ歩いて行つた。何の家からも灯が洩れて來た。もう障子を開け放つて置くに好い季節であつた。梢や、枝の隙間からくゞつて來るやうに其の灯は小さく美しかつた。

二人は、子供等が庭頭で唄を歌つてゐる家の垣根の端や、また笑聲の聞えて來る窓の下などを通つた。皆なが幸福に、何の心配もなく暮してゐることが羨ましかつた。大分歩いてから、『もう家へ歸らうさ』と正助は小供の手を引きながら、道を戻らうとした。此處まで默つて、小さな足音を立てながら從いて來た子供は、急に尖つた、泣聲を出して、

『厭だ。家へ歸るのは厭だ。もつと彼方へ行くんだ。』と言つて聞かなかつた。

正助は仕方がなく、また子供の手を引きながら歩いて行つた。

其處は全く淋しい處であつた。人家も杜斷れて、寂然とした暗い郊外につゞいてゐる細い路が闇の底にぼんやりと浮んでゐた。

「もう、歸へらうさ」と言つて、子供の手を採りながら踵を返しにかかつた。小さな手は無理に其れを振り放して、其儘、先へ歩いて行くのであつた。

「あゝ、怖いことだ。お前獨り行くならお行き。お父さんは歸るがいゝか」と正助は故意と怖れさせるやうに聲を震はして言つた。けれども子供は、もはや怖いものは何もないといはぬばかりにさつさと歩いて行つた。何となく絶望的に見られた。正助は胸を徽かに躍らしながら、默つて佇んで子供を見守つてゐた。小さな影がとぼ／＼と淋しい路の彼方に消えて行つた。もう五間も隔たるとうす闇は何物も同じい黑い色で塗つてしまつた。正助は、たまり兼ねて子供の傍に走つて行つた。無理に手を引いて歸らうとすると、火の付くやうに泣き立てた。

「お前は親不孝者だぞ。今からこんなになつて何うするつもりだ。」と言つて、覺えず暗涙に咽んだ。彼は、はぢめて世間に母を失つた子供のことを思つた。此時、母の愛の力といふものを始めて感じた。

子供はこれから散歩といふものが好きになつた。家にゐるより外を歩いてゐたがつた。小さな心にもかうして憂へを忘れやうとする樣子が見えた。

「お父さん散歩しやう」と晝間でも言ひ出すと何といつても散歩に出ないまでは、泣いて聞かなかつた。

彼は日々に眼付が險しくなつて、氣が變になつて行く小供に注意して恐怖を覺えた。

「なぜさう家にゐるのが厭なんだ。なぜお友達が遊びに來たら、いつしよに遊ばないんだ。」と一日淋し

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

さうにしてゐる子供を抱き寄せて頭を撫てながら言つた。正助は、孤獨の子供が堪らなく可哀さうになつた。

庭頭に何處からともなく蜻蛉が飛んで來た。今年になつてから始めて見るのであつた。まだやつと出初めた蜻蛉は、うす青い透き徹る羽根を輝かして、この廣い天地をどんなにして遊び廻つてゐゝかと止る處さへ惑つてゐる風が見えた。

『ご免下さい』と女の人の聲がした。彼方の窓の方を振り向くと近所の知つた人が、何か玩具を持て見舞ひに來てくれたのであつた。正助は立ち上つた。

『さあ坊ちやんゐらつしやい。どんなにかお獨りでお淋しいでせうねえ。小母さんの處へゐらつしやい』と手を差し伸さんばかりにして笑顔て子供を見てゐた。

正助は女の人に禮を言ひながら、窓の際まで行つて、また子供の處に戻つて來て、下を向いて默つてゐる子供の手を取つて、彼方へ連れて行かうとした。

明るい何處となく若やかな女の笑顔が、二人の方に向いてゐるのを感じた。正助は無理にも子供を其方に連れて行かうとした。けれど小さな體に宿つてゐる力が其れを抗んだ。

『さあ、坊ちやん、玩具を上げますからゐらつしやい。』と女が言つた。其の聲にもやはり曇りがなかつた。

刹那、正助は慌てゝ手を引いた。驚いてもう少して、大きな聲を立てるばかりであつた。ちかと嚙み付かれた指を見ると眞紅な血が吹き出てゐた。正助は苦痛を堪へて、其の傷付いた指を掌の裡に握り包

んで、この有様を氣取られはしなかつたかと無理に造り笑ひをしながら女の顔色を覗つた。もはや我慢がし切れなさうに痛んで、ねば〳〵とした血が拳から溢れ出して來た。——一九一四、四作——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN



# 風雨の夜

田山花袋

## 一

午前は麗らかな日が照つて、墓地のところどころにすつかり咲いた花が眞白に見えてゐた。要垣の嫩芽（わかめ）の下には、蒲公英の花が黄ろく咲いて、野蒜が綠の色を濃かに綴つた。向ふの野の麥の中からは雲雀が絶えず空にあがつてゐた。

「好い天氣だな、今日は風もねえ」

墓地の傍の細い路を野の方へ出て行く百姓達は、かう心持好さゝうに挨拶して摩れ違つて通つて行つた。

墓地は靜かであつた。新しい花崗石の墓の上では鶯が好い聲を立てゝ鳴いた。春はもう闌になつて、草といふ草は皆な綠に萌え出してゐた。山門から本堂に行く長い敷石の傍には、大きな木瓜が目もさめるやうに赤く見事に咲いてゐた。

狹くしきつた澤山の墓の間を縫つて、門前の墓番の爺は朝から頻りに草を挘

つてゐた。其處には他郷で生れて、中年で此處にやつて來て、土地の人に親のやうに敬まれた醫者の墓もあれば、他人の妻に烈しく戀ひをして早く生命を失つて了つた若者の墓もあつた。つい此間死んだ若い綺麗な町の娘の墓には、花が一杯に手向けられてあつた。墓番の爺はせつせと唯草を簽つた。すぐ近くにある町の雜音は、それでもをりをりこの靜かな墓地の中まで傳はつて來た。街道を通る車の音、寺の森を掠めて通つて行く汽車の響、時間毎に騷がしく聞えて來る小學校の生徒の聲――それが止むと、門前の長屋の上さんの子供を叱る聲が際立つて聞えて來た。

墓番の嗅がふと其處い姿を見せた。

『新さん、また來たかな』

『好い加減に言つて置けよ』

『でも、度々だからな』

『好いやうに言つて置けよ』

嗅はやがて歸つて行つた。鶯は矢張好い聲で鳴いてゐた。鐘樓の向ふの不動堂では、子守が二三人唄を唄つて遊んでゐた。

やがて寺の上さんの通つて行くのが見えた。今朝寺に行つて、爺は上さんと次のやうに話をした。

『今日は。はア、好いお天氣で……』

『爺や、墓に草が生えたから、今日は取つてお呉れよ。餘り放つて置くと、お參に來た人にわるいからね……。西の方から先にする方が好いよ。周圍も掃除して貰はなくつちやならないから、大般若もも

うちさだから』

爺は、『はア、さうすべい。此間からさうは思つてゐやしたけど、風だの、雨だのではア。よく風が吹いたでな』

『もう、麥もさくを切らずばなるまいね』

『はア』

『もう吉田屋さんぢや切つたんべ』

『切つてやしたッけ』

爺は廣い臺所の處に長い間棒立に立つてゐた。其處に、主僧が今起きたばかりの顏を出した。『お早うがんす、好い天氣で、結構で御座りやす』から爺は丁寧に挨拶をした。て、爺は其處から出て、寺の門前にある小屋のやうな自分の家に行つて、支度をして、のつそりのつそり墓地の方へと出かけて行つた。

風もないのに花はチラチラと散つた。何處かで牛の鳴く聲がした。

二

庫裡の玄關の前に、一臺の車は長い間置いてあつた。春の日が靜かに照つてゐた。

『お客かな』

爺はさう思つたが、その次ぎに見た時には、其處にはもうその車はなかつた。『いつ歸つて行つたんべ』などと思ひながら、爺は垣から垣へと草を露つて行つた。

そのすぐ前に大きな墓が一つあつた。古い墓であつた。苔が蒸してゐた。爺は無論知らないが、その墓石の下には、毒藥を飮んで死んだ町の豪家の妾が埋められてあつた。それが――その墓の主が町でも評判の綺麗な女であつたなどといふことは、今まで誰も知つてゐるものはなかつた。主僧も知らなかつた。主僧の先代も知らなかつた。それが二日前寺の玄關に四十ばかりの身なりの賤しくない男が尋ねて來た。主僧は座敷に通した。

「今から百年位前のことですが、俗名寺井そめといふのが御座いますまいか。お分りになりますまいか。」

「古いことですな……。」

主僧が躊躇してゐると、その男はやがてわざわざ東京から訪ねて來た理由を話し始めた。それはその男の曾祖母の母親に當る人であつた。「私は今は石田姓を名乘つてをりますが、何でもその佛は立派な綺麗な人で、江戸の柳原か何かで生れたさうです。何ういふことで、その寺井の家の妾になどなつたかと言ふことは少しもわかりませんけれど、何でも其時分は、寺井の家は盛えてゐまして、その主人などは江戸にもよく出て行つたものと見えます。處が、昔の小說本などにもよくある話ですが、その佛が私の曾祖を生んだのを、本妻がひどく妬いて、それはとても一緒に住んでゐられないやうな取扱をしたさうです。それで終には毒を飮んで死んだのださうです。私の祖母は曾祖母から聞いたと見えまして、よくその話をするのを私も微かに覺えてをりますが、佛はやさしい綺麗な町にもそんな人はないと言はれたさうです。處が、そのたゝりと言ふんですか、寺井の主人は其翌年死にますし、家は段々傾いて行つて、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

その本妻などもあとで慘な死み方をしたといふことです。そればかりならまだ好う御座いますが、代々夭死をしたり、不具の子が生れたりして、今でもそれがたゝつてゐるといふので、去年でしたが、その寺井の後のものがたづねて來て、是非行つて法要を營んで貰ひたいと申すのです。寺井の方でやつたのでは効目がないから、私共でやつて貰ひたいと言ふのです。え、その寺井の跡ですか？今でも碌なことはしてをりませんがな」

「はア、はア、さうですか」

から繰返して聞いてゐた主僧は、「寺井といふ大きな家があつたといふことは私も聞いてをります。寺にもいろいろなものを寄附してゐます」

て、主僧は過古帳を澤山に出して來て、それを一々客の前で繰つて見た。其處には無數の名が宿帳か何ぞのやうに書いてあつて、それが祥月命日にわけてあつた。

「命日はわかりませんか」

「わかりませんな、古いことですから」

客も後には手傳つて過古帳を繰つた。主僧は櫃の底に藏つて置いた別の過古帳を持つて來たりした。

「ありました、ありました。」から主僧は言つて、「これでせう？」

「あ、これです」

そこには死んだ年月日と俗名と戒名とがちやんと書いてあつた。寺井宗兵衞側室そめ行年二十二歳と書いてあつた。

『これだ、これだ』

『これですな』

主僧も客も喜悦の聲を立てた。

『四月十五日、丁度今頃ですな』

『さう〳〵花の時分だッて聞いてゐました』客も思ひ出したやうに言つた。

近い中に更(あらた)めて寺井の跡のものと一緒に來て、相應な法要を營むつもりだから、何うか何分その時は賴むと言つて、その客は墓參をすませて、待たした車に乗つて歸つて行つた。『面白いことがあるもんだね』などと後で主僧は上さんに話した。上さんは上さんで、『寺井ッて、今の寺井の何かでせうか？』

『百年も前の昔の話だから、何かであつたとは思ふが、よくわからないさうだ』

『そんなにたゝるもんかね。おかつねえもんだ、人の思ひッて』上さんはこんなことを言つて臺所の方へ下りて行つた。

その墓の傍の草を取り終ると、爺は一休みしやうと思つて、墓の石に腰をかけて、烟管に烟草をつめてマッチを磨つた。鶯が矢張その近くで鳴いてゐた。日影がいくらかぼんやりと曇つて來てゐた。

『天氣が變るかな』

爺はこんなことを獨りて言つた。

三

ぼつ〳〵午後から降り出した雨は、夕暮近い頃には、凄じい大降りになつて、風も凄じく出て來てゐた。咲き亂れた花は泣いたやうに白くほの暗い薄暮の空氣の中に見えてゐた。

『今年の花もこれでお終ひだ』

かう主僧はをりから東京から來てゐる友達に言つた。

そればかりではなかつた。やがて晩春の頃に起る雷さへ加はつた。濺ぐやうな雨は電光と雷聲とに伴つて瀧津瀬のやうに亂れ落ちた。

墓番の爺の家では、雨が到るところから漏つた。便所に行く所には、仕方がなく、バケツに雑巾を入れてそれを凌いでゐた。

ふと緣に雨の當る音が軒下でしたと思ふと、

『正爺ゐたかえ』

寺の上さんの聲だ。

『は、お上さんけえ？』

かう言つて、爺は立つて、前の入口の雨戸を細目に明けた。

外は眞暗である。

傘をすぼめて入つて來た上さんは、

『えらい降になつたね』

『本當でがんす。天氣はかはるとは思ひやしたけども……こんなに降るとア知りやせん。今朝は好い天

氣てしたからな」

「正爺、お前、氣の毒だが、穴を一つ掘つて呉れないかねえ」

「今かね」

この吹降に、この闇夜に……。

「今、川本の主人が來てね、あまつ子が死んだッて言つて來てね」

「あまつ子ッて、川本のけえ?」

「なァに、あそこにゐる女つ子だがね……。掘つて呉れるかね」

「わしや、はァ、御免蒙りやすべい」

「駄目かな」

「年を取りやしたから、はァ、難義な仕事は駄目てがんすよ。それも、こんな降りてもなけりやてすけど……」

「それもさうだね……誰かなからうか」

「粂の野郎が好いてせう」

「粂はゐたかえ?」

「ゐやしたッけ、さつき……」

「お前、一つ頼んて來てお呉れな…今夜の十時に葬式をするッて言ふんだから」

「十時にな……」吃驚したやうな顔をして、「粂も何ッて言ふだかな……」考へて、「しかし、何も、稼業

だから、やるッて言ふかも知れやしねえよ。爺がイヤだッて言つたら、龍(たつ)も聞いて見ませうか』

『さうしてお呉れよ、兎に角掘らなけりやならないんだから』

爺は破れた番傘をさして雨を衝いて出かけて行つた。電光がサッと光つて、凄しい雷聲がこれに續いた。

寺の上さんは、婆さんと何か一言二語話してゐたが、『ぢや、何とかすぐ返事を持つて來てお呉れよ』かう言つて寺の方へ歸つて行つた。

奥の座敷て、主僧は東京から來た客と酒を飲んでゐた。話が段々面白くなつて行つてゐた。其處に、もう少しさつき、雨を衝いて訪ねて來た客があつた。主僧は客を茶の間に延いてかなり長い間話した。『はア、はア』などゝいふ聲も聞えてゐた。

三十分ほどして客は歸つて行つたらしく、やがて主僧は座敷にやつて來た。

『何だえ？用かえ？』

『葬式を一つやらなければならない』

『今夜？』

客も驚いたといふ風を見せた。

『十時に來るんだよ……。まア、好いから飲みたまへ』

『子供かえ？』

『何アに……可哀相なんさ、……停車場の前に、小料理屋があるね』

『あゝ、だるまなどのゐる？裏に蒲團などの干してある？』

『あゝあれだよ。川本ッて言ふんだがね。今、その主人が來てね。十九になる、つい此間つれて來た酌婦が急に死んだんだとさ』

『酌婦が――何て死んだんだえ？』

『面疱で死んだんだとさ…ついゝ一週間ばかり前に、秩父の方からつれて來たばかしなんだとさ。それが急に、昨日、一昨日、一寸顏に吹出物見たいなものが出たんだッて、それをかきこわしたら、顏中一杯に腫れ上つて、醫師にかけた時には、もう手後れなんだッて、こわいもんだね、面疱と言ふものは――』

『それは面疱は大變た。あれは殆ど一刻を爭ふもんだよ。』

『それてね、川本の主人、こぼしてゐるんだよ。まだ碌々座敷にも出したことがない。何でも六十圓とかで伴れて來たんだとさ。それが、危險だと言ふので、早速秩父の親許の處へ知らせてやつたんださうだが、向ふては、汽車賃を出せば行くッて言つてよこしたんだッて…。いくら貧乏だッて、餘りだッて言つて憤慨してたがね…。なアに、向ふでも、金を取かへされると思つたんだね』

『ふん、悲慘なもんだね』

かう言つたが、客は考へて、『向ふでもさうだらうけれど、此方の主人の方でもいくらか取れるものなら金を取かへさうといふ腹があつたんだね。それにしても悲慘だね。全く商賣品になつて了つてゐるんだからな。…それにしても、親ゝ親だね。何も金のことは別問題なんだからやつて來れば好いんだ。

出來ないものは出來ないだッて構ひやしないんだ。乾度無智な親なんだねえ。さういふことがわからないんだからね。來れば、すぐ金を取かへされる位に思つてゐるんだね。悲慘だ、』から言つて客は頭を振つて、『悲慘だなア』

外には雨が盛に降つてゐた。

暫くしてから、『て、川本の主人が來て何ッて言ふんだえ?』

『だから、さういふ譯だから、墓地の地面を何うか安くして貰ひたいッて賴みに來たんさ。親さ出て來ないやうなものを、一晩家に置くのもかいがないッて、急に今夜埋めて了ふことになつたんだとさ……。だから、僕も言つてやつたよ、それはいくらでも安くしてやる。南の隅の方にあるからつてね。しかし、死んだ者は可哀相なんだから、罪はないんだから、よく供養を營んでやんなさいッて言つてやつたよ。それや、此處等の奴は、我利我利だからね。一文だッて錢を出すのを厭がつてゐるんだからね。』

『それて何時死んだんだえ?』

『今朝の明方ださうだ』

『醫師にも碌々見せなかつたんだね』

『さうかも知れないよ』

『しかし、不思議なもんだね、わからんもんだね。一週間までは、こんな見ず知らずの土地に來て、見ず知らずの寺の墓の土にならうとは死んだ當人は夢にも思はなかつたんだからね。何んな好いことがあるかも知れないと思つてやつて來たんだからね』考へて、『何んな女だつたらう? 見たことはないかえ?』

「ないね」
「無論、客なんぞ一人もついてゐないんだらうね」
「これから出さうと思つてゐた處なんださうだから……」
「一人も知つてゐるものはない全くの他鄕だね。その他鄕で、かういふ晩春の風雨の夜に、無造作に葬られて了ふんだね。ロマンチツクだね。宜しく浮ばれるやうにお經を讀んでやるんだね。」
主僧は笑つてゐた。
其處に上さんは入つて來た。
「掘るツてかえ?」
「正爺はイヤだツて言ふから、条か誰かに賴んで貰ふやうに言つて來ましたよ。……ひどい雨、ちよつとの間に、こんなに濡れちやつた」から言つて上さんは濡れた衣の膝の處を見せた。
客には酌婦の死がいろいろの感じを起させるやうに見えた。何ぞと言つてはその話をした。「何ういふ娘だツたか知らないが、娘の死んだ電報を受取つて、出て來られないやうな親も可哀相だな……秩父ツて言つたね、秩父の何處だらう?」
「何處だかそれは聞かなかつた」
默つて座つてゐた客の頭には、憐れな酌婦と死と風雨とが一緒になつて集つて來てゐた。かうした邊僻な田舍寺の一夜といふことも興味を惹くらしく見えた。
主僧が酒を勸めると、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『もうよさう』

『まア、好いぢやないか』

『もう澤山だ』

上さんがまた入つて來た。

『一人ぢや駄目だから、龍と二人で掘るッて言ふんですがね。……そして、何うしても一人一圓づゝ貰はなけれやッて言ふんですがね』

『足元を見て高いことを言ふな。一兩取るには一日も二日もかゝる癖に』主僧はかう言つて笑つて、『兎に角一人でいつもの通りの賃錢で掘るなら好いが、それがいけないけりや、川本へ行つて相談して來いッて言つてやれ。此方ぢや、そんなことに關係してゐないんだから……』

上さんは二度も三度も彼方へ行つたり此方に來たりした。穴を掘る男は何かむづかしいことをくどくど繰返した。『この降りだから』などと言つた。

『勝手にさせる方が好いッて言ふのに……、わからない奴だな』終には主僧は面倒臭がつて相手にしなかつた。

## 四

穴掘りの粂と龍とは、もう跣足になつて來てゐた。鋤だの畚なども持つて來てゐた。成たけ此處で話をすまさうと思つたけれど、要領を得ないので、停車場前の川本まで出懸けて行くことにした。

「えらく降りやがるな」

「これぢやずぶ濡だ。馬鹿に寒いなア。此頃の陽氣ぢやねえ」

こんなことを言ひながら、雨を衝いて、田圃道を通つて、灯の多い停車場の方へと出て行つた。

停車場の近所の五六軒の家は皆なぴつしやり雨戸を閉めてゐた。うどん屋、小料理屋、すし屋などが並んでゐて、晝間は其處に白粉をべつたりつけた酌婦が汽車から下りる客を呼び込んでゐた。夜は二階に三味線の音が賑やかに聞えた。薄月の夜など、近在から來る若い息子達が二人も三人もそこに立つてゐると、酌婦が店から出て來て、何か聲高く笑つた。店にゐる酌婦の顏は電燈に青白く映つて見えてゐた。

停車場の傍には、大きな噴井があつて、水が其處から綺麗に流れ落ちてゐた。其處で酌婦が赤い襷をかけて、蹲踞んで洗濯などをしてゐると、藥罐に水を汲みに來た驛夫が何か戯談を言つてからかつて行つた。町の小間物屋の男が車を曳いて驛に着いた荷物を受取りに行つてゐる傍では「私にもレートを一つお呉れよ」などと言つてゐた。

今夜はしかし人の影も見えなかつた。軒燈に吹つける雨は、銀箭のやうに光つて、路は夕立の時のやうに綺麗に洗はれてゐた。レールに添つたところの信號標は青く闇の中に光つて見えてゐた。

川本の家の雨戸は一枚明いて、其處から灯が洩れてゐた。

「御免なんしよ。」

かう言つて二人は入つて行つた。

酌婦が二人其處にさびしさうに座つてゐた。奥には、客が三四人もあるらしく、酒に酔つた主人の話聲なども聞えていた。肥つた上さんは元氣のない顔をして出て來た。

「一人て掘れべいがな」

「この雨ぢや、一人ぢや駄目だ。それに、怖かねえから……」

「怖ねえ？てけいなりをして……」

上さんは親もやつて來ないことだの、六十兩損をした話だのをまたしても二人の穴掘男に繰返してきかせた。娘の親から返事が來てから上さんは既に何遍來る人々にその話をしたかわからなかつた。「一人だツてお客を取りやしないんだから。一文だツてかせぎやしないんだから。何んてまア運がわりいたんべ」かういふ風に上さんは話して、「あきれたちやんだよ。人情も何も知らねえんだから。娘の死んだのに、汽車賃を送れば行くもないもんだ」

「だから、負けて掘つてお呉れよ」

「だツてなア、龍公」粂は煮え切らない風をして其處に立つてゐた。

龍も口の中て何かぐづぐづ言つてゐた。

「お寺のきめが、七十錢か七十五錢ぢやねえか。お寺ぢや何ツて言はした？」

「それぢや彼方へ行つて聞いて來いツて言ふだ」

「やくざもねえ、一兩もかけて、それも二人かゝつて……。負けといてお呉れよ」

「いくらに負けるたんべ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

「二人で一兩で掘つてお呉れよ」

「それぢや駄目だ、話になんねえ」粂は仕方がないといふ顔をして、「俺達も、折角、かうして跣足にまでなづて來たんだから、仕事をしていが、五十錢ぢや厭だ、なア龍公」

馬鹿のやうな龍公もにやにや笑ひながら點頭いて見せた。

「ぢや歸んべいか」

「うん」

「待つてお呉れよ」

かう上さんは言つて奥に入つて行つたが、今度は主人と一緒に出て來た。『仕方がねえ野郎共だな』こんなことを言ひながらやかて奥から出て來た主人の肥つた顔は酒で赤くなつてゐた。『仕方がねえ、そんぢや七貫づゝやんべ』

何の彼のと言つて、一人八十五錢づゝやることに最後はきまつた。それまでに主人は上さんの話した話を繰返した。

「お喧しうごいした」

かう言つてやがて二人は出て行つた。

「泣面に蜂だ』主人はかう獨語のやうに言つたが、『でもな、一晩寢かして置いちや、また金がかゝるからな。一兩や二兩にはかへられねえよ』

「馬鹿馬鹿しい、本當に……」

上さんはぐつぐつこぼしてゐた。

其處にゐる二人の酌婦の頭には、一週間前の夜に、その娘を伴れて、主人が得意さうな顏をして秩父から歸つて來た時のことが浮んでゐた。それは小づくりな色の白い痩せた女であつた。『好い女だんべ。藝を仕込めば、藝者にても何でも出來るァ。向ふて、女中奉公はしてゐたんだが、まだわるくすれねぇから、使ひやうて何うにでもなるァ』主人はこんなことを言つて、二人の酌婦にあてつけがましい語氣を見せた。名をお雪と呼ばれてゐた。『お雪、お雪』から主人はやさしく呼んだ。新しく來た女がめづらしいといふ風に見えた。『あんな新參者に負けるもんか』二人の酌婦も一時はかう思ふほどであつた。それにも拘らず、お雪の死んだ時には、二人の酌婦は眼を泣き腫らしてゐた。染々身につまされたらしかつた。一人の方は緣側の柱の處に立つて長い間すゝり上げてゐた。

奧の座敷には、主人の同業者が二三人來て酒を飲んでゐた。棺は一番廉いのを買つて來た。棺に入れる時には、流石に湯かんだけはしてやつたが、おゆづりは縫つてやる人もなかつた。襦袢と腰まきのままで無理やりに小さな棺の中に入れた。はれた顏は海紫色になつて、二目とは見られないやうになつてゐた。棺の上は太い荒繩で十文字をかけた。

棺の前の机の上からは、線香の烟が細く覺束なく立つてゐた。酌婦の一人が晝間裏の山から折つて來た山しきびがぼんやり見えてゐた。

『まア、然し、死んだものは可哀相さ』

こんなことを男の一人は言つてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

「親はわりい。わりいにはきまつてゐる。娘が死んだのを、他人さまにお葬式までして貰つて、それで遣つて來ないなんて、そんな法はない。しかし、此方ぢやいつも儲けてゐるんだから好いやな、たまには」

「儲けるどころか」

「去年の田の方は好いしさ、二人はよくかせぐしさ。僕のとこなどから見ると、よつぽど此方の方が好いんだ」

「駄目だよ、少し位田の方が好くたツて、かういふ眼に逢つちや、片なしだ。先が相手にならねえんだから全損さ」

「でも、まア寺で引受けて呉れて好かつた。……あの坊さん、慾張りてないから好いや。新しく地面を取るんぢや、ちつとやそつとのことでは、お寺によつては中々出來ねえんだからな。あの、佐間の光禪寺な、あの坊さんになんかかゝつたら大事だ。私は好いが、さういふきめにしてあるんだから、世話人が喧しく言つて仕方がねえツてぬかしやがるからな。坪、二兩位のことは何處でも言ふよ。」

「全く慾のない坊さんだ」

かうもう一人の男が言つた。

「まア、仕方がねえ、あきらめてゐるんでがんさ……。」主人は自分の盃に手酌で酒をついで、「これも何かの因縁だんべ。私の家に死ににやつて來たやうなもんだからね　。だから私ャ、お寺にもよく賴んて來やした。懇ろに弔つてやつて下さいてな。坊さんも至極氣の毒がつて呉れましたよ」

「まア、それが佛の爲めだ。好い事をして置けば、損をしたものはすぐ戻つて來やすよ」分別顏をした

親類の爺は言つた。

「それにしてもな、面瘍ッて怖ねえもんだな」

「本當だ‥‥」

「見る見る大きくなるんだからな。半日と言つてゐねえ。今度のことなど、何ァに、始めは、腫物をちよつとかきこわした位に思つてゐたんだ。當人もさう思つてゐたんだよ。餘り痛いッて言ふし、それに、顏が一面に腫れ出して來たから、商賣品に傷がついてはと思つてな、それで田口さんに見せたら、これはもう手後れだッて言ふんだら、吃驚したにも何にも‥‥」

「本當に油斷がならねえ」

こんな話をしながら一座は賑やかに酒を飮んでゐた。外では雨がまだ盛に降つてゐた。雷はとうに止んだが、風は愈々強くなつて、裏の寺の山は凄しく鳴つた。

「これぢや東京の花ももう駄目だんべ」吹荒るゝ風雨の氣勢に耳を傾けるやうにして隅に座つた一人が言つた。と、其隣の男が、

「博覧會、何うでした?」

「いや、はや、人が一杯で、碌に見ることも何も出來やしませんわ。押し合ひへし合ひて、肩と肩とをすつて歩くんだから」

「行くなら、來月かさらい月だ」

「しかし、その時分は、田舍は忙しくなるから。田植やおかひこが始まつちや、田舍の人は出られませ

んからな」

「だから、其時分になると、ぐつとすくべ」

話はそれからそれへと續いた。酌婦の一人が來て線香を上げて行つたりした。「もう何時だ？九時？ぢや、そろ〳〵支度にかゝんなくつちやなんねえぞ。定公と貞次郞の宅へ行つて來て呉れや」から主人は酌婦に言つた。

## 五

ランタンが寺にないので、粂はもう一度停車場に行つて、無理に賴んで、古い半分壞れかけたのを借りて來て、中に二分のランプを入れた。龍は提灯を樹の枝にかけてその上に破れ番傘を吊した。墓地の南の隅の方は、それでもその二つの灯の光でぼんやりと照されてゐた。墓石のいくつとなく立つてゐるのが薄暗い光線の中に氣味わるく見えて、野と墓地との界の棒の並木の風雨に鳴るのが凄しく聞えた。灯の外は墨を流したやうに暗かつた。

寺の上さんが掘る位置を指圖して行つてから、粂は鋤を土に下した。雨にぬれた春泥は柔かであつた。そこは晝間見ると蒲公英だの野蒜だのの一面に生ゐてゐるところであつた。行倒れの乞食をこの前一度その近所に埋めたことがあつた。前には志を抱いて若くつて肺病で死んで行つた田舍敎師の大きな墓石があつた。龍は右の隅から鋤を入れて掘つて土を傍に積んだ。全身ずぶ濡れになつて、せつせと穴を掘つてゐる二人の姿が暫く薄ぼんやりと其處に見えてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

「やけに降るなァ」

かう言つて、粂は半は掘りかけた鋤を立てゝ休んだ。古い帽子の廂からは汗と一緒に雨が雫になつて落ちた。

「えらい時に、穴を掘らせやがる。八貫五百に負けさせやがつたが、一兩でもこんな商賣はイヤだ」かうは言ひながら、腹の中では、これて明日一杯旨い酒が飲めるなどと考へてゐた。

「今日の佛は若い女つちよだッて言ふが、あつたら女をなくしたもんだ。惜しいもんだ。その位なら、俺ても抱いてやれや好かつた」

こんなことを言つても、龍は返事もしないで、默つて掘つてゐるので、粂はまた鋤を動し始めた。土は段々赤土になつて行つた。水がじくじく出て來た。

三尺位掘ると、一人は中に入つて水を桶てかい出さなければならなかつた。二人は顔から體からすつかり赤土だらけになつた。

「おい、龍、あかりを見せねえか」

龍は其處に置いてあるランタンを取つて下の方を見せた。

「これだからな、この水だからな」

桶て五六杯かき出して、そしてまた鋤を動かした。

凄じい風がサッと吹いて來たと思ふと、樹の枝につるして置いた番傘が吹飛ばされて、提燈の上にバラバラと雨が當つた。灯が消えさうにチラチラ搖いた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

「待つて呉らしつし」

龍はランタンを傍に置いて、五六間先に吹き飛された破れ傘を拾つて、そしてそれを再び樹の枝に結び附けた。

龍は今度は粂に代つて穴の中に入つた。水は黒く薄暗い灯に光つて見えてゐた。龍の脚は一尺ほども泥の中に入つてゐた。傍にある花の散つたのが白く龍の體にくつついて見えてゐた。

「もうよかんべ」

龍は穴の中から言つた。

「三四尺位あるかな」

「その位あんべ」

「よかんべ、よかんべ、この降りぢやとても落附いて掘つてなんかゐられやしねえ。ぐづぐづ言へば言ふ方が無理だ」

龍も穴から上つて來た。粂はランタンを其處に出して、もう一度穴の中を覗いて見たが、『よかんべ、よかんべ』

暫くすると、傘と提灯とを樹の枝から外してゐる龍の姿が見えた。粂は鋤と畚とを集めて、ランタンを右の手に持つた。やがて雨の降り頻る中を墓場から此方へと出て來る二人の影が黒く見えた。

墓地には風雨が荒れてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

## 六

東京の客はもう醉つて倒れてゐた。小搔卷を上さんがソッと上からかけてやつてからも、もうかなりの時間が經つた。

それと反對に、主僧は全く酒から覺めてゐた。茶の間で、長火鉢を挾んで、上さんと何か面白さうな話をしてゐた。やがて柱にかけてある時計が十時を打つた。

『遅いな』

かう主僧はつぶやくやうに言つたが、間もなく人聲が庫裡の入口の處でした。棺が來たのであつた。

主僧は不斷着の上に僧衣をはをつて、上に金襴の袈裟をかけた。いつもならば、足袋をはきかへるのだが、今日は汚れた白足袋のまゝで、本堂に通ずる長い廊下を靜かに手燭を持つて歩いて行つた。廊下には庭の落花が雨にぬれて一面に白くついてゐた。

本堂にはさつき上さんがつけて行つた蠟燭がもう半分すぎともつてゐた。寺の紋のついた提灯と竹筒臺の置ランプとが其處に置いてあつたが、それでも廣い本堂はまだ薄暗かつた。隙間から入つて來る風に本尊の前の蠟燭の灯はチラチラと動いた。

賽錢箱の置いてある處の雨戸が二枚明けてあつて、其處に、かついて來た棺が白く見えてゐた。荒繩の太いのが眼に立つた。

それでも河本の主人と、其處に來て酒を飲んでゐた親類の爺と、二三人の男とがついて來てゐた。一番あとから一人の方の色の白い緣側の柱の處に立つて泣いてゐた酌婦が靜かに上つて來た。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

此處まで來る間に、酌婦は路のわるいのに躓いて、二度も三度も轉ばうとした。「いくら商賣だッて、さう轉ばいたッてようかんべ」などと男逹は笑ひながら、凭りかゝる手を把ったりしてやつた。一行は廻道をして山門の方から入つて來た。一度は傘が風に吹き取られさうになつて女は聲を立てた。「だから、ついて來ない方が好いと言つたんだのに……」から主人はたしなめるやうに言つた。

かついて來た男が棺を棺臺の上に載せると、主僧は蠟燭の灯を彼方此方に配つて、鉦を一つ鳴して、讀經を始めた。

靜かな悲しい氣分が何處となく主僧の讀經の聲の中にこもつてゐた。細く立つた聲は人々の心に沁み渡つて聞えた。

ほの暗い光線の中に開かれたこの一場の光景は、不思議な心を人々に起させるに十分であつた。讀經後の燒香に人々が靜かに立つて動いて行くさまは、この世のものとは思はれなかつた。蠟燭の灯に近い主僧の顏は古いすゝけた昔の繪の中に鮮かに殘つてゐる色彩のやうに見えた。

酌婦は長い間手を合せて祈念した。

その時分には、門前の長屋の墓番の老夫婦は、もうとうに床の中に入つて寢てゐた。爺は輕い鼾を立てゝ好い心持さうにして眠つてゐた。ひとり長く目覺めてゐた老婆は、ポタポタ疊の上に落ちて來る雨洩りを氣にして、豆ランプを持つて立つて內の中を彼方此方と見て歩いた。丁度其時、寺では鉦の音がしてゐた。「あの河本のお葬式と見える」老婆はこんなことを思ひながら、再び床の中に入つた。雨はまだ矢張トタン屋根の上に凄じい音を立てゝ降つてゐた。

主僧が本堂から歸つて來て、僧衣をぬいて座敷に來ると、丁度其時、少し目を覺しかけた東京の客は、
『これからかい？』
『いや、もう濟んだ』
『すんだ、早いなア』かう言つたが、今度はすつかり眼を覺して起きかゝつて、『馬鹿に早いね。餘程寢たかね、僕は――』
『二時間位寢たらう』
『もう何時だえ？一體？』
『十時四十分位だらう』
『寢た、寢た』長い伸をして、『酒を飲んでゐて苦しかつたらう、御經を讀むのが――』
『なアに、すつかりさめちやつたから』
かう言つて、主僧は全く覺めた蒼白い顏を見せて、『もう一杯飲まうか』
『いや、もう澤山』
『ぢや、茶でも淹れやうか。』
『うん、結構だな』主僧の顏を見て、『もう葬つたかね』
『もうすんだらうよ』
『可哀相だな』東京の客はいつか其不仕合の女のことを考へてゐた。
墓地では、送つて來た人達が丸くその周圍を取卷いてゐる中で、粂と龍とが荒繩のかゝつたまゝの棺

をその儘穴の中に靜かに下した。黒く光つてゐる穴の中の水のそれにつれて動いてゐるのが、かざした提灯の光に微かに見えた。

酌婦が覗くやうにすると、後に立つてゐた男が、『そんなに入りたけりや一緒に入れてやらうか』と言つて、後から輕く押つける眞似をした。『イヤアよ、田村さん、吃驚した』けたゝましい聲を立てゝ酌婦は後の方に身を退いた。笑ひ聲が一しきり聞えた。

『水が大變出てるね』

『此處はこれだからイャだね』

『その代りすぐ土になつて了ふね』

『それはさうだけれど……』

こんな話聲が續いて風雨の中に聞えた。粂は棺の浮んで來ないやうに半分足で踏まへて、一方から土をかけた。龍も傍から鋤を動かした。時の間に墓は築かれて了つた。

やがて人々は散じた。粂と龍とは門前の自分の宅に寢に行つた。悔みに來た人は銘々の町の宅の方へと歸つて行つた。河本の主人の寺に挨拶に行つてゐる間に、酌婦と田村とは、手を握つたり何かして、近道を停車場の灯の方へと出て行つてゐた。

## 七

翌朝は眩いほど好く晴れてゐた。

やわらかな墓地の土には、跣足の痕だの足駄の痕だのが縦横についてゐて、落花がその上に一面に散つてゐた。一夜の風雨の中に闌な春は暮れて了つてゐた。

泥濘をこね廻した跡には、紙屑だの紙屑だのが散ばつて、まだ完全に出來てゐない土饅頭は、人を埋めたといふよりも、むしろそつと死骸を掘つて行つたあとといふやうな混雜と不規律とを示してゐた。墓地は晴やかな朝日の光に照されてゐた。心持好ささうに鶯は長く囀つた。

一番の汽車はいつもの通り麥の畑の綠の上に黃く白い煤烟を靡らせて靜かに野を掠めて通つて行つた。榛の並木の梢からは、雫がバラバラと珠のやうになつて落ちた。

何も變つたものはなかつた。寺の上さんは白い手拭をかぶつて、手桶を下げて、井戸端に來て水を汲んだ。釣瓶からサッと手桶にあけた水には、朝日が美しくかゞやきわたつた。主僧は手拭をへて帶に挾んで、心持好さうに鹽で歯を磨きながら其處等をぶら〳〵歩いた。

小學校の屋根の向ふにある天氣豫報の青い旗は西北の風の方向を示してゐた。暫くすると、小學校に通つて行く幼ない生徒達が、いつもの通り向ふの家の間や田畝道や垣の間の道からぞろぞろと出て來た。やがて唱歌の聲が聞えて來た。町の郊外の製米所のエンジンの音も聞え出した。

かなり日が長けてから、墓番の正爺は、いつもの仕事着を着て、鎌を持つて、墓場の方へと入つて行つた。昨日仕殘したところに來て鎌と箒を置いて、墓石に腰をかけて、先づ一服と言ふ形で、旨さうに烟草を鼻から出した。

其處に寺の上さんが入つて來た。

『昨夜はえらい降りてしたな』

『よくこんな好いお天氣になつたね』上さんはかう言つたが、『向ふの方をもう少し綺麗に取つてお呉れな。今、よく取つておかないと、あとで困るから』

昨夜の葬式の話は正爺の口にも上さんの口にも上らなかつた。上さんはすぐ其處から出て行つた。爺は草をむしり始めた。



# 紫の血

上司小剣

## 一

これは今から三十年も前のこと、私たちが生れて間もない頃の話であります。――

輕便安樂椅子といふものを、初めて日本へ持つて來たドイツのメッケルといふ少佐が、いよ〳〵來年來るとか、再來年來るとか言つて、陸軍の人たちが騷いでゐた頃のことださうですから、陸軍の平時編成も今とは違つて、今の師團司令部に當るものが、其の頃は鎭臺と呼ばれてゐたさうです。

大阪鎭臺、赤鎭臺。
またも負けたか、八聯隊。
馬に蹴られて、ヤッチキチン。

こんな俗謡が、大阪の市に流行つたことがあるさうですが、大阪鎭臺といふ

のは、今の第四師團司令部のある大阪城址に置かれて、少將の司令官がゐたのでありませう。八聯隊といふのは多分歩兵第八聯隊のことでありませうか。それならば今も矢張り大阪にあつて、丹波の福地山に移つた歩兵第二十聯隊の跡を占め、其の隣りにある元の八聯隊兵營は、横手の野砲兵第四聯隊と山分けにして住まつてゐます。

私の母方の伯父が、其の八聯隊に入營してゐた頃を、私は微かに覺えてゐます。其の頃の八聯隊は無論元の兵營で、昔の大名屋敷の外廓のやうな、切子形の壁の四角な建物でありました。私は母に連れられて、伯父の居る兵營の前を人車で通つた時、銃劍を持ち背嚢を負つて門の前に立番をしてゐる兵士をば、兵隊の子守りだと思つたことがあります。それは背嚢の廻はりに卷いてある赤毛布をば、赤い容物だと思ひ、背嚢をば赤ン坊だと思つたのです。私は今でも軍裝をした兵士に出逢ふと、其の頃の幼い記憶を思ひ浮べます。

メッケルの來た時分には、もう伯父は除隊になつてゐて兵營に居なかつたのですが、メッケルの持つて來た折り疊みの出來る輕便安樂椅子の模造で一値けしやうとして、大損をしたことがあります。メッケルが日本に敎へた兵制改革や參謀官養成よりも、私の一族に取つては、この安樂椅子に因緣が深いのであります。私たちが今だにメッケルといふドイツ人の名を覺えてゐるのも、或は輕便安樂椅子の爲めであらうかと思ひます。

## 二

話が前後しますが、伯父が其の八聯隊に居た時のことであります。近々メッケルといふ少佐がドイツ

ッから來るといふことは、一兵卒の耳にも入つて、この外國の參謀將校の渡來が、一兵卒の身の上にも大きな影響を及ぼすもの丶やうに言つてゐたさうです。

伯父は大阪根性丸出しの冷かな、善く言へば確乎とした、惡く言へば狡猾な男で、今も昔も義勇奉公といふやうな心は薄く、手に銃劍を持つても、心で算盤を彈いてゐるといふ風ですから、兵士としての評判は勿論良くなかつたのです。

麻布の一聯隊が主として東京人から成り立つてゐるやうに、大阪の八聯隊が土着の大阪人ばかりから出來上つてゐるにしても、眞逆に伯父のやうな大阪魂のものばかりではなかつたのでせう。其の頃八聯隊に二人の模範兵士が居りまして、それが皆伯父の給養班——と其の頃もいつたか何うか知りませんが、寢食を共にする若干の兵士の一組です——であつたのです。

模範兵士の一人は、船場の紙問屋の二番息子で、他の一人は、玉造の鍛冶屋の弟でした。二人とも無口の落ち付いた、如何にも勇氣のありさうな男で、檢査から入營までにも、この二人だけは他の人々のやうに徵兵除けのお守護札を頂きに行くやうなことがなかつたさうです。——和泉の國の何んとか神社の徵兵除けのお守護札が、治安を妨害するものと認められて發行を禁止されたのは、それからズッと後のことです。

二人の模範兵士は、極めて仲が好かつたさうです。親子にも夫婦にも兄弟にも、あんなに仲の好いのは珍らしからう、と言はれた程ださうです。同じ鍋のものを喰べあつて、同じ室內に起臥してゐるもの丶中で、或る二人だけが殊に仲好くするといふやうなことがあると、他のものからは爪彈きされ、自分

の方からも、他を疎くして自ら遠ざかるといふやうなことになり、其の間柄が自然に面白くなくなるものですが、この二人にはそんなことがなくて、二人の仲の好くなる程、他の戰友からの尊敬は増しました。

「あれは二人に人徳があつたのやなア」と、伯父は今でも言つてゐます。

二人は同じやうな圓い頭で、四角張つた兵隊顔をしてゐたさうですが、紙問屋の方が少し身長が高く、鍛冶屋の方には頰髯があつたさうです。

外出を許されると、二人は何時も連れ立つて出て行きました。其の頃兵營の門を出て南へ行つた上本町の辻にあつた銘酒屋のやうな家で、二人は飲まぬながらに一盃引ッかけて、薄赤い顔をしながら、足並み揃へて靴音高く、久寶寺橋の通りを嬉しさうな顔で西へ／＼と行きました。

コレラが流行つて、兵士の遊歩區域が狹められ、橋を幾つも渡つて遊廓のある場所に行かれなくなつた時、二人は船場の家へ行つたり、玉造の家へ行つたりしてゐました。玉造の家へ行く折には、紙問屋が鍛冶屋の兄へ土産に、よく紙幣を與りました。兄といつても弟とはズッと年が違つて、もういゝ老爺でした。弟には距てのない友達でも、鍛冶屋の兄貴は紙問屋のことを『旦那／＼』と呼んでゐました。

『これでも昔は武士の腰の物を一本や二本打つた腕だす。……權兵衛、太郎兵衞の百姓道具は、食はず飲まずに居たかて打てまへん。』などと、大阪の人には、芝居の舞臺の上で役者が言ふより外には聽いたことのない、一國な言葉を吐いて、鍛冶屋の兄貴は始終怠けて貧乏してゐましたから、妻もない獨り身の口を糊し兼ねて、兵營に居る一人の弟のところへ無心に來ることがありました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

「他の人は家から小使ひ錢ヽ取り寄せるのに、俺は家へ錢をやらんならん。」と鍛冶屋の弟は、練兵が終つてから泣き顔をしてゐることが度々ありました。

兄貴が無心に來る度に、弟は紙問屋の息子の嚢口から出た若干を兄貴に握らせて還へしました。

「もう今度たけだツせ。………これから來てもあかんて。」

兵營の冷たい鐵門の側に突ツ立つて、弟は兄貴を見送りながら、寂しい顔をして言ひました。

「よし〳〵、もう來ん。」と、老いた兄貴は腰を曲げつヽ、首を振り〳〵、番兵に會釋して花崗石の敷いた上をトボ〳〵と歩いて歸りました。さう言つて置きながら二三日經つとまたやつて來ました。

そんなことが幾度か重なつても、紙問屋の息子は、親友の爲めならと、厭やな顔もせずに、若干づヽを出して快く鍛冶屋の弟に渡しました。二人て老いた鍛冶屋を鐵門の側まで送つて出ることもありました。

「これて濟めば、この話もこれ切りやがなア。………わしも昔の兵隊屋敷のことなぞ、皆んな忘れてしもたやろが、………」

かう言つてはよく伯父が其の後を話しました。

## 三

今から何十年か前の、四月三日の神武天皇祭は、日本晴れの上天氣だつたさうです。伯父は漸く一等卒になつたばかりてあるのに、同じ三年兵ても紙問屋と鍛冶屋とは、正月に揃つて上等兵になつてゐました。

大祭日の前夜に、二人の上等兵は翌る日遊びに行く場所を相談して、互ひに微笑し合つてゐたのに、其の朝になると、鍛冶屋が俄に腹痛を起して、外出も出來なくなりました。

「君が出られんのなら、俺も出えへん。」と、紙問屋は、軍醫の許へ駈け付けるほどでもない鍛冶屋の病ひを介抱しつゝ、寢臺の側に寄り添つてゐました。

伯父は其の光景をちよい〳〵と見たゞけて、獨り外出したのでしたが、事件は其の後に起りました。

正午の食事時まで、紙問屋は鍛冶屋の容態を氣遣ひつゝ、側を離れずにゐましたけれど、鍛冶屋が度々、「わしに構はずに、君いてくれはれ。」といふので、紙問屋は青かつた鍛冶屋の顏色の稍見直して來たのに、少しは安心した風をして、食事室から歸つて來ると間もなく、支度を調へて獨りて淋しさうに出て行きました。

午後二時頃、鍛冶屋はまだチク〳〵と痛んでゐる腹を押へつゝ、仰向けに寢て、ペンキ塗りの細い天井板を數へたり、紙問屋の外出の行く先きのことを考へたりしてゐますと、衛兵の方から通知があつて、例の兄貴がまた面會を求めに來たことを告げられました。

病氣だと言つて、一度は兄貴を追ひ歸さうとしましたが、矢張り氣が咎めると見え、素足のまゝ靴を穿いて、腹を押へ〳〵、ヨボ〳〵と廣い營庭を横切つて、風紀衛兵所の直ぐ横にある面會室に入つて見ると、老いた兄貴は汚ない床几を並べたガランとした室内に唯一人で立つてゐて、弟の顏が現はれると直ぐ、節くれ立つた右の親指と人差し指とで、圓い形をして見せました。弟は苦い顏をして兄貴の前に腰を卸し、木も草も青いものとては一つもない、砂漠のやうな營庭を眺めました。平常は彼所此處で小

さな練兵が行はれたり、用箱を持つた下士等の忙しさうに往來する營庭にも、今日は人影がなくて、紛れ込んだ町の野良犬が暖かさうな日光を浴びつゝ、方々を嗅ぎ廻はつてゐました。

「造幣の櫻が咲いたさうな。」

老いた兄貴はかう言つて、弟と顔を突き合はせるほどにして腰をかけましたが、

「氣の毒やが、またちいと心配してんか。……今夜炊く米がないのやがな。」と、またも右の指で圓い形をして見せました。

「今日はでけん、去んどくれ。」と弟は素氣なく言つて、營庭の方を見詰めてゐました。身體に合はぬ小倉の軍服の詰め襟が頸に食ひ込んで、三四日剃らぬ頰髯は針のやうに尖つて見えました。腹痛がまだ癒らぬと見えて、時々顔を顰めて腹を押へてゐました。

「鞴は潰れるし、金槌とヤツトコは家賃の代りに家主が取りよつたし、……」と老いた兄は、目脂の溜つた眼をクシヤ〳〵さして、さも飢じさうな顔をしました。

毎もの手だ。と氣がつかぬのではなかつたのでせうけれど、親とも思はなければならぬ一人の兄の忘け根性を憎むよりは、其の物欲しさうな、胃病の賣藥の廣告繪に見るやうな、情けない顔貌を氣の毒なと考へる心が先きにたつて、何うかしてやらなければならぬと、弟は深く決斷した樣子でありました。

「其處で待つといて、……」

かう言つて、今は腹痛も忘れたらしく、急ぎ足で頭陀袋のやうな靴を引き摺りつゝ、また營庭を橫切つて、室内に入りましたが、直ぐ紙問屋の息子の場席へ行つて、其の私物函に手をかけました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

しかし蓋を開けることは、稍暫し躊躇してゐたやうでしたが、軈て思ひ切つた風で蓋を取ると、内部には巻紙と状袋とが入つてゐて、状袋の一束の中程の一枚には、幾枚かの紙幣が入れてありました。

「君、外へ持つて出て掏摸に取られるといかんさかいな、かうやつとくと、誰れも氣がつけへんで。」

兄弟よりも親しい鍛冶屋の弟だけにかう言つては、紙問屋の息子が、時々こツそりと此處へ紙幣を納つてゐました。先刻獨りで出かける時にも、親友の病ひを氣遣ひ〳〵、此處から紙幣を抜き出し、小さく折つて蟇口へ入れて行きました。

「今日は俺一人やもん、これだけで餘るぞ、戻りにお土産を買うて來る。」と言つて出て行きながら、また扉を開けて半身を現はし、圓い顔で莞爾と笑つて姿を消したのでした。

鍛冶屋の弟は、考へ〳〵、北の重味のある状袋を摘み出しても、急には中の紙幣を抜くことが出來ませんでした。

「心易い仲や、後で事譯を言やよい。………よいとも〳〵、要る時や何時でも出して使て呉れ。俺と君の間やないか、水臭いことを言ふなよ。………といふに極つてる。」

かう思つて、鍛冶屋は我れながら勇氣の足らぬのを笑ふ狀で、状袋の中から一圓紙幣を一枚抜き出し、元の通り私物箱の蓋をして、急ぎ足にまた面會所までやつて來ました。

「今日は一圓でよい、一圓だけ拵へて呉れ、頼む。」と、再び現はれた弟の姿を見るなり、直ぐさう言つた兄の厚かましさが、急に憎らしくなつて、弟は矢つ張り先刻追ひ返へしてやれやよかつたと思つたやうでしたが、今はそれも出來ぬので、皺になるまでに堅く握つて來た紙幣を、四つに折つたまゝで、兄

の前へ投げ出しました。

痩犬がパンを投げられた時のやうに、兄は其の紙幣を攫むと、高い敷居に躓いてヨロ〳〵しながら、轉びもせずに、逃ぐるが如く面會所を出て行きました。

四

紙問屋の息子は、夕食前に戻つて來て、寢臺の上に腰をかけてゐる鍛冶屋の弟の前に嬉しさうな顏をして突つ立ちました。

「何うや、もう快いのか。………君が寐てると思ふと、遊びに出ても面白うない。」と言つたのには答へないで、鍛冶屋は、

「君の留守にまた兄貴が來よつてなア。」と、笑ひ顏をして言ひました。

「うむ、さうか。俺が居んので氣の毒やつたな。………また明日でも來て呉れるやうに言ふといて呉れたか。」

紙問屋も笑ひ顏をして、羅紗の上衣を小倉のに着更へなどしつゝ、

「歩くと汗が出よる。日和がよいので南は人が出た〳〵。櫻の宮も出たらしい」と、手拭て首筋の邊を拭いてゐました。朝早く出た同室の兵士等はまだ誰れも歸つて來なかつたのです。

「君の留守に君の私物箱を開けたが、怒るなよ」

幾度か言ひ出さうとしては、何んたか急に言ひにくゝなつたことを、鍛冶屋は漸く言つて差し俯きました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

「さうか、何出したんや。巻紙か、狀袋か。」
稍不機嫌な顏をしながらも、平氣を裝ふ聲で紙問屋は言ひました。
「兄貴が一圓何うしても要るちうて、動きよらんよつて、仕方なしに君の私物箱を開けて、あの狀袋の中から一圓紙幣を一枚借して貰た。……　何も平生の心易立てからや、惡う思はんやうにして呉れ。」
態と笑顏は作つてゐるが、心の奥でおど〳〵してゐるらしいのが、鍛冶屋の色に現はれてゐました。
紙問屋は何も言はずに、苦り切つて考へてゐましたが、フイと踵を返へして廊下へ出やうとしたから、鍛冶屋は追ひ縋つて、抱き止めるやうにしながら、
「君、怒つて呉れては困る。惡い氣でしたことやなし、謝罪まる、謝罪まる。」と聲を震はしました。
引き止められ、引き戻さるゝまゝに、紙問屋はまだ寢臺の側まで來ましたが、ぢッと鍛冶屋の顏を見詰めて、
「君、心易いは平生のことやないか。人の留守に私物箱を開けて金を持ち出し、心易いて濟むか、濟まんか、誰れにでも聞いて貰うとえゝ。』と、これも聲を震はして言ひました。
「濟まんと思ふよつて、謝罪まつてるんや。妙な人やなアおまはんも。……」
今の今までは「君」と呼んでゐたのを、「おまはん」と言ふまでに、調子が狂つて來ました。
「孰方が妙な人や。……　おまはんは盜人やないか。」
紙問屋も相手を『おまはん』と呼ぶやうになりました。
「盜人や、……　……うだ〳〵いふて貰うまい。鍛冶屋で貧乏はしてゐが、今まで人さんのもん、塵一本

手にかけたことは、憚りながら、ボン／＼ながら、おまへんて。……何んぼ船場の良い衆やかて、人を見て物を言ひなはれ。阿呆らしい。』

『塵一本手にかけたことはないか知らんが、金一圓盗んだことがある。……人の私物箱を開けて、………』

『そいて盗人やいふんか。……盗人なら盗人てえゝ、何うなと勝手にして貰ひまへう。………勝手にさらせ。』

『勝手にしてやる。吼えるな。……週番士官殿に願て出てやる。』

暫く言ひ爭つた末、紙問屋は奮然と靴音立てゝ室を出て行きました。其の後から鍛冶屋も出て行きました。

其の夜、聯隊の會計室に大騷動が起りました。千圓ばかり官金の入つてゐる軍吏の鞄が紛失したのです。徹夜調査の結果は、模範兵士の譽れあるあの鍛冶屋の弟が持ち逃げをしたといふことになりました。

『人は見かけに依らんものやなア』

こんな言葉が口から口へ、聯隊中に語り合はれました。

## 五

官金千圓の盗人は、鍛冶屋の弟に違ひありませんてした。鍛冶屋の弟は、紙問屋の息子が週番士官の許へ訴へに行つたものと思ひ詰め、表沙汰になれば、内情は兎も角、自分が一圓紙幣の盗人にならなければならんと、獨りて決めて、何うせ盗人の惡名を負ふのなら、一圓も十圓も同じことだと、これも獨

りて決めて、其の足で聯隊の會計室へ飛び込んで行つたのです。すると會計主任の軍吏は聯隊長室へ呼ばれて行つてゐて、其の卓子の上に鞄が載つてゐたのです。鍛冶屋は半ば夢中で、邊りに人無きを幸ひ、其の鞄を提げて出たのです。

實は横の方の卓子に一人二人書記が居たのですが、上氣した鍛冶屋の眼には止まらなかつたのです。書記の方ではまた一上等兵が上官の使で鞄を取りに來たのだとばかり思つてゐて、別に咎め立てもしなかつたのださうです。隨分ぼんやりした話ではありませんか。

それで鍛冶屋は其の鞄を提げて、眞一文字に營庭を横切り、大手を振つて營門を出て行つたのです。番兵も何も鍛冶屋が鞄を提げて大威張りで出て行くのを見たゞけで、怪みもしなかつたのです。何處かへ公用で行くのだなア、くらゐに思つてゐたのでせう。丁ど午後六時に十分ばかり前のことだつたさうですから、櫻の花の咲く頃の氣候として、まだ明るかつたに違ひありません。番兵ばかりではなく、營庭や營門の外で鍛冶屋が鞄を提げて行くのに出逢つた外出歸りの兵士も多かつたさうですが、誰れもそんなことゝは氣がつかなかつたのです。

『何處行きや。』と可なり親しくしてゐる兵士が、通りすがりに問ふても、鍛冶屋は眞ッ赤な顔をして聞えぬ風であつたといふことです。

其の頃の陸軍刑法は、百圓以上の金を盜んだものを死刑に處することになつてゐたのです。死刑と言つても、人の見えぬところでギロチンにかけるのではなく、公開の場所で銃殺するのです。今から見れば野蠻な掟ですが、軍人の廉潔性を養ふ爲めとか何んとか、時代相應の理屈はあつたのでありませう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

鍛冶屋が會計室から持ち出した鞄には千圓も入つてゐて、おまけにそれが官金と來てゐるので、捕へられると、言ふまでもなく死刑です。誠に一寸の機會で、銃殺といふ恐ろしい運命に出會したことになるのであります。

紙問屋の息子のするがまゝに任せて置いても、高が一圓紙幣ですから、何う間違つても死刑になる氣遣ひはなかつたのです。鍛冶屋も會計室の鞄の中に千圓といふ大金が入つてゐやうとは思ひ設けなかつたのでありませう。或は百圓以下の金が入つてゐると思つて持ち出したのかも知れません。

『あゝ仕舞つた。』

鞄を開けて見て鍛冶屋は、かう叫んだかも知れません。

鍛冶屋は聯隊の直ぐ近くの十三小路の或る家に隱れてゐました。鞄を提げて先づこの家に落ち付いたのです。

それは母子二人暮しの荒物屋で、母は五十くらゐ、娘は十三四でした。鍛冶屋が何うしてこんな家を知つてゐたかは、到頭判然分らなかつたさうですが、何でも煙草か何かを買つた縁で知り合ひになつてゐたので、母は全く何も知らずに、隱まうといふのではなく、たゞ何かなしに宿を貸したのでせう。けれども脫營兵であるくらゐのことは幾ら女でも分らぬ筈はありませんから、何んでも格外れの高い室代の約束で、二階に置いたのであらうといふとでありました。

翌日の早朝から玉造の兄貴の家は探偵に取り圍まれましたが、兄貴は一向平氣で、相變らずノラリクラリして仕事もせずに居ました。百性道具は打たんなぞと威張つてゐたので、自身の弟が盜人をしたと

聞いては、恥ち入るかと思つたものもありましたが、一向そんな風はなくて、弟が捕へたら褒美を與るといふ話を探偵から聞くと、手ぐすね引いて弟の立ち廻はつて來るのを待つてゐました。この時は一寸びがみの權太といふ風が、この鍛冶屋の老爺の上に見えたさうです。

兄貴の手を借るまでもなく、弟は直ぐ捕へられました。饂飩屋の出前持ちが時々饂飩を三つ宛二人家内の荒物屋へ持ち込むといふことから足が付いたといふ噂さもあれば、荒物屋の母が探偵に内通したといふ話もあつて、これも到頭判然しなかつたのであります。

「御用〱。」と、其の頃の探偵が矢張り徳川時代の捕物のやうなことをしたか何うかは知りませんが、十人ばかりの捕手が、荒物屋の前後から二階を目がけて亂れ入ると、合點だ、とばかりに、鍛冶屋の弟は白襯衣にズボンの姿で、家根の上へ逃げ上つたさうです。

芝居の好きな私の伯父は、この時のことを話して、丸橋忠彌召取のやうな騷ぎだと言ひました。

そらッ、といふので、探偵が皆家根へ躍り上つて見ると、もう鍛冶屋の姿は見えませんでした。ちやん〱ばら〱の立廻はりを演ずるまでもなく、肝心の捕物を見失つたのであります。

其の中に追々巡査や探偵や見物人の數が殖えて來て、十三小路の狹い道は人で埋まりました。あの長い〱枳殼垣も見えぬほどに人の堵を造りました。枳殼の針に他所いきの羽織を引ッかけて、泣き顏をしてゐる小娘などもありました。人出を當て込んで蜜柑や駄菓子を箱に入れて賣りに來るものもあれば、それを買つて、むしや〱喰ひながら、家根の上を眺めてゐる人もありました。

巡査や探偵は探しあぐんで、もう引き揚げやうといふことになりました。餘りに人出が多くなつたの

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

て、それに紛れて大事の犯人は逃げたといふことになりました。其の當りがけと見えて、巡査や探偵が今度は見物人をこづき廻はして追ひ立てました。押されて轉ぶもの、踏まれて泣くもの、大袈裟に言へば阿鼻叫喚の騒ぎでありましたが、軈て皆んなが追ひ拂はれて、十三小路は元の淸々した巷になりました。

止むを得ぬ用事の人だけは、一々誰何されて通行を許されてゐました。丸髷に結つた丸ぽちやの、十八九と見える若い細君が、耳朶まで染まるほど眞ッ赤な顔をして、巡査の尋問に答へてから、蜜柑の皮や紙屑の散ばつてゐる大風の後のやうな小路を小走りに出つて行きました。長い袂が枳殻垣に添ふて、ヒラ〳〵と旗のやうに飜つて見えました。

先刻から路傍に曳き棄てゝある一臺の人力車がありました。其處だけは少し路が廣いので、人々の邪魔にはなりながら、人込みに押し潰されもせずにありましたが、其の頃の人力車の箱には、巻繪のやうにして、金色で神功皇后や關羽や張飛の姿が描いてありました。今丁ど其の若い細君が其の人力車の母衣の下に、青龍刀を提げて大きな眼を剝いてゐる長い髯の人の繪をチラと見ながら、行き過ぎやうとして、

『あら、………』と、この土地には珍らしい關東音の調子で高く叫んで、人力車の側から飛び退きました。居殘つてゐた巡査が其の聲を聞いて何事かと見ると、人力車の下に一人の男が蹲踞んでゐるのです。

其の男は巡査の近づくのを見ると、人力車の下から這ひ出して、一散に逃げ出しましたが、其の姿は白

襯衣に兵隊ヅボンといふ當のお尋ね者でしたから、巡査の警笛はピリ〳〵〳〵と鳴り響いて、忽ち集つた巡査探偵の群に其の男は圍まれて了ひました。言ふまでもなくそれは鍛冶屋の弟だつたのです。

「あら、……」と叫んだ若い細君の姿はもう見えませんでしたが、お尋ね者が捕へられたといふことは直ぐ廣まつて、追ひ拂はれた群集は三人五人づゝ舞ひ戻つて來ました。箱を擔いだ物賣りまでがまた出て來ました。其の人々はもう何家かの若い細君が「あら……」と言つた爲めに、鍛冶屋の弟が捕へられたといふことを知つてゐました。其の若い細君がツイ近所に住む何んとかいふ官吏の妻であるといふことまで知つてゐるものもありました。

「默つてゐてやれば好かつたのに。…………」

「さうや、見て見ぬ振りをして通つて了うと免れたかも知れん。………」

群集の同情は鍛冶屋の弟に向いて來て、若い細君を惡人のやうに言ふものさへ出て來ました。

## 六

聯隊に引き渡された鍛冶屋の弟は、初夏のある日に、いよ〳〵城南練兵場で銃殺されることになつて、其の噂さが大阪一杯に廣がりました。

其の日は蒸し暑いやうな、生温い風の吹く厭やな日でありました。刑の執行は午前十時といふことでしたが、八時頃から人々がぞろ〳〵と集つて來ました。おでん燗酒や、饂飩の高荷や、氷水屋までが、馬場の邊りに荷を卸して商賣を始めました。それが皆相應に流行りました。

「あんまり待つたて寒なつた。鮫津の茶屋で一杯しよ。……」などと、鈴ケ森の淨瑠璃の一節を上

手に口ずさみながら、おでん燗酒の前に立つ前垂姿の若い男もあれば、裾を捲くつて、揃への赤い湯もじを現はし、三四人手を繋ぎ合はして、嬉々と笑ひ興じつゝ、氷水屋の床几へ腰をかけに行く娘たちもありました。

練兵場の眞ン中邊りにある一本の柳の若葉は、塵埃に汚れてゐました。北の方には城の櫓や石垣が芝居の書き割りのやうに見えてゐます。刑場は其の柳の木の近くに定められてありました。別に竹矢來を結ぶでもなく、幕を張るでもなく、たゞ一本の白い棒杭が打つてあつて、其の近くへは人を寄せぬやうに番兵が警戒してゐました。

「あの棒杭へ括り付けて置いて、鐵砲で打ち殺すのやらう。」

「さうやない、あれは目標だけや。」

「いや、さうやない。」

背中へ十文字に子供を負つて、今一人の子供の手を引いた女房は、其の夫と見える職工らしい男と、こんなことを言ひ爭つたりしながら、待ち遠しさうな顏をしてゐました。

十時少し前頃になると、人が段々殖えて來て、わい／＼がや／＼と騷いでゐましたが、十時を少し過ぎた頃、

「そら來た。」といふ聲が、何處からか聞えて、人々の動搖めく中に、一筋の通路が銃劍の光りに開かれて、一隊の兵士に警められた青い獄衣の鍛冶屋の姿は、眞ッ直ぐに練兵場へ入つて來ました。「押すな押すな」と群集の犇めく中を、頰髯を綺麗に剃つた痕の青々としてゐる鍛冶屋は、繩も掛けられずに、大

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

手を振つて歩きました。軍服を着てゐた時よりは、却つてデップリと肥えたやうで、其の顏は莞爾々々としてゐるやうに見えました。

「落ち付いてますな。………あゝはなか〳〵てけまへんて。………」

「大膽な奴だすな。………あの奴根性てないと、大それた盜人はなりまへんやろかいな。」

人々の口々に言ふことが、わアーと唸りを立てるやうに聞えました。

白い棒杭は案の定、罪人を縛り付ける爲めてした。鍛冶屋は其の棒杭へ後手に縛られて、將校から何やら書付を讀んて聽かされてゐました。黑い法衣を着た坊さんも來て、何やら言つて聽かしてゐました。鍛冶屋の顏は相變らず笑を含んてゐるやうてしたが、其の色は靑く見えたり、赤く見えたりしました。群集も流石に靜まりました。

「南無阿彌陀佛。」といふ聲が聞えました。

「………お駒が命赦免の狀。………御披見なれと、………」と巧みな節を付けて、「………といふて乘り込んて來る人はないかいな。」と溜息を吐きながら言つたものがありました。聲は低かつたけれど、人々が石塔のやうに靜まつてゐたので、それが多くの人の耳に入りました。

「フヽヽヽ。」と、水の漏れるやうな聲をして笑つたものがありました。

「シッ、シッ。」と、寄席て聞くやうな聲を出して、それを制するものがありました。

軈て十人ばかりの兵士が、孰れも銃を執つて、縛り付けられてゐる鍛冶屋の八間ばかり前に立ちました。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

「誰れが打つか分らんやうに、あないに大勢立つのや。」と感心した風でいふものがありました。

一列の兵士が前面に立ち了ると、鍛冶屋の眼には、白い布片で目隱しをされました。

暫くすると、一發の銃聲がズドと響きましたが、それは態と狙ひを外したのでありました。

縛られて目隱しをされてゐる鍛冶屋の身體は、ビクリと動いたやうでした。

其の次にまた他の兵士がズドンと打つた一發の銃彈は、鍛冶屋の額に命中したらしく、白い目隱しがバラリと取れて、五分苅りの頭はガクリと下りました。

私の伯父の話は、毎も此處でおしまひになります。この話には幾らかお負けがあるだらうと思ひますし、中には鍛冶屋が一人で思つたり、仕たりしたことまで、伯父が知つてゐたり、見てゐたりしたやうな箇所もあるのですから、當てにはなりませんけれど、兎に角、昔し——といつても僅か三十年餘り前まで——は、こんなことで、人が公開の場所で殺されたのだといふことだけは分るでせう。

其の時伯父は幸ひ打ち方には廻はされなかつたさうですが、跡片付の係りになつたので、あの白い棒杭の側の凹みに紫色の血が溜つてゐたのを見て、今でも造り身(さし身)に醬油をつけて喰ふ時、醬油の色とあの時の血の色とが、全く同じやうに思はれて厭やだす、とよく言ひます。

また白い棒杭の後の小石には、盆栽の苔の一かけを毟つたやうに、一摘みほどの肉に五分苅の髮の毛の附いたのが、くッ付いてゐたと、伯父は言つてゐました。それほど其の頃の銃彈は不完全なものであつたのです。

伯父は、兵士の銃殺が、メッケル少佐の來たお蔭て廢されたやうに言つてゐます。さうしてメッケルがもう三年ばかり早く來て吳れたら、鍛冶屋も殺されず、俺も輕便安樂椅子て損をせずに濟んだのにと始終さう言つてゐます。

（完）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

## 中央公論大賣捌所


東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區尾張町　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
京都市七條停車場前　三共社


○定價　金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但清國を除く）

| 册數／國別 | 內國 | 外國 |
|---|---|---|
| 六册 | 金壹圓五拾錢 | 金貳圓拾錢 |
| 十二册 | 金參圓 | 金四圓貳拾錢 |
| 以上郵税共 | | |

▲但し新年號（本年度に限り三倍）春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五册（本年度十六册）分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金參圓七拾五錢（本年度は金四圓）外國は金五圓貳拾五錢（本年度は金五圓六十錢）拂込まるべし


## 廣告取次店

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、万年堂、秀逸堂


## 送金注意

一誌代郵税　は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替　にて御送金の場合は　本鄉西片町十番地中央公論社　と指定し拂渡局を東片町局　と指定あれば途中盜取の虞なし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　必ず一割增の事
一集金郵券　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込　をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委託料及送達料共）

一受領證請求　は必ず返信料を要す


大正三年四月廿七日印刷納本
大正三年五月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木西三

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地
中央公論社
電話　下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

**CHUO KORON** (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

五圓五十錢の紳士靴

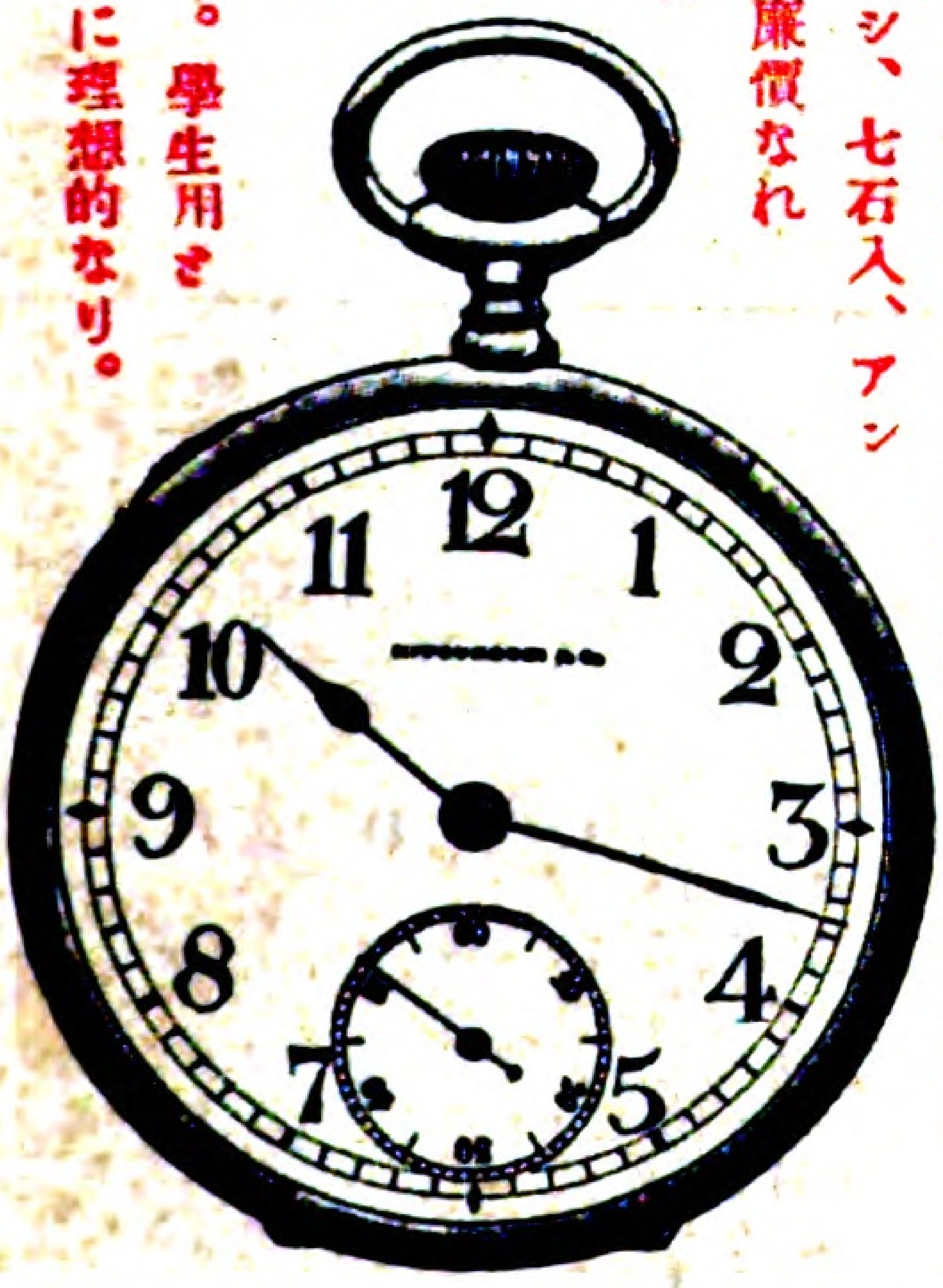
五圓五十錢の實用懐中時計

ピープル型は、キッド革製の深編上靴にして、しかもゴム踵なれば穿き工合極めて良し。御注文の際は、足袋の文數、甲高、甲並、甲低かを御示しあれ



三越特製
靴目錄
進呈

瑞西製、十七形、ニッケル側片硝子時計。中蓋付、ミツコシ、七石入、アンクル。廉價なれども器械の狂はぬと他に其比なし。學生用として誠に理想的なり。



東京駿河町

三越呉服店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN